

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第569集

あま さか ぼ たん の さく や しき  
尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡  
発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥地区関連遺跡発掘調査

2010

岩手県県南広域振興局農林部農村整備室  
(財) 岩手県文化振興事業団

# 尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都鳥地区閑連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業都島地区に関連して、平成20年度に発掘調査を実施した奥州市尼坂遺跡、牡丹野遺跡、作屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

調査の結果、平安時代の集落跡の存在が明らかとなりました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました岩手県県南広域振興局農林部農村整備室、奥州市教育委員会を始めとする関係各位に衷心よりの謝意を表します。

平成22年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 武田牧雄

## 例　　言

- 1 本書は、岩手県奥州市胆沢区南都田字国分370-1ほかに所在する尼坂遺跡、奥州市胆沢区南都田字国分371ほかに所在する牡丹野遺跡、奥州市胆沢区南都田字作屋敷487ほかに所在する作屋敷遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 各遺跡の発掘調査は、経営体育成基盤整備事業都烏地区の事業に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て、岩手県県南広域振興局農林部農村整備室の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 岩手県遺跡登録台帳番号と遺跡略号は以下のとおりである。

尼坂遺跡	遺跡番号…NE25-1123／遺跡略号…A S -08
牡丹野遺跡	遺跡番号…NE25-0185／遺跡略号…B T N -08
作屋敷遺跡	遺跡番号…NE25-0144／遺跡略号…S K Y -08
- 4 野外調査の期間と調査面積および担当者は、以下の通りである。

尼坂遺跡	平成20年5月1日～5月15日／322m <sup>2</sup> ／星 雅之・田中美穂
牡丹野遺跡	平成20年4月10日～6月12日／2,698m <sup>2</sup> ／星 雅之・田中美穂
作屋敷遺跡	平成20年6月9日～8月12日／2,044m <sup>2</sup> ／星 雅之・田中美穂
- 5 室内整理期間と担当者は、以下の通りである。

尼坂遺跡	平成20年11月4日～平成20年12月26日／星 雅之
牡丹野遺跡	平成20年12月1日～平成21年1月30日／星 雅之
作屋敷遺跡	平成20年11月4日～平成21年2月13日／田中美穂
- 6 業務委託は、以下の機関・個人に委託した。

基準点設置	（株）中央測量設計、（株）アクト技術開発
空中写真	（株）東邦航空
石器・石製品の石材鑑定	花崗岩研究会
火山灰分析	弘前大学大学院・理工学研究課科 柴 正敏
放射性炭素年代測定	（株）加速器分析研究所
金属製品の保存処理	岩手県立博物館
- 7 本報告書の編集と執筆は、星 雅之と田中美穂が行なった。
- 8 土層の色調は、「標準土色帳」（農林水産省農林技術会議局監修）に準拠した。
- 9 調査および室内整理に際しては次の方々、機関に御指導・御協力を賜った。（順不同・敬称略）  
井上雅孝（流沢村埋蔵文化財センター）、斎藤邦雄・吉田充・櫻井友梓・千葉正彦（岩手県教育委員会）、佐々木いく子・高橋千晶・朴沢志津江・重森直人（奥州市教育委員会）、伊藤博幸・佐藤良和・千田幸生・伊藤みどり・遠藤栄一（奥州市埋蔵文化財調査センター）
- 10 これまでに、調査成果の一部を現地公開資料、調査略報、奥州市遺跡報告会などで公表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先する。
- 11 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 目 次

I 調査に至る経過 .....	1
II 遺跡の立地・環境 .....	1
1 地理的環境 .....	1
2 周辺の遺跡 .....	4
3 基本層序 .....	15
III 野外調査と室内整理の方法 .....	19
1 野外調査 .....	19
2 室内整理 .....	20
IV 尼坂遺跡 .....	22
1 遺跡の位置・概要 .....	22
2 これまでの調査歴 .....	22
3 検出遺構 .....	23
4 出土遺物 .....	23
5 総括 .....	23
V 牡丹野遺跡 .....	25
1 遺跡の位置・概要 .....	25
2 これまでの調査歴 .....	25
3 検出遺構 .....	25
4 出土遺物 .....	34
5 総括 .....	35
VI 作屋敷遺跡 .....	60
1 遺跡の位置・概要 .....	60
2 これまでの調査歴 .....	60
3 検出遺構 .....	60
4 出土遺物 .....	90
5 総括 .....	93
VII 自然科学分析 .....	153
1 作屋敷遺跡における放射性炭素年代（AMS測定） .....	153
2 岩手県奥州市胆沢区作屋敷遺跡より採取されたテフラについて .....	156
報告書抄録 .....	206

## 図版目次

第1図 遺跡位置図	2	第38図 1号掘立柱建物跡②、1号土坑	113
第2図 周辺地形と尼坂・牡丹野・作原敷遺跡 調査範囲	3	第39図 2・6・7・9・10号土坑	114
第3図 地形分類図	5	第40図 11~13・15・16号土坑	115
第4図 周辺の遺跡分布	7	第41図 18~22号土坑	116
第5図 尼坂・牡丹野遺跡基本層序	17	第42図 1・2号溝跡	117
第6図 作原敷遺跡基本層序 <尼坂遺跡>	18	第43図 3・4号溝跡	118
第7図 グリッド配置図、陶磁器	24	第44図 5号溝跡、8・14号土坑①、 6・8号溝跡①	119
<牡丹野遺跡>		第45図 8・14号土坑②、6・8号溝跡②、 7号溝跡	120
第8図 遺構配置図	38	第46図 17号土坑、9~11号溝跡	121
第9図 調査区南部遺構配置図	39	第47図 12・13号溝跡	122
第10図 調査区中央部・西部遺構配置図	40	第48図 14・15号溝跡	123
第11図 1号竪穴住居跡、1・2・4号土坑	41	第49図 16号溝跡	124
第12図 2号竪穴住居跡、1号堅穴状遺構	42	第50図 17号溝跡	125
第13図 3号土坑、2・4号溝跡	43	第51図 18~21号溝跡	126
第14図 1・3号溝跡	44	第52図 2号焼土遺構、1・2号階下穴状遺構	127
第15図 調査区南部柱穴群	45	第53図 調査区西部柱穴群①・②	128
第16図 調査区中央部柱穴群①	46	第54図 調査区北部柱穴群①・②	129
第17図 調査区中央部柱穴群③	47	第55図 調査区北部柱穴群③・④	130
第18図 1号旧河道	48	第56図 調査区中央部柱穴群①・②・③	131
第19図 旧河道流路推定図、2号旧河道	49	第57図 調査区中央部柱穴群④・⑤	132
第20図 3・4号旧河道	50	第58図 調査区東部柱穴群①・②	133
第21図 古代の土器（1）	54	第59図 調査区東部柱穴群③・④	134
第22図 古代の土器（2）・弥生土器	55	第60図 調査区東部柱穴群⑤・⑥	135
第23図 陶磁器	56	第61図 古代の土器（1）	140
第24図 石器	57	第62図 古代の土器（2）	141
<作原敷遺跡>		第63図 古代の土器（3）	142
第25図 遺構配置図	100	第64図 古代の土器（4）	143
第26図 調査区西部・北部遺構配置図	101	第65図 古代の土器（5）	144
第27図 調査区中央部・東部遺構配置図	102	第66図 古代の土器（6）	145
第28図 1号竪穴住居跡①	103	第67図 古代の土器（7）	146
第29図 1号竪穴住居跡②、2号堅穴住居跡	104	第68図 古代の土器（8）	147
第30図 3号竪穴住居跡	105	第69図 土製品、陶磁器、鉄製品	148
第31図 4号竪穴住居跡、3~5号土坑、1号焼土遺構	106	第70図 石器	149
第32図 5号竪穴住居跡①	107		
第33図 5号竪穴住居跡②、6号堅穴住居跡①	108		
第34図 6号竪穴住居跡②	109		
第35図 6号竪穴住居跡③、7号堅穴住居跡	110		
第36図 8号竪穴住居跡、1号堅穴状遺構	111		
第37図 1号掘立柱建物跡①	112		

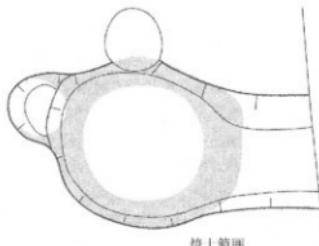
## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表①	8	第16表 磁石器観察表	59
第2表 周辺の遺跡一覧表②	9	<作屋敷遺跡>	
第3表 周辺の遺跡一覧表③	10	第17表 垂穴住居跡観察表	136
第4表 背沢区内調査歴のある遺跡	12	第18表 垂穴状遺構観察表	136
<尼坂遺跡>		第19表 振立柱建物跡観察表	136
第5表 陶磁器観察表	23	第20表 土坑観察表	136
<牡丹野遺跡>		第21表 溝跡観察表	137
第6表 垂穴住居跡観察表	52	第22表 燃上遺構観察表	137
第7表 垂穴状遺構観察表	52	第23表 陥し穴状遺構観察表	137
第8表 土坑観察表	52	第24表 杖穴状土坑観察表①	138
第9表 溝跡観察表	52	第25表 杖穴状土坑観察表②	139
第10表 旧河道観察表	52	第26表 古代の土器観察表①	150
第11表 柱穴状土坑観察表	53	第27表 古代の土器観察表②	151
第12表 古代の土器観察表	58	第28表 土製品観察表	152
第13表 弥生土器観察表	59	第29表 陶磁器観察表	152
第14表 陶磁器観察表	59	第30表 鉄製品観察表	152
第15表 剥片石器観察表	59	第31表 磁石器観察表	152

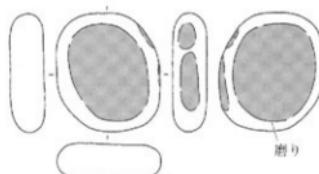
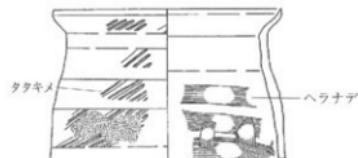
## 写真図版目次

<尼坂遺跡>		写真図版17 3号垂穴住居跡（2）、	
写真図版1 調査区全景航空写真	160	4号垂穴住居跡	176
写真図版2 南側・西側調査区全景	161	写真図版18 5号垂穴住居跡	177
写真図版3 調査風景、陶磁器	162	写真図版19 6号垂穴住居跡（1）	178
<牡丹野遺跡>		写真図版20 6号垂穴住居跡（2）	179
写真図版4 遺跡全景	163	写真図版21 7号垂穴住居跡	180
写真図版5 1号垂穴住居跡	164	写真図版22 8号垂穴住居跡、1号垂穴状遺構	181
写真図版6 2号垂穴住居跡、1号垂穴状遺構	165	写真図版23 1号振立柱建物跡（1）	182
写真図版7 1~4号上坑	166	写真図版24 1号振立柱建物跡（2）、	
写真図版8 1~4号溝跡	167	1~2~10号上坑	183
写真図版9 1~4号旧河道、作業風景	168	写真図版25 2~5~10号土坑、1号施上遺構	184
写真図版10 古代の土器（1）	169	写真図版26 6~8~9~11~12号上坑	185
写真図版11 古代の土器（2）、弥生土器、陶磁器	170	写真図版27 13~15号上坑	186
写真図版12 石器	171	写真図版28 16~19~21号土坑	187
<作屋敷遺跡>		写真図版29 20号土坑、1~3号溝跡	188
写真図版13 遺跡全景	172	写真図版30 4~5号溝跡	189
写真図版14 1号垂穴住居跡	173	写真図版31 6~10号溝跡	190
写真図版15 2号垂穴住居跡	174	写真図版32 11~14号溝跡	191
写真図版16 3号垂穴住居跡（1）	175	写真図版33 15~17号溝跡	192

写真図版34	18~21号溝跡	193	写真図版41	古代の土器（3）	200
写真図版35	1・2号焼土遺構	194	写真図版42	古代の土器（4）	201
写真図版36	1・2号陥し穴、作業風景	195	写真図版43	古代の土器（5）	202
写真図版37	作業風景	196	写真図版44	古代の土器（6）、土製品（1）	203
写真図版38	作業風景、現地公開	197	写真図版45	土製品（2）、陶磁器、鉄製品	204
写真図版39	古代の土器（1）	198	写真図版46	石器	205
写真図版40	古代の土器（2）	199			



焼上範囲



凡例

## I 調査に至る経過

経営体育成基盤事業都烏地区の事業区域内には作屋敷、牡丹野、尼坂、国分の4つの埋蔵文化財包蔵地が存在し、事業施行に際し試掘調査を行ったところ、作屋敷、牡丹野、尼坂の3遺跡について記録保存が必要となったため発掘調査を実施したものである。

都烏地区は、奥州市胆沢区南都田地区に位置し、水田の大部分は昭和26年～29年にかけて積雪寒冷地土地改良事業により10a区画に整備されているが、農業機械の大型化が進む中で小区画となったこと、農道は幅員2～3mと狭小で通行に支障があること、水路は用排水兼用土水路であるため用水不足や排水不良であり維持管理に多大な労力を投じていることなどから、地域営農の確立に十分な対応ができない状況である。このため本事業により水田約235haを標準区画1haの大区画化とし、併せて用排水路、道路の整備を行い、もって地域農業の中心となる経営体を育成し活力があり生産性の高い地域営農の確立を目指している。

工事施工に先立ち地区内に存在する4遺跡について、当室は岩手県教育委員会に対し試掘調査を依頼（平成19年9月21日付け県南広農整第483号）した。岩手県教育委員会は、平成19年10～11月にかけ4遺跡の試掘調査を実施し、作屋敷、牡丹野、尼坂の3遺跡について発掘調査が必要である旨を回答（平成19年11月15日付け教生第946号）してきた。

その結果を踏まえて、当室は、岩手県教育委員会との協議調整を経て財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託し発掘調査を実施することになった。

（岩手県県南広域振興局農林部農村整備室）

## II 遺跡の立地・環境

### 1 地理的環境

#### （1）遺跡の位置と立地

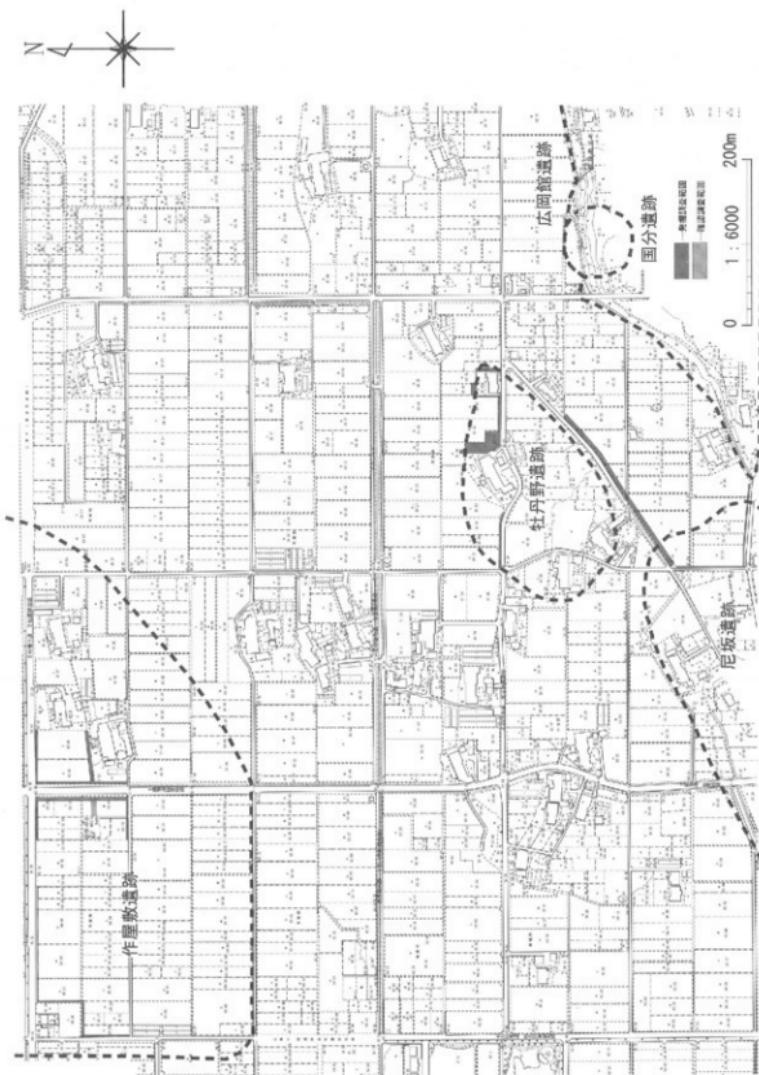
尼坂遺跡、牡丹野遺跡、作屋敷遺跡は岩手県奥州市胆沢区南都田に所在する。奥州市は、岩手県の南部に位置し、北に胆沢郡金ヶ崎町、北上市、花巻市、東に一関市、遠野市、気仙郡住田町、南に西磐井郡平泉町及び一関市、西は秋田県雄勝郡東成瀬村に接する。平成18年2月20日に水沢市、江刺市、胆沢町、前沢町、衣川村による5市町村の合併によりできた市である。東西約57km、南北約37km、総面積993.35km<sup>2</sup>、人口約13万人を有する。

尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡の位置は、JR東北本線水沢駅から西方6～7km、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北東約2kmにある。これら3つの遺跡は、胆沢川と衣川・北股川に挟まれた胆沢扇状地に立地する。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「供養塚」N J -54-14-14-3の図幅に含まれ、尼坂遺跡は北緯39度7分34秒、東経141度4分38秒付近に、牡丹野遺跡は北緯39度7分45秒、東経141度4分47秒付近に、作屋敷遺跡は北緯39度7分53秒、東経141度4分24秒付近に位置する。

本調査は、経営体育成基盤事業に伴いハイブリット用地、支線道路、排水路、田区などを対象として行われた。調査地の標高は、尼坂遺跡では92～94m、牡丹野遺跡では89～92m、作屋敷遺跡では92～96mである。調査前の現況は、水田を中心に、農道、水路、畑地であった。



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺地形と尼坂・牡丹野・作屋敷遺跡調査範囲

## (2) 遺跡周辺の地形と地質

東北地方を縦断する奥羽山脈は、中新生以降のグリーンタフ変動によって形成され、新第三系中新統及び火山岩類を主体としている。形成期が比較的新しく、河川は急流が多いため、この山脈に源を持つ北上川の西側支流には多量の土砂が供給された。したがって、北上川中流域右岸（西岸）においては、胆沢扇状地をはじめとする大小の堆積地形が発達し、広く平野部を形成している。

胆沢扇状地は、北は胆沢川、南は北股川や衣川に挟まれ、胆沢川上流市野々付近を頂点とする。その面積約20,000haにもおよぶ。胆沢扇状地は、南から北に向かって新期の河岸段丘が配列する、傾斜扇状地であることが大きな特徴でもある。胆沢扇状地の段丘（河岸段丘）は、南側から高位段丘、中位段丘、低位段丘、河岸低地に大別される。堆積土には、奥羽山脈にある焼石岳や栗駒山付近から供給された火山灰層が厚く堆積し、段丘を成している。当地域の段丘区分は、中川久夫ほかの先行研究があり（中川ほか：1963）、火山灰層序を明らかにし、段丘区分に際してその層序が適用された。その後、火山灰研究の成果が補填され、段丘位置を示す火山灰層の分布が明らかになりつつある（大上・吉田：1984）。以下には大上・吉田に従い各段丘について記述する。補足として、各段丘の形成年代については、『地名・屋号が物語る胆沢の歴史と自然』（胆沢町教育委員会：2005）の中で佐々木いく子氏・小岩直人氏による記載内容を引用して示す。

高位段丘は、大歩段丘、一首坂段丘、西根段丘に区分されている。大歩段丘は、胆沢川左岸の金ヶ崎町永栄付近に分布する。標高240～200mで段丘面は開析が進み小丘陵をなしている。一首坂段丘（60～30万年前）は、扇状地南端に発達し、南東方向に標高を減じ、ゆるやかに傾斜している。標高220～150mである。西根段丘（60～30万年前）は、胆沢扇状地の南端扇頂部（標高290～220m）や、低位段丘の中に残丘（標高140～110m）として分布するとともに、胆沢川左岸の一部にも丘陵性台地（標高190～180m）として分布している。

中位段丘である胆沢段丘は、高位から上野原段丘（標高250～80m、30～13万年前）、横道段丘（標高240～70m、30～13万年前）、掘切段丘（標高240～70m、11.5万年前）、福原段丘（標高130～60m、8～9万年前）の4つに細分され、南から北に向かって配列し、いずれもほぼ北東方向に標高を減じている。これら胆沢段丘の中では、堀切段丘が特に発達し、最も広く分布している。なお、福原段丘については、墨沢尻火山灰以上の火山灰がおり、火山灰層序からみて北上地区（和賀川流域などに顯著）などに分布する村崎野段丘に対比される可能性がある（大上・吉田：1984）。

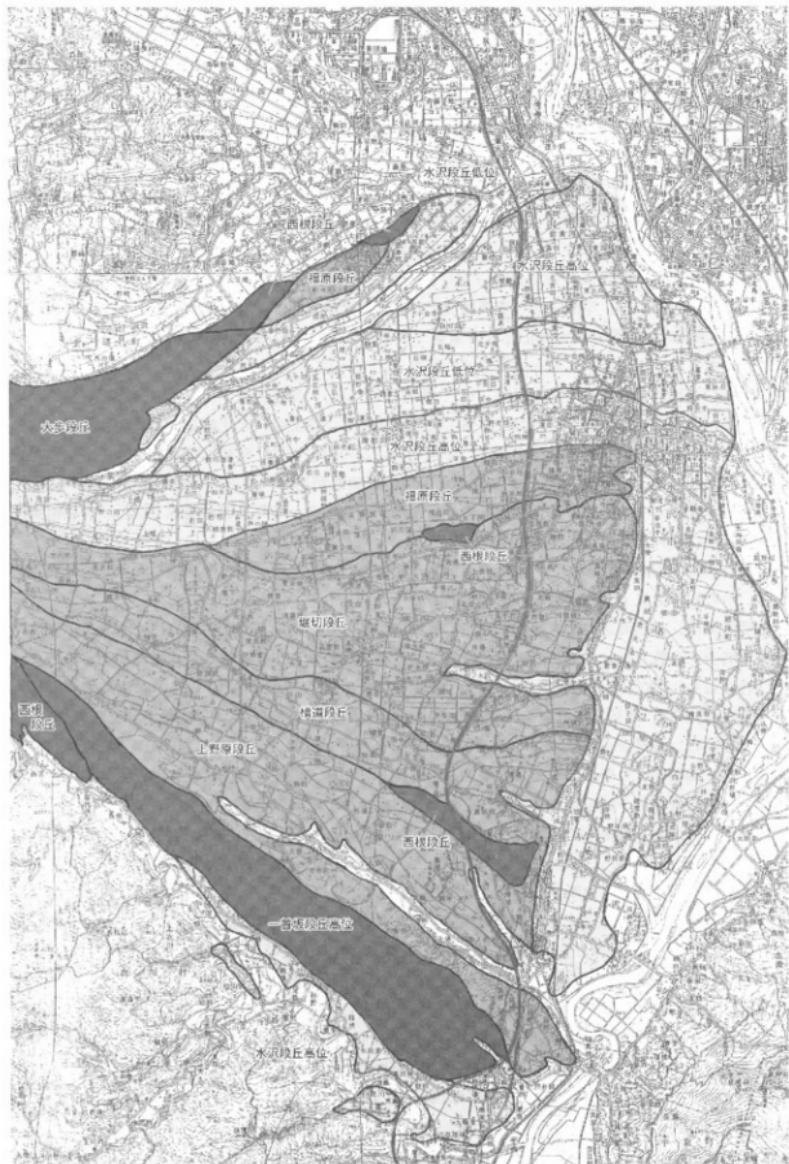
低位段丘である水沢段丘は、胆沢扇状地北端や東端、胆沢川岸と北上川に沿って分布する。この水沢段丘は、水沢段丘高位面（標高290～40m、2万年前）と水沢段丘低位面（標高120～38m、3千年前）の2つに区分される。水沢段丘高位面は、胆沢川、北股川、北上川の各河川に沿うように分布するが、特に扇状地の扇端部に広く分布している。これは北上川の氾濫により扇端部が字々に削り取られたためである。水沢段丘低位面は、胆沢川の中流～下流の両岸を中心に分布する。

河岸低地は、胆沢川の下流の両岸、北上川の両岸を中心に分布する。

## 2 周辺の遺跡

### (1) 遺跡周辺の遺跡

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の平成18年3月31日現在のまとめによると、奥州市には1,069箇所の遺跡が登録されている。その内、胆沢区（旧胆沢町）には185箇所の遺跡が登録されている。第4図及び第1・2表には今回調査した3遺跡の所在する胆沢区南都田を中心に、南北約12km



第3図 地形分類図

東西約8kmに所在する遺跡を示した。ここでは、図幅中に所在する各時代の遺跡を中心に記述する。なお、胆沢区の遺跡には1~71、水沢区の遺跡には101~213、前沢区の遺跡には301~313、金ヶ崎町の遺跡には401~455の番号を付した。

<旧石器時代>胆沢区内にある旧石器時代の遺跡は、全て若柳地区にあり図幅外西側に所在する。これらの遺跡は後述することとする。なお、図幅中には平成4~6年に調査された金ヶ崎町柏山第跡(448)がある。

<縄文時代>胆沢区には縄文時代の遺跡が85箇所登録されているが、今回作成した図幅中にも38箇所が所在する。傾向としては前期・中期の遺跡が多い。ここでは図幅内で過去に発掘調査が実施された遺跡を記述する。漆町遺跡(12)は、縄文時代早期の蛇王洞II式とされるものをはじめ早期の貝殻文系の土器が出土している。芦の隨遺跡(27)は、前期の集落跡と中期の遺物などが確認されている。小十文字遺跡(29)は、早期末葉の衣裏縄文土器や前期前半大木2式などが出土している。浅野遺跡(39)は、前期末~中期初頭を中心とする遺構・遺物が出土している。胆沢区以外に図幅中には、水沢区28箇所、前沢区6箇所、金ヶ崎町20箇所がある。

<弥生時代>図幅中には、清水下遺跡(11)、漆町遺跡(12)、角塚古墳(16)、牡丹野遺跡(32)、小田切遺跡(68)がある。胆沢区における弥生時代の遺跡は、縄文時代と比較して少ない。特記事項としては、清水下遺跡の石包丁発見を挙げておきたい。この石包丁は、昭和52年水路改修工事中に2点発見された。時期は不確定にあるが弥生時代中期の可能性がある(胆沢町史編纂委員会:1981)。次に、胆沢区以外で図幅内には、水沢区中半入遺跡(101)、金ヶ崎町長坂後遺跡(427)、長坂前遺跡(428)、清水遺跡(433)などが挙げられる。

<古代>胆沢区内の遺跡の中で、古代の土師器や須恵器が出土したのは、今回調べた限りでは65箇所あり、その内半数以上が平安時代の遺跡である。

古墳時代は、本州最北の前方後円墳として国指定史跡となっている角塚古墳(16)がある。4次にわたる調査が実施され、出土した埴輪の制作技法や埴丘形態から5世紀末から6世紀初めと考えられる(朴沢ほか:2002)。角塚古墳以外では、蝦夷塚古墳(6)、鶴谷田古墳(37)、鶴田古墳群(43)、見分森古墳(194)、※見分森遺跡中に含まれるなどが挙げられ、何れも末期古墳と考えられている。蝦夷塚古墳は、周溝出土の須恵器や土師器の特徴から8世紀後半と推定されている。鶴田古墳群は、平成14年・15年の2カ年の調査では古墳3基を確認している。墳丘と周溝は伴うが、主体部が未検出にある。出土遺物は9世紀代と推定されるが、何れも小片でその量も極めて少ないとから、造営時期は明確ではない。胆沢区の東側の水沢区内には、中半入遺跡(101)、麿生遺跡(120)、面塚遺跡(147)、高山遺跡(148)、西大畠遺跡(149)など、岩手県内でも稀な古墳時代の遺跡が集中してみられる。金ヶ崎町は二ノ宮古墳(421)を挙げておきたい。

奈良時代は、漆町遺跡(12)、二木本遺跡(13)、要害遺跡(15)、机地遺跡(20)、塚田遺跡(17)、石田I・II遺跡(23)、小十文字遺跡(29)など、縄文時代や平安時代との複合遺跡が多くみられる。塚田遺跡は、奈良時代を中心とする遺物が出土している。二木本遺跡は漆町遺跡の東側、清水下遺跡の南東側に隣接し、奈良~平安時代の遺構・遺物が出土している。要害遺跡は、奈良時代後期から平安時代後期(8世紀後半~11世紀)にかけての堅穴住居跡が検出され、「北海道系」とされる沈線文を持つ土器なども出土している。その他として図幅中には、水沢区は玉貫遺跡(119)、玉貫前遺跡(121)、権現堂遺跡(134)を、金ヶ崎町は道場遺跡(411)、五郎屋敷古墳(415)、西根遺跡(423)、飛鳥田遺跡(453)、を挙げておきたい。

平安時代は、上記のとおり前時期と比較して遺跡数の増加が著しい。尼坂遺跡(31)、牡丹野遺跡



第4図 周辺の遺跡分布

第1表 周辺の遺跡一覧表①

No.	遺跡名	地図	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1.	香取根原	散在地	中世	土塁、堀	JR武藏野線	JR武藏野線
2.	中井	散在地	平安	須弥山	JR武藏野線	JR武藏野線
3.	足立城	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
4.	足立山	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
5.	御殿跡	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
6.	板戸内古墳	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
7.	小伏見	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
8.	外久井	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
9.	外記I	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
10.	外記II	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
11.	新里(玉置山丘陵)	散在地	平安	土塁、石垣、須弥山	JR武藏野線	JR武藏野線
12.	清水下	散在地	平安	石垣、須弥山	JR武藏野線	JR武藏野線
13.	津町	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
14.	二木本	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
15.	鉢山(北井作村)	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
16.	馬岸山古墳	古墳時代	平安	須弥山	JR武藏野線	JR武藏野線
17.	深谷	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
18.	机田窓(御園村)	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
19.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
20.	机田	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
21.	机田	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
22.	机田山	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
23.	石山I・II	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
24.	第2号	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
25.	石南御所跡	散在地	中世	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
26.	「文字」	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
27.	芦の駒	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
28.	竹井	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
29.	小・大文字	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
30.	作原城	城跡	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
31.	尼波	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
32.	竹野月	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
33.	広岡城(御坂城)	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
34.	国分	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
35.	川端	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
36.	雲	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
37.	猪谷	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
38.	方子沢	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
39.	猪口I	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
40.	猪口II	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
41.	猪口古墳群	古墳時代	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
42.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
43.	猪口古墳群	古墳時代	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
44.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
45.	猪口古墳群	古墳時代	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
46.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
47.	森	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
48.	森の手	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
49.	森I	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
50.	森II	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
51.	中島	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
52.	猪口森	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
53.	森	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
54.	小山方八丁廻	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
55.	大通	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
56.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
57.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
58.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
59.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
60.	佐久保	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
61.	佐久保長柄	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
62.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
63.	上里駒	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
64.	長瀬	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
65.	中空地	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
66.	西ノ屋	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
67.	高尾山向	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
68.	小田切	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
69.	上宿・猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
70.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
71.	高民沢	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
72.	中人	集落跡	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
73.	人多集落	集落跡	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
74.	片丘山	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
75.	猪口	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
76.	木山	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
77.	木山II	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
78.	木ノ木	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
79.	木の木	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
80.	石劍	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
81.	当面寺(養蚕寺跡)	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
82.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
83.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
84.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
85.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
86.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
87.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
88.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
89.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
90.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
91.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
92.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
93.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
94.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
95.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
96.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
97.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
98.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
99.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
100.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
101.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
102.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
103.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
104.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
105.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
106.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
107.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
108.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
109.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
110.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
111.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
112.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
113.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
114.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
115.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線
116.	糸糸	散在地	平安	土塁	JR武藏野線	JR武藏野線

第2表 周辺の遺跡一覧表②

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
117	今樂山	古墳群	奈良・平安	土塁跡、道路	水戸市佐賀町今樂	
118	今樂町	集落跡	奈良・平安	土塁跡、道路	水戸市佐賀町今樂	
119	下曾	散布地	奈良	土塁跡、瓦器類	水戸市佐賀町下曾	
120	藤住	散居跡	古墳～平安	土塁跡、道路跡、フレーク	水戸市佐賀町藤住	
121	五丁町	散居跡	奈良	土塁跡、道路	水戸市佐賀町五丁町	
122	西原(タケシバヨウ)	散居跡	中世	手掘跡	水戸市佐賀町西原	
123	北原	散居跡	奈良・平安・近世	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町北原	
124	新田(ア)	散居跡	奈良・平安	手掘跡、柵垣、塗更宿	水戸市佐賀町新田	
125	喜田(イ)	散居跡	平安	塗更宿、柵垣、マスレーバー	水戸市佐賀町喜田	
126	鶴山	散居跡	平安	土塁跡	水戸市佐賀町鶴山	
127	人神里	散居跡	平安	土塁跡、柵垣、手掘跡	水戸市佐賀町人神里	古墳文第44集(1982年)
128	大字・佐野・御所原	城跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町大字佐野	
129	ハヤロ	散居跡	平安	土塁跡、柵垣	水戸市佐賀町ハヤロ	
130	北郷(リ)	丘陵跡	平安	手掘跡、柵垣、坂東路跡下塙	水戸市佐賀町北郷	
131	足利城(芳八)	城跡	平安	手掘跡、柵垣、堀	水戸市佐賀町足利	
132	北郷(田代原・長野原)	丘山跡	奈良・平安・近世	土塁跡、柵垣	水戸市佐賀町北郷	
133	氏原	古跡系	平安	土塁跡、柵垣	水戸市佐賀町氏原	
134	御所原	集落跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町御所原	
135	二・四	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町二・四	
136	八幡市	集落跡	平安	土塁跡	水戸市佐賀町八幡市	
137	越谷	散居跡	平安	柵垣	水戸市佐賀町越谷	
138	外山田	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町外山田	
139	伊勢守	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町伊勢守	
140	杉原	散居跡	平安	手掘跡(築期)、土塁跡	水戸市佐賀町杉原	
141	伊勢守	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町伊勢守	
142	足利城(佐野)	城跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町足利	
143	氏原	古跡系	平安	手掘跡	水戸市佐賀町氏原	
144	足利城(御所原)	城跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町御所原	
145	道原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町道原	
146	東大寺	集落跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町東大寺	
147	坂原	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町坂原	
148	鳴山	集落跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町鳴山	
149	丙原	散居跡	古墳・平安	壁面式手掘跡、土塁跡	水戸市佐賀町丙原	
150	五斗原	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町五斗原	
151	西郷	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町西郷	
152	笠置(佐野原)・松原	城跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町笠置	
153	梅原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町梅原	
154	船原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町船原	
155	朝原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町朝原	
156	志原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町志原	
157	大原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町大原	
158	坂原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町坂原	
159	久原	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町久原	
160	元原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町元原	
161	南久原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町南久原	
162	中原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町中原	
163	船原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町船原	
164	森原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町森原	
165	森原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町森原	
166	木戸女子高敷原	散居跡	平安	手掘跡、柵垣、竹生	水戸市佐賀町木戸女子高敷原	
167	水戸城(要塞)	城跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町水戸城	
168	新川原(要塞)	城跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町新川原	
169	西郷田	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町西郷田	
170	西郷田Ⅱ	集落跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町西郷田Ⅱ	
171	氏原田	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町氏原田	
172	大原	集落跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町大原	
173	足利城(1)	城跡	平安	手掘跡、柵垣、土塁跡、石垣	水戸市佐賀町足利城(1)	
174	足利城(2)	城跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町足利城(2)	
175	寺原	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町寺原	
176	大原	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町大原	
177	後原	散居跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町後原	
178	聖原	城跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町聖原	
179	牛原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町牛原	
180	南久原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町南久原	
181	南久原Ⅱ	集落跡	平安	手掘跡、柵垣	水戸市佐賀町南久原Ⅱ	
182	西郷Ⅰ	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町西郷Ⅰ	
183	西郷Ⅱ	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町西郷Ⅱ	
184	前原	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町前原	
185	寺原(城跡原)	城跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町寺原	
186	北郷	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町北郷	
187	高松原	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町高松原	
188	福原	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町福原	
189	人原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町人原	
190	船上	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町船上	
191	御所神社公園	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町御所神社公園	
192	東久原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町東久原	
193	西久原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町西久原	
194	前原	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町前原	
195	小原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町小原	
196	佐原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町佐原	
197	地原Ⅰ	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町地原Ⅰ	
198	地原Ⅱ	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町地原Ⅱ	
199	神谷地原	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町神谷地原	
200	地原地原	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町地原地原	
201	霞ノ原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町霞ノ原	
202	真成ヶ丘田原	集居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町真成ヶ丘田原	
203	羽原	散居跡	平安	手掘跡	水戸市佐賀町羽原	

第3表 周辺の遺跡一覧表③

(32)、作屋敷遺跡 (30) の周辺だけをみても、漆町遺跡 (12)、沢田遺跡 (21)、宇南田遺跡 (22)、十文字遺跡 (26)、小十文字遺跡 (29)、川端遺跡 (35)、堤遺跡 (36) など、多数の遺跡が分布する。宇南田遺跡は、9世紀中頃を中心とする遺構・遺物が出土している。沢田遺跡は、平安時代を中心とする集落跡で堅穴住居跡6棟をはじめ該期の遺物が出土している。小十文字遺跡は、埋土に十和田a火山灰を含む野巣治造構と報告されている堅穴住居跡などが検出されている。この野巣治造構からは、灰釉陶器がしている。胆沢区以外の平安時代の遺跡は、図幅中にあるだけでも相当数に上る。主な遺跡として、水沢区では中平入遺跡 (101)、今泉遺跡 (116)、胆沢城跡 (131)、伯済寺 (139)、石田遺跡 (176)、南矢中遺跡 (180)、福原遺跡 (188)、見分森遺跡 (194) が、前沢区では明後沢遺跡 (311)、金ヶ崎町では鳥海櫛跡 (422)、観音寺廃寺跡 (446)などを挙げて留める。

<中世・近世>胆沢区における中世・近世は、遺跡台帳からは14箇所説み取れるが、塚田遺跡調査報告書を参照すると25箇所とあり、多少の混乱が看取される。しかしながら、塚田遺跡の調査報告書刊行から約25年を経過していることを鑑みれば、城館跡に限らず、中世や近世の陶磁器など遺物が出土した遺跡数を加えると、大幅に増加していることは想像に難くない。事実、今回調査を実施した3遺跡においても、少ないながらも該期の陶磁器類が出土している。図幅中で主なものを挙げると、広岡館 (33)、小山方八丁館 (54)、若柳要害館 (25)、香取根館 (1) がある。胆沢区以外についても、図幅中には多くの城館跡がみられる。水沢区は竪堂Ⅱ遺跡 (143)、佐野館 (122)、榮館・松木館 (152)、水沢城跡 (167)、要害館 (178) などが、前沢区は環濠屋敷跡である北館 (301) が、金ヶ崎町は、三居寺館 (402)、五葉館跡 (418)、頭防館跡 (424)、細越城跡 (442)、柏山館跡 (448) などが、その他図幅外で松木館跡がある。

## (2) 胆沢区の調査歴のある遺跡

第3表には、胆沢区内における調査歴のある遺跡（※調査報告書が発刊されている事例）について、集成を試みた。遺漏も考えられるが、試掘確認調査を含めると52箇所（以上）に上る。時期別にみると、旧石器時代8箇所、縄文時代が38箇所以上、弥生時代10箇所、古代20箇所、中世・近世・近代5箇所で、縄文時代が圧倒的に多く、また旧石器時代や弥生時代はそのほとんどが縄文時代との複合遺跡である。以下には、調査歴のある遺跡から導かれる時代毎の傾向についてまとめてみる。

<旧石器時代>胆沢区内にある旧石器時代の遺跡は、全て若柳地区にあり第4図より西側に所在する。分布傾向として、胆沢扇状地中位段丘の上野原段丘や横道段丘を中心に立地し、上秋森遺跡、山の神遺跡、二の台長根遺跡が調査されている。なお、未調査には上佐布遺跡が登録されており、さらに近年の調査成果から若洞堀遺跡、大平野Ⅱ遺跡、下嵐江Ⅰ遺跡、下嵐江Ⅱ遺跡の4箇所が追加される。

<縄文時代>縄文時代の調査遺跡を時期毎に概観すると、草創期は現時点で土器の出土は未確認にあるが下尻前Ⅳ遺跡（※この遺跡は現在下尻前Ⅱ遺跡に変更・追加されている）と宮沢原遺跡（※報告時は宮沢原E東遺跡）から有舌尖頭器が出土している。早期は、南都田地区の尼板遺跡、漆町遺跡、小十文字遺跡、小山地区の休場遺跡、若柳地区的下尻前Ⅱ遺跡などに代表され、地形的には中位段丘を中心に分布する。堅穴住居跡などの検出例は少なく、現状で集落跡として認知できるのは休場遺跡と尼坂遺跡に留まろう。前期は、南都田地区的浅野遺跡・尼板遺跡・芦の隨遺跡、若柳地区の大清水上遺跡・下尻前Ⅱ遺跡などが集落遺跡として挙げられる。地形的には中位段丘を中心とする。中期の分布は、基本的には前期を踏襲しながらも、低位段丘や沖積地にも若干みられる。ただし、該期の土器を出土する事例や陥し穴を検出した事例は多いものの、堅穴住居跡など集落跡を窺わせる事例は少なく、宮沢原遺跡や下中沢Ⅱ遺跡に留まる。後期は、堅穴住居跡を検出した遺跡をみると、現時点で

第4表 越沢区内調査歴のある遺跡

遺跡名	地點	時代	地形	標高	特記事項(主な遺構)	文献
下原前進跡	若柳	加K(後期前葉)	斜面	281~290	堅石住居跡3(後期前葉~中葉)	岩見文352集
下原前進跡	若柳	後K(早J・前期)、弥生後葉	緩斜面	292~294	物質台石、大木立式、舟内火候塗2点	岩見文352集
原前Ⅱ遺跡	若柳	後文(後葉行駆)	緩傾斜地	330~350	堅石住居跡4(後葉行駆~後葉前葉)、後葉前葉2、廻塗2点、土坑4L、堅石通塗1	岩見文288・343史
穴山摩道跡	若柳	不明(洞庭地帯部分は近世改~得和初期)	段丘・段丘面	250m前	平廻塗上部段丘・穴埋跡11部分、余永吐5箇所、石器・木門	岩見文311集
市野々遺跡	若柳	後文(前葉~晩J・弥引・平安)	水沢段丘・島位置	240		岩見文397集
大溝水Ⅰ遺跡	若柳	神代(前葉後葉・若生)	上野段丘北斜	270	茶穴住居跡7点、土坑203、落穴99	岩見文475集
人渕水道跡	若柳	後文	上野段丘北斜	270	土坑15、陥入穴7、大木6点、大木柱~10点、人木柱~A式	岩見文373集
鹿合窓跡	若柳	中世	首根段丘	257~271	馬頭塗など	伊武20集
南中川遺跡	若柳	後文	水沢段丘・島位置			伊武5集
豊川原遺跡	若柳	後文	堅切段丘		廻塗4箇所	岩見文4集
吉沢原遺跡	若柳	後文	堅切段丘	175~180	海し穴270	岩見文495・512集
吉沢原跡	若柳	後文(中期後葉~末葉)	堅切段丘	175m前	茶穴住居跡6(全て揭示印)、大木3~10点、青色火候塗2点	伊武176
人糸遺跡	若柳	後文	堅切段丘	175m前	後葉初葉~飛鳥小型	伊武20集
山の神遺跡	若柳	旧石器、後文、弥生	堅切段丘	144~151	竹口12点、前葉初期~前期の土器	岩見文352集
河原段丘	若柳	後文	河岸段丘	346~353	神社跡行跡・飛鳥	岩見文346集
人平界Ⅱ遺跡	若柳	後石器、後文(中期末葉~後葉初葉)	堅切地	358~371	堅穴住居跡8点(後文中期末葉~後葉初葉)	岩見文443集
トク江Ⅰ・Ⅱ遺跡	若柳	古J・後文	河岸段丘	345	堅穴住居跡1(後文後葉)	岩見文450集
上萩森遺跡	若柳	日比西、弥生	上野段丘	268		伊武10・19集
南町原	若柳	後文、弥生、平安	水沢段丘・島位置	187	講文早塗、弥生末・少・鼎・平安	伊武1・19・27集
芦の隨道跡	南町原	後文(中期前葉・平安)	福原段丘・縁辺	109	講文穴住居跡4・平安2	越後山集
国分	南町原	後文、平安	福原段丘	91	後文	伊武1集
小文字遺跡	南郷原	後文、小鼎	福津段丘	103	早期木、前期前葉(大木柱)、中期、晚期、鼎、火盆、平安	伊武11集
茂野遺跡	南郷原	後文(中期後葉~末葉)、弥生、奈良、平安	福原段丘	70~74	茂文穴住居跡6(住居跡2、人木4~7点)	伊武17集
尼女遺跡	南郷原	後文(中期後葉)、後期、飛鳥、平安	堅厚段丘	92~97	茂文早塗・堅穴住居跡5、平安堅穴住居跡5	伊武1・22~24集
牡丹野遺跡	南郷原	奈良、医師、平安	水沢段丘・島位置	89~92	堅穴住居跡2	岩手県教委136集
佐原段丘跡	南郷原	後文、平安	水沢段丘・島位置	92~96	堅穴住居跡(平安)	岩手県教委136集
角屋古墳	南郷原	外生、小鼎	水沢段丘・島位置	76		伊武28集
御坂塚古墳	南郷原	古墳	水沢段丘	74~78	水沢段丘・島位置	岩見文380集
鶴田古墳群	南郷原	古墳	堅厚段丘	71		鶴田1集
坂田古墳	南郷原	奈良	水沢段丘・島位置	76		鶴田10集
二木本遺跡	南郷原	奈良、平安	水沢段丘・島位置	82		鶴田10集
愛萬遺跡	南郷原	奈良、平安(近世)	水沢段丘・島位置	77		鶴田10集
武出遺跡	南郷原	奈良、平安	水沢段丘・島位置	79		鶴田10集
宇奈川遺跡	南郷原	平安	水沢段丘・島位置	75		鶴田10集
石出遺跡	南郷原	後文(中期・後葉、平安、近世)	堅厚段丘	104		伊武1集
一の台遺跡	小山	後文	上野段丘	190		岩手県教委120集
一の台遺跡	小山	後文	上野段丘	185		岩手県教委120集
一の台Ⅱ遺跡	小山	後文	上野段丘	190		岩手県教委120集
二の沢遺跡	小山	後文	上野段丘	125~130		岩手県教委120集
櫛載遺跡	小山	後文	首根段丘	143~149	陥入穴など	岩見文397集・西手系教委120集
岩瀬説遺跡	小山	后石器、後文	堅切段丘	148	石器帯申区9、上机の陥入穴38・堅穴2点・蓋塗2点	岩見文351集
二の台長根遺跡	小山	昭和	上野段丘	135~130		岩住文476集
上野と立田遺跡	小山	後文	上野段丘	119		岩住文397集
上中沢Ⅰ遺跡	小山	近代	一首段丘	180		岩住文387集
上中沢Ⅱ遺跡	小山	後文	一首段丘	170		岩住文397集
二の台遺跡	小山	後文、奈良	一首段丘	165		岩住文387集
一の台Ⅱ遺跡	小山	後文	上野段丘	184		岩住文455集
綿供養遺跡	小山	後文	上野段丘	145~147		岩住文455集
上大畠平Ⅰ遺跡	小山	後文	上野段丘	176	寺馳塗調査	岩住文469集
上大畠平Ⅱ遺跡	小山	後文	上野段丘	164~172	寺馳塗調査	岩住文469集
休場遺跡	小山	後文(後葉)	上野段丘	120		岩住文351集
下中沢Ⅴ遺跡	小山	後文(中期)	上野段丘	172	堅穴住居跡2(後文中期後葉)	岩手県教委112集

下尿前Ⅱ遺跡や下尿前Ⅲ遺跡など、胆沢扇状地扇頂付近より西の胆沢川左岸の崖線上に立地する事例が中心である。それらは堅穴住居跡の数が10棟以下の小規模集落が点在する様相で捉えられよう。晩期は、調査歴のある遺跡を見る限り、良好事例は看取できない。

縄文時代の調査事例を総括すると、堅穴住居跡などを検出する集落遺跡は現状では少なく、大清水上遺跡を除くと集落の様相を検討するには未だ資料不足の感は否めない。ただ、地形的には時期を問わず中位段丘中心に集落跡が立地する様相である。陥し穴を検出する狩り場遺跡については、中位段丘を中心とし、特に上野原段丘や堀切段丘に立地する遺跡からの事例が急増している。大清水遺跡や宮沢原下遺跡の報告書中において、平面形・断面形の形態や、火山灰混入の有無などから精力的な考察が試みられている（佐藤：2001、戸根：2007、濱田・吉田・菊池：2008ほか）。本県における陥し穴研究に一石を投じるものと期待される。

＜弥生時代＞弥生時代は造構の検出事例が少なく、土器のみを確認した事例が多い。全般的には、下尿前Ⅱ遺跡など弥生時代後期の土器を出土する遺跡が一定数散見できるが、前期や中期は少ない。現状の調査事例からは、中位段丘と低位段丘を中心に分布し、空間的には胆沢扇状地扇頂付近及び扇頂より西に所在する遺跡が多い様相で捉えられる。

＜古代＞古代は、分布傾向として胆沢扇状地扇尖～扇端にかけての地域に多いことが読み取れる。古代を古墳時代、奈良時代、平安時代に分けて述べると、古墳時代の遺跡は角塚古墳、蝦夷塚古墳、椿谷古墳、鶴田古墳群など、何れも南都田地区にみられ、岩手県内の中でも特に多い地域として知られている。地形的には低位段丘を中心に中位段丘にも分布がみられる。古墳時代の遺跡が、この南都田地区に多い理由について、鈴木明美氏は塙田遺跡報告書中で、「各々眼前に広がる沖積地・湿地帯と密接な関連があるものと考察される」（鈴木：1985）と述べている。角塚古墳の西に近接する宇南田遺跡の調査報告書（鈴木・佐藤：1986）などを見る限り、湿地面・旧河床面・微高地の3種の地形が存在することは明らかであり、上述の観点からも今後さらなる検討が必要と思われる。奈良時代は、基本的には古墳時代を踏襲した空間占地にあり、前時期同様に南都田地区を中心とする。それらのはとんどは、次の平安時代と複合する遺跡が多い。平安時代は、空間占地は奈良時代を踏襲しながらも、さらに分布域が拡大し、遺跡数も多くなる。特徴として、平安時代になり営まれる集落遺跡も數多い。

＜中世・近世・近代＞現時点で中世・近世及び近代の調査事例としては、穴山堰遺跡、施合遺跡、要害遺跡、石行Ⅰ遺跡、上中沢Ⅰ遺跡が挙げられる。中世の城館跡の調査事例は施合館跡があり、胆沢扇状地扇頂部において東西方向に長く形成された河岸段丘に立地する。用水堰について、中半入道跡第2次発掘調査報告書によれば胆沢扇状地を灌漑する用水堰には、主要なものだけでも藤五堰、茂井羅堰、三堰、籌庵堰、穴山堰、二の台堰があり（西澤：2004）、その中で穴山堰跡の一部分の調査が実施されている（半澤：1999）。また、これらの堰の中で、最も古い藤五堰は中世まで遡ることが予想されている。

## 参考・引用文献

### 【市町村史・論文・研究会発表資料など】

- 胆沢町史編纂委員会 1981 『胆沢町史－原始古代編－』胆沢町史刊行会  
大上和良、吉田充 1984 『北上川中流域、胆沢原状地における火山灰層序』岩手大学工学部研究報告第37巻  
加藤景 1954 『陸中尼坂遺跡調査概報』『岩手史学研究』NO19岩手史学会  
中川久夫、岩井淳一、大池昭三、小野寺信吾、森由紀子、木下尚、竹内真子、石田琢二  
1963 『北上川中流沿岸の第四系および地形』『地質誌』1巻69号

### 【岩手県市町村報告書など】

千田政弘、千葉周秋、南池節子

- 1996 『三ヶ尻危険横道上遺跡』岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書第33集金ヶ崎町教育委員会  
岩手県教育委員会 2001 『岩手県内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第112集  
岩手県教育委員会 2006 『岩手県内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財調査報告書第120集  
【旧胆沢町教育委員会関連文献（発刊年順）】（※胆沢町埋蔵文化財調査報告書は胆沢埋文第00集と表記する）  
伊藤鉄夫 1976 『胆沢原E東遺跡・赤瀬遺跡』調査報告書 胆沢町教育委員会  
伊藤鉄夫 1977 『津町遺跡調査報告書』胆沢埋文第9集  
安倍庄吉 1981 『小十文字遺跡－発掘調査報告書－』胆沢埋文第11集  
安倍庄吉 1983 『尼坂遺跡－発掘調査報告書－』胆沢埋文第12集  
小原正治、鈴木明美 1984 『二本木遺跡－緊急調査報告書－』胆沢埋文第13集  
鈴木明美、安倍庄吉 1985 『塚田遺跡－緊急調査報告書－』胆沢埋文第14集  
鈴木明美、佐藤美枝子 1986 『宇南田遺跡－緊急調査報告書－』胆沢埋文第16集  
鈴木明美 1988 『浅野遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第17集  
鈴木明美 1988 『沢田遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第18集  
菊池強一 1988 『上萩森遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第19集  
鈴木明美 1988 『鹿合遺跡－調査報告書－』胆沢埋文第20集  
安倍庄吉、宍倉圭介 1991 『国分遺跡、芦の隨遺跡緊急調査報告書－』胆沢埋文第21集  
山口興典、佐々木いく子、安倍庄吉 1992 『尼坂遺跡－第二次緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第22集  
山口興典、佐々木いく子、安倍庄吉 1993 『尼坂遺跡－第三次（東）緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第23集  
山口興典、佐々木いく子、安倍庄吉 1993 『尼坂遺跡－第三次（西）緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第24集  
安倍庄吉、佐々木いく子 1994 『尼坂遺跡－第四次緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第25集  
佐々木いく子、安倍庄吉 1995 『要塞遺跡－緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第26集  
佐々木いく子、安倍庄吉 1996 『石行遺跡－緊急発掘調査報告書－』胆沢埋文第27集  
朴沢忠江、辻秀人、阿部憲彦、四生尚、佐藤公保 2002 『角坂古墳群発掘調査報告書』胆沢埋文第28集  
国生尚、朴沢忠江 2002 『鶴田古墳群発掘調査報告書』胆沢埋文第29集  
胆沢町教育委員会 2003 『発掘調査から見る胆沢の歴史－町内遺跡発掘展－』胆沢町郷土資料館第11回企画展  
胆沢町教育委員会 2005 『地名・屋号が物語る胆沢の歴史と自然』胆沢町郷土資料館第13回企画展  
【財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書など（発刊年順）】（※岩埋文第00集と表記する）  
瀬川司男、中川重紀、高橋與右衛門 1982 『金ヶ崎バイパス開通遺跡発掘調査報告書』瀬川遺跡、東大畠遺跡：大曾根遺跡。岩埋文第44集  
杉沢昭太郎 1997 『下原前II遺跡発掘調査報告書』岩埋文第252集  
中村英俊、小山内透 1997 『松本前II遺跡発掘調査報告書』岩埋文第256集  
中村真美 1998 『下原前VI遺跡発掘調査報告書』岩埋文第269集  
酒井宗孝 1999 『下原前II遺跡A地区発掘調査報告書』岩埋文第288集  
岩手埋文 1999 『平成19年度発掘調査報告書』岩埋文第311集

中村直美・平めぐみ・高橋與石衛門	
小原真一	2000 「体場遺跡発掘調査報告書」岩埋文第331集
佐藤淳一	2000 「原前II遺跡B地区発掘調査報告書」岩埋文第343集
高木晃	2001 「大清水遺跡発掘調査報告書」岩埋文第373集
岩手理文	2002 「中半入遺跡・般央塚古墳発掘調査報告書」岩埋文第380集
西澤正晴	2002 「平成13年度発掘調査報告書」岩埋文第397集
佐藤淳一・中村絵美	2004 「中半入遺跡第2次発掘調査報告書」岩埋文第413集
吉田光	2006 「大清水上遺跡発掘調査報告書」岩埋文第475集
戸根貴之はか	2007 「宮沢原下遺跡発掘調査報告書」岩埋文第495集
岩手理文	2007 「平成19年度発掘調査報告書」岩埋文第524集
岩手理文	2008 「平成20年度発掘調査報告書」岩埋文第516集

### 3 基本層序

今回調査を実施した3遺跡は、何れも胆沢区南部に所在し、尼坂遺跡と牡丹野遺跡は隣接し、また牡丹野遺跡と作屋敷遺跡は約500mの距離にある。今回の調査地は、同じ胆沢扇状地低位段丘高位面（※尼坂遺跡自体は中位段丘と低位段丘を跨ぐが、今回の調査地は低位段丘高位面）に立地することもあり、旧河道や旧沢部分などを除くと、ほぼ同様の土壙がみられる。

#### (1) 尼坂遺跡の基本層序

尼坂遺跡の基本層序は、調査開始初期に第1～5の5本の試掘トレンチを掘削し、土層の堆積状況を把握した。概ね以下のような堆積順を示す。

- I層 表土・水田土・整地層 層厚20～50cm……現代の文化層で平均的には30cm程。
- II層 黒褐色シルト 層厚0～10cm……………古代を中心とする文化層と推定される。
- III層 黒色シルト 層厚0～40cm……………縄文時代前期前葉以降の文化層と推定される。
- III a層 黒色シルト 層厚0～30cm……………縄文時代前期前葉以前の文化層と推定される。
- IV層 黄褐色粘土（地山）

尼坂遺跡は、調査区南部においては耕作土を除去した段階で、IV層黄褐色粘土（地山）が直に露出する状況にあった。このことから、昭和28年に実施された耕地整理などにより削平が著しいことがわかった。調査区西部においては、II層は確認できなかったものの、III層は窪地部分（沢跡と考えられる）に比較的広範囲に残存し、またその地点のIII層下位より浅黄褐色砂状堆積物のレンズ状の堆積を確認した。この浅黄褐色砂状堆積物に関係する遺構・遺物が無かったことから、科学分析を実施していないが、肉眼観察からは十和田中振火山灰（To-Cu）の可能性が示唆される。従って、この窪地自体は、縄文時代前期前半には開口していた可能性が高く、合わせてⅢ層は十和田中振火山灰降下期以降に形成された土層と推定されよう。また、この窪地の壁を構成するIII a層と命名した黒色シルトは、土器などの遺物が出土しなかったことから詳細はわからないが、十和田中振火山灰降下期より古い時期に形成された土層と推定される。

#### (2) 牡丹野遺跡の基本層序

牡丹野遺跡の基本層序については、試掘トレンチや調査成果から次のように考えられる。

- I層 表土 層厚20～150……………水田耕作土や水田造成に伴う盛土である。
- II層 黒褐色シルト 層厚0～50……………古代若しくは弥生時代以降に形成された土層と捉えられ、

弥生時代後期の土器、平安時代の土師器などが出土した。

Ⅲ層 黒色シルト 層厚 0～20cm…………縄文時代に形成された土層と捉えられる。

Ⅳ層 黄褐色粘土（地山）……………地点によっては径5～40cmの円礫を含む。

牡丹野遺跡では、表土を除去した段階で、調査区北西部や中央の一部にⅡ層黒褐色シルトのプライマーな土層の堆積が確認されたものの、大部分は直にⅣ層黄褐色粘土（地山）が露出する。従って、過去の耕地整理の際に大規模な削平を受けていると捉えられる。なお、地権者によれば、大規模な耕地整理が行われたのは、昭和28年であるらしい。また、調査区北西部から調査区中央部に向かって流れれる旧河道が検出されたが、これらについても昭和28年若しくはその頃に実施された耕地整理に伴い、堰きとめられ廃絶された可能性もある。

補足として、調査開始初期に試掘トレンチを設定・掘削したが、調査進行上の関係で、重機による表土除去する際の日安に用いることとし、トレンチ箇所の平面実測を割愛した。従って、トレンチ箇所は明示していないことをお断りしておく。

### （3）作屋敷遺跡の基本層序

作屋敷遺跡の基本層序について、試掘トレンチや調査成果から次のように考えられる。

I層 表土 層厚20～50cm…………現代の水田耕作土や盛土などを一括する。

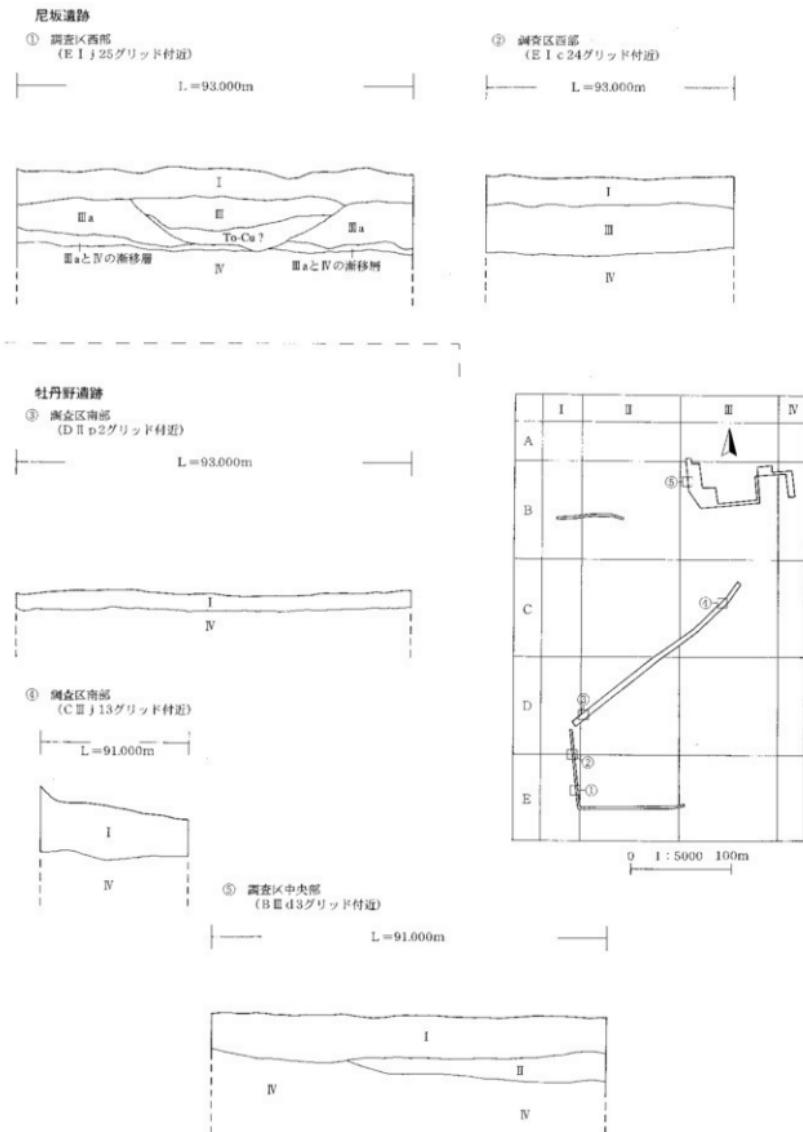
II層 黑褐色シルト 層厚 0～20cm…………古代の遺構埋土の主体を占める。

III層 黒色シルト 層厚 0～40cm…………古代以前に形成された土層と捉えられ、陥し穴状造構の埋土上位などに堆積する。

IV層 黄褐色粘土（地山）……………地点により礫が混じる部分もある。

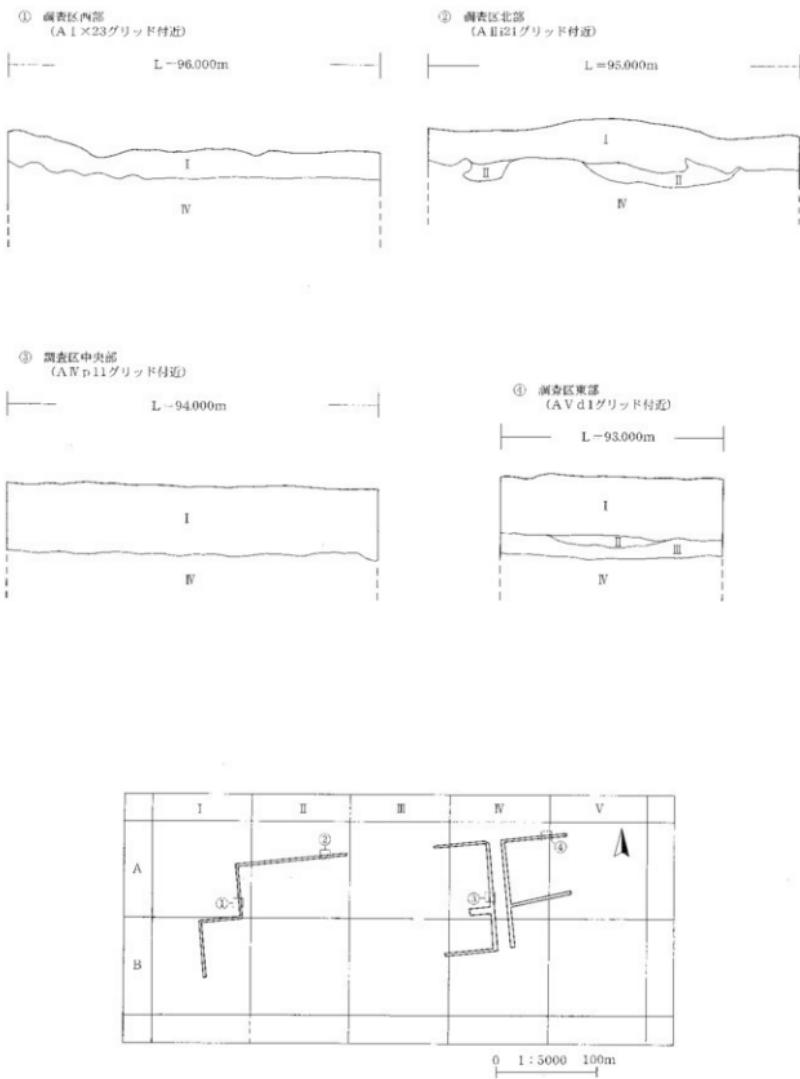
作屋敷遺跡では、表土を除去した段階で、大部分は直にⅣ層黄褐色粘土（地山）が露出する。従って、調査区全体的にみられるのはI層とIV層である。ただし、尼坂・牡丹野遺跡と比較した場合、耕地整理時の地山掘削深度が浅かったものと思われ、遺構の遺存状態が良好であった。Ⅲ層は、調査区中央部の北端や、調査区東部の北端付近など極わずかな範囲で認められたが、遺物の出土はなかった。上記のとおり、陥し穴状造構の埋土上位にみられる黒色シルトは、Ⅲ層に出来ると考えられる。

補足として、調査開始初期に試掘トレンチを設定・掘削したが、調査進行上の関係で、重機による表土除去する際の日安に用いることとし、トレンチ箇所の平面実測を割愛した。従って、トレンチ箇所は明示していないことをお断りしておく。



第5図 尼板・牡丹野遺跡基本層序

### 3 基本層序



第6図 作屋敷遺跡基本層序

### III 野外調査と室内整理の方法

#### 1 野外調査

##### (1) 尼坂遺跡・牡丹野遺跡の調査面積について

尼坂遺跡・牡丹野遺跡の調査予定面積は、尼坂遺跡が $270\text{m}^2$ 、牡丹野遺跡が $2,864\text{m}^2$ であったが、ハイブライン部分の調査区幅が $2\text{ m} \rightarrow 1.5\text{ m}$ に変更されたことに伴い調査面積に変更が生じたことや、当初可能性ありとして尼坂遺跡に含めていた部分が牡丹野遺跡に含めることになるなど、若干の変更が行われた。県南広域振興局農林部農村整備室と生涯学習文化課による協議を経て、最終的には尼坂遺跡が $322\text{m}^2$ 、牡丹野遺跡が $2,698\text{m}^2$ の調査を実施した。

##### (2) 作屋敷遺跡の調査面積について

作屋敷遺跡の調査予定面積は、 $1,944\text{m}^2$ であったが、現地協議で調査区北部 $100\text{m}^2$ が追加となり、最終的には $2,044\text{m}^2$ の調査を行った。なお、 $2,044\text{m}^2$ の内、調査地中央部（神社鳥居の前付近） $150\text{m}^2$ は確認調査のみを実施している（この部分からは遺構・遺物ともに発見されなかった）。

##### (3) 調査区の区割設定

尼坂遺跡と牡丹野遺跡は、地続きの関係にあり、実際の発掘調査においても並行して調査を行った経緯があることから、この2つの遺跡は一括して扱い記述することとする。

＜尼坂遺跡・牡丹野遺跡＞尼坂遺跡・牡丹野遺跡の区割設定は、世界測地系（平面直角座標第X系）を座標変換した調査座標を用いて、調査区全体を網羅するよう設定した。調査座標原点は、 $X = -9650.000$ 、 $Y = 21000.000$ を採用し、一辺 $100\text{m}$ の大グリッドを設定し、さらにこれを一辺 $4\text{ m}$ の小グリッドに区割した。グリッドの名称について、大グリッドは原点より北から南に向かってアルファベットのA→B→C…と、西から東に向かってローマ数字のI→II→III…と付した。小グリッドは、北から南へアルファベットのa~y、西から東へ算用数字の1~25を付し、上記した大グリッドと組み合わせて「A I a 1」・「A I b 1」のように表した。

- 基1  $X = -96953.000$ ,  $Y = 21194.000$ ,  $H = 91.730\text{m}$
- 基2  $X = -96953.000$ ,  $Y = 21101.000$ ,  $H = 92.513\text{m}$
- 基3  $X = -96873.000$ ,  $Y = 21096.000$ ,  $H = 92.180\text{m}$
- 基4  $X = -96785.000$ ,  $Y = 21194.000$ ,  $H = 91.567\text{m}$
- 基5  $X = -96730.000$ ,  $Y = 21160.000$ ,  $H = 90.625\text{m}$
- 補1  $X = -96953.000$ ,  $Y = 21160.000$ ,  $H = 92.144\text{m}$
- 補2  $X = -96953.000$ ,  $Y = 21132.000$ ,  $H = 92.375\text{m}$
- 補3  $X = -96919.000$ ,  $Y = 21096.000$ ,  $H = 92.413\text{m}$
- 補4  $X = -96842.000$ ,  $Y = 21132.000$ ,  $H = 92.159\text{m}$
- 補5  $X = -96763.000$ ,  $Y = 21231.000$ ,  $H = 90.885\text{m}$

＜作屋敷遺跡＞作屋敷遺跡の区割設定は、世界測地系（平面直角座標第X系）を座標変換した調査座標を用いて、調査座標原点は $X = -96000.000$ 、 $Y = 20400.000$ （世界測地系）を起点とし、その設定方法は尼坂・牡丹野遺跡に準じている。

基1 X = -96203.000, Y = 20447.000, H = 96.134m  
 基2 X = -96203.000, Y = 20488.000, H = 95.280m  
 基3 X = -96138.000, Y = 20527.000, H = 95.542m  
 基4 X = -96138.000, Y = 20577.000, H = 94.441m  
 基5 X = -96121.000, Y = 20735.000, H = 92.783m  
 基6 X = -96121.000, Y = 20761.000, H = 92.763m  
 基7 X = -96185.000, Y = 20735.000, H = 93.799m  
 基8 X = -96185.000, Y = 20761.000, H = 92.733m  
 基9 X = -96231.000, Y = 20735.000, H = 93.020m

#### (4) 粗掘り・遺構検出

調査開始と同時に調査区内に試掘トレーニングを設定し、人力で掘削して土層の堆積状況及び遺構検出面の確認に努めた。その後、重機（バックホー）を用いて表土（主に水田耕作土や盛土）を除去した。表土除去後、人力で錐筆、移植ヘラを用いて遺構の検出を行った。

#### (5) 遺構の命名・精査

検出された遺構は、検出順に○号住、○号土坑、○号溝跡などと命名した。遺構の精査は、堅穴住居跡の場合は、上層から1層ずつ掘り下げ、埋土中および貼り床内の遺物はできるだけ層毎に取り上げた。土坑は2分割して、土層記録後に、残る半分を精査する際に層毎ごとに取り上げた。現場で作成した実測図は、平面図は電子平板を用い、断面図は原則的に1/20で従来の手実測で作成した。写真撮影は、6×7cm判のモノクローム1台と35mmモノクローム1台、35mmリバーサル1台、デジタルカメラの4台で行った。原則として報告書掲載用の写真はデジタルカメラで撮影したものを使った。航空写真撮影は、セスナ機により行い、6×7cm判のモノクロとカラーの2種類を撮影した。

## 2 室 内 整 理

#### (1) 遺 構 図 面

遺構図は、電子平板のデータで作成した平面図と、現場で人力により作成した断面図をスキャナーで取り込み、全てデジタルデータとした後、編集した。

#### (2) 遺 物

遺物は、先に水洗と出土地点ごとの仕分け作業を行った後、遺物の種類毎に以下のように進めた。土器類は、水洗後に袋単位で通し番号を付けて重量の計測と登録作業を行った。その際に袋に付けた通し番号は、注記番号として採用した。選択基準は、①残存率の良いもの、②遺構の時期推定になる層位的資料、③口縁部資料、などの順に優先して選択し、仮番号を付け登録した後、掲載遺物として更に選択した。土製品・石器・鉄製品は、水洗後、仮番号付け、掲載物の選択を行った後、掲載番号を付した。陶器類は、水洗後、仮番号を添付し登録した。その後、近世までのものを優先し選択を行った後、掲載番号を付した。

#### (3) 写 真 類 の 整 理

撮影した遺構写真は、撮影カード順の写真台帳を作成した。6×7cm判モノクローム、35mmモノク

ローム、35mmリバーサルの種類ごとにアルバムに整理し、デジタルカメラで撮影したデータは日付順に整理した。航空写真は6×7cm判モノクロ・カラーを撮影した。遺構写真図版はデジタルカメラで撮影したものを行い、デジタル編集し作成している。遺物写真は、当センターの写真技師により原則として1点ごとに撮影番号を付してデジタルカメラで撮影した。

#### (4) 報告書について

<原稿執筆・編集>報告書の執筆・編集は星と田中が行った。

<遺構の記載>遺構の記載は、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、堅穴状遺構、土坑、溝跡、炉跡・焼土、柱穴状の順に編集している。

<遺物の掲載>遺物掲載番号は、尼坂遺跡1～4、牡丹野遺跡1～55、作屋敷遺跡1～109と付し、遺物図版・遺物写真図版・観察表とも同一の番号となっている。

<遺構図版>遺構図版は、1/50を基本とするが、遺構の性格に応じて縮尺を変えている。遺構はデジタルでトレース・編集を行い作成した。

<遺物図版>遺物図版は、土器は1/3を原則として突出して大きいものを1/6、土製品は1/2、陶磁器は1/2、鉄製品は1/2、石器は1/2で掲載した。

<遺構写真図版>遺構写真図版の掲載順は、本文や遺構図版と同様である。デジタルデータを編集し、図版作成を行った。

<遺物写真図版>遺物写真図版は、遺物図版と同じ縮尺を基本とする。デジタルデータを編集し、図版を作成した。

#### (5) 観察表について

<遺構観察表>遺構の規模について、他の遺構や擾乱で破壊を受けているものについては残存部以上をつけて明示した。ただし、残存状況が特に悪いものについては不明や空欄とした。

<遺物観察表>土器、土製品、石器、石製品などの法量値は、欠損する場合は残存部の数値を（ ）で示した。ただし、土器類の破片などについては、割愛する。

## IV 尼坂遺跡

### 1 遺跡の位置・概要

尼坂遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字国分370-1ほかに所在する。遺跡は、JR東北本線水沢駅から西約7km、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北約2kmの位置にあり、胆沢扇状地福原段丘～水沢段丘高位面に立地し、調査地の標高は92～94m、現況は水田、畑、水路、道路、宅地などである。

今回の調査区は水沢段丘高位面にあり、すぐ南側が調査区より3mほど高い福原段丘である。従って、段丘境に近い部分を調査した。

「尼坂」という地名は、牡丹野で尼さんたちが薬草を栽培し、その薬草を運ぶのに通った坂に由来するらしい。

今回の尼坂遺跡の調査区は、牡丹野遺跡と地続きの関係にあることと、当初両者の境界とされていた牡丹野遺跡3号溝跡を検出した付近は埋蔵文化財包蔵地に隣接する「可能性あり」とされていた部分でもあった。従って、遺跡の境界が不明瞭にあったことと、周知範囲の隣接地ということから、どちらの遺跡範囲に含めるか不確定な部分でもあった。この部分からの検出遺構としては、牡丹野遺跡3号溝跡として縦集・掲載した遺構があり、調査時は尼坂遺跡として調査を進めていた。県教育委員会とその後の協議の結果、最終的にはこの部分を牡丹野遺跡に含めることになった。

### 2 これまでの調査歴

尼坂遺跡は、古くは昭和26年8月東北大によって調査が行われ、縄文時代早期～前期前半の重要な遺跡として注目されていた（加藤：1954）。その後、旧胆沢町教育委員会により4回調査が行われている（第一～四次調査）。ここでは旧胆沢町教育委員会が調査した第一次から第四次調査について、その概要をまとめてみる。

＜第一次調査＞第一次調査は、町道改修工事（町道鶴田愛宕線拡幅工事に伴う）に関わり昭和56年11月12日～12月9日にかけて6,500m<sup>2</sup>が調査されている。平安時代の堅穴住居跡5棟、ピット跡、溝跡が検出され、縄文時代前期前半の土器、石器、土師器、須恵器、羽口、鉄器、砥石が出土している（山口・佐々木・安倍1983）。

＜第二次調査＞第二次調査は、住宅建設に関わり平成3年10月15日～12月8日にかけて1,196.5m<sup>2</sup>が調査されている。土器集積土坑、住居跡9棟（※内平安1棟）、土坑11基、溝状土坑（※陥し穴）7基、焼土遺構4基、木根攪乱2基が検出されている。遺物は、縄文時代早期～前期の土器、石器、土師器が出土している（山口・佐々木・安倍：1992）。

＜第三次調査＞第三次調査は、第三次調査（東）と第三次調査（西）に分け報告書が発刊されている。

第三次調査（東）は、町道拡幅（町道独光館線）に伴い平成4年7月2日～9月5日まで1,539.53m<sup>2</sup>が調査されている。平安時代堅穴住居跡、性格不明遺構、性格不明の周溝造構2基、大小種々の土坑群・ピット群が検出されている。遺物は、縄文時代早期～前期・後期の土器、須恵器、石器が出土している（山口・佐々木・安倍1993）。

第三次調査（西）は、胆沢ダム建設に伴う移転世帯の宅地造成に伴い平成4年6月23日～7月14日

にかけて730m<sup>2</sup>が調査されている。溝状土坑4基、土坑2基、性格不明のピット群3基が検出されている。遺物は、縄文時代早期～前期の土器、石器が出土している（山口・佐々木・安倍1993）。

＜第四次調査＞第四次調査は、宅地造成に伴い平成5年6月20日～8月9日にかけて792.8m<sup>2</sup>が調査されている。陥し穴状土坑4基、楕円形土坑2基、円形土坑2基が検出されている。遺物は、縄文時代前期前半・後期～晩期の土器、石器が出土している（安倍・佐々木：1994）。

### 3 検出遺構

尼坂遺跡からの検出遺構はない。基本層序の項で上述したとおり、縄文時代の沢跡と推定された崖地が1箇所見つかったが、人為による遺構ではないことと、出土遺物がなかったことから、不掲載とした。

### 4 出土遺物

調査開始初期に掘削したトレンチから5点の陶磁器類が出土した。その内、明らかに現代のもの1点を除き、1～4の4点を掲載した。2は18世紀代の大堀相馬の碗である。それ以外は、産地・年代とも不明にあるが、近代以降と推定される。

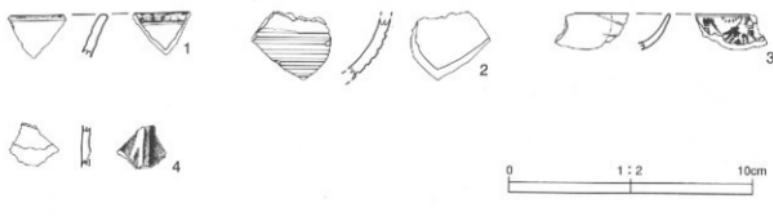
### 5 総括

今回の調査では、遺構の検出はなく、遺物については近世と近世以降と推定される陶磁器片が5点出土した。過去の発掘調査で顕著に見られた縄文時代早期～前期や古代の遺構・遺物の発見には至らなかった。

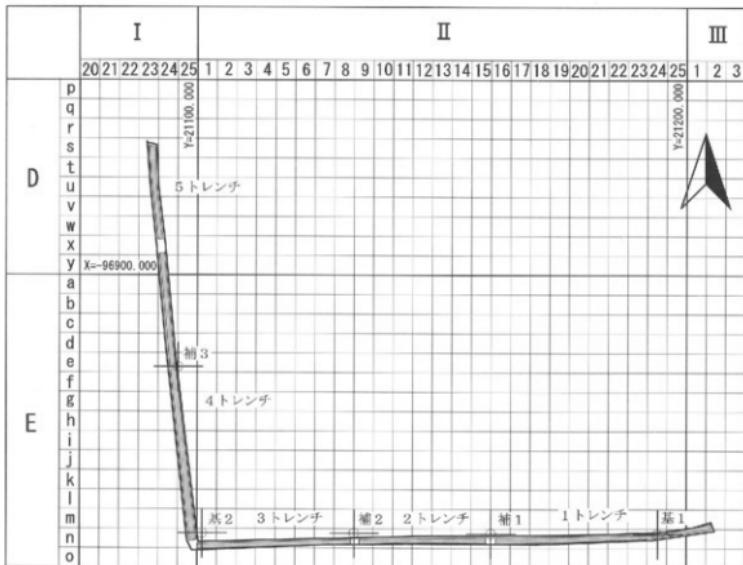
昭和26年に東北大で行った発掘調査を含めると、今回の発掘調査は6回目となる。過去5回の発掘調査が行われている地点は、町道鶴田愛宕線の北側で、今回の調査区からみて南西方向にある。今回の調査区は、水沢段丘高位面に相当し標高が92～94mである。対して、過去の調査区は、福原段丘及びその北崖線辺に相当すると考えられ、標高が95～97mで今回の調査区より3～5m高い。この標高差は、実際の現地においても看取される。先にも上述したとおり、過去の発掘調査で縄文時代早期～前期を中心とする遺物が顕著に出土しているが、今回該期の遺物が出土しなかった理由の一つとして、この段丘の差異が関係する可能性もある。また、古代の遺構・遺物についても未発見に終わったが、これについては調査区の西側や牡丹野遺跡のある北側に展開する可能性を示唆するものである。

No	出土地点	層位	器種	産地	時代	備考
1	2トレンチ	耕作土直下	不明	不明	現代	
2	2トレンチ	耕作土直下	碗	大堀相馬	18世紀	上沼田灰陶、中～下等灰陶
3	2トレンチ	耕作土下層	小皿	不明	不明	
4	4トレンチ	検出面	皿	不明	不明	

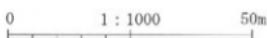
第5表 陶磁器観察表



陶磁器



グリッド配置図



第7図 グリッド配置図、陶磁器

## V 牡丹野遺跡

### 1 遺跡の位置・概要

牡丹野遺跡は奥州市胆沢区南都田字国分371ほかに所在する。JR東北本線水沢駅から西約7km、胆沢総合支所（旧胆沢町役場）から北約2kmの位置にあり、胆沢扇状地水沢段丘高位面に立地し、調査地の標高は89~92mである。現況は水田、水路、農道で、耕地整理などにも関連して平坦な土地が広がる。地形図で現道などの標高値を見ると、西から東へ、そして南から北へ、少しずつ標高が下がる。従って基本地形は南西→北東へ向かって緩やかに傾斜することが読みとれる。「牡丹野」という地名は、昔この地で尼さんたちが、薬草（キキョウ）の栽培を行った場であることに由来するらしい。

### 2 これまでの調査歴

牡丹野遺跡は、「胆沢町史」（胆沢町町史編纂委員会：1981）の記述を参照すると、大正の頃から土師器片・須恵器片の散在が確認され、昭和40年頃桑畑造成時に土師器甕が発見されている。発掘調査は、岩手県教育委員会により平成19年2月に約200m<sup>2</sup>が実施されている（岩手県教育委員会：2008）。9世紀後半と推定される竪穴住居跡1棟、土坑2基を検出している。岩手県教育委員会による調査地点は、2号旧河道を検出した調査区西部と呼んでいる部分から南西へ約70mにある。野外調査時にこの周辺の畑を踏査した際にも、須恵器片の散布を確認している。

### 3 検出遺構

牡丹野遺跡の今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構1基、土坑4基、溝跡4条、柱穴状土坑32基、旧河道4条である。遺構の記載に際して、若干説明を補足すると、位置の項では調査区が細長いことから、調査区を便宜的に調査区北西部・南部・中央部の3つに分け呼称し、記述に用いることとする。規模の項では、遺構の両端が調査区外に延びることが多かったため、調査区の幅そのものが遺構の長さになる場合が多い。その場合は、「不明」か検出部の数値に「以上」を付して明記することとする。竪穴住居跡や溝跡などが主に該当する。埋土の項では、土層の記載に際して基本層序はI~IV層のローマ数字を用い、個々の遺構埋土は1層・2層・3層・などとのアラビア数字を用いている（※規模と埋土については作屋敷遺跡も同様である）。

#### （1）竪穴住居跡

##### 1号竪穴住居跡（第11図、写真図版5）

＜位置・検出状況＞調査区南部のD II h 10~11グリッドに位置する。検出面はIV層中において、黒褐色シルトによる方形気味の広がりとして把握した。水出造成時に竪穴本体は削平を受けたと思われ、壁はほとんど残っておらず、床面付近のみが残存する。

＜重複関係・建替え＞1・2・4号土坑に切られる。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は、隅丸長方形と推定されるが、北側が未検出ため明確ではない。規模も明確ではないが、長軸と捉えられる南北方向では4m以上、短軸と捉えられる東西方向においては約4.1mを測る。検出面からの深さは、6cm以下が大部分で、直に床面が露出している部分

### 3 掘出遺構

もある。長軸方向は南-北と考えられる。

＜埋土＞第11図の土層断面A-A'・B-B'の11~14層が本遺構に伴う堆積土である。12層と13層がわずかに残存する埋土である。暗褐色シルトを主体とし、自然堆積と判断される。11層系と14層は貼り床土と推定される。

＜床面・壁＞IV層地山を床面とするが、埋土で述べたとおり11層系と14層が貼り床上で部分的に貼り床が施されていると判断される。硬化面は認知できない。貼り床上面では全体的に平坦である。壁は、上記のとおり、水田造成時に破壊されているため、ほとんど立たない。

＜カマド＞検出されていない。

＜柱穴・付属施設＞柱穴は屋外から1個検出した。床面からは確認できない。付属施設として、南東隅から浅い土坑を検出した。

＜遺物＞（第21図1~5、写真図版10）出土遺物は、土器類361.91g、陶磁器類4点が出土した。1~4は土師器甕の口縁部で、何れもロクロによる調整がみられる。5は須恵器壺の胴部下半~底部である。陶磁器類は検出作業中に出土したもので、何れも近代若しくは現代のものであることから、不掲載とした。

＜時期＞出土土器は小破片で詳細な時期は特定できないが、9世紀後半~10世紀前半と推定される。重複遺構との関係からは、本遺構を切る1号土坑の埋土中に十和田a火山灰の混入が認められたことから、本遺構は十和田a火山灰降下期より古いと考えられる。従って、出土遺物から得られている9世紀後半~10世紀前半の年代とは整合する。

### 2号竪穴住居跡（第12図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞調査区南部のC II X23グリッド付近に位置する。本遺構プランは調査区外南に延びる。検出面はIII~IV層中で、黒褐色シルトによる不整気味のプランとして把握した。

＜平面形・規模・長軸方向＞南側は調査区外へ延びることから詳細は不明であるが、平面形は方形と推定される。検出部で把握できた規模は、長軸1.1m以上×短軸2.1m、検出面からの深さは約20cmを測る。長軸方向は北西-南東と推定される。

＜埋土＞1層は現在の水田耕作上、2層は水田床土である。3層が本遺構に伴う堆積土である。3層は、黒褐色シルトを主体とし、人頭大の礫が多量に混入する。礫は、自然磨耗した河原石が主体であるが、人為による磨痕との見分けのつかないものが混じる。これらの礫自体は、人為による投げ込みと捉えられるが、堆積土自体は自然堆積層と考えられる。

＜床面・壁＞IV層地山を床面とし、ほぼ平坦である。貼り床は認められない。壁は、外傾して立ち上がる。

＜カマド＞北壁の東隅より煙道部を検出した。煙道部は、天井部分は削平されているが、遺存状況は概ね良好で、北西方向を向く。煙道底面は、竪穴住居床面からみて、平行気味に延びた後に外傾して立ち上がる。煙出し部は明確には認知できなかったが、あるいは第12図B-B'土層断面の8層が堆積する凹地部分が煙出し部の一部かもしれない。燃焼部と袖部については認められない。

＜遺物＞（第24図54、写真図版12）出土遺物は、石器1点である。先にも上記したとおり、埋土中~床面にかけて多量の礫が投げ込まれていたが、その中の1点を磨石と認知した。また、検出作業時に時期や產地が不明の陶磁器1点が出土したが、現代の可能性が極めて高いことから不掲載とした。

＜時期＞古代と推定されるが、出土遺物、重複遺構、火山灰などが無く、明確にはわからない。

## (2) 壊穴状遺構

### 1号堅穴状遺構（第12図、写真図版6）

＜位置・検出状況＞調査区南部のD II n 4 グリッド付近に位置する。表土除去後、Ⅲ層～Ⅳ層で黒褐色シルトの方形状プランとして把握した。柱穴やカマドの検出がなかったことから、堅穴住居跡ではなく、堅穴状遺構として遺構登録した。

＜平面形・規模・主軸方向＞プランの南東側が調査区外に延びるため明確にはわからないが、平面形は方形基調である。規模は把握できる北西～南東方向では2.8mである。検出面からの深さは6～10cmである。上部はかなり破壊を受けていると考えられる。主軸方向は不明である。

＜埋土＞1層は現代の水田底土である。2層が本遺構に伴う堆積土で黒褐色シルトである。黄褐色粘土ブロックの混入具合からは人為堆積層の可能性がある。

＜床面・壁＞床面には緩い凹凸がある。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類3.31gである。磨滅した小片なことから不掲載とした。

＜時期＞不明。埋土の様相からは、古代の遺構と考えられる。

## (3) 土坑

### 1号土坑（第11図、写真図版7）

＜位置・検出状況＞調査区南部のD II h 11グリッド付近に位置する。検出状況は、Ⅳ層上面において1号堅穴住居跡と共に認知した。

＜重複関係・建替え＞1号堅穴住居跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は円形を呈する。開口部径は160×140cm、深さは1号堅穴住居跡の床面より12～24cm深い。断面形は浅皿状を呈する。

＜埋土＞1～4層に分層した。埋土上位に堆積する1層は黒色シルト、その下位に2層に亘り黄橙色層の十和田a火山灰層がみられ、3層黒褐色シルト、4層暗褐色シルトにより構成される。土層の堆積様相から、自然堆積と判断される。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞重複遺構との関係からは、1号堅穴住居跡より本遺構が新しい。従って、9世紀後半より新しい可能性を考えられる。また、埋土中には十和田a火山灰が堆積することから、10世紀前半より古い。従って、9世紀後半より新しく、10世紀前半より古ないと捉えられる。

若干所見を付記すると、1号堅穴住居跡出土遺物と、本遺構の埋土に十和田a火山灰が堆積する内容を鑑みると、1号堅穴住居跡の廃絶時期と、本遺構の構築された時期は大差ない可能性はある。

### 2号土坑（第11図、写真図版7）

＜位置・検出状況＞調査区南部のD II h 11グリッド付近に位置する。検出状況は、Ⅳ層上面において1号堅穴住居跡と共に認知した。

＜重複関係・建替え＞1号堅穴住居跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は長楕円形を呈する。開口部径は165×98cm、深さは1号住居跡の床面より約24cm深い。断面形は浅皿状を呈する。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする。埋土下位の24層中に十和田a火山灰が微量混入する。自然堆積か人為堆積かの明確には判断できないが、自然堆積と捉えておきたい。

＜底面・壁＞底面は丸底気味である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞重複遺構との関係からは、1号竪穴住居跡より本遺構が新しい。従って、9世紀後半より新しい可能性で考えられる。また、埋土中には十和田a火山灰が堆積することから、10世紀前半より古い。従って、9世紀後半より新しく、10世紀前半より古いと捉えられる。若干所見を付記すると、1号竪穴住居跡の廃絶時期と、本遺構の構築された時期は大差ない可能性はある。

### 3号土坑（第13図、写真図版7）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB III j 7グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルトの広がりとして検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は隅丸長方形を呈する。開口部径は188×98cm、深さは約24cmである。主軸方向は北西-南東方向をみる。

＜埋土＞1層黒褐色シルトによる単層である。黄褐色粘土ブロックと礫が少量含まれる。人為堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から古代と考えられる。

### 4号土坑（第11図、写真図版7）

＜位置・検出状況＞調査区南部のD II h 11グリッド付近に位置する。検出状況は、IV層上面において1号竪穴住居跡と共に認知した。

＜重複関係・建替え＞1号竪穴住居跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は不整梢円形を呈する。開口部径は185×140cm、深さは1号住居跡の床面より約28cm深い。断面形は浅鉢状を呈する。

＜埋土＞埋土上～中位に1層黒褐色シルトが、埋土中～下位に暗褐色シルトが堆積する。自然堆積ではないかと考えられる。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第21図6、写真図版10）出土遺物は土器類17.5gである。6の土器器窓1点が出土した。

＜時期＞重複遺構との関係からは、本遺構が1号竪穴住居跡を切ることから、9世紀後半～10世紀前半より新しいと捉えられる。出土遺物からは9世紀後半～10世紀前半で考えられる。

## （4）溝 跡

### 1号溝跡（第14図、写真図版8）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB III d 2～i 10グリッド付近に位置する。表土除去後、VII層中で黒褐色シルトによる長方形の広がりとして把握した。西側は調査区外へ続く。東側は途中で途切れること。

＜重複関係＞4号旧河道を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞調査区内での規模は、長さ約30m、溝幅0.6～0.9m、深さ10～40cmである。主軸方向は、西から東へ向かった後、南東方向に折れる。

<埋土>黒褐色シルトによる草層である。自然堆積の可能性が高い。

<床面・壁>底面は平坦である。水が流れるとした場合、溝底の標高値からは北西→南東に向かう。ただし、溝底の比高はほとんどない。壁は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。

<柱穴・付属施設>なし。

<遺物>（第21・24図7～11・49・50写真図版10・12）出土遺物は土器類102.52g、石器2点である。土器類は、7は土師器壊、8・9は土師器壊、10は須恵器の壊？、11は須恵器壊である。石器は、49・50のスクレイパー2点が出土している。

<時期>出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と推定される。

### 2号溝跡（第13図、写真図版8）

<位置・検出状況>調査区南部のC III j 13～k 13グリッド付近に位置する。表土除去後、IV層中で黒褐色シルトによる長方形の広がりとして把握した。溝上～下部は削平され、溝底に近い部分が遺存していたと捉えられる。

<平面形・規模・主軸方向>調査区内での規模は、長さ6.8m、溝幅0.6m、深さ3～12cmである。長軸方向は、北から南へ直線的に延びる。

<埋土>1層は現水田耕作土、2層は耕地整理前の旧水田耕作土と判断される。本遺構に伴うのは3・4層と命名した土層で、黒褐色シルトを主体とする。自然堆積の可能性が高い。

<床面・壁>底面はやや凸凹がある。水が流れているとすると、溝底の標高値からは南→北へ向かって流れる可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。

<遺物>なし。

<時期>検出面から、昭和20年代後半の耕地整理より古いことは確実である。しかしながら、出土遺物、重複遺構などが無く、時期は不明にある。埋土の様相についても、埋土の遺存状況が悪く、古代かそれより新しいか判断できない。

### 3号溝跡（第14図、写真図版8）

<位置・検出状況>調査区南部のC I p 25グリッド付近に位置する。表土除去後、IV層中で黒褐色シルトによる溝状のプランとして把握した。補足として、この付近は平成19年段階では埋蔵文化財包蔵地周知外の部分であったが、岩手県教育委員会生涯学習文化課の試掘調査結果から、埋蔵文化財包蔵地に追加された部分である。尼坂遺跡と牡丹野遺跡の境界付近であったことから、調査開始前はどちらの遺跡範囲にも属さない「可能性あり」とだけされていた部分である。従って、調査開始当初は便宜的に尼坂遺跡に含めていたが、岩手県教育委員会生涯学習文化課とのその後の協議で牡丹野遺跡に含めることになった。

<平面形・規模・主軸方向>両端は調査地外に延びる。調査区内での規模は、長さは4.0m以上、溝幅0.7m、深さ35～45cmである。主軸方向は北西～南東方向に向かって直線的に延びる。

<埋土>1層は水田の耕作土である。2・2a・3層と命名した土層が本遺構に伴う。2層と2a層は黒褐色シルトで、黄褐色粘土質砂質土（この近辺の地山土）を5～7%含有する。3層は、黄褐色粘土質砂質土で地山土の再堆積土である。第14図A-A'断面では2層と2a層が3層を挟むような堆積が確認された。対してB-B'断面では2層が埋土上～中位に、3層が埋土中位～底面に堆積する。2層は自然堆積土とおもわれたが、A-A'断面の土層堆積様相を考慮すると、全て人為により埋め戻された可能性もある。ただ若干の留意点として、B-B'断面の下位にみられる3層の締まり

具合などからは、3層は底面の嵩上げを意図した整地土にも思える。その場合は、3層上面が使用時の溝底である可能性があり、2a層は溝掘り方への混入層である仮定もできようか。

＜床面・壁＞床面は平坦な部分が主体で、所々丸底気味の部分もある。水が流れていたと仮定した場合、溝底の標高値からは、北西→南東方向へ流れる可能性がある。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類1.45gである。磨滅した土師器小片1点が出土した。不掲載とした。

＜時期＞不明にある。埋土の様相などから古代と推定される。

#### 4号溝跡（第13図、写真図版8）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB III i 14グリッド付近に位置する。表土除去後、IV層中で黒褐色シルトによる細長いプランとして把握した。現況は水田で、調査時は調査事務所や駐車場への進入路として鉄板を敷設した直下に相当する部分である。調査の運営上、調査最終日にバックホーで表土を除去し、検出・精査を行った経緯のある地点で、早急な調査を行う必要があった。検出面はIV層ではなくI層であった可能性があり、従って近世～現代の遺構であると推定される。土層断面図についても作成できなかったことを補足しておく。

＜平面形・規模・主軸方向＞南一北方向に延びるが、両側は途切れる。北側は、表土除去を行った際に、誤って80cm程調査区外まで掘削してしまったが、更に調査区外へ延びることは確実である。規模は、長さ1.5m、幅0.3m、深さ10cm前後である。

＜埋土＞上記のとおり土層セクション図を作成していないが、黒褐色シルトによる単層である。自然堆積なのか人為堆積なのかは不明にある。

＜床面・壁＞底面は平坦である。水が流れていたと仮定した場合、溝底の標高値からは流れの方向を推定できない。周辺地形の標高から推定すると、南→北の可能性がある。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは5～8cmである。

＜遺物＞なし。

＜時期＞上記のとおり、近世～現代と推定されるが、明確には不明である。

#### （5）柱穴群

##### 調査区南部柱穴群（第15図）

＜位置・検出状況＞調査区南部のC III g 14～k 12グリッドに位置する。検出面はIV層地山粘土層であるが、現況は水田造成時に地山自体削平されている。当初は、柱穴状土坑の規模などの観点から現代の馳穴ではなく、古い時代の遺構と捉えた経緯がある。ただし、個々の埋土は水田耕作土に類似することも記述しておく。

＜柱穴番号＞1～5号柱穴状土坑で5個である。

＜規模＞柱穴状土坑の規模については、開口部径50cm前後、深さは10～18cmの数値内に収まる。柱穴群①や柱穴群②に所在する柱穴状土坑と比較すると、規模的には開口部径が大きく、深さが浅いものが主体にある。

＜埋土＞黒褐色シルト・暗褐色シルトを主体とし、单層のものが多い。埋土は全般に粘性が強く、やや湿っぽい。上記の様相は、水田耕作土に類似する。なお、柱痕は確認できない。

＜柱穴配置＞柱穴の配置について、1・4・5号柱穴状土坑の3個は同一軸線上に並ぶが、2・3号柱穴状土坑がずれる。ただし、各柱穴間の距離は、約4.7mの間隔を持って分布していることでは規則性がややある。

＜出土遺物＞なし。

＜時期＞時期について、調査区の幅が狭く、建物跡などの推定ができないことから、古代～現代までの時間幅としか言及できない。埋土の様相からは現代の可能性も考えられる。

#### 調査区中央部柱穴群①（第16図）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB III f 3～18グリッド付近に位置する。表土を除去した段階で35個の柱穴状土坑を検出した。検出面は、層地山粘土層を中心にⅢ層黒褐色シルト層である。

＜柱穴番号＞6～40号柱穴状土坑で35個である。

＜重複関係＞4号旧河道より新しく、3号旧河道より古いと捉えられるものが多い。

＜規模＞柱穴状土坑の規模については、開口部径23～64cm、深さ12～45cmの数値内にある。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする単層である。

＜柱穴配置＞柱穴群2としたものは、大きく捉えると1号溝跡の南西側付近にまとまりを持って位置する。直線的に配列するされるものとしては、①23・24・39号柱穴状土坑、②21・22・25・26・28・29号柱穴状土坑が挙げられる。これらは、何れも南西～北東方向に延びる。ただし、これらの柱穴配列からは掘立柱建物跡は復元できない。

＜出土遺物＞（第21・22図12・36、写真図版10・11）6・32号柱穴状土坑から出土遺物があり、総量で土器類44.56gが出土した。6号柱穴状土坑より36の弥生時代後期の土器が、32号柱穴状土坑より12の須恵器が出土している。

＜時期＞3号旧河道と4号旧河道との新旧関係から、古代若しくは古代より新しいと捉えられるものが多い。ただし、詳細な時期は掴めない。埋土の様相から古代と考えたい。

#### 調査区中央部柱穴群②（第17図）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB III c 21～f 21グリッドに位置する。表土を除去した段階で6個の柱穴状土坑を検出した。検出面はIV層地山粘土層である。

＜柱穴番号＞41～46号柱穴状土坑で6個である。

＜規模＞柱穴状土坑の規模については、開口部径16～73cm、深さ10～37cmである。規模的にはバラツキがある。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする単層のものが多い。

＜柱穴配置＞これらの柱穴配列からは掘立柱建物跡は復元できない。

＜出土遺物＞なし。

＜時期＞時期について、古代～現代までの時間幅としか言及できない。埋土の様相からは現代の可能性も考えられる。

### （6）III 河道

今回の調査では大きく捉えて4条の旧河道を検出した。これらの旧河道は現在の地図などからは読み取れない情報であることと、遺物などから概ねの埋没時期を想定できることから、人為により構築された遺構ではないが、図化・明示することとした。

#### 1号旧河道（第18図、写真図版9）

＜位置・検出状況＞調査区南部のD f 10～d 17グリッド付近に位置する。検出状況は、表土を除去

した段階で、北東～南西方向に延びる幅3～4mの暗褐色シルトの帯状のプランを検出し、堀、大溝、近現代の屢跡などを想定した経緯がある。調査方法は、先にプランの短軸方向に平行するように4本の試掘トレーニングを設定し、土層の堆積状況や壁形や底面の様相把握に努めた。その結果、プラン把握の一つのキー層であった埋土上位にみられる暗褐色シルトの堆積が掴めない地点が多く、人為的に掘られた施設とするには躊躇する状況であった。従って、旧河道として登録することとした。

＜平面形・規模＞平面形は、やや蛇行気味に捉えられる。調査区内で把握される長さは約38m、幅は3～4m、深さ35～70cmである。

＜埋土＞埋土は1～4b層までの5つに分層した。最上位の1層は暗褐色シルトを主体に黄褐色粘土質土（地山土）が混じる。層厚は3～12cmで薄い。堆積が自然なのか人為なのか判断ができなかった。2層は黒褐色シルトで層厚10～25cm、径5～30cmの円礫が多く含まれる。この2層は、主に南西方向より入り込んで堆積した自然堆積層と判断される。なお、12世紀の常滑の破片が、この2層から出土している。3層は黄褐色粘土を中心には褐色砂質土が多量に含まれる。層厚は10～40cmである。この3層についても、2層と同様に主に南西方向から流入した自然堆積層で、合わせて水性堆積由来すると推定される。4層は黄褐色粘土層であるが、円礫がほとんど含まれない部分を4a層に、円礫を多量に含む部分を4b層として区分した。全体的には4a層が4b層より上位に堆積する。自然堆積層である。

＜出土遺物＞（第21・23図13・40・41、写真図版10・11）埋土中から須恵器1点、常滑2点、合わせて85.98gの遺物が出土している。

＜時期＞遺物は平安時代の須恵器と12世紀の常滑片である。12世紀段階では埋没していた可能性を推定しておきたい。

## 2号旧河道（第19図、写真図版9）

＜位置・検出状況＞調査区北西部のB II n 2～p 10グリッドに位置する。耕作土などの表土を除去後、黒褐色や青灰色の粘土層と褐色砂質土層が入り混じった低湿地的な様相の土層が表れた。調査区の幅が狭く、プランの平面的な広がりは掴めないことから、各所にトレーニングを設定し、掘り下げた。その結果、1m程掘り下げた段階で、一升瓶の破片など現代と推定される遺物が出土した。掘削途中からは湧水が多く、調査区西部全体が水没したりなどした関係で、調査の安全を優先し、土層セクションの作成は割愛した。

＜平面形・規模＞調査区内での平面形は西～東に延びる。ただし、地元の方からは、昭和27年より以前には南西方向から北東方向に蛇行して流れる川があったことをご教示頂いた。

＜埋土＞上記のとおり、粘土や砂質土が混じった土層である。堆積様相からは自然堆積と思われたが、伝え聞いた内容によれば人為により埋められたものである。

＜出土遺物＞ビンの破片や何かの部材など出土した。昭和の産物であるが、昭和20年代後半よりは新しいように思われた。

＜時期＞地元の方から伝え聞いた内容からは、河が埋められたのは昭和27年のようなである。出土遺物ともほぼ整合することから現代と捉えられる。

## 3号旧河道（第20、写真図版9）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB II y 3グリッド～B III d 5グリッドに位置する。表土除去後、IV層中で検出した。

<重複関係・建替え> 4号旧河道より新しい。

<平面形・規模> 平面形や規模は窺い知れない。流れの方向について、現況の地形からは読み取れないが、調査所見としては北西から南京に延びた後、曲流して北東に向かう（※北東方向が下流と考えられる）。河幅については、北壁が調査区外に所在することが確実なのでわからない。調査部分からは、10m以上である。深さは35~120cmである。

<埋土> 第20図の断面図A-A'では、1層系が現代の耕作土、2層系が本旧河道に伴う堆積土、3層系、4層系、5層は4号旧河道に伴う埋土、6層は地山、11層は1号溝跡の埋土である。2層系は、色調と土質の違いで2~21層に細分した。色調は、大別するとにぶい黄褐色系と黒褐色系がある。土質はシルト系、砂質土系、粘土系、泥土系、礫系に分かれ、さらにそれらが混ざるものもある。土質で区分すると以下のようない様相である。①シルト系は埋土上位の2層が該当する。②砂質土系は2a層・2i層・21層で、埋土の上位～下位に至るまで各所に堆積する。2a層にはにぶい黄褐色を呈し、埋土上位から下位に向かって下るように堆積する。2i層と21層は、埋土の下位付近において、泥土に混ざる様相で堆積がみられる。色調も泥土と同様に黒色を呈する。③粘土系は2e層で、埋土最下位にみられ、色調は暗オリーブ褐色である。土層断面を見る限り比較的平坦気味に堆積している。④泥土系は2b層・2c層・2d層・2f層・2g層・2j層・2k層である。色調は何れも黒色である。実施した分層からはこの泥土系が埋土の主体を占め、傾向としては粘土系や砂質土系の上下に堆積する様相で捉えられようか。その中で2f層と2g層はやや粘土に近い土質、2k層は砂質に近い土質である。⑤礫系としたのは2h層で、泥土系と粘土系に挟まれるように確認された。断面図を作成した地点の土層堆積としては、人為により埋められた様相ではなく、自然に埋没したように思われた。

<出土遺物>（第21・23図14・15・42~46、写真図版10・11）出土遺物は須恵器2点（84.89g）と、17世紀後半～現代までの17点が出土した。14・15の須恵器2点は9世紀～10世紀と推定される。陶磁器類は、17世紀後半～18世紀の時期幅で推定される肥前産3点以外は、年代や産地が推定できないものがほとんどの状況であることから、42~46の5点を掲載した。

<時期> 出土遺物は年代の幅が大きく時期の推定は難しいが、時期の上限は江戸時代中期、下限は昭和初期くらいと考えられる。そして、2号旧河道としたものの旧流路が、本旧河道と考えられよう。従って、4号旧河道が最も古期の流路の可能性があり、本旧河道の北側に2号旧河道（昭和27年まで存在したと考えられる）の続きの河道跡が存在する可能性が高い。

#### 4号旧河道（第20、写真図版9）

<位置・検出状況> 調査区中央部のB III c 3 ~ j 10グリッドに位置する。表土除去後、IV層中で検出した。

<重複関係・建替え> 3号旧河道及び1号溝跡より古い。

<平面形・規模> 平面形は、北西から流れる2つの流路が、B III f 6グリッド付近で合流し、南東に延びる。その後どちらに流れが続くのかは現況地形からは判断できない。推測を記述すると、プレハブ進入路下であったB III 118グリッド付近では検出できることから、それより南側か、若しくは大きく曲流して北東方向に流れの方向が変わるのが、2つの可能性を提示しておきたい。規模は、河幅8~14m、深さは、浅いところで約20cmである。最深部については、調査の安全性を優先し完全な底までの掘削を行っていないため不明であるが、125cm以上を測る。また、B III e 3・e 4・f 3・f 4グリッド付近に中洲的な空間を持つことが合わせて判明した。

＜埋土＞第20図の断面図A-A'・B-B' 3~5a層が本旧河道に伴う堆積土である。全て自然堆積層である。①3層系は出土遺物と重複する1号溝から、弥生時代後期以降平安時代10世紀前半までの時間軸で埋没した土層と捉えられる。色調と土質の違いで新しい堆積層順に3~3e層に細分した。②4層系は、4層と4a層の2つに大別した。遺物は出土していない。4層は、土質や色調は3層や3e層と類似するが、B-B'断面の観察からは3e層より古いので、弥生時代後期以前の堆積層と判断したい。4a層は、下位の5a層に類似する土質・色調なので、4層が水成的な作用を受けた上層の可能性が示唆されるが、断定できない。③5層系は湿地土と判断される土質である。土質を見る限り、河に伴う堆積土とした場合は基本的に流れが緩やかなのか、若しくは緩やかになった時分の河底下位の堆積土なのか。何れ沼地的な低湿地的な堆積土の可能性を考えられようか。

＜出土遺物＞（第21~24図16~33・37~39・47・51、写真図版10~12）出土遺物は、土器類3,277.2g、近代と推定される陶磁器類5点、石器1点が出土した。土器類は、弥生時代後期の土器片が9号ビニール袋で1袋分、古代の土器数点である。弥生土器は地文のみのものが多く、明確には時期の特定が難しい。ただ、地文の施文の様子や土器胎土の様相から、弥生時代後期と推定される。土師器は、9世紀後半~10世紀前半と推定されるものが含まれるもの、磨滅が激しく、時期の特定が難しいものが大部分である。また、異時期の流れ込みの可能性もある。陶磁器類は、17世紀後半~18世紀と推定される肥前1点、18世紀代の大堀相馬1点、近代1点、現代1点、不明1点である。51の近代と推定される摺り鉢を掲載した。これらの陶磁器類は3号旧河道との遺物取り上げの際に混在した可能性もあり、本旧河道とは異時期と捉えられる。

＜時期＞出土遺物から、弥生時代後期~古代と考えられる。埋土の色調や土質などの様相についても、明らかに近代~現代とは異質である。また、埋土の項で上記したとおり、埋土の堆積様相からは、弥生時代後期には埋没が始まっていた可能性がある。

#### 4 出 土 遺 物

今回の調査では、大コンテナ（40cm×30cm×30cm）で1.5箱分の遺物が出土した。土器類は土師器・須恵器合わせて約1箱分、弥生土器は9号袋で約1袋分、陶磁器57点、石器7点、チップ・フレークが少量である。

##### （1）古 代 の 土 器

土師器と須恵器合わせて総重量4421.04gが出土した。遺構内が3,979.32g、遺構外出土分が437.13gである。出土地は4号旧河道を中心とする。接合作業を行った結果、完形や略完形に復元された個体ではなく、全て破片資料である。掲載基準は、3cm以上の破片、若しくは口縁部資料を中心とし、土師器と須恵器合わせて1~35を掲載した。

土師器は、壺、高台壺、甕の3器種がみられた。壺は7・16の2点を図化したが何れもロクロ成形による。18は高壺の脚部と推定される。今回の調査で最も多く出土したのが甕で、1~4・6・8・9・19~26の15点を掲載した。長胴甕と推定されるものがほとんどで球胴甕は認められない。ロクロ成形のものと非ロクロ成形の2種がある。

土師器は、全体の器形を窺い知れるものがないことから詳細についてはわからない。9世紀後半から10世紀前半の時間軸で捉えられようか。

須恵器は、壺、甕、壺の3器種で、器種判別できないものもある。壺は5・10・17の3点で、14・33は壺の可能性が高いものの、器種は不明にある。甕は11・13・15・27・28・29・34・35の8点で、

他に12と32にその可能性がある。

### (2) 弥生時代の土器

弥生時代後期と推定される土器片が、調査区中央部で検出した4号旧河道より比較的まとまりを持って出土した。全て小片で総量は9号袋1つ分である(約3kg)。36~39の4点を掲載した。36以外は地文のみで、文様を確認できるものがほとんどなく、詳細な時期の特定は困難な資料である。

36は、RL横回転を施す後、細めの沈線によりモチーフされる。このモチーフがどのように展開するのか判断できない。

37~39は、何れもRLが横回転及び斜回転されるもので、原体の回転方向に規則性を感じられない様相で捉えられる。

文様のある36と地文のみの37~39を比較した場合、原体にRLを用いていることと、節や条の様子が類似することから、同時期のものと推定しておきたい。

### (3) 陶磁器類

総数で57点の陶磁器類が出土した。時期毎の内訳は、12世紀2点(常滑)、17世紀後半~18世紀2点(肥前)、18世紀代5点(肥前3点、大堀相馬2点)、18世紀後半~19世紀1点(肥前?)、19世紀代7点(何れも産地不明)、19世紀以降10点(何れも産地不明)、近代5点(何れも産地不明)、近代?1点(産地不明)、現代19点(産地不明)、その他時期不明5点である。その内、40~48の9点を掲載した。

40・41は12世紀と推定される常滑産甕の破片である。何れも1号旧河道から出土した。

42は18世紀代と推定される肥前産の皿である。42以外に肥前産と推定されるものが5点出土しているが、何れも17世紀後半~18世紀と捉えられる。出土地は1号旧河道と3・4号旧河道及びその周辺に設定・掘削した試掘トレンチである。

43~48は、産地不明であるものの、近世の時間幅で推定される。

### (4) 石器

石器は総数で7点出土した。剥片石器が5点、礫石器が2点である。その内、49~55の7点を掲載した。剥片石器5点の器種の内訳は、スクレイパー4点と石錐1点である。49のスクレイパーは、表面の左側縁と裏面右側縁に二次剥離が施されるものである。50のスクレイパーは、右匙の未成品の可能性を有するものである。51のスクレイパーは黒曜石製で、先端と両端の表面裏面に二次剥離が施される。主要な刃部は、右刃若しくは先端と推定される。52の石錐は、黒曜石製である。53のスクレイパーは、平面形が五角形気味を呈し、3辺の表面に二次剥離が施される。礫石器2点は磨石である。54と55は磨石で、2点ともに表面裏面に磨面が形成される。出土地から帰属時期を推定すると、54は平安時代、55は弥生時代の可能性が考えられる。

## 5 総括

今回の調査で検出した遺構は、堅穴住居跡2棟、堅穴状造構1基、土坑4基、溝跡4条、柱穴状土坑32基、旧河道4条である。

### (1) 遺構

堅穴住居跡は2棟、堅穴状遺構は1基検出した。何れも古代と推定される。1号堅穴住居跡は、水田造成や整備など耕地整理に伴い削平が著しく、検出面から数cmで床面が現われるなど、遺存状況が悪く、遺構の詳細な情報は得られなかった。ただし、出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と推定され、合わせて十和田a火山灰との関係から10世紀前半より古い時期である可能性が導かれた。2号堅穴住居跡と1号堅穴状遺構についても、1号堅穴住居跡と同様に遺存状況が悪く、尚且つ出土遺物や十和田a火山灰との関係もないことから、埋土の様相から古代と推定したに留まる。

土坑は4基検出し全て古代と捉えられる。その内1・2・4号土坑の3基は、1号堅穴住居跡と重複関係にあり、尚且つ1・2号土坑の埋土には十和田a火山灰が認められる。1号堅穴住居跡の廃絶期は、出土土器からは9世紀後半～10世紀前半の時期幅で捉えられる。従って、十和田a火山灰降下時期より古い可能性があるこれらの土坑は、1号堅穴住居跡廃絶期と大差ない時期に構築された可能性がある。調査歴で記述した岩手県教育委員会が調査した地点においても、同様に堅穴住居跡を切る土坑が検出されている。このことは、これらの土坑が堅穴住居跡の廃絶時の何らかの行為に関係する遺構である可能性も示唆される。

溝跡は4条検出した。調査区の幅が狭く、平面的な鱗がりなどはわからない。1号溝跡は出土遺物などから9世紀後半～10世紀前半の可能性がある。合わせて、4号旧河道と重複関係にあることから、本遺構を構築した段階においては、4号旧河道の流路は埋没していたことがわかった。2・3号溝跡は、埋土の様相からは古代の可能性があるものの、時期を特定できない。4号溝跡については近世～現代の可能性で推定されるが、特定はできない。

柱穴状土坑は、柱穴群②とした調査区中央部付近から顕著に検出された。柱配置の規則性などが窺えなかったことから、掘立柱建物跡の復元はできなかつたが、この周辺において古代に何らかの建物が存在したことが示唆される。

旧河道は4条を検出した。調査区西部で検出した1号旧河道からは、土師器と12世紀の常滑2点が出土した。この常滑が旧河道の時期推定に直結させ結び付けられるのかは検討を要する。しかしながら、この遺跡からも奥州藤原氏に関連する可能性がある遺物が出土したことは特記事項の一つと捉えられよう。2・3・4号旧河道については、この近辺に南西から北東方向に向かう比較的大きな河があったことが明らかとなり、合わせて牡丹野遺跡を一部横切り、北側外線部に流れが続いていることもわかった。これらの旧河道は、一連の変遷化にあると捉えられ、少なくとも弥生時代後期から昭和27年までの長い間存在したことがわかった。

## (2) 遺 物

今回の調査で出土した土師器や須恵器は、完形や略完成形にまで復元された資料はなく、ほとんどが小破片である。土師器は、壺は少なく、甕が最も多い。甕類の中では、長胴甕と推定される破片が多く、球胴甕は認められない。また、これらの甕はロクロ成形のものと非ロクロ成形の2種がある。壺類や甕類の年代観からは9世紀後半～10世紀前半の時間幅で捉えられる。須恵器は、圧倒的に甕類の破片が多く、壺や盞は少ない。今回の調査において層位的に良好と判断される資料としては、1号堅穴住居跡出土の1～5が挙げられる。これらの船属時期は、十和田a火山灰の降下時期より古い可能性が極めて高いことを指摘できよう。

弥生土器は、中～後期と推定される。地文のみで詳細な時期などは特定できない。なお、今回出土した土器は、地文にRL横回転を多用する特徴が見受けられる。

陶磁器類は、12世紀から現代まで総数で57点の陶磁器類が出土した。12世紀の常滑の破片2点が出

土したことは特記事項である。出土数が多いのは、19世紀以降～現代までのもので、産地の特定ができない。また、近世においては、肥前産が一定量出土している。

石器はスクレイバーを中心とする。特記事項としては、52の黒曜石製の石錐の出土が挙げられる。

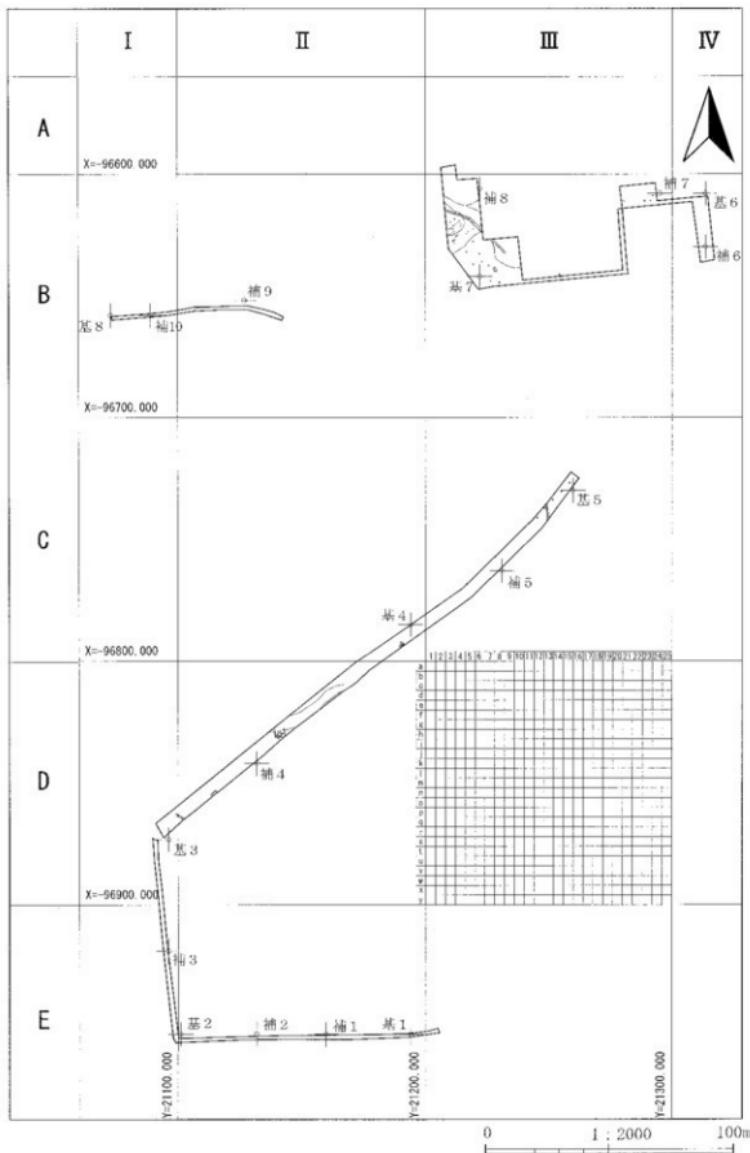
### (3) まとめ

ここでは、調査区毎に調査成果についてまとめてみる。

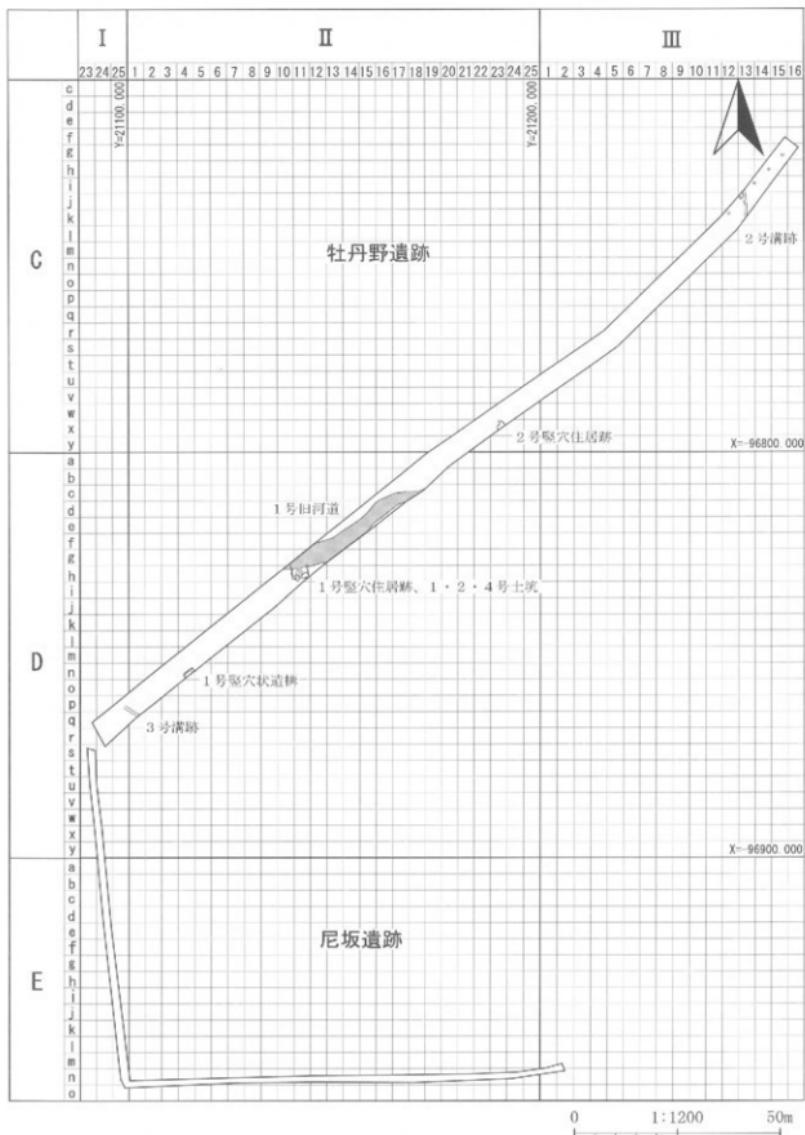
調査区南部では、2棟と数は少ないが堅穴住居跡が検出されたことから、周知されていたとおり牡丹野遺跡が古代の集落跡であることが検証されたことにおいて、一つの成果と評価できよう。

調査区中央部については、堅穴住居跡は未検出でその他の遺構についても希少な状況にあったが、3・4号旧河道を中心に弥生時代後期の土器、平安時代、近世～近代の陶磁器などが出土したことで、各時期においての人的活動の一端が明らかとなった。

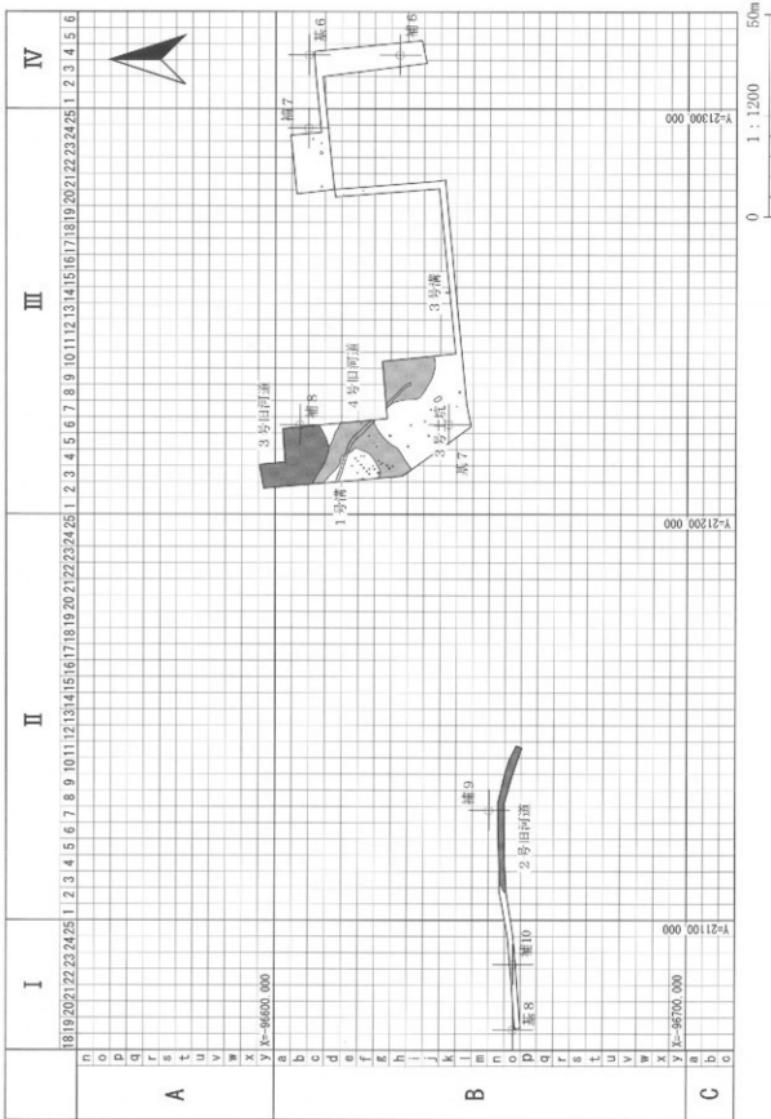
調査区北西部においては、2号旧河道を検出したものの、遺構・遺物などの人的活動の痕跡は検出されなかつた。ただし、隣接する付近の水田からは、岩手県教育委員会の試掘調査では遺物が確認されている。また、調査区北西部からみて100m程南西側の畑部分では、須恵器片が確認されていることから、2号旧河道の周辺においても、古代の集落跡が広がる可能性は高い。また、所見的な内容になるが、今回の調査内容から牡丹野遺跡の集落の中心域は、調査区南部より北側に広がることが予想される。そして、現在遺跡の標柱が立てられている調査区中央部に接する畑部分や宅地部分及びその西側、更には調査区北西部からみて南東側の範囲が想定されよう。上記した集落の中心域と推定される部分は、現水田部分と比べて標高がやや高い微高地にあることも補足しておきたい。



第8図 遷構配置図

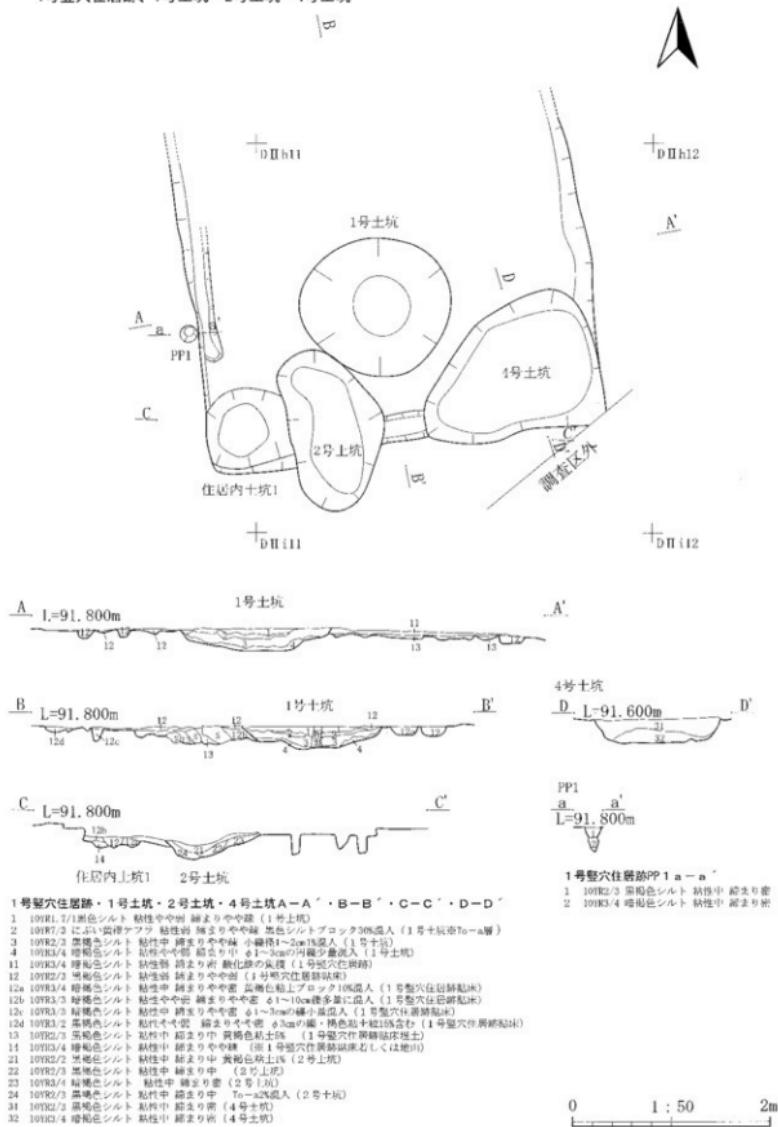


第9図 調査区南部遺構配置図



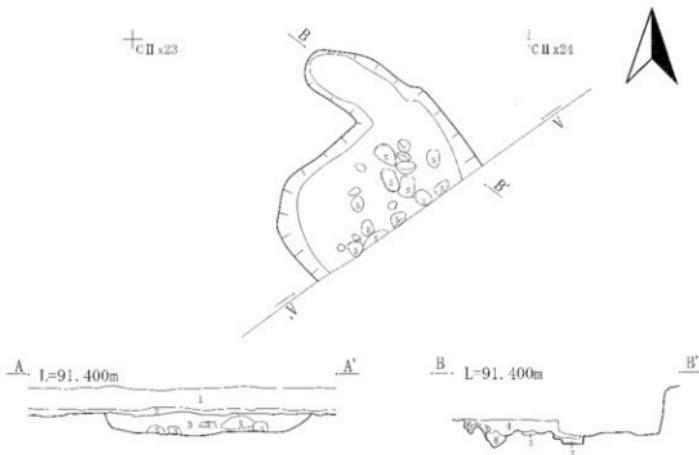
第10図 調査区中央部・西部遺構配置図

## 1号竪穴住居跡、1号土坑・2号土坑・4号土坑



第11図 1号竪穴住居跡、1・2・4号土坑

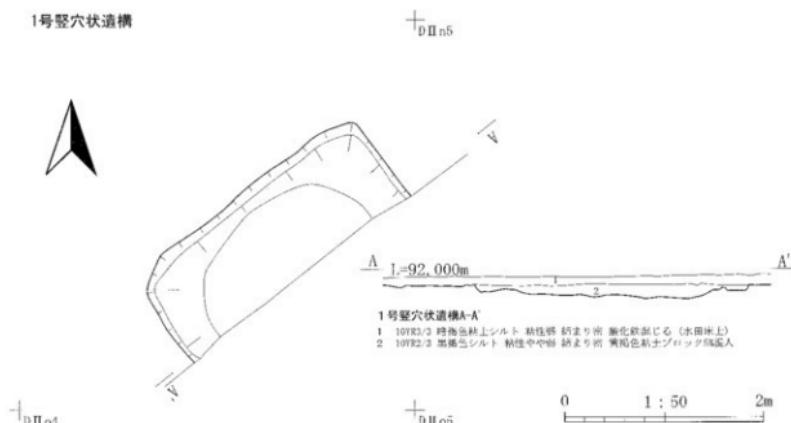
2号豎穴住居跡



2号豎穴住居跡 A-A'・B-B'

- 1 10TR2/2 黄褐色シルト 粘性やや強 硫まり弱 (底水田十)
- 2 10TR2/3 出掘れシルト 粘性やや強 硫まり弱 (底水田十席縮引28年以後)
- 3 10TR2/2 黄褐色シルト 粘性やや強 硫まり弱
- 4 10TR2/2 黄褐色シルト 粘性中 硫まり中 黄褐色土質砂岩土7%混入
- 5 10TR3/3 緑褐色シルト 粘性中 硫まりやや強
- 6 10TR3/4 棕褐色シルト 粘性弱 硫まりやや強
- 7 10TR4/4 黄褐色シルト 粘性弱 硫まりやや強 埋堆山
- 8 10TR4/4 棕褐色シルト 粘性やや弱 硫まりやや強 黄褐色粘土7%混入

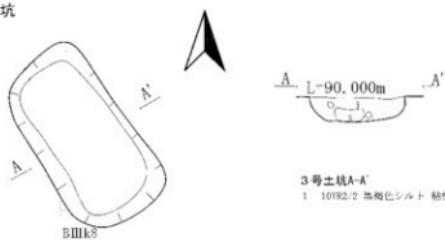
1号豎穴状遺構



- 1号竖穴状遗构 A-A'**
- 1 10TR3/2 棕褐色粘土シルト 粘性弱 硫まり弱 硫化鉄鉱じる (木田上)
  - 2 10TR2/3 黄褐色シルト 粘性やや弱 硫まり弱 黄褐色粘土ブロック5%混入

第12図 2号豎穴住居跡、1号豎穴状遺構

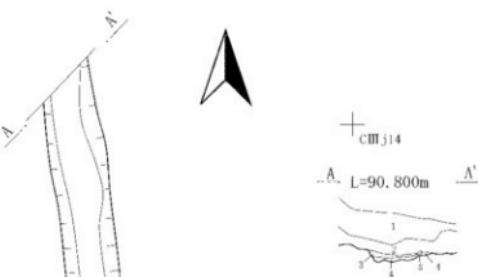
3号土坑



3号土坑A-A'

1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 細よりやや粗 黄褐色粘土上ブロック20%混入

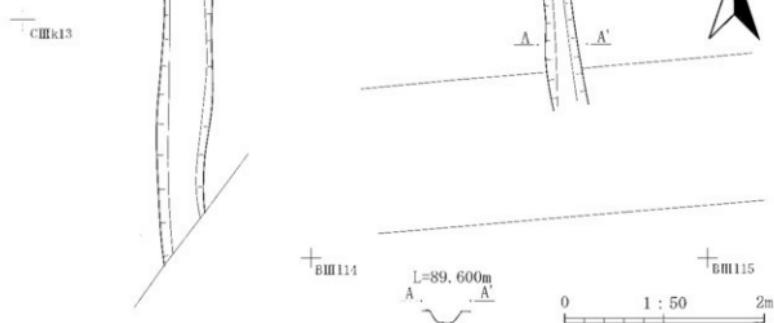
2号溝跡



2号溝跡A-A'

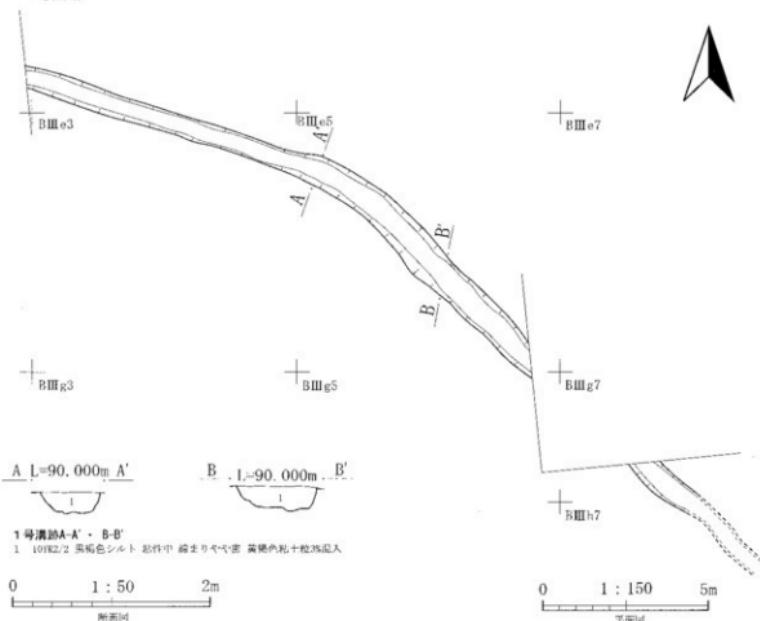
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 細よりやや粗 黄褐色粘土上35合む (耕作上)
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性中 細より粗 灰化灰55合む (耕作上)
- 3 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性中 細よりやや粗 細よりやや粗
- 4 10YR2/3 黑褐色シルト 粘性中 細よりやや粗

4号溝跡

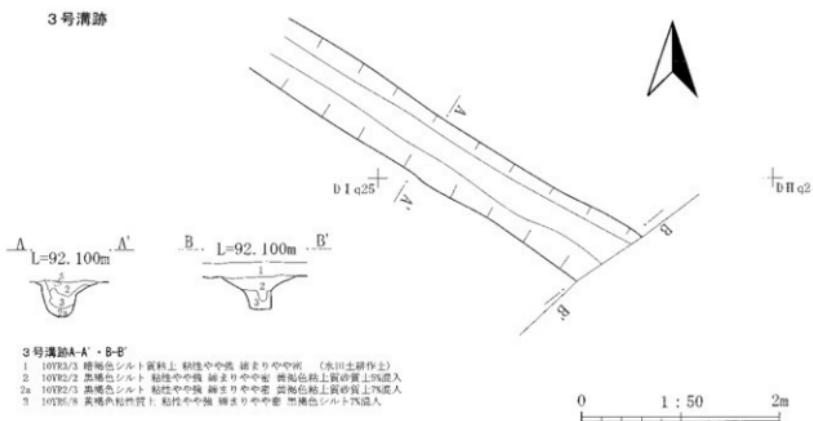


第13図 3号土坑、2・4号溝跡

1号溝跡

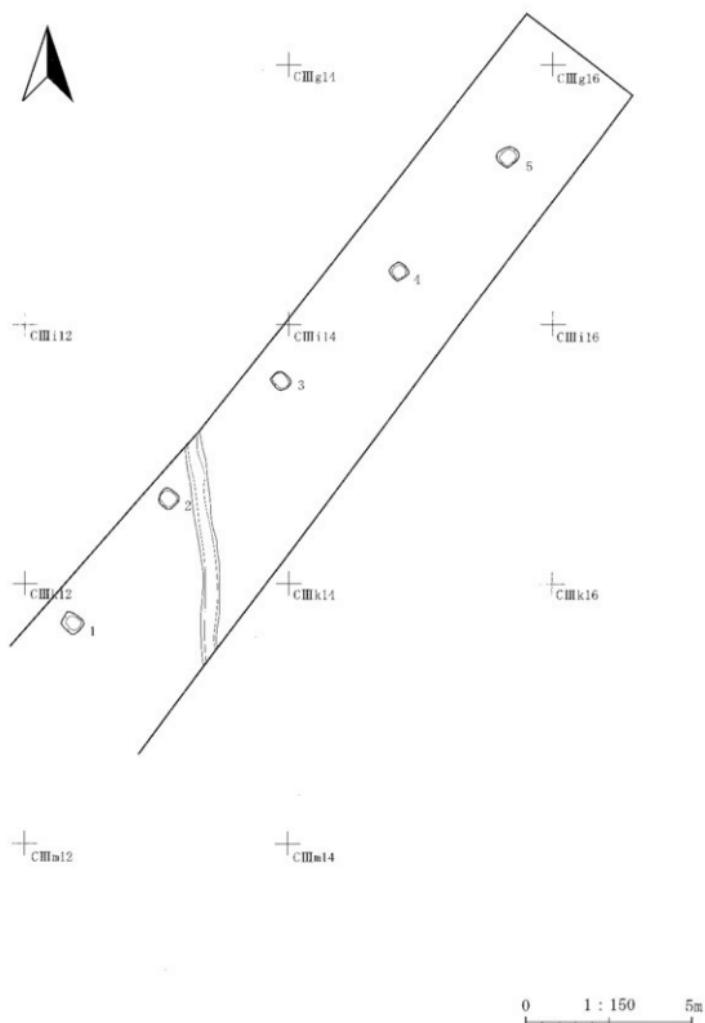


3号溝跡



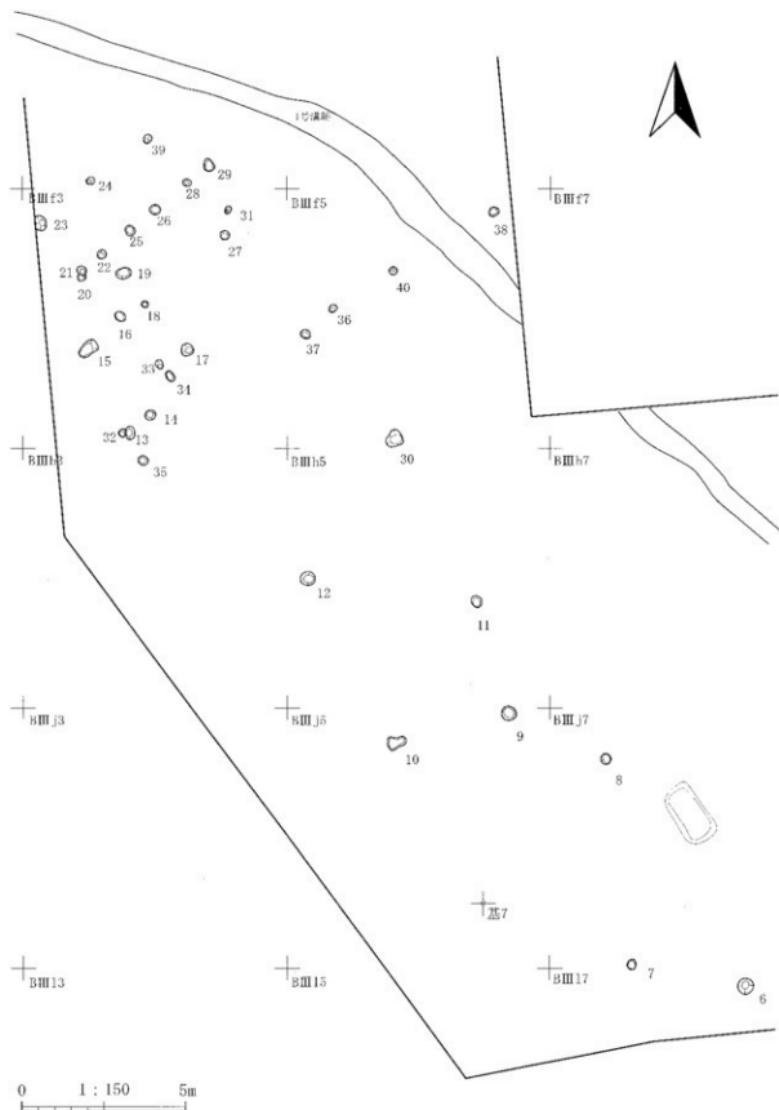
第14図 1・3号溝跡

## 調査区南部柱穴群



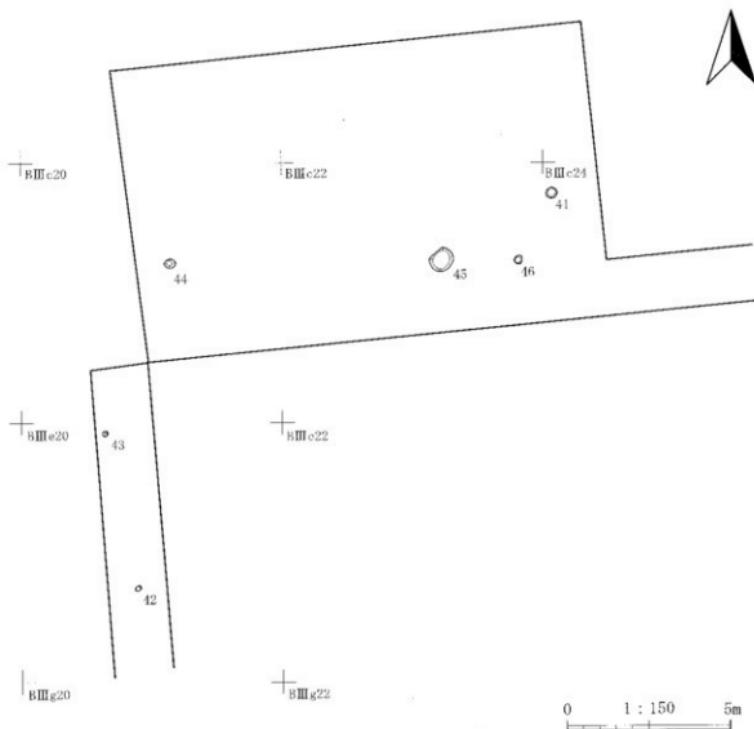
第15図 調査区南部柱穴群

調査区中央部柱穴群①



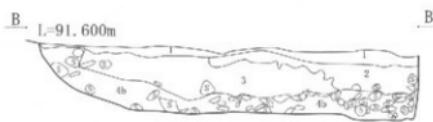
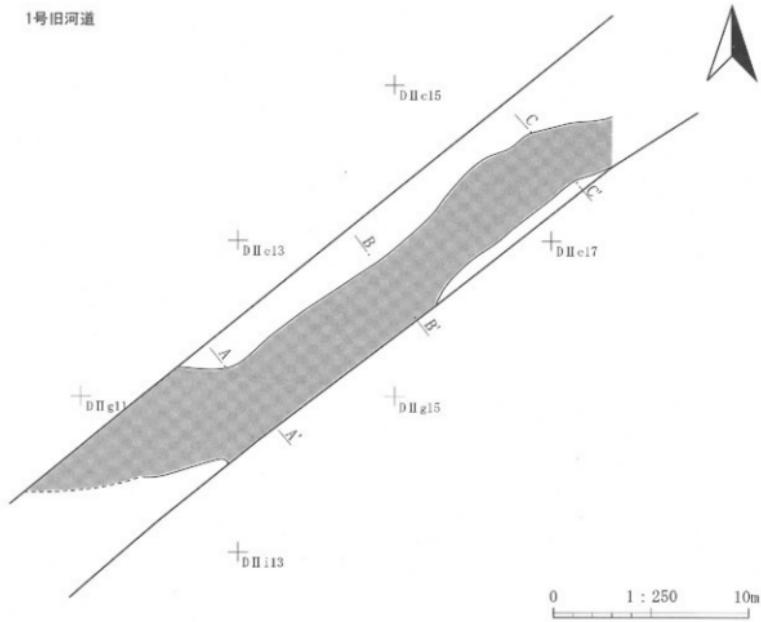
第16図 調査区中央部柱穴群①

## 調査区中央部柱穴群②



第17図 調査区中央部柱穴群②

1号旧河道



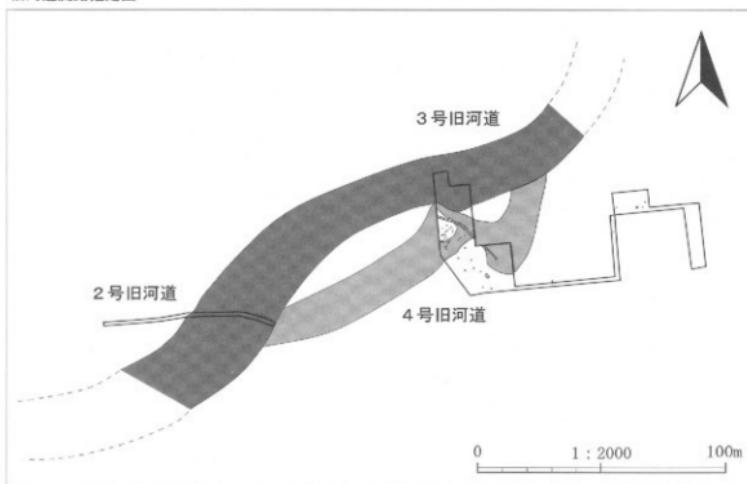
1号旧河道A-A'・B-B'・C-C'

- 1 10TK3/4 短褐色シルト 粘土中 塗まりや空隙 黄褐色粘土質土(火山土)20%混入
- 2 10TK2/3 黑褐色シルト 粘土中 塗まりや空隙 灰色～30cmの粘土層2%混入
- 3 10TK5/8 黄褐色シルト 粘土中 細まり中 灰色砂質土30%混入
- 4a 10TK4/6～5/8 黄褐色砂質土 粘土中 塗まりや空隙
- 4b 10TK5/8 黄褐色粘土 粘土や砂質土 塗まりや空隙 灰色 (厚5～40cm) 40%混入

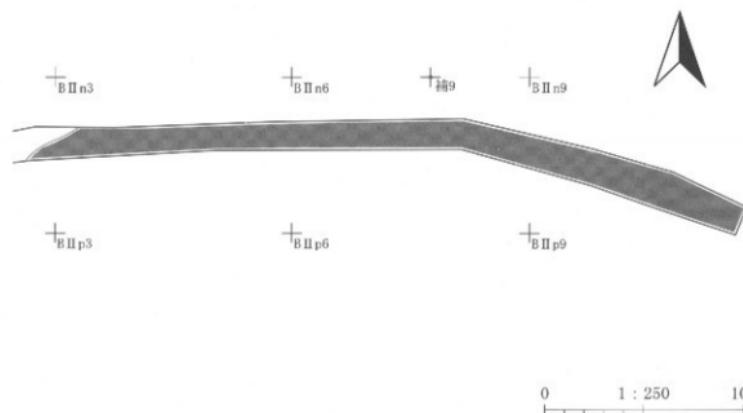
0 1 : 50 2m

第18図 1号旧河道

旧河道流路推定図

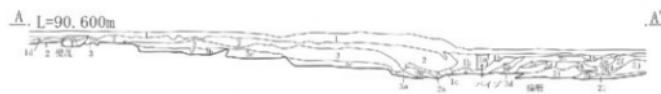
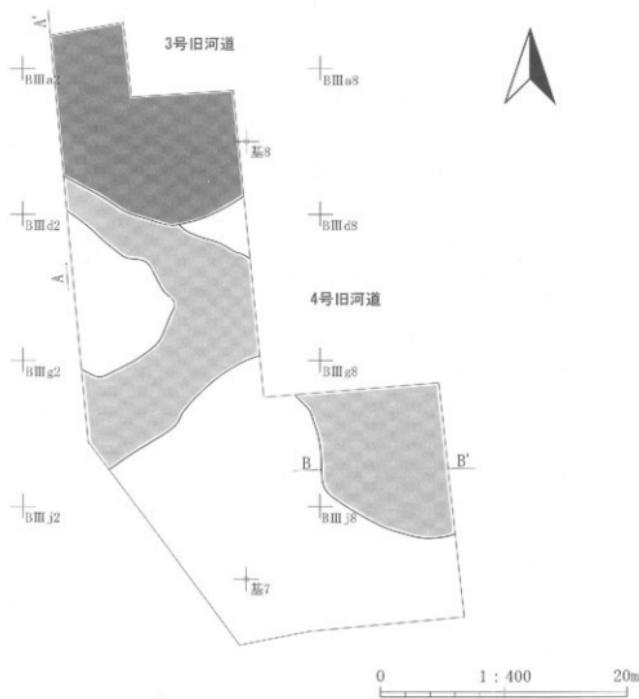


2号旧河道



第19図 旧河道流路推定図、2号旧河道

3・4号旧河道



0 1 : 150 5m

第20図 3・4号旧河道

## 3・4号旧河道A-A'・B-B'

- 1 109E3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 硬より軟 表土 (現代土)
- 1a 109E2/3 黒褐色シルト 粘性やや強 硬より軟 黄褐色灰土+3%混入 表土 (現代土)
- 1b 109E2/3 黑褐色シルト 粘性やや強 硬より軟 黄褐色灰土+3%混入 表土 (現代土)
- 1c 593/1 オリーブ色泥質土 粘性やや強 硬よりやや強 (現行の堆土上)
- 1d 109E3/3 黑褐色シルト 粘性やや強 硬より強 (現行の堆土上)
- 2 109E1/1 にぶい黃褐色シルト 粘性中 硬よりやや強 砂質土20%混入 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2a 109E1/3 にぶい黃褐色泥質土 粘性中 硬より強 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2b 513/2 オリーブ色泥質土 粘性やや強 酸化鉄の基準を満たさない (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2c 513/2 オリーブ色泥質土 粘性中 硬より強 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上) (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2d 313/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬よりやや強 酸化鉄の基準を満たさない (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2e 293/3 等オリーブ色泥質土 粘性やや強 硬よりやや強 有機物(木片・葉)7%混入 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2f 2.313/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬よりやや強 酸化鉄の基準を満たさない (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2g 2.513/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬よりやや強 酸化鉄の基準を満たさない (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2h 2.513/2 黑褐色砂質土 粘性中 硬よりやや強 (5-2mm)砂30%混入 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2i 3/3/1 オリーブ色泥質土 粘性中 硬よりやや強 有機物(木片・葉)16%混入 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2j 2.513/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬よりやや強 有機物(木片・葉)16%混入 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2k 2.513/1 黑褐色泥質土 粘性中 硬より強 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2l 2.513/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬より強 (3号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2m 109E2/2 黑褐色シルト 粘性中 硬より強 (4号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2n 513/2 黑褐色シルト 粘性中 硬より強 (4号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2o 109E1/4 黑褐色シルト 粘性中 硬より強 (4号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2p 109E1/3 黑褐色シルト 粘性中 硬より強 (4号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2q 109E1/3 黑褐色シルト 粘性中 硬より強 (4号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2r 109E2/2 黑褐色シルト 粘性中 上25 (5-2)cm硬よりやや強 (4号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 2s 109E1/1 黑褐色泥質土 粘性中 硬よりやや強 酸化鉄の基準を満たさない (4号旧河道土層剖和27年以前の堆土上)
- 4 109E2/2 黑褐色シルト 粘性中 硬より強
- 4a 109E2/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬より強
- 5 109E3/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬より強 黄褐色土粒15%混入
- 5a 2.513/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬より強
- 6 109E2/2 黑褐色泥質土 粘性中 硬より強 (4号地)
- 11 109E2/2 黑褐色シルト 粘性中や強 硬よりやや強 黄褐色土上ロック2-5%混入 (1号堆积土层)

## 3・4号旧河道土層注記

第6表 整穴住跡観察表

図版番号	写真番号	遺構名	時期	グリッド	規模(長辺/m)	規模(短辺/m)	壁高(cm)	埋土の堆積状況	ホマド	柱穴数(個)	付属施設	直復・その他
11	5	1号整穴住跡	9世紀後半～10世紀前半	DⅢh10	4.5以上	4.1	65以下	自然	一	1	土塀1	1・2・4号土塀に切札16
12	6	2号整穴住跡	古代	CⅡx23	L1以上	2.1以上	29	自然	北塀東隅	なし	なし	縁石中に人頭大の鍬形器

第7表 整穴状造構観察表

図版番号	写真番号	造構名	時期	グリッド	平面形	規模(長辺/m)	壁高(cm)	埋土の堆積状況
12	6	1号整穴状造構	古代	DⅡn4	方形	2.8	6~10	人為?

第8表 土坑観察表

図版番号	写真番号	遺構名	時期	グリッド	平面形	開口面径(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況	直復・その他
11	7	1号土坑	9世紀後半～10世紀前半	DⅢh11	四角	160×110	18~30	自然	1号整穴住跡を切る、十和田山火山灰
11	7	2号土坑	9世紀後半～10世紀前半	DⅢh11	長方形	165×98	30	自然?	1号整穴住跡を切る、十和田山火山灰
13	7	3号土坑	古代	BⅢj7	椭丸長方形	168×98	24	人為	
11	7	4号土坑	9世紀後半～10世紀前半	DⅢh11	不整様四角	185×140	34	自然?	1号整穴住跡を切る

第9表 清跡観察表

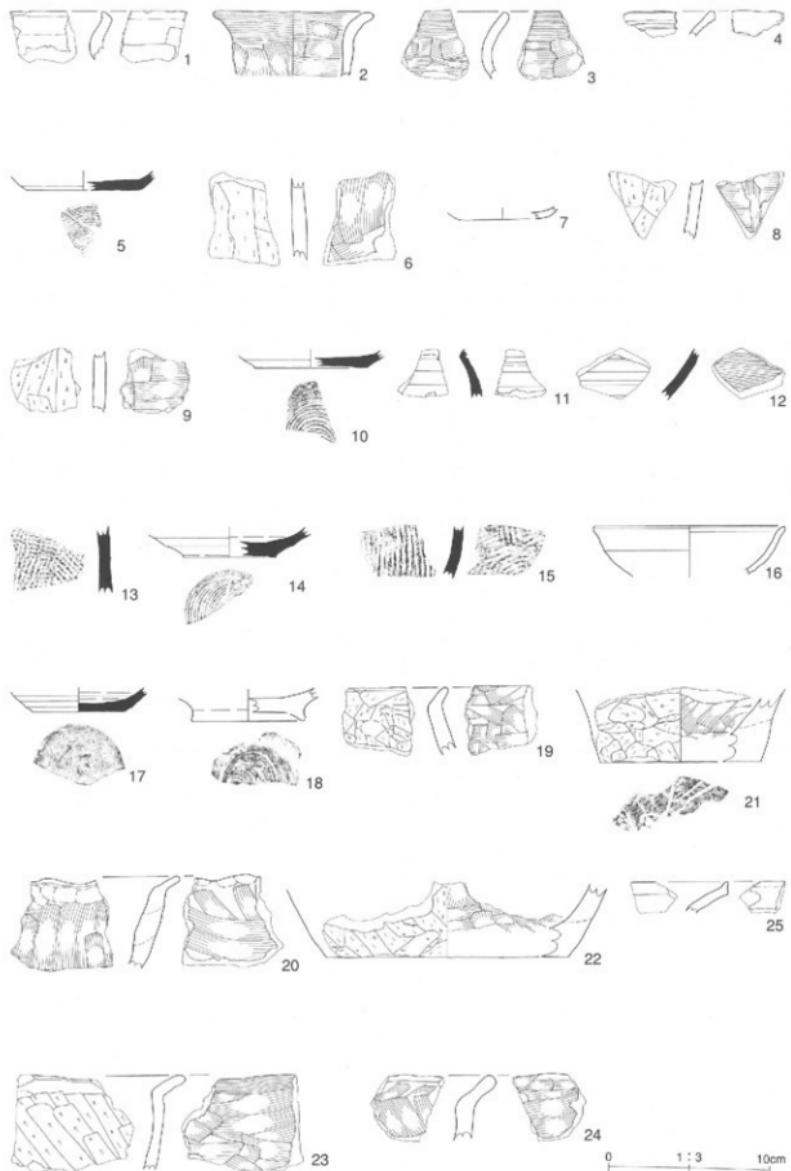
図版番号	写真番号	遺構名	時期	位置	グリッド	方向	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況
14	8	1号清跡	9世紀後半～10世紀前半	中央	BⅢj2	西 東	30	60~90	10~40	自然
13	8	2号清跡	不 明	西	CⅣj13	北～南	6.8	60	3~12	自然
14	8	3号清跡	古代?	中央	CⅣj21	北西～南東	4.6以上	70	35~40	人為?
13	8	4号清跡	近世～現代?	西	BⅢj14	南～北	1.5	30	10	不明

第10表 旧河道観察表

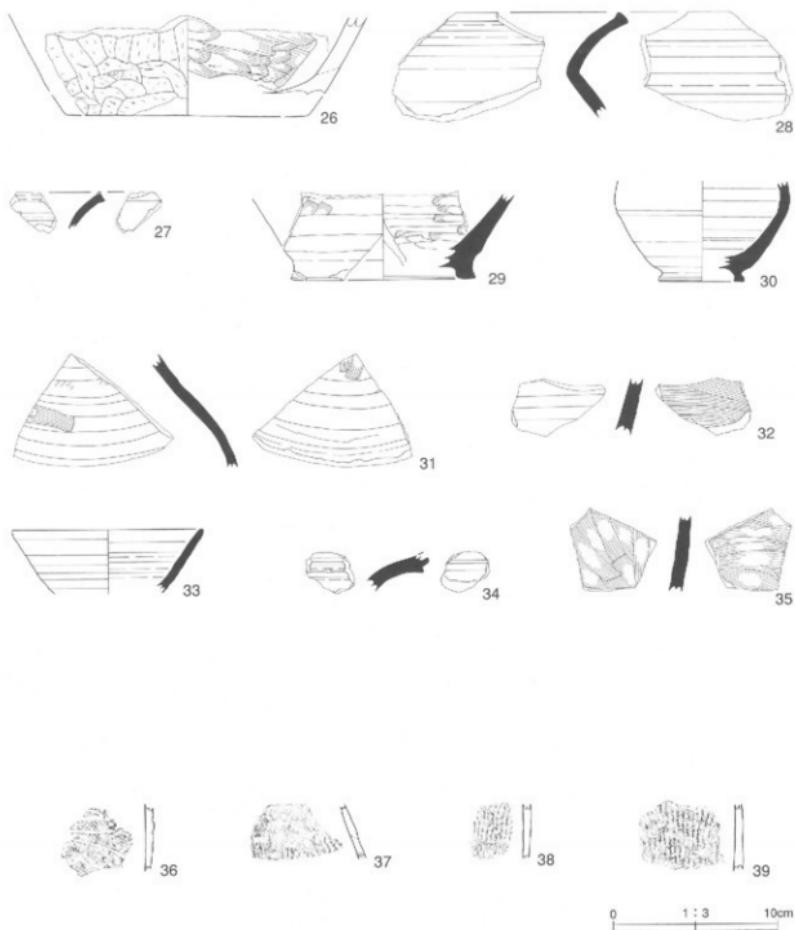
図版番号	写真番号	遺構名	時期	位置	グリッド	方 向	長さ(m)	幅(cm)	深さ(cm)	埋土の堆積状況
18	9	1号旧河道	12世紀?	西	DⅢl10	北東～南西	38	3~4	35~70	1層不明、2～4層自然
19	9	2号旧河道	紀 代	北西	BⅣn2	西～東	不明	不明	不明	人為
19・20・21	9	3号旧河道	近世～現代	中央	BⅣy3	北西～南東	10以上	不明	35~120	自然?
19・20・21	9	4号旧河道	新石器期～古代	中央	BⅣo3	北西～南東	不明	8~14	20~120以上	自然

第11表 柱穴状土坑継廻表

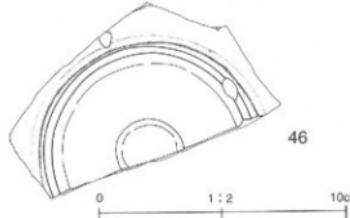
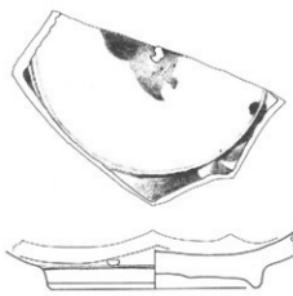
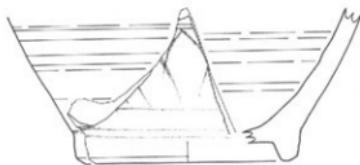
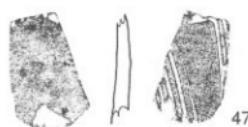
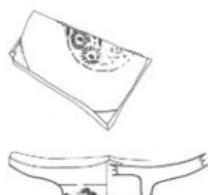
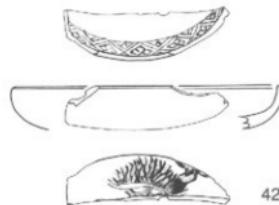
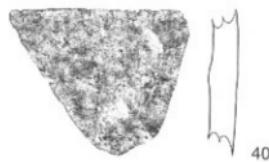
柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区
1	54×48	11	南部	24	29×25	20	中央部①
2	55×51	18	南部	25	32×30	22	中央部①
3	52×43	10	南部	26	31×31	20	中央部①
4	48×45	13	南部	27	29×25	29	中央部①
5	54×52	13	南部	28	26×25	36	中央部①
6	50×50	26	中央部①	29	42×39	23	中央部①
7	33×26	23	中央部①	30	51×50	29	中央部①
8	37×33	15	中央部①	31	25×18	21	中央部①
9	45×44	22	中央部①	32	23×23	20	中央部①
10	59×34	16	中央部①	33	29×23	30	中央部①
11	37×31	26	中央部①	34	33×20	14	中央部①
12	44×41	28	中央部①	35	27×26	19	中央部①
13	42×27	27	中央部①	36	24×24	23	中央部①
14	32×30	36	中央部①	37	30×26	21	中央部①
15	64×36	23	中央部①	38	33×32	12	中央部①
16	37×30	21	中央部①	39	24×23	29	中央部①
17	40×39	42	中央部①	40	24×24	35	中央部①
18	27×20	45	中央部①	41	36×35	37	中央部②
19	48×32	17	中央部①	42	20×15	22	中央部②
20	26×20	32	中央部①	43	16×16	10	中央部②
21	27×23	24	中央部①	44	36×29	21	中央部②
22	30×28	42	中央部①	45	73×64	17	中央部②
23	31×31	24	中央部①	46	30×25	15	中央部②



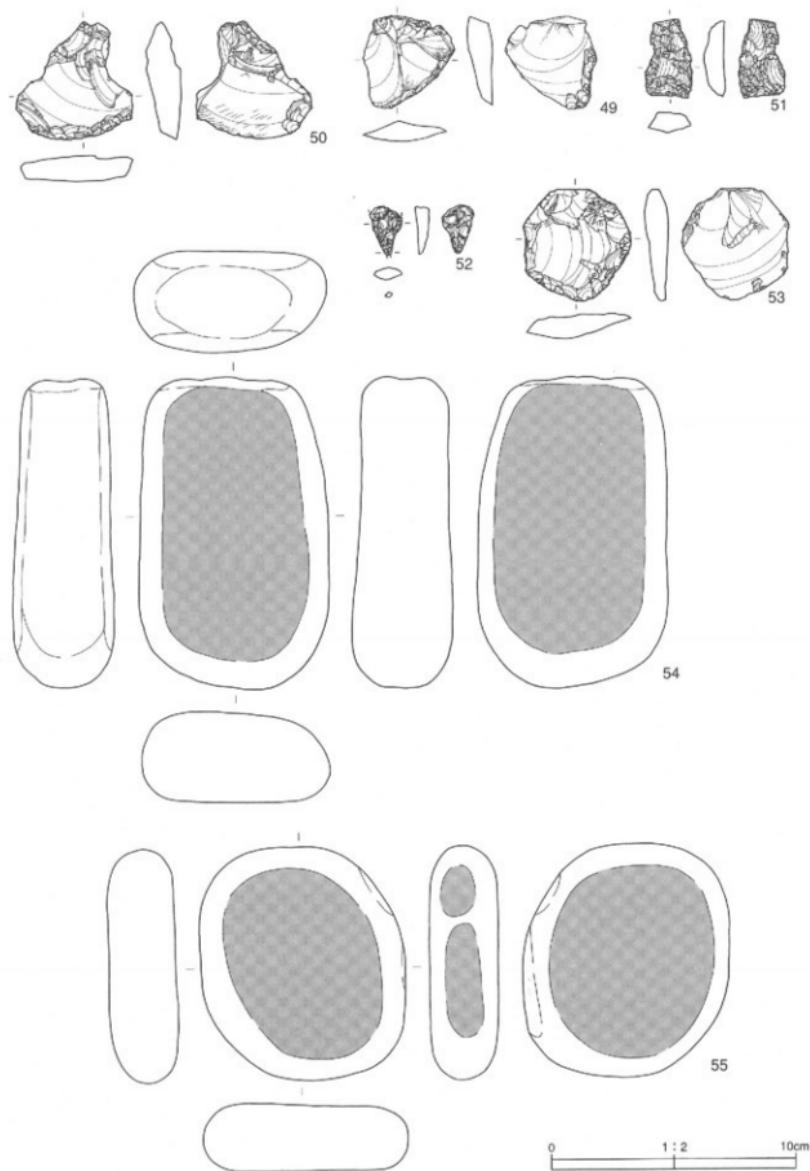
第21図 古代の土器（1）



第22図 古代の土器（2）・弥生土器



第23図 陶磁器



第24図 石器

第12表 古代の土器類観察表

NO.	出土場所	型	位	標	特	器	口徑(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外観観察		内面調査		備考
										底	口縁	底	口縁	
1	1941年 2	山土器	無	十脚器	土	直	-	-	-	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
2	1949年 2	山土器	11号	上脚器	土	直	10.0	-	14.0	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
3	1974年 4	山土器	11号	上脚器	土	直	-	-	14.0	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
4	1974年 4	山土器	11号	土脚器	土	直	-	-	11.0	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
5	4年計Q1	山土器	11号	直	直	直	7.0	11.0	休部下～底部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
6	4年計E5	山土器	11号	直	直	直	-	-	-	休部	休部	休部	休部	休部
7	1949年	山土器	土脚器	土	直	直	-	6.5	0.7	休部	休部	休部	休部	休部
8	1949年	粘土器	土脚器	土	直	直	-	-	-	休部	休部	休部	休部	休部
9	1949年	粘土器	土脚器	土	直	直	-	-	-	休部	休部	休部	休部	休部
10	1949年	土土器	土脚器	土	直	直	7.0	11.0	休部下～底部	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
11	1949年	土土器	土脚器	土	直	直	-	-	-	休部	休部	休部	休部	休部
12	35年E7	山土器	直	直	直	直	-	-	-	休部	休部	休部	休部	休部
13	1949年	堆土中	直	直	直	直	-	-	-	休部	休部	休部	休部	休部
14	2045年	堆土中	直	直	直	直	-	-	-	休部下～底部	口縁	口縁	口縁	口縁
15	2045年	堆土中	直	直	直	直	11.0	-	-	休部	休部	休部	休部	休部
16	4年計E5	3號	十脚器	土	直	直	-	6.0	0.3	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
17	4年計E5	3號	堆土中～トロ	土	直	直	-	5.8	1.5	休部下～底部	口縁	口縁	口縁	口縁
18	4年計E5	堆土中	十脚器	土	直	直	-	7.0	1.0	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
19	4年計E5	堆土中～トロ	十脚器	土	直	直	-	-	-	休部下～底部	口縁	口縁	口縁	口縁
20	4年計E5	堆土中	土脚器	土	直	直	-	-	-	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁
21	1949年	堆土中	土脚器	土	直	直	-	5.0	0.3	休部下～底部	口縁	口縁	口縁	口縁
22	1949年	堆土中～トロ	土脚器	土	直	直	-	18.0	4.0	休部下～底部	口縁	口縁	口縁	口縁
23	1949年	3號	土脚器	土	直	直	-	-	-	口縫	口縫	口縫	口縫	口縫
24	4年計E5	3號	土脚器	土	直	直	-	-	-	口縫	口縫	口縫	口縫	口縫
25	1949年	堆土中	土脚器	土	直	直	-	-	-	口縫	口縫	口縫	口縫	口縫
26	1949年	堆土中～位	土脚器	土	直	直	-	15.0	6.0	休部下～底部	口縫	口縫	口縫	口縫
27	1949年	堆土中～位	土脚器	土	直	直	-	-	-	口縫	口縫	口縫	口縫	口縫
28	1949年	堆土中～位	土脚器	土	直	直	-	-	-	口～底部上	口	口	口	口
29	4年計E5	3號	土脚器	土	直	直	-	11.0	0.5	休部下	口縫	口縫	口縫	口縫
30	4年計E5	土土器	直	直	直	直	-	15.0	6.0	休部下～底部	口縫	口縫	口縫	口縫
31	1949年	土土器	直	直	直	直	-	-	-	休部下～底	口縫	口縫	口縫	口縫
32	1949年	土土器	直	直	直	直	-	-	-	休部下～底	口縫	口縫	口縫	口縫
33	1949年	土土器	直	直	直	直	-	-	-	休部下～底	口縫	口縫	口縫	口縫
34	1レシナ	直	直	直	直	直	-	-	-	休部下～底	口縫	口縫	口縫	口縫
35	1レシナ	直	直	直	直	直	-	-	-	休部下～底	口縫	口縫	口縫	口縫

原版地図

第13表 弃生土器観察表

NO	出土地点	層位	器種	部位	又種・施体・その他	内面	時期	備考
36	6号柱穴	埋土中	鉢	腹部	RL標位一皮源	ナマ	弥生後期?	沈泥文模様口更張跡
37	4号柱洞	埋土中位	鉢	腹部	RL標・縁位	ナマ	弥生後期	
38	1号旧河原	埋土中位	鉢	底部	RL標・側位		弥生後期	
39	4号旧河原	埋土中位	鉢	腹部	RL標・縁位	ナマ	弥生後期	

第14表 南磁器観察表

NO	出土地点	層位	器種	产地	時代
40	1号旧河原	埋土中	壺	常滑	12世紀
41	1号旧河原	砂質の下・周土中	甕	常滑	12世紀
42	3号旧河原	砂質上	壺	肥前	18世紀
43	3号旧河原	砂質上	尖付瓶	不明	19世紀
44	3号旧河原	砂質土	尖付瓶	不明	19世紀以降
45	3号旧河原	砂質土	豆類	不明	19世紀
46	3号旧河原	砂質上	尖付瓶	不明	19世紀
47	4号旧河原	埋土中位	瓶	不明	古代
48	4トレンチ	耕作土中	尖付瓶	不明	19世紀

第15表 刺片石器観察表

NO	出土地点	層位	落種	石質	产地	時代	長さ	幅	厚さ	重量
							cm	cm	cm	
59	1号溝	埋土中	スクレイパー	頁岩	奥羽山脈	新生代新第二紀	3.7	3.7	0.7	11.00
60	1号溝	後半面付瓦	スクレイパー	頁岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	4.6	4.8	1.0	27.02
51	4号旧河原	埋土中位	スクレイパー	黒曜石	产地不明	不明	3.2	1.9	0.7	3.25
52	6トレンチ	黒色土中	石鋸	黒曜石	产地不明	不明	2.1	1.4	0.5	1.16
53	7トレンチ	黒色土下位	スクレイパー	頁岩	奥羽山脈	新生代新第二紀	1.5	4.4	0.8	31.21

第16表 磚石観察表

NO	出土地点	層位	落種	石質	产地	時代	長さ	幅	厚さ	重量
							cm	cm	cm	
54	2号住	灰褐色土	磚石	安山岩	奥羽山脈	新生代第三紀	12.7	7.5	3.5	734.66
55	7トレンチ	黒色土上位	磚石	安山岩	奥羽山脈	新生代第二紀	9.5	8.1	2.8	396.49

## VI 作屋敷遺跡

### 1 遺跡の位置・概要

作屋敷遺跡は奥州市胆沢区南都田字作屋敷487ほかに所在する。現況は水田、水路、農道で、調査地の標高は92~96mである。地形図で現道などの標高値を見ると、西から東へ、そして南から北へ、少しずつ標高が下がる。従って基本地形は南西→北東へ向かって緩やかに傾斜することがわかる。耕地整理などの影響もあり現況は平坦な地形に見受けられ、また周辺には残丘や微高地的な地形は見当たらない。ただし、地元の方や地権者によると、作屋敷遺跡のある水田周辺は、隣接する周囲の土地に比べて微妙に高い場にあるらしく、大雨時においても洪水の被害を受けにくい土地であるらしい。上記の情報を裏付ける内容として、調査区中央部の南端付近（現道からプレハブの現場事務所への進入路付近など）の現道は、北から南へ幾分標高が下がることから、この周辺の地形の中ではイレギュラーな方向に低い。このことは、作屋敷遺跡が微高地に立地していることを物語り、作屋敷遺跡に古代集落が営まれた背景には、このような微地形的要因も関係する可能性が考えられよう。

### 2 これまでの調査歴

作屋敷遺跡は、具体的な出土品は不明であるが合口甕棺が出土し、また地元では以前より畑を耕した際に土器が出ることでも知られている遺跡である。発掘調査は、平成5年に胆沢町教育委員会により実施され、住居跡1棟と多数の土師器、須恵器が出土している。現時点では発掘調査報告書が未発刊であることから、過去の調査地点や調査結果の詳細はわからないものの、今回の調査区北部の西端と接する宅地部分と考えられる。

### 3 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代は陥し穴2基、平安時代が竪穴住居跡8棟・竪穴状遺構1棟・掘立柱建物跡1棟・土坑21基・溝跡19条・焼土遺構2基、古代を中心と考えられる柱穴状土坑265基、近世の溝跡1条、近世～現代の溝跡1条、現代の土坑1基である。

本節の記述に際して、位置の項では、調査区が細長いことから、調査区を便宜的に調査区西部・北部・中央部・東部の4つに分け呼称し、記述に用いることとする。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 1号竪穴住居跡（第28・29図、写真図版14）

＜位置・検出状況＞調査区西部のB I f 13~h 14グリッドに位置する。検出状況は、II層及びIV層において黒褐色シルトによる南北に長い広がりとして把握した。

＜重複関係・建替え＞1号土坑に切られる。

＜平面形・規模・長軸方向＞遺構プランは調査区外東と西に統くことから、平面形・規模ともに不明である。調査部分からは、南北の一辺は約6mで、深さは約30cmを測る。

＜埋土＞最上位の1層は、黒褐色シルトで酸化鉄の集積がややみられる。明確には判別できなかつたが、現代より古い時代の水田耕作土、若しくは古代以降の何れの時代かの旧表土の可能性もある。2層系としたものが本遺構の主たる埋土である。埋土上～中位の2a層は、厚さ3~8cmの土和田a火

山灰層である。埋土中位に堆積する2b層は暗褐色粘土質土である。埋土下位には2c・2d層暗褐色シルト質粘土と4a層灰黃褐色粘土が堆積する。これらは、自然堆積層と推定される。3層と4層は貼り床と考えられる。

第28図には、調査区境東側の土層断面A-A' と調査区境西側の土層断面B-B' を図化・掲載しているが、1・2a・2c・2d・4・4aなどはB-B' 土層断面にのみ認められる。従って、西側と東側では堆積土層に若干の差異が看取られる。併せて、2a層と命名した十和田a火山灰層については、遺構全面に分布するではなく、西側にのみ局所的に広がりが認められる。

＜床面・壁＞床面はIV層黄褐色粘土や灰黃褐色砂質粘土層を中心に、一部貼り床が施される。硬化面は認められない。壁の残存する北壁と南壁の一部分は、IV層を壁とし、ほぼ直立気味に立ち上がる。

＜カマド＞検出されていない。今回の調査で検出された該期堅穴住居跡の中で、カマドが検出されたものは全て東壁に構築されている。本遺構についても調査地外東側にカマドが存在する可能性は高い。

＜柱穴・付属施設＞柱穴は8個、住居内土坑は7基を検出した。

主柱穴は、開口部の規模や深さからPP 5・PP 8などが想定されるが、推定の域を出ない。

住居内土坑について、それらの埋土は全て人為堆積である。開口部の規模に反して深度が浅いものや、断面形が浅皿状のもの、底が平坦でないものがみられる。住居内土坑3・4と住居内土坑5・7は重複関係にあり、住居内土坑3と住居内土坑5が新しい。

柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)
1号住P P 1	22×22	57	1号住P P 5	49×44	31
1号住P P 2	(35×20)	25	1号住P P 6	20×20	7
1号住P P 3	20×18	10	1号住P P 7	16×16	11
1号住P P 4	30×28	15	1号住P P 8	56×55	68

＜遺物＞(第61図1~9、写真図版39・44)出土遺物は土器類が10,329.77g、焼成粘土塊24gが出土した。土器類は、1~6の土師器と7~9の須恵器を掲載した。土師器は壺と甕で、ロクロ成形による。これらの土器類は全て十和田a火山灰降下時期より古いと考えられる。焼成粘土塊は掲載番号88として写真・表掲載した。

＜時期＞出土土器から9~10世紀と推定される。また、十和田a火山灰が埋土中に確認されることからも10世紀前半より古いと捉えられ、土器の年代と矛盾しない。

## 2号堅穴住居跡(第29図、写真図版15)

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II x 23グリッド付近に位置する。検出面はIV層中で、炭化材を含む黒褐色シルト質粘土による南北に長い方形プランとして把握した。本遺構プランは西側と東側は調査区外に延びる。検出状況から焼失住居と推定された。

＜平面形・規模・長軸方向＞南壁・北壁・西壁の一部を検出したが、全体の平面形は不明にある。検出部からは方形基調と推定される。把握できた規模は、南北の一辺が4.9mを測る。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。焼失に伴う黄褐色粘土ブロック・炭化物・焼土を含むが、埋土自体は自然堆積と考えられる。

＜床面・壁＞IV層地山を床面とし、ほぼ平坦である。貼り床は認められない。壁は外傾して立ち上がる。検出面からの深さは約15cmである。

＜カマド＞なし。

### 3 残出遺構

柱穴・付属施設>柱穴 5 個検出した。柱配列は明確には掴めないが、PP 2・PP 3・PP 4 などに主柱の可能性が窺える。

柱穴No	径 (cm)	深さ (cm)
2号柱 PP 1	(24×22)	4
2号柱 PP 2	40×36	12
2号柱 PP 3	32×30	74
2号柱 PP 4	38×32	78
2号柱 PP 5	38×26	11

<遺物> (第61・69図10・103~105、写真図版39・45) 出土遺物は、土器類476.55 g と鉄製品 4 点が出土した。10は須恵器甕である。鉄製品は 4 点中 3 点を掲載した。103は刀子、104と105は釘?である。

<時期>出土土器は 9 世紀後半~10世紀と推定される。

<その他>焼失家屋の可能性が高い。

### 3号堅穴住居跡 (第30図、写真図版16・17)

<位置・検出状況>調査区東部のB IV e 16グリッド付近に位置する。検出面はIV層中で、黒色シルトによる方形プランとして把握した。プランは調査区外西側に延びる。

<重複関係・建替え>4号溝が本遺構を切る。

<平面形・規模・長軸方向>平面形は方形を基調とするが、上述のとおり遺構の西側は調査区外に続くことから不明にある。堅穴全体の半分程を調査したと考えられる。把握できた規模は、南北の一辺が3.1mである。深さは約35cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東西と推定される。

<埋土>第30図A-A'・B-B'・C-C' 土層断面では11~15層に分層した。なお、1層と2層は、4号溝跡に伴う埋土である(※土層注記は第30図を参照いただきたい)。11・12・12a・13層は自然堆積層である。12b層は貼り床土、14・15層は整地を意図した人為層と推定される。

<床面・壁>床面はほぼ平坦で、貼り床(※12b層)が施され全体的に非常に硬い。この貼り床は、厚さ約10cmで全面にわたり施されている。壁は直立気味に立ち上がる。

<カマド>東壁際よりカマド煙道部を検出した。煙道の天井部は、第30図a-a'断面で1層とした暗褐色粘土質シルトに黄褐色粘土を混ぜたものを構築上として使用している。そして、カマド本体の構築土としてはa-a'断面2層にその可能性がある。3層は煙道天井部の崩落土と考えられ、炭化物や焼土粒が微量含まれる。煙道の長さは約80cm、煙道幅は約12cm、煙出し部の底が煙道部底面と比較して極端に深い構造を呈する。燃焼部が想定できるような焼土層は認められなかったが、住居内土坑2の北側付近と考えられよう。袖部は未検出である。

<柱穴・付属施設>床面で2個の柱穴と、貼り床を除去した段階で土坑3基を検出した。

土坑は、北東隅、南東隅、及びカマド前付近の3箇所に設けられており、断面形は何れも浅皿状で床面から約18cmの深さにある。何れのものも貼り床土の下位に15層とした整地層が確認されることから、貼床を施す前に埋め戻していると判断される。

柱穴No	径(cm)	深さ(cm)
3号柱P P 1	40×38	32
3号柱P P 2	20×17	18

＜遺物＞（第61図11～16、写真図版39）出土遺物は、土器類1,646.47 gが出土した。11～13が土師器で、11が壺、12・13が甕で、何れもロクロ成形による。14～16が須恵器で、14が壺、15は甕？、16が壺の胴部である。これらの内、カマドの構築上や貼り床より下から出土したのが12で、貼り床上と貼り床下出土の部位同士が接合関係を示したのが、13・14などである。

＜時期＞出土土器から9世紀後半～10世紀前半と推定される。

#### 4号竪穴住居跡（第31図、写真図版17）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I + 22グリッド付近に位置する。検出面はIV層で、黒褐色シルトによる不整形のプランとして把握した。

＜重複関係・建替え＞2号溝跡、1号焼土遺構、5号土坑に切られる。

＜平面形・規模＞平面形・規模ともに不明である。

＜埋土＞第31図E-E'断面の2層・4層が本遺構に伴う堆積土である。埋土上位の2層は黒褐色シルト質粘土を主体とする。埋土下位にみられる4層は、暗褐色シルト質粘土で、焼土粒などを少量含む。2層・4層とともに混入物の在り方からは、人為が介在した土層と判断されるが、堆積様相は自然堆積と考えられる。

＜床面・壁＞IV層を床面とし、やや凹凸が見られる。貼り床は認められない。壁は直立気味に立ち上がる。壁高は15～22cmである。

＜カマド＞なし。

＜柱穴・付属施設＞柱穴は1個検出した。

＜遺物＞（第62図17、写真図版39）出土遺物は土器類89.76 gが出土した。17の土師器壺を掲載した。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによる。

＜時期＞出土土器から9世紀後半～10世紀前半と推定される。

#### 5号竪穴住居跡（第32・33図、写真図版18）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II + 17グリッド付近に位置する。検出面はIV層中で、黒褐色シルトによる方形プランとして把握した。南側は調査区外に延びる。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は隅丸方形を基調とするが、遺構プランは調査地外南に続くことから、明確にはわからない。規模は、調査部分からは東西の一辺は約4.6mを測る。壁高は22～28cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東～西と捉えられる。

＜埋土＞1～8層に細分した。1層は現代の水田耕作土などである。埋土の主体を占める2層黒褐色粘土質土は、少量ではあるが炭化物や焼土粒を含むことから、人為の介在が推定される土層であるが、堆積様相自体は自然堆積と判断された。3～6層はカマド構築に関わる土層と判断した。その中で、5層・5a層・6層は煙道構築土の崩壊土と推定した。7層は煙出し部の堆積土層で、自然堆積と推定される。8層は床下土坑1・2を覆う貼り床上である。

＜床面・壁＞床面はIV層地山中で、上記した床下土坑部分以外貼り床は施されていない。ほぼ平坦である。床面には比較的多くの土器片が散らばるような様子で見つかり、また床面のわずか上で鉄製の鋤先が出土した。

＜カマド＞東壁に構築されている。調査区境の断面で検出された。平面的には調査ができなかつたが、礎が集中的にみられる部分が上層断面から見て取れる。この礎の集中する部分が、袖部～カマド天井部付近であった可能性が高い。煙道部の長さは約2mで、割り抜き式なのかどうかはわからない。燃焼部は未検出にある。

＜柱穴・付属施設＞柱穴5個と住居内土坑3基を検出した。

柱穴は、規模的な観点からPP3とPP4は主柱穴の可能性が考えられよう。住居内土坑は3基検出したが、その内住居内土坑1・2は上記のとおり貼り床で覆われている。住居内土坑3は、位置的にみてカマド燃焼部の掘り方の可能性もある。

柱穴No	径(cm)	深さ(cm)
5号柱PP1	22×17	16
5号柱PP2	(18×10)	18
5号柱PP3	40×38	77
5号柱PP4	36×32	75
5号柱PP5	20×18	20

＜遺物＞（第62～64図18～31・98・106、写真図版40・44・45）出土遺物は土器類5,551.25g、焼成粘土塊7.1g、陶磁器類1点、鉄製品1点が出土した。土器類は、18～25の土師器と26～31の須恵器を掲載した。21～24と26は、カマド煙道部に伴う5層より出土した。この5層は、カマド煙道部の天井の構築土が崩落した土層若しくはカマド廃絶後に埋め戻した廃棄土層の何れかと捉えられ、自然堆積なのか人為堆積なのか明確には判断できない。しかしながら、土器類自体は意図的に廃棄したものと捉えられる。89は焼成粘土塊で掲載番号89として写真・表掲載した。98は青磁碗の破片である。外面に蓮弁文がみられる。時期は明確ではないが15世紀前半の可能性がある。異時期の混入であろうか。106は床面直上出土の鐵先である。

＜時期＞出土土器から9世紀後半～10世紀前半と推定される。

#### 6号堅穴住居跡（第33～35図、写真図版19・20）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のBIV b11～d13グリッドに位置する。検出面はIV層で、十和田a火山灰を少量含む黒褐色シルトによる方形気味のプランとして把握した。プランの西側は調査区外西側に続く。

＜重複関係・建替え＞13号溝と14号溝に切られている。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は隅丸方形と判断される。規模は、南一北で約5.4mである。東一西は半分以上が調査区外西側に続くことから不明にある。壁高は10～16cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東一西と推定される。

＜埋土＞埋土は1～4層に区分した。堅穴本体は、1層黒褐色シルトによるほぼ単層で、十和田a火山灰が少量混入する。この1層は自然堆積層である。1a層は調査区境で検出したPP3の堆積層で、1層を切る関係にある。しかしながら、土色や土質は1層と類似する。1b層は、住居内土坑5にみられる褐色粘土の地山ブロック土である。1c層は住居内土坑5に伴う黒褐色シルトに黄褐色粘土が多量に入るブロック層である。この1b層・1c層はともに人為層で、自然堆積層である1層中に覆われ、住居内土坑1・5に伴うが、これら1b層・1c層の下位には3層とした人の整地層がある。2層・3層・4層は人為層で、その内2層・2a層は貼り床と捉えられる。3層・4層はそれぞれ土坑の中～下位付近を中心にみられる整地層である。土坑の中～下位のみの整地を意図しているのか、

若しくは土坑底面の嵩上げ的な行為なのか、判断が難しい。

上記の土層堆積様相から考えて、土坑1・5と命名したものは、土坑5が柱穴、土坑1が柱の建て替えに伴う柱抜き取り痕の可能性が示唆されようか。なお、この両土坑からは、須恵器や土師器が一定量出土している。

＜床面・壁＞Ⅳ層地山を床面とする部分と、2層や2a層の貼り床が施されている部分がある。全般に硬く、やや凹凸がある。壁は、やや外傾気味にわずかに立ち上がる。

＜カマド＞燃焼部に関連すると思われる焼土層がみられる。この焼土層は、東壁中央付近のPP12とPP13の間付近から、西にある住居内土坑2付近にかけて広がり、この部分付近はやや凹む（床面より標高が下がる）。焼土層の厚さは最大10cmで発達がみられる。また、周辺には焼土粒も頗著にみられる。煙道部や袖部の残存はないが、13号溝跡や14号溝跡に破壊された可能性が高い。

＜柱穴・付属施設＞柱穴16個と住居内土坑を5基検出した。床面の上で検出されたものと貼り床の下から検出されたものがあり、本竪穴住居跡は柱穴や床面施設の作り替えが行われていることが窺える。従って、少なくとも新旧2時期の変遷が考えられる。古段階を第33図に、新段階を第34図に明示した。

貼り床の下から見つかった古い段階の柱穴・施設としては、PP10・11・12・13・15、住居内土坑4がある。

貼り床上で見つかった新しい段階の施設は、PP1・2・3・4・5・6・7・8・9・14・16、住居内土坑1・2・3・5がある。

柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	柱穴No.	径(cm)	深さ(cm)
6号住PP1	46×32	32	6号住PP9	46×40	57
6号住PP2	32×26	27	6号住PP10	31×28	21
6号住PP3	(15×8)	17	6号住PP11	24×21	33
6号住PP4	(20×20)	27	6号住PP12	38×30	57
6号住PP5	42×38	63	6号住PP13	44×28	36
6号住PP6	50×37	56	6号住PP14	24×20	33
6号住PP7	19×17	24	6号住PP15	26×24	15
6号住PP8	(21×10)	20	6号住PP16	56×45	24

＜遺物＞（第64・69図32～39・90・107、写真図版40・41・44・45）出土遺物は、土器類10,780.46g、土製品1点、焼成粘土塊18.8g、鉄製品1点である。土器類は32～36の土師器と37～39の須恵器を掲載した。29の須恵器は、本遺構の埋土と約150m離れた20号土坑の埋土出土の破片同士が遺構間接合を示した資料である。38は住居内土坑3から一括出土した須恵器大甕の破片である。90は土錐、焼成粘土塊は掲載番号91として写真・表掲載した。107は刀子の破片である。

＜時期＞出土土器から9世紀後半～10世紀前半と推定される。合せて、十和田a火山灰の降下時期より古いと判断される。

#### 7号竪穴住居跡（第35図、写真図版21）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB IV h 10～i 12グリッド付近に位置する。検出面はⅣ層で、暗褐色シルトによる方形プランとして把握した。本遺構の北側と南側は調査区外に続く。

＜重複関係・補替え＞本遺構下位から8号竪穴住居跡を検出した。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は方形基調と考えられるが、上述のとおり北側と南側が調査区外

### 3 檢出遺構

に統くことから、詳細はわからない。規模は東一西の一辺は約6.3mで、深さは10~15cmである。カマドが東壁に構築されていることから、長軸方向は東一西と推定される。

＜埋土＞埋土は1層暗褐色シルトによる単層である。硬く縮まり、また黄褐色粘土小ブロックや炭化物を少量含む。人為堆積と推定されるが明確ではない。2・3層は貼り床である。

＜床面・壁＞床面は、下位の8号堅穴住居跡を覆う部分については貼り床が施され硬い。それ以外は地山IV層を床面とする。全体的にはやや凹凸がある。壁は緩く外傾して立ち上がる。

＜カマド＞東壁際で南調査区境の土層断面において、煙道部を検出した。袖部や燃焼部は検出されていない。住居内土坑3としたものからは、略完形の土師器壺が出土しているが、位置から推定してカマドに関係する施設である可能性もある。

＜柱穴・付属施設＞柱穴4個、住居内土坑3基、壁溝1条を検出した。何れの柱穴も、堅穴の規模に反して開口部径20cm以下の小形のものである。住居内土坑は、3基検出した。埋土の様相から、住居内土坑1・3は、堅穴発掘時に開口していたと考えられ、住居内土坑2は貼り床されている。壁溝は、東壁～北壁の一部に認められた。幅約25cm、深さ5~10cmである。

柱穴No	径(cm)	深さ(cm)
7号住PP1	24×19	15
7号住PP2	(18×8)	10
7号住PP3	22×20	14
7号住PP4	20×20	14

＜遺物＞（第65図40~45、写真図版41・44）出土遺物は土器類1,393.54gと焼成粘土塊22gである。土器類は傾向として須恵器壺の破片が多く出土している。40の土師器壺と41の須恵器壺は、埋土中より出土した部位とカマド付近の貼り床下から出土した部位が接合関係を示したものである。44の須恵器壺や攜帯番号92として写真・表掲載した焼成粘土塊も同様にカマド付近の貼り床下から出土している。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半~10世紀と推定される。

#### 8号堅穴住居跡（第36図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB IV i 10~i 12グリッド付近に位置する。検出状況は、7号堅穴住居跡の床下（貼り床下）より検出した。大部分が調査区外南側に統く。7号堅穴住居跡と軸方向が同じで、規模的には一回り小形にある。状況から、本遺構を建て直したのが7号堅穴住居跡と考えられる。

＜重複関係・建替え＞7号堅穴住居跡より古い。

＜平面形・規模・長軸方向＞平面形は方形基調と考えられるが、上述のとおり南側が調査区外に統くことから、詳細はわからない。規模は東一西の一辺が約5m強と推定される。深さは5~10cmである。長軸方向は東一西方向と推定される。

＜埋土＞褐色粘土質シルトを主体に黄褐色粘土が多量に混入する。人為堆積で、合わせて7号住居跡を構築する際に本遺構を覆った貼り床と判断される。

＜床面・壁＞IV層地山を床面とする。貼り床は認められない。やや凹凸がある。7号堅穴住居跡との床面の高低差は、本遺構の床面が約10cm低い。

＜カマド＞未検出にある。

＜柱穴・付属施設＞柱穴4個、住居内土坑1基、壁溝1条を検出した。柱穴の規模は、PP1が開口

部径約40cmとやや大きく、他の3個20cm以下である。住居内土坑1は断面形が浅皿状を呈するもので、深度の観点から土坑と判断した。しかしながら、位置的にみて柱穴である可能性もある。壁溝は、北西隅の一端のみ検出された。

柱穴No	径(cm)	深さ(cm)
8号住PP1	44×44	8
8号住PP2	24×20	7
8号住PP3	20×18	21
8号住PP4	24×21	17

＜遺物＞なし。

＜時期＞重複造構との関係から9世紀後半～10世紀若しくはそれよりやや古い可能性がある。

### (2) 柱穴状遺構

#### 1号堅穴状遺構（第36図、写真図版22）

＜位置・検出状況＞調査区中央部や北のA IV i 10～j 11グリッド付近に位置する。表土除去後、IV層中で黒褐色シルトによる長方形気味の広がりとして把握した。西側と東側は調査区外に延びる。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は長方形と判断される。規模は、長軸3m以上、短軸2.2mである。深さは12～30cmである。主軸方向は東～西方向である。

＜埋土＞1層黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と判断されたが、明確ではない。

＜床面・壁＞底面は四角が顕著で、特に東側では中央が丸底状をみる。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞不明にある。埋土の様相からは、今回の調査で顕著に検出されている9世紀後半～10世紀前半の造構に類似する。古代と推定しておきたい。

### (3) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は1棟認知した。それ以外に今回の調査では265個の柱穴状土坑を検出した。これら柱穴状土坑は、3個以上が等間隔で並ぶグループを抽出するなどして掘立柱建物跡の復元に努めたが、調査区の幅が狭いこともあり、建物のは復元できなかった。従って、柱穴状土坑については、柱穴状土坑群として、(8)の柱穴状土坑に調査区毎に記述し、その内で掘立柱建物跡を構成する可能性があるグループについて、若干取り上げることとする。

#### 1号掘立柱建物跡（第37・38図、写真図版23・24）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV y 11～B IV b 13グリッド付近に位置する。検出状況はIV層において、先に黒褐色シルトによる方形基調のプランを確認した。この方形基調のプランは、結果として付属土坑としたもので、当初は単独の土坑として精査に着手した経緯がある。この付属土坑を少し掘り下げた段階で多量の遺物が含まれていることがわかり、合わせて付属土坑プランの北西隅と北東隅より大形の柱穴を検出した。検出時は付属土坑が新しと判断されたが、新旧関係を把握するため、付属土坑とPP1を通した土層断面を設定した（第37図B-B'）。上層観察の結果、付属土坑の1層とPP1の1層は同じ土層と判断され、また出土土器も付属土坑出土と柱穴出土で接合するものがある。従って、両者は同時に埋め戻されていることが判明した。その後、周辺からPP1やPP2に類似する深度を持ったPP3・PP4・PP5・PP6の柱穴が検出されたことから、その配列を鑑みて、付属

土坑を持つ掘立柱建物跡と判断した。

＜重複関係・建替え＞13号溝跡と21号土坑に切られている。

＜柱穴＞6個の柱穴を検出、確知した。

＜埋土＞柱穴の埋土は、人為堆積なのがPP 1・PP 3 の埋土上位にみられる1層黒褐色シルトと、PP 1の5層、PP 2の1層・2層、PP 4の1層・2層、PP 5の1層・3層がそれぞれ挙げられる。総じて、中位や下位に暗褐色シルト質粘土が堆積し、所々に黄褐色粘土ブロックと炭化材が少量混入する。やや不明確なのが、PP 5の2層であるが、あるいは柱痕跡（アタリ）かもしれない。

＜建物方位＞調査から推定される主軸（桁行）は、ほぼ南—北方向である。

＜平面形式＞掘立柱建物である。規模は、桁行530（16尺）cm、梁間210cm（6.3尺）である。ただし、調査区の関係で梁間と捉えた東西方向については、調査区外に延びる可能性は残る。

＜柱間寸法＞桁行の柱間寸法は、PP 1とPP 3では180cm（約6尺）、PP 3とPP 5では340cm（112.6尺）、PP 2とPP 4では220cm（約7.3尺）、PP 4とPP 6では290cm（9.6尺）である。梁間の柱間寸法はPP 1とPP 2では200cm（6.6尺）、PP 3とPP 4では220cm（7.3尺）、PP 5とPP 6では210cm（7尺）で、基準寸法は7尺と推定しておきたい。

＜付属土坑＞建物の北端で方形基調の土坑を検出した。規模は、長径200cm強、短径140cm、深さ約20cmである。埋土は全て人為堆積層である。1層は埋め戻し的な行為に伴う堆積層と判断される。併せてこの1層からは多量の土師器・須恵器片が出土したが、これらについても廃棄されたものと推定される。2層と3層は、土坑底面より下で検出された2個の副穴を覆う整地層である。やや硬い。

＜出土遺物＞（第65・66図46～62、写真図版41・42・44）出土遺物は、上器類5,615.21g、焼成粘土塊7.2gが出土した。出土遺物のほとんどは付属土坑からで、柱穴からは上器類が少量出土した。46～48は土師器壺、49は土師器小型甕、50は耳皿、51・52は須恵器壺、53～55は須恵器大甕、56は須恵器甕、57～62は須恵器蓋である。傾向としては、土師器より須恵器が多いことが看取される。93の焼成粘土塊は写真・表掲載のみ行った。

＜時期＞出土土器から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

#### （4）土 坑

上坑は21基検出した。その中で13号土坑としたものは炭窯と考えられる。また、2～5・10号土坑は、何らかの作業に伴う下部構造の痕跡である可能性もある。時期的には現代の可能性がある17号土坑を除けば、概ね古代（大半は平安時代）と捉えられる。

##### 1号土坑（第38図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞調査区西部のB I f 13グリッドに位置する。検出状況は、東側調査区境に入れたサブトレントの土層断面において、1号堅穴住居跡を切るプランを検出し、確知した。

＜重複関係・建替え＞1号堅穴住居跡を切る。

＜平面形・規模＞平面形は不整円形を呈する。規模は、調査区境東側においては、100～225cm、深さは最大で約60cmである。

＜埋土＞1～5層に分層した。埋土上位が1層黒褐色シルト、埋土中～下位が2・3層黒褐色シルト質粘土で、色調はほとんど同じにあるものの、土質が異なる特徴が看取される。最下位の4層は黒色泥質粘土質土でやや湿り気がある。北壁際にみられる5層褐色粘土は壁の崩壊土と考えられる。全て自然堆積層と考えられる。

＜底面・壁＞底面は平坦ではなく、凹凸が顕著である。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第66図63・64、写真図版42・43）遺物は土器類2,128.04 gが出土した。63が土師器壺、64が須恵器大甕である。

＜時期＞出土遺物は9世紀後半～10世紀である。ただし、重複遺構である1号竪穴住居跡の埋土には十和田a火山灰を含むが、本遺構はそれを切っている。従って、10世紀前半より新しい可能性もある。

#### 2号土坑（第39図、写真図版24・25）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I t 22グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルトの楕円形の広がりとして、10号土坑と共に検出した。

＜重複関係・建替え＞本遺構の東側で重複する10号土坑を切っていると捉えた。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈する。開口部径は265×84cm、深さは35～40cmである。

＜埋土＞黒褐色シルトを主体とする。自然堆積と判断したが明確ではない。

＜底面・壁＞底面は平坦基調であるが、緩く波打つ。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第66図65、写真図版42・44）出土遺物は、土器類264.55 g、焼成粘土塊9.6 gである。65は土師器壺の口縁部片である。焼成粘土塊は掲載番号94として写真・表掲載した。

＜時期＞出土遺物からは9世紀後半～10世紀前半と推定される。

#### 3号土坑（第31図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I t 23グリッド付近に位置する。IV層中で、焼土を含む暗褐色シルトの半円形のプランを検出した。調査区外東側に続く。

＜重複関係・建替え＞1号竪穴状土坑に切られる。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形と推定される。開口部径は南北の一辺が約100cm、深さは約18cmである。

＜埋土＞埋土上位に1層明褐色焼土みられ、炭化物を顕著に含む。この焼土は、現地性と判断されることから、1層上面で火が焚かれたと判断できよう。埋土中～下位に2層暗褐色シルト粘土が堆積するが各所に黄褐色粘土ブロックが混入する。1・2層共に整地を意図した人為堆積と考えられる。従って、1層上面は、火を焚く行為に関係した作業面であることが想起できる。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は緩く外傾若しくは外反気味に立ち上がる。

＜遺物＞（写真図版45）出土遺物は、土器類129.28 gと焼成粘土塊36.5 gが出土した。土器類は土師器小片で不掲載とした。焼成粘土塊は掲載番号95として写真・表掲載した。

＜時期＞出土遺物からは9世紀後半～10世紀前半と推定される。

#### 4号土坑（第31図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I t 23グリッド付近に位置する。IV層中で、黒褐色シルトの広がりとして5号土坑や1号焼土遺構と共に検出した。調査区外東側に続く。

＜重複関係・建替え＞5号土坑を切る。しかしながら、セットの関係にある遺構の可能性が高い。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形と推定されるが、プランの大部分が調査区外東側に続くことから、明確にはわからない。規模は、南北の一辺が約100cm、深さは約25cmである。

＜埋土＞11～13層の3つに細分した。黒褐色シルトを主体とし、焼土粒・炭化物・黄褐色粘土粒が少

量混入する。人為の行為が窺われる上層ではあるが、堆積様相としては自然堆積層である。

＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外反して立ち上がる。深さは約28cmである。

＜遺物＞なし。

＜時期＞重複遺構との関係から9世紀後半～10世紀前半より新しい可能性が考えられる。しかしながら、5号土坑や1号焼土遺構、及び3号土坑などとはセット関係にある施設と考えられる。従って、それらと同時期の遺構としておきたい。

#### 5号土坑（第31図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA T t 23グリッド付近に位置する。IV層中で、黒褐色シルトの広がりとして4号土坑や1号焼土遺構と共に検出した。

＜重複関係・建替え＞4号土坑に切られる。また、1号焼土遺構との関係については同時性の遺構と判断される。

＜平面形・規模＞平面形は梢円形を呈する。規模は、南北の一辺が92cmである。東側が4号土坑に破壊されているため、東西は不明とした。深さは32cmである。

＜埋土＞第31図C-C'の1・2・6層が本遺構の埋土である。埋土上位に堆積する1層黒色シルトと2層暗褐色シルト質粘土層は、黄褐色粘土粒を多量に含み、炭化物粒・焼土粒・土器片を少量含む。なお、この1・2層は1号焼土遺構も覆うことから、本遺構と1号焼土遺構は同時性の遺構の可能性が高く、合わせて何らかの作業面であった可能性もある。6層は黒褐色シルト質粘土で、黄褐色粘土ブロックを15%含む。これらは、全て人為による整地層と考えられ、全般に硬い。特に1層は非常に硬い（硬化面的である）。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第66～68図66～77・99、写真図版42・43）出土遺物は、土器類4,517.06g、陶磁器類1点が出土した。土器類は須恵器が圧倒的に多い。66が土師器壺、67・68が土師器甕、69～71が須恵器壺、72～74が須恵器大甕、75・76が須恵器壺、77が須恵器甕である。99は東美濃産の綠釉陶器穀柵で、10世紀前半黒錦90式である。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

＜その他＞4号土坑や1号焼土遺構、及び3号土坑などとは、セット関係にある施設と考えたい。

#### 6号土坑（第39図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞調査区東部のB IV f 16グリッドに位置する。検出状況は、IV層中において、1号陥し穴と共に検出した。

＜重複関係・建替え＞1号陥し穴状遺構を切る。

＜平面形・規模＞平面形は長梢円形を呈する。規模は、開口部径145×65cm、深さ16cmである。

＜埋土＞黒褐色シルトに単層である。堆積様相から自然堆積ではないかと考えられる。

＜底面・壁＞底面は、一部分は重複関係にある1号陥し穴の埋土が底面となる。その他はIV層黄褐色粘土層でほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第68図78、写真図版43）出土遺物は78の須恵器壺1点（212.35g）が出土した。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀と考えられる。

## 7号土坑（第39図）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB VI a 12グリッド付近に位置する。検出状況は、VI層中で黒褐色シルトの匁形の広がりとして検出した。

＜重複関係・建替え＞本遺構の西側は、13号溝跡に切られている。

＜平面形・規模＞平面形は梢円形を呈する。規模は、開口部径で長軸長82cmである。短軸長は上記のとおり、西側が13号溝跡に破壊され不明である。深さは約10cmである。

＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。堆積様相から自然堆積ではないかと考えられる。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は、土器類14.28gが出土した。小片であることから全て不掲載とした。

＜時期＞詳細な時期は不明であるが、出土遺物から9世紀後半～10世紀と考えられる。

## 8号土坑（第44・45図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA I 125グリッド付近に位置する。IV層中で、黒褐色シルト質粘土や黒色シルトの広がりとして認知した。遺構プランは調査区外南側に延びる。

＜重複関係・建替え＞14号土坑に切られる。

＜平面形・規模＞平面形は梢円形を呈する。規模は、開口部径165cm以上×140cm、深さは約25cmである。

＜埋土＞第44図A-A'断面の1層は、本遺構の他に14号土坑、6・8号溝跡も覆う。本遺構の埋土と認知されるのは、21～23層である。21層黒褐色シルト質粘土が埋土上位に、22・23層の黒色シルトが中位～下位に堆積する。堆積様相からは自然堆積と判断されたが明確ではない。

＜底面・壁＞床面はほぼ平坦である。壁は直立気味～やや外傾に立ち上がる。

＜遺物＞（第68～70図79・100・108、写真図版44～46）出土遺物は、土器類834.86g、焼成粘土塊13.9g、綠釉陶器1点、右器1点が出土した。79は小形の土器器窓である。ロクロ成形で、底部は回転糸切りによる。焼成粘土塊は掲載番号96として写真・表掲載した。100の綠釉陶器は、猿投産の綾楓で、内面に陰刻花文が描かれる。9世紀後半と考えられる。108は磨り石で、表面と裏面の両面に磨り痕がある。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀と考えられる。

## 9号土坑（第39図、写真図版26）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I n 22グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルト質粘土の広がりとして検出した。プランの半分以上は調査区外西側に延びる。

＜平面形・規模＞平面形は長梢円形と想定を呈する。規模は、開口部径200cm以上×60cmで、深さは約26cmである。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層で、黄褐色粘土粒が5%程混入する。自然堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面は北西方向に向かってやや傾斜する。壁は、南壁や東壁は直立気味に外傾し、北壁や西壁では緩く外傾して立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類44.42gである。何れも小片のため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀と考えられる。

**10号土坑（第39図、写真図版24・25）**

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I t 23グリッド付近に位置する。IV層中で黄褐色粘土を含む黒色シルトの広がりとして、2号土坑と共に検出した。

＜重複関係・建替え＞2号土坑に切られるとして捉えた。ただし、セット関係にある土坑の可能性も考えられることを付記しておきたい。

＜平面形・規模＞大部分が調査区外東側に延びることから、全の形状は不明にある。ただ、梢円形若しくは円形の可能性はある。規模は南北の一辺が約190cmである。深さは、30~38cmである。

＜埋土＞最上位の11層黒褐色シルトは、黄褐色粘土が少量含まれる。自然堆積層の可能性もあるが、明確にはわからない。12層は人為による整地層で、明黄褐色粘土粒や焼土粒が多く混入し、非常に硬い。13・14層は明確には判別できないが、人為堆積層の可能性が高い。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がるが、北壁が南壁と比較して急傾を呈する特徴が看取される。

＜遺物＞出土遺物は土器類7.22gが出土した。小片のため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半~10世紀前半と考えられる。

**11号土坑（第40図、写真図版26）**

＜位置・検出状況＞調査区西部A I p 23グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルト質粘土の広がりとして検出した。本遺構の東側は調査区外東側に続く。

＜平面形・規模＞平面形は方形基調である。規模は、南北の開口部径が65cmであるが東西方向では不明にある。深さは北側の最深部で17cm、南側の最深部で13cmである。

＜埋土＞北側が黒褐色シルト、南側で黄褐色シルトが堆積する。人為堆積の可能性が考えられる。

＜底面・壁＞底面は中央部が約22cmマウンド状に盛り上がり、そこから壁際にかけて凹凸が激しい。壁は、外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相からは古代の可能性がある。

**12号土坑（第40図、写真図版26）**

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II k 4グリッド付近に位置する。検出状況はIV層で黒褐色シルトの広がりとして認知した。大部分は調査区外南側に延びる。

＜平面形・規模＞平面形は不整形である。規模は、東西の開口部径270cm以上、深さは37cmである。

＜埋土＞黄褐色粘土ブロックが10%混入する黒褐色シルト質粘土を主体とする。暗褐色砂質土が東壁側に堆積する。人為堆積と判断されたが、明確ではない。

＜底面・壁＞底面はやや丸底気味である。壁は緩く外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は、土器類25.67gである。小片のため不掲載とした。

＜時期＞詳細な時期は不明であるが、出土遺物から9世紀後半~10世紀前半と考えられる。

**13号土坑（第40図、写真図版27）**

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II k 9グリッド付近に位置する。IV層中で焼土粒や炭化物を含む黒色シルトによる方形プランとして把握した。

＜平面形・規模＞平面形は長方形を呈する。規模は、開口部径は172×90cm、深さ50cmを測る。

＜埋土＞1～4層に分層した。全般的に焼土粒と炭化物が顕著にみられる人為層であるが、堆積様相としては、自然埋没したものと捉えられる。埋土上～中位にかけて厚く堆積する1層黒色シルトは、焼土粒と炭化物を少量含む。埋土中位の2層は焼土層で炭化材を多量に含む。2a層黒褐色シルト層は、主に壁際にみられ、焼土粒を多量に含む。埋土下位の主体を占める3層は、黒色シルト層で1層と類似する。4層は褐色粘土質シルトで、壁の地山崩壊土と判断される。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は急傾斜で立ち上がる。

＜遺物＞（第68図80・81、写真図版44）出土遺物は、土器類550.51gと鉄滓1点が出土した。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

＜性格・用途＞2層を中心とみられる多量の炭化材の在り方から、本遺構は炭窯と推定される。

#### 14号土坑（第44・45図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA I 123グリッド付近に位置する。IV層中で暗褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。本遺構の南側プランは、調査区外南側に延びる。

＜重複関係・延替え＞本遺構の西側で重複する8号土坑を切る。また、東側で重複する8号溝跡との新旧関係は、第44図A-A'断面においては本遺構が8号溝跡を切って（新しく）図示している。ただ、本遺構と8号溝跡は同時期存在で、併せて本遺構が8号溝跡の何らかの付属施設である可能性もある。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形である。規模は、長軸長92cm以上、短軸長80cm、深さは最深で42cmである。

＜埋土＞第44図断面A-A'の1層は、本遺構の他に8号土坑・6号溝跡・8号溝跡も覆う。本遺構の埋土と認知されるのは31～33層である。埋土上位に薄く堆積する31層は暗褐色シルト層である。埋土上～中位には32層黒色シルトが堆積する。埋土下位には、黒色シルトが少量混入する33層褐色粘土質土が堆積する。何れの土層もレンズ状の堆積を示し、混入物も少ないとから、自然堆積と捉えられる。

＜底面・壁＞底面はすり鉢状に丸底である。壁は外傾して立ち上がるが、西壁が東壁と比較してより急傾にある。

＜遺物＞なし。

＜時期＞出土遺物はないが、重複遺構との関係から9世紀後半～10世紀前半若しくはそれより若干新しい時期の可能性が考えられる。また、調査区境の土層断面の観察結果からは、十和田a火山灰降下時期より新しい可能性が高い。

#### 15号土坑（第40図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I 122グリッドに位置する。検出状況は、IV層で黒褐色シルトの広がりとして検出した。本遺構の西側は、調査区外西側に延びる。

＜平面形・規模＞平面形は不整形で、ランダムに握られた様相である。規模は、検出部においては南北長280cm以上、東西長75cm以上で、深さは北側で20cm、南側で25cmである。

＜埋土＞1層黒褐色シルトを主体とし、黄褐色粘土ブロックや焼土粒を含む。この1層は、比較的多くの土器を包含するが、土器は人為により投棄されたと判断される。ただ、埋土自体は自然堆積と捉えた。2層は底面付近において所々にみられ、黄褐色粘土（地山土）に黒褐色シルトが少量混入する。地山の再堆積土と考えられるが、地山そのもので掘り過ぎの可能性もある。

＜底面・壁＞底面はIV層地山中まで掘り込まれており、凹凸が激しい。本遺構付近の地山は、基本的には黄褐色粘土層であるが、底面は疊混じりの粘土層が顕著にみられる。従って、凹凸が激しいことは、地山の土質にも起因するものかもしれない。壁は緩く外傾する。

＜付属施設＞副穴1個を検出した。径約17cmの円形である。深さは約20cmである。

＜遺物＞（第68図82～84、写真図版44）出土遺物は土器類1,785.00gである。82・83は須恵器坏で、84は須恵器大甕の胴部である。接合作業の結果、何れも完形にはならないことから、壊れた状態のものを廃棄したと考えられる。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

#### 16号土坑（第40図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II j 15グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色粘土質土の長楕円形気味の広がりとして検出した。

＜平面形・規模＞平面形は長楕円形を呈する。規模は、開口部径は200×98cm、深さ48cmを測る。

＜埋土＞1層黒褐色粘土質土を主体とする。この1層中には黄褐色粘土紋が5%程含まれ、また酸化鉄の集積がみられる。自然堆積と考えられる。西底面付近にみられる2層は、地山壁の崩壊土と判断される。

＜底面・壁＞底面は平坦を基調とする。壁は外傾して立ち上がるが、西壁が東壁と比較してより急傾にある。

＜付属施設＞北側に溝状の張り出しが伴う。幅は約60cm、深さ約25cmである。当初は重複遺構と捉えたが、土層断面の観察の結果からは同じ埋土（1層）が堆積することから、付属施設と判断した。

＜遺物＞なし。

＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相からは古代の可能性が高い。

#### 17号土坑（第46図、写真図版28）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II i 22グリッド付近に位置する。IV層で黒褐色粘土質土による溝跡と推定されるプラン（10号溝跡）と、不整円形気味のプラン（本遺構）を確認した。調査区境にサブトレンチを入れ、土層断面の観察から、10号溝跡を切る本遺構を認知した。南側は調査区外南側へ延びる。

＜重複関係・建替え＞10号溝跡を切る。

＜平面形・規模＞平面形は不整形である。規模は、検出部において東西では355cm以上であることがわかる。深さは最深部で約40cmである。

＜埋土＞第46図B-B'断面の1層が本遺構に伴う。黒褐色シルト質粘土を主体とする。南東方向から斜めに1層を切る搅乱層がみられる。当初この搅乱層は、人為による古代層の可能性で捉えたが、調査区境の土層断面の再観察を行った結果、現代の搅乱層の可能性が高いと判断された。明確ではないものの、本遺構は現代の可能性もある。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類9gである。磨滅した土師器小片1点である。

＜時期＞重複遺構との関係から古代より新しい。また、搅乱層と捉えた土層が現代であれば、本遺構も現代となる。出土遺物は、上記のとおり磨滅した土師器小片1点が出土しているが、異時期の混入の可能性が高い。

**18号土坑（第41図、写真図版28）**

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB IV e 12グリッド付近に位置する。IV層で黒色シルトによる楕円形のプランとして把握した。

＜重複関係・建替え＞179号柱穴状土坑に切られる。また、180号柱穴状土坑との新旧関係は明確には掴めなかつたが、本造構が新しいと捉えた。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形である。規模は、開口部径148×120cm、深さ28cmを測る。

＜埋土＞1層黒色シルトを主体とする。この1層には炭化物が微量含まれる。2層褐色粘土は地山ブロック層で、壁の地山崩壊土と判断される。自然堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類29.76gである。古代の土器器小片である。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

**19号土坑（第41図、写真図版28）**

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II j 16グリッド付近に位置する。IV層で黒褐色シルトの楕円形のプランとして把握した。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形である。規模は、開口部径70×55cm、深さ30cmである。

＜埋土＞黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と判断される。

＜底面・壁＞底面は凹凸が激しく、平坦ではない。壁は、外傾した後、一部内傾気味となり、さらに外傾に立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類52.86g出土している。古代の土器器小片である。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

**20号土坑（第41図、写真図版29）**

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV y 12グリッド付近に位置する。IV層で黒褐色粘土質シルトの広がりとして検出した。西側は調査区外西側へ延びる。

＜平面形・規模＞平面形は検出部からは楕円形と推定される。規模は、南北長が146cm、深さは32cmである。

＜埋土＞黒褐色粘土質シルトを主体とし、底面や底面壁際においてにぶい黄橙色粘土がみられる。自然堆積層と考えられるが、明確には判断できない。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞（第68図85、写真図版44）出土遺物は土器類859.53gである。85の須恵器甕を掲載した。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

**21号土坑（第41図、写真図版28）**

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB IV a 12グリッド付近に位置する。IV層で黒褐色シルトの楕円形の広がりとして検出した。半裁した結果、柱穴状土坑とするには掘削深度が浅いと判断し、土坑として造構登録した。

＜平面形・規模＞平面形は楕円形を呈する。規模は、開口部径は88×54cm、深さ約10cmを測る。

＜埋土＞褐灰色シルトによる単層である。黄褐色粘土ブロック、焼土粒、炭化物の混入具合から人為

堆積層と判断した。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。壁は、外傾気味にわずかに立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類16.05 gである。土師器小片である。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

#### 22号土坑（第41図）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV w 12グリッド付近に位置する。IV層で黒色シルトの広がりとして検出した。大部分は調査区外東側に延びる。

＜平面形・規模＞平面形は不明にある。規模は、検出部で南北が82cm、深さは最深で13cmを測る。

＜埋土＞黒褐色シルトの単層である。人為堆積なのか自然堆積なのか判断できなかった。

＜底面・壁＞底面は北から南へ向かって傾斜する。壁は南側では外傾するが、北側ではほとんど立たない。

＜遺物＞出土遺物は土器類16.05 gである。土師器小片で不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

#### （5）溝 跡

溝跡は21条検出した。古代18条、中世～近世1条、近代～現代1条、現代1条である。底面・壁の項においては、溝底の標高値を参考に水が流れる方向について推定し記述した。本遺跡の地形は平坦を基調とし、微地形的には西から東へ、そして南から北に向かって高度を減じる。底面の標高値からも、基本的には、上記の方向に水が流れると推定されるものが多い。しかしながら、1節の遺跡の位置で記述したとおり、作屋敷遺跡は周囲よりやや高い微高地に立地していることで、上記に反する方向に流れる可能性があるものも散見された。

##### 1号溝跡（第42、写真図版29）

＜位置・検出状況＞調査区西部のB I h 13～j 14グリッド付近に位置する。IV層中で黒色シルトによる溝状のプランとして検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長さは315cmである。溝幅が24～36cm、深さ最深で20cmを測る。主軸方向は北東～南西方向に延びる。

＜埋土＞黒色シルトと黒褐色シルトに大別される。自然堆積と考えられるが、明確ではない。

＜底面・壁＞底面は、全体的には平坦を基調とするが、やや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは南西→北東に緩く下る。壁はやや外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類3.92 gである。土師器小片である。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、埋土の様相からも古代の遺構と推定される。

##### 2号溝跡（第42図、写真図版29）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I r 23グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルトの橋円形の広がりとして検出した。溝の両端は調査区外に延びる。

＜重複関係・建替え＞4号堅穴住居跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長

さは約6mである。溝幅30~44cm、深さ12~18cmを測る。主軸方向は北東→南西方向に直線的に伸びた後、やや西側に曲がる。

<埋土>黒褐色シルトによる単層である。自然堆積と判断される。

<底面・壁>底面はやや丸底気味を呈する。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは南西→北東に緩く下る。壁は外傾して立ち上がる。

<遺物>出土遺物は土器類465.03gである。

<時期>出土遺物は9世紀後半~10世紀前半である。周辺の遺構変遷からは、それよりやや新しい時期の可能性もある。

### 3号溝跡（第43図、写真図版29）

<位置・検出状況>調査区東部のA IV p 15グリッド付近に位置する。IV層で黒褐色砂質シルトの溝状プランとして検出した。

<平面形・規模・主軸方向>溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅70~88cm、深さ16~25cmを測る。主軸方向は東→西方向に伸びる。

<埋土>黒褐色砂質シルトによる単層である。明確ではないが自然堆積と考えられる。

<底面・壁>底面は凹凸が激しく、平坦ではない。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは西→東に下る可能性がある。壁は外傾しながら立ち上がる。

<遺物>出土遺物は土器類62.92gである。磨滅した小片で不掲載とした。

<時期>出土遺物から9世紀後半~10世紀前半と考えられる。また、本遺構の連續性として、現道を挟み西側に直線的に迫っていくと、調査区中央部で検出された18号溝跡若しくは19号溝跡のどちらかに繋がる可能性が高い。

### 4号溝跡（第43図、写真図版30）

<位置・検出状況>調査区東部のB IV b 16~e 17グリッドに位置する。IV層中で黒褐色シルトの広がりを検出した。調査区境にサブトレニチを入れ、土層断面の観察を行った結果、南北の長さが14m以上であることがわかった。厳密には溝跡であるものか不明確にあるが、後述する14号溝跡の関係などを考慮し、溝跡として遺構登録した。

<重複関係・建替え>3号堅穴住居跡を切る。

<平面形・規模・主軸方向>面的な調査ができなかったことから溝の長さや溝幅は不明である。検出部での長さは約14m、深さは最深で12~25cmを測る。主軸方向は北→南に伸びる。

<埋土>黒褐色シルトを主体とするが、黄褐色粘土の混入の割合で含有率の高い方を1層、低い方を2層とした。1層が埋土上位に、2層が埋土下位に堆積する。両層とともに自然堆積と判断されたが、明確ではない。

<底面・壁>平面的な検出部がほとんどなく、底面や壁の状況は不明にある。水が流れていたと仮定すると、調査区境の土層観察から溝底を判断すると、緩く南→北に下る可能性もある。

<遺物>出土遺物は土器類52.31gである。磨滅した土師器小片で、併せて酸化鉄の集積が付着しているものもある。土器の残存率を鑑みて、全て不掲載とした。

<時期>出土遺物は9世紀後半~10世紀前半と考えられる。しかしながら、遺構の重複関係からは3号堅穴住居跡より新しいことが確実であり、9世紀後半~10世紀前半の年代よりやや新しい可能性もある。また、本遺構の連續性として、現道を挟み西側に伸びると想定した場合、調査区中央部で検出

された14号溝跡に繋がる可能性が高い。この14号溝跡についても、十和田a火山灰を埋土に含む6号竪穴住居跡より新しいことを確認できる。従って、上述した9世紀後半～10世紀前半より新しい可能性については整合性がある。

#### 5号溝跡（第44図、写真図版30）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II k 1 グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルトや灰褐色粘土質砂質土の非常に大きな広がりを検出した。調査区北境に幅50cm程のサブトレーナを設定し掘削したところ、幅が10m前後、深さ1m以上の溝跡であることが判明した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約9.9m、底部径約7.7m、深さ最深で約1.3mである。主軸方向は北一南方向に延びる。

＜埋土＞1～15層に分け、さらに2層系は2層と2a層に、5層系は5層と5a層に細分した。埋土上～下位にいたるまで黄褐色や褐灰色の砂質土若しくは砂質粘土を主体とする。全て自然堆積層であり、合わせて水成堆積と判断される。その中で、壁際に近い埋土中位の8層が十和田a火山灰層である。この8層は、プライマリな火山灰層ではなく、水成作用による二次堆積と判断される。十和田a火山灰は、8層以外には8層の直下に堆積する13層にぶい黄褐色砂質粘土中に、小ブロックが少量混入するものの、他層には認められない。遺物は、埋土最下位～底面直上に厚く堆積する15層灰褐色砂質粘土から土器器小片と須恵器片が少量出土しているが、他の層から認められない。なお、15層出土の土器類は流れ込みによるものと判断される。また、3層と14層は、他とは土色・土質が異なる黒色泥炭土がみられるが、近接する同時期・同種の遺構と考えられる6号溝跡などには認められない。従って、水成作用が強い溝底などに形成されている（溜まりやすい？）と考えたい。上記の内容に土層堆積様相を加味して拡大解釈すると、本溝跡は概ね3単位（時期？）の堆積土により構成されている可能性もある。具体的には古い方から、①第1段階の堆積土が15層、②第2段階の堆積土が4・5・5a・6・7・8・8a・9・10・11・12・13・14層、③第3段階の堆積土が1・2・3層の、3つの単位が想定される。また、第2段階とした堆積土はさらに、細分可能性かもしれない。なお、上記した内容が流路の変遷に結び付けられるかは検討を要する。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦と思われたが、精査時は湧水が顕著で底面の状況把握はやや不確実にある。水が流れていたと仮定すると、周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞（第68図86、写真図版44）出土遺物は土器類187.97gである。86の須恵器甕を掲載した。遺物は全て、埋土下位～底面に堆積する15層から出土した。この15層は、埋土の項で上記した第1段階の堆積土である。従って、これら15層出土の土器類は、第2段階の堆積土にみられる8層十和田a火山灰降下時期より古い可能性が極めて高い資料と言えよう。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、本溝跡にみられる十和田a火山灰は二次堆積ではあるが、出土土器類の年代から考えて降下時期と人差ない時期と判断される。したがって、十和田a火山灰降下時には埋没が始まっていたと捉えられるが、完全には埋まりきっていないかったと判断できよう。

#### 6号溝跡（第44・45図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA I k 24グリッドに位置する。IV層中で黒褐色シルトの大きな広がりを検出した。精査当初は竪穴住居跡なのか溝跡なのか判別できなかったことから、調査区北境に幅

50cm程のサブトレーナを設定し掘削したところ、幅4mを超える溝跡と判明した。

＜重複関係・建替え＞14号土坑や8号溝跡と重複する。新旧関係は、土層断面の観察から本遺構が14号土坑に切られ（古く）、8号土坑を覆う（新しい）と捉えた。しかしながら、本遺構と14号土坑・8号溝は、新旧関係にある遺構ではなく、セットの関係にある同時期遺構の可能性もある。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約4.2m、底部径約0.28m、深さ最深で約0.96mである。主軸方向は北一南方向に延びる。

＜埋土＞第44・45図A-A'・B-B'土層断面では、本遺構の埋土を1～8層、8号溝跡の埋土を11層、8号土坑の埋土を21～23層、14号土坑を31～33層に命名した。本遺構の埋土は、上記のとおり1～8層に分層し、さらに2層系は2・2a・2b層に、3層系は3・3a・3b層に、4層系は4・4a・4b・4c層に、5層系は5・5a・5b層に細分した。埋土上位は、1層黒色シルトを主体とし、その直下に2層系とした十和田a火山灰が混入する土層がみられる。埋土中位付近には、3層系～5層系とした褐色や暗褐色を基調とした砂質土が主体的にみられる。堅際にのみ6層黒褐色泥質粘土質土がみられる。埋土下位～底面付近には7層黒褐色粘土質土を中心とし、北側調査区境では7層直下でさらに8層黄褐色粘土がみられる。全て自然堆積層である。合わせて基本的には水成堆積と判断される。ただし、5号溝跡の埋土と比較した場合、6号溝跡の埋土は全体的に水に長時間浸った土質とは捉え難く、水成作用が弱かった可能性が窺える。

＜底面・壁＞底面は調査区北境ではU字状にやや丸底に、調査区南境では平坦気味にある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。全体の断面形は逆台形に近い形状で、いわゆる薬研堀と判断される。

＜遺物＞出土遺物は土器類111.7gが出土している。9世紀後半～10世紀前半の土師器で、3層・3a層から出土している。小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、本溝跡にみられる十和田a火山灰は二次堆積ではあるが、出土土器類の年代から考えて降下時期と大差ない時期と判断される。また、十和田a火山灰降下時には既に埋没に近い状態であったことが想定される。

## 7号溝跡（第45図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II k 6～k 9グリッドに位置する。IV層で黒褐色シルトの溝状プランとして検出した。

＜重複関係・建替え＞57・59・60・61・62・65・70号柱穴状土坑に切られている。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長さ約11mである。溝幅が15～55cm、深さは4～6cmである。深さから判断して、溝の上部は削平され、底付近が残存していたと考えられる。主軸方向は南西一北東方向に、ほぼ直線的に延びる。なお、南北端では真南方向に変わる。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積と考えられるが明確には判断できない。

＜底面・壁＞底面はやや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは東西→北東に下る可能性が高い。壁は外傾気味にあるが、非常に浅く判断できない。

＜遺物＞出土遺物は土器類181.39gである。9世紀後半～10世紀前半の土師器である。小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物は9世紀後半～10世紀前半である。

### 3 検出遺構

#### 8号溝跡（第44・45図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA I k 24グリッドに位置する。6号溝跡の中場付近の下位から検出した。

＜重複関係・建替え＞6号溝跡より古いと判断した。しかしながら、埋土の類似性などから判断して、大差ない時期か若しくは6号溝跡に付属する遺構である可能性がある。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約80cm、底部径約45cm、深さは最深で約20cmである。主軸方向は北-南方向に延びる。

＜埋土＞第44・45図A-A'・B-B'土層断面で11層としたのが、本遺構に伴う埋土である。灰黄褐色砂質土による単層である。この11層は、色調や土質が6号溝跡の2a・3a・5層などに類似する。自然堆積である。

＜底面・壁＞底面は平坦気味にある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞重複遺構との関係からは、時期の下限は9世紀後半～10世紀前半より古い。併せて、相対的に十和田a火山灰降下期より古い。出土遺物がなく、時期の上限は推定できないが、埋土の類似性などの観点から6号溝跡と同時期の遺構か若しくは6号溝跡に付属する遺構である可能性が高い。

#### 9号溝跡（第46図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II i 21～j 22グリッドに位置する。IV層中で黒褐色シルト質粘土の溝状プランとして検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。検出部での長さ270cm以上である。溝幅が18～34cm、深さ8～12cmを測る。主軸方向は南東-北西方向に直線的に延びる。

＜埋土＞黒色シルト質粘土の単層である。自然堆積と考えられるが明確には判断できない。

＜底面・壁＞底面は凹凸が激しく、南から北に向かって階段状に下がる様子にもみえる。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞出土遺物は土器類10.88gである。9世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

#### 10号溝跡（第46図、写真図版31）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II i 21～j 22グリッドに位置する。IV層で黒褐色粘土質土による溝跡と推定されるプランと、不整円形気味のプランを確認した。調査区境に入れたサブトレンチの土層断面において、不整円形気味（17号土坑）のプランに切られる本溝跡を認知した。

＜重複関係・建替え＞17号土坑に切られる。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約1.0m、底部径約0.25～0.35m、深さは最深で約0.25mである。主軸方向は南東-北西方向に延びる。

＜埋土＞埋土上位に11層黒褐色シルト、中～下位に12・12a層の黄褐色粘土ブロックが混入する黒褐

色粘土質土が堆積する。明確には判断できないが、自然堆積の可能性がある。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾気味に立ち上がる。検出部からの長さ2.2m以上である。

＜遺物＞出土遺物は土器類10.51gである。9世紀後半～10世紀前半の土器で、小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

#### 11号溝跡（第46図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA II i 24グリッドに位置する。IV層で黒褐色シルト質粘土の溝状プランとして検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が64～75cm、深さ15cmである。主軸方向は南東→北西方向に直線的に延びる。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積なのか人為堆積なのか判断が難しいが、前者と捉えたい。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、南側はやや丸底気味を呈する。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾しながら立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞出土遺物がなく時期は特定できない。埋土の様相からは、古代と推定しておきたい。

#### 12号溝跡（第47図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV w11～x 12グリッド付近に位置する。IV層中で黒色粘土質シルトの溝状プランとして検出した。溝跡の両端が調査区外に続く。

＜平面形・規模・主軸方向＞検出部での長さ250cm以上である。溝幅が46～60cm、深さ3～12cmを測る。主軸方向は西→東方向に直線的に延びる。

＜埋土＞黒色粘土質シルトによる単層である。自然堆積と判断したが明確ではない。

＜底面・壁＞底面は凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下る可能性が高い。溝上部は削平されていると思われ、壁はわずかに立ち上がるだけで壁形はわからない。

＜遺物＞（第69図101、写真図版45）出土遺物は101の陶磁器類1点（22.78g）である。中世～近世と推定される瀬戸・美濃産碗の破片である。

＜時期＞出土遺物から中世～近世と考えられる。

#### 13号溝跡（第47図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV x 12～B IV d 13グリッド付近に位置する。IV層で黒褐色シルト質粘土による溝状のプランとして検出した。溝跡の両端が調査区外に続く。

＜重複関係・建替え＞6号竪穴住居跡、14号溝跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞長さは不明にある。溝幅は、開口部径30～40cm、底部径20～35cm、深さは5～12cmである。主軸方向は南→北方向にかけて、弧状に延びる。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積と推定される。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高はわずかではあるが

北が高く南が低い。また、周辺地形の標高はほぼ平らにある。従って、北→南に下る可能性を考えられるものの、明確にはわからない。壁は緩く外傾して立ち上がるが、溝上部は削平されていることから、本来の壁形はわからない。

＜遺物＞出土遺物は土器類781.27 gが出土した。9世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物は9世紀後半～10世紀前半と考えられる。しかしながら、遺構の重複関係からは、十和田a火山灰降下時期より確実に新しい。埋土の様相からは、中世～近世と捉えられる12号溝跡に類似する。総括すると時期の上限は10世紀前半より新しいが、時期の下限は不明である。

#### 14号溝跡（第48図、写真図版32）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB IV a 12～d 13グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルトや褐灰色砂質上の不整形の広がりとして検出したが、平面プランは明瞭ではなく、また本遺構西側に位置する6号竪穴住居跡と重複関係にあることは想定されたが、新旧関係は不明確にあった。従って、調査区東境にサブレンチを入れ、また本遺構と6号竪穴住居跡を網羅するように東西方向に土層ベルトを設定した上でベルト沿いにサブレンチを入れ、土層断面から遺構検出に努めた。

＜重複関係・建替え＞13号溝跡に切られ、6号竪穴住居跡を切る。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は馬蹄形気味を呈するが、平面的な検出部が少なく詳細はわからない。溝幅が、開口部径約2m、底部径約1.2m、深さは最深で約1mである。主軸方向は北から南に延びた後、北西から南東方向に曲がる。

＜埋土＞1～3層に分層した。埋土上位の1層黒褐色シルトは約6cmの厚さで堆積し、硬く縮まる。2層黒褐色シルトは、色調や土質は1層に類似するが、やや柔らかい特徴がある。3層褐灰色砂質土は2層よりさらに柔らかく、各所に黑色泥炭土が多く混じり、底面付近では人頭大の角礫が多く出土した。これらの角礫は、角がやや自然摩耗されている。1～3層は明確ではないが、全て自然堆積と判断しておきたい。ただし、埋土上位の1層は人為により踏み固められている可能性もある。また、3層に混入する黒色泥炭土の在り方からは、水成作用があった土層と判断できようか。

＜底面・壁＞底面は凹凸があり、全体的には西から東若しくは北から南にやや下る。水が流れていたと仮定すると、溝底の標高からは北西側が高く南東側が低いことから、北西→南東に曲流し下る可能性が考えられる。しかしながら、周辺地形はほぼ平らにあり、調査地外東側の情報がない現状において、言及は難しい。

＜遺物＞出土遺物は土器類388.52 gである。9世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物は9世紀後半～10世紀前半と考えられる。しかしながら、遺構の重複関係からは、十和田a火山灰降下時期より確実に新しい。従って、10世紀前半以降の遺構と考えられる。

#### 15号溝跡（第48図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区北部のA IV f 1～g 1グリッドに位置する。IV層で黒褐色シルト質粘土による溝状プランとして検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が約50cm、深さは最深で12cmである。主軸方向は南～北方向にはほぼ直線的に延びる。

＜埋土＞黒褐色シルト質粘土による単層である。自然堆積と考えられるが明確には判断できない。

＜底面・壁＞底面はやや凹凸があるものの、平坦を基調とする。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南→北に下る可能性が高い。壁は直立気味に立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞出土遺物がなく時期は特定できない。埋土の様相からは、古代と推定しておきたい。

#### 16号溝跡（第49図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区中央部西部のA IV v 11グリッドで検出した溝跡と、現道を挟んで東側に位置する調査区東部のA IV v 15～v 19グリッド付近で検出した溝跡が同じ溝跡と判定された。検出状況は、表土を除去した段階で、調査区中央部ではオリーブ黒色シルト質粘土の、調査区東部では黄灰色粘土質による溝状のプランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に統くことから長さは不明にあるものの、今回の調査では全長35m以上であることがわかる。溝幅が、開口部径0.9～2m、底部径0.5～0.8m、深さ最深で約0.35mである。主軸方向は西→東の方向に直線的に延びる。

＜埋土＞埋土は調査区中央部側（※第49図A-A'断面）と調査区東部側（※B-B'断面）とで埋土の色調や土質が若干異なる。調査区中央部側は、埋土上位に1a層オリーブ黒色シルト質粘土、埋土下位に2層黒褐色シルトが堆積する。2層からは現代遺物の他、自然木や何らかの部材と思われる木片が出土している。1a・2層ともに酸化鉄の集積が顕著で、湿っぽい土層なことから、隨時水の流れがあった可能性は言及できないまでも、水の作用があったことは想定できる。対して、調査区東部側は、埋土上位に1層黄灰色粘土質土、埋土下位に3層暗灰黄色砂質粘土質土が堆積する。3層からは現代遺物、土師器片、何らかの部材と思われる木片が出土している。1・3層とともに、酸化鉄の集積が顕著なことと、全てではないが泥っぽい土が各所に認められることから、調査区中央部側と同様に水の作用が想定できる。調査区中央部側において埋土下位にみられる2層と、調査区東部側の埋土下位3層は、色調や土質には若干の差異が看取されるものの、出土遺物などの類似性からは同時期の堆積層と判断される。1層と1a層についても酸化鉄の集積具合などから同様に、同時期の堆積層の可能性は考えられる。これらが、自然堆積なのか人為堆積なのか明確には判断はできなかった。ただ、地山粘土ブロックなどの混入はほとんど認められないと、埋土上位も下位も層を成して堆積している様相であることから、自然堆積の可能性がある。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下ると捉えられる。壁は外傾気味に立ち上がる。

＜遺物＞（第68図87、写真図版44）出土遺物は土器類1,822.95gである。その他に自然木や何らかの木片、一升瓶の破片などの近代～現代と考えられる遺物が出土している。87の須恵器大甕の口縁部片を掲載したが、この須恵器は異時期の流れ込みである。

＜時期＞出土遺物から近代～現代に廃絶されたと考えられる。また、埋土から出土した木片などの遺存状態からもそれを支持できよう。ただ、出土遺物には明らかに昭和の年代を推定できるものが含まれない。いつの時代まで遡れるのか不明にある。調査区東部の地権者の方にこの溝についてご教示いただいたが、地権者の方が生まれた昭和20年代中頃には、既にこのような溝はなかったらしい。また、地元でさらに高齢の方にもお話をうかがってみたが、子供の頃溝があった記憶はないとの情報を得た。従って、廃絶時期は、遺物から判断して古くても明治と推定しておきたい。合わせて時期の下限は昭和20年代よりは確実に古いことも言及できよう。

#### 17号溝跡（第50図、写真図版33）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB IV i 1～j 4 グリッド付近に位置する。IV層中で黒褐色シルトの溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径約3.7m、底部径約3.1m、深さ最深で約1.1mである。主軸方向は北西→南東の方向に直線的に延びる。

＜埋土＞埋土上位に1層黒褐色シルトが10～40cmで堆積する。この1層は乾いた土質で、水成的な作用は窺えない。埋土中～下位に2層暗オリーブ褐色粘土質砂質土、埋土の最下位に3層・3a層褐色灰砂質土が薄く堆積する。この2・3・3a層は、ややグライ化した様相の土で、水成作用が関係した土層と推定される。4層黄褐色砂礫土は、地山なのか地山土の再堆積土なのか明確には判断できなかったことから図化した。地山の可能性が極めて高いと思われる。これらは自然堆積か人為堆積なのか明確には判断できなかったが、状況から人為堆積の可能性が高い。

＜底面・壁＞底面は凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からはどちらに流れていたのかわからない。推測としては北西→南東の可能性が高いと思われる。壁は外傾しながら立ち上がる。検出面からの深さは約50cmである。

＜遺物＞出土遺物は、ビンや肥料袋などの現代遺物と土器類29.65gである。

＜時期＞出土遺物から現代と考えられる。正確にはわからなかったが、地元の方の話によると、昭和後半頃まで使われていた用水路跡である可能性がある。

#### 18号溝跡（第51図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV p 10～p 11グリッドに位置する。IV層中で黒褐色砂質粘土の溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径60～85cm、底部径18～30cm、深さは最深で約20cmである。主軸方向は西→東に直線的に延びる。

＜埋土＞黒褐色砂質シルトによる単層である。自然堆積と判断した。

＜底面・壁＞底面は均一ではなく、やや凹凸がある。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下る可能性が高い。壁は外傾に立ち上がる壁形を基本とするが、所々崩落している。また、所々杭穴が認められるが、溝使用当時の痕跡なのか、現代の水田耕作に伴う廻穴なのかわからなかったことから、図化・明示することとした。

＜遺物＞出土遺物は土器類56.91gである。9世紀後半～10世紀前半の土師器で、小破片なため不掲載とした。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。また、本遺構の連続性として、現道を挟み東側に直線的に迫っていくと、調査区東部で検出された3号溝跡に繋がる可能性がある。

#### 19号溝跡（第51図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV p 10～p 11グリッドに位置する。IV層中で黒褐色砂質粘土の溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。溝幅が、開口部径48～60cm、底部径25～35cm、深さは最深で約10cmである。主軸方向は西→東に直線的に延びる。

＜埋土＞黒褐色砂質シルトによる単層である。自然堆積と判断した。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは西→東に下る可能性が高い。壁は緩く外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞出土遺物がなく、重複遺構もないことから時期は不明にある。埋土の様相からは近接する18号溝跡に類似することから、9世紀後半～10世紀前半の可能性がある。また、本遺構の連続性として、現道を挟み東側に直線的に並んでいくと、調査区東部で検出された3号溝跡に繋がる可能性がある。

#### 20号溝跡（第51図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区東部のA IV d 24～d 25グリッドに位置する。III～IV層中で黒褐色シルト質粘土の溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。幅が35～48cm、深さ最深で38cmである。主軸方向は南東→北西方向に直線的に延びる。

＜埋土＞埋土上位に1層黒褐色シルト質粘土、埋土下位に2層黒褐色粘土質土が堆積する。基本層序III層に由来する可能性がある。自然堆積と考えられる。また、水成の作用が窺えない。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞出土遺物がなく、重複遺構もないことから時期は不明にある。埋土の様相からは古代と推定しておきたい。

#### 21号溝跡（第51図、写真図版34）

＜位置・検出状況＞調査区東部のA IV d 1グリッドに位置する。IV層中で黒褐色シルト質粘土の溝状プランを検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞溝跡の両端が調査区外に続くことから長さは不明にある。幅が60～70cm、深さ最深で約40cmである。主軸方向は南東→北西方向に直線的に延びる。

＜埋土＞黒褐色粘土質土による単層である。基本層序III層に由来する可能性がある。自然堆積と考えられる。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦である。水が流れていたと仮定すると、溝底や周辺地形の標高からは南東→北西に下る可能性が高い。壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞出土遺物がなく、重複遺構もないことから時期は不明にある。埋土の様相からは古代と推定しておきたい。

### （6） 焼土遺構

#### 1号焼土遺構（第31図、写真図版25・35）

＜位置・検出状況＞調査区西部のA I t 23グリッドに位置する。表土を除去した段階で、幾つかの黒～黒褐色シルトのシミを検出したが、その黒色シルトの上に焼土粒が顕著に認められたことから、焼土遺構として認知することとした。

＜重複関係・建替え＞4号竪穴住居跡を切る。5号土坑とは、新旧関係ではなく、一連のセット関係にある遺構と捉えられる。

＜平面形・規模＞平面形は梢円形で、北西から南東に広がる。焼土粒の広がる範囲は92×54cm、焼土粒の混じる土層の厚さは5cm前後である。また、全面ではないが一部焼土層として認められる部分もある。

＜焼土の様相＞検出面付近は、1層黒色シルトに焼土粒として混じる様相で、一部黒色シルトが焼土化している部分がある。炭化物も多量に混入する。焼土の色調は明赤褐色で、現地性焼土で焼成状態はやや良好である。なお、この1層黒色シルトは人為による整地層と判断され、非常に硬い。

＜地下構造＞精査結果から下部土坑が検出された。規模は、開口部径88×66cm、深さ44cmである。精査の手順を記述すると、1層を掘り下げると、2層暗褐色シルト層が覆う。この2層は炭化物・焼土粒・土器片を少量含み、また重複する5号土坑も覆う。2層下位には厚さ約25cmの焼土層が表れ、最下位には褐色粘土質土がみられる。これらは、全て人為による整地層と判断される。

＜出土遺物＞（写真図版4）出土遺物は土器類500.21g、焼成粘土塊9.8gが出土した。土器類は、9世紀後半～10世紀前半の上部器片と須恵器片で、割合としては須恵器片が多い。ただ、取り上げ時に5号土坑の出土土器類と多少混在した可能性があり、本遺構出土としては不掲載とした。焼成粘土塊は3層中から出土したもので、掲載番号91として写真・表掲載した。

＜時期＞出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。なお、各所で記述してきたとおり、本遺構と3・4・5号土坑はセット関係にある遺構の可能性が高い。これについては、まとめ取り上げることとする。

## 2号焼土遺構（第52図、写真図版35）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のB IV d 12グリッドに位置する。IV層でドーナツ状に広がる焼土を検出した。

＜重複関係・建替え＞264号柱穴状土坑に切られる。

＜平面形・規模＞焼土の広がりは上記のとおりドーナツ状にみられる。焼土範囲は75×65cmで、厚さは10cm平均である。

＜焼土の様相＞明赤褐色の色調を呈する焼土である。現地性で、焼成具合は非常に良好にある。

＜地下構造＞焼土層を掘り下げたところ、下部から暗褐色シルトに黄褐色粘土が多量に混入する人為層がみられ、さらにその下位より焼土層を検出した。この焼土層を下げると、炭化材が敷き詰められたような層が表れる。状況からカマドの煙出部と、煙道部の一部と判断される。

＜付属施設＞焼土層の東側に円形の小穴が伴う。

＜出土遺物＞出土遺物は土器類0.24gである。古代の土器と推定されるが細片でわからない。

＜時期＞古代のカマドと推定される。今回の調査では南壁にカマドを持つ窪穴住居跡が認められないことから、窪穴住居跡に伴うものではない、単独のカマド状遺構の可能性もある。

## （7）陥し穴状遺構

### 1号陥し穴状遺構（第52図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞調査区東部のB IV f 17～g 17グリッドに位置する。IV層上面で黒色シルトの溝状のプランとそれを切る梢円形のプラン（6号土坑）を検出した。

＜重複関係・建替え＞6号土坑に切られる。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は溝状を呈する。規模は、開口部径は270×30cm、底部径は255×10cm、深さは最深で85cmを測る。主軸方向は北西～南東をみる。

＜埋土＞埋土上～中位にかけて、1層黒色シルトが40～60cmで厚く堆積する。この1層は基本層序Ⅲ層に由来する土層と判断される。埋土下位には地山土の再堆積層である2層黄褐色粘土層が堆積する。この2層は壁などの崩壊土と推定される。全て自然堆積である。

＜底面・壁＞底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

＜遺物＞なし。

＜時期＞6号土坑より新しいことから、9世紀後半～10世紀前半より古いことは確実である。詳細な時期は不明であるが縄文時代と推定される。

## 2号陥し穴状造構（第52図、写真図版36）

＜位置・検出状況＞調査区中央部のA IV o 11グリッド付近に位置する。IV層中で黒色シルトの溝状のプランとして検出した。

＜平面形・規模・主軸方向＞平面形は溝状を呈する。規模は、開口部径は320×75cm、底部径290×10～20cm、深さは最深で約130cmを測る。主軸方向は南一北である。

＜埋土＞埋土上位には1層黒色シルトが40～50cmで堆積する。この1層は基本層序Ⅲ層に由来する土層と判断される。埋土中位には2層明黄褐色粘土と、明黄褐色粘土が多量に混入する3層黒色シルトが堆積する。2層は壁の地山崩壊土で、3層は1層と地山土の混合土である。埋土下位には地山土の再堆積層である4層明黄褐色粘土層が堆積する。この4層は壁などの崩壊土と推定される。全て自然堆積である。

＜底面・壁＞底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。深さは約18cmである。

＜遺物＞なし。

＜時期＞詳細な時期は不明である。埋土の様相から縄文時代と考えられる。

## （8）柱穴群

柱穴状土坑は265個検出した。本来は掘立柱建物跡を構成する柱穴も含まれていると思われるが、掘立柱建物跡として認知できなかったことから、ここで一括して扱うこととする。柱穴番号は、通し番号になっているが、調査区の総延長が750mにも及ぶことから、調査区を西部・北部・中央部・東部の4つに分け、その調査区毎の柱穴群として明示する。

### 調査区西部柱穴群（第53図）

＜位置・検出状況＞調査区西部で検出した柱穴状土坑を一括する。第53図には以下の①・②の2つのエリアに分割して示した。おおよそA I n 22～y 24グリッドに位置する。全てIV層中で検出した。

① A I n 22～q 22グリッドに位置するもの。

② A I t 23～y 23グリッドに位置するもの。

＜柱穴番号＞1～7・40～44号柱穴状土坑で12個である。①と②のエリア毎に示す。

① 1～7・40～42号柱穴状土坑で10個である。

② 43・44号柱穴状土坑で2個である。

＜重複関係＞重複関係にある造構は、3号土坑を1号柱穴状土坑が切る。

＜規模＞規模は20～40cmの範囲にある。

＜埋土＞黒褐色シルトによる単層のものが多い。

＜柱穴配置＞比較的まとまりがあるのが、南端で検出された2～7号柱穴状土坑の6個である。ただ

し、配置に明確な規則性は看取されない。

＜出土遺物＞出土遺物は、1号柱穴状土坑より土器類20.41 g、2号柱穴状土坑より土器類10.2 g、5号柱穴状土坑より土器類12.05 g、44号柱穴状土坑より土器類33.25 gが出土した。全て小破片なことから、不掲載としたが、古代の土師器を中心とする。

＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

#### 調査区北部柱穴群（第54・55図）

＜位置・検出状況＞調査区北部で検出した柱穴状土坑を一括する。第54・55図には以下の①～④の4つのエリアに分割して示した。およそA II k 3～j 13グリッドに位置する。全てVI層中で検出した。

- ①A II k 3～l 7グリッドに位置するもの。
- ②A II j 8～j 13グリッドに位置するもの。
- ③A II j 14～j 19グリッドに位置するもの。
- ④A II i 21～i 24グリッドに位置するもの。

＜柱穴番号＞調査区北部では91個である。①～④のエリア毎に示す。

①45～62・64～70号柱穴状土坑で25個である。

②63・71～100号柱穴状土坑で31個である。

③101～120・127～135号柱穴状土坑で29個である。

④121～126号柱穴状土坑で6個である。

＜重複関係＞重複関係にある遺構は、12号土坑を53号柱穴状土坑が、7号溝跡を57・59・60・61・62・65・70号柱穴状土坑が、13号土坑を63号柱穴状土坑がそれぞれ切る。

＜規模＞柱穴状土坑の規模については、18～70cmの範囲にある。

＜埋土＞黒褐色シルトによる單層のものが多い。

＜柱穴配置＞比較的まとまりがあるのが、A II k 3グリッド付近、A II k 5グリッド付近、A II k 7グリッド付近、A II j 10グリッド付近、A II j 12～j 13グリッド付近である。比較的等間隔で並び掘立柱建物跡を構成する可能性があるグループとして、A II j 12グリッド付近に位置する83・87・88・90号柱穴状土坑を挙げておく。他は配置に明確な規則性は看取されない。

＜出土遺物＞出土遺物は30個の柱穴状土坑より土器類が総量で535.43 g出土した。全て小破片なことから、不掲載としたが、古代の土師器を中心とする。最も多くの土器類が出土したのが②のエリアに所在する95号柱穴状土坑で203.07 gである。

＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

#### 調査区中央部柱穴群（第56・57図）

＜位置・検出状況＞調査区中央部で検出した柱穴状土坑を一括する。第56・57図には以下の①～⑤の5つのエリアに分割して示した。

- ①A IV f 4～f 5グリッドに位置するもの。
- ②A IV f 10～g 10グリッドに位置するもの。
- ③B IV h 7～i 10グリッドに位置するもの。
- ④A IV w 11～B IV b 12グリッドに位置するもの。
- ⑤B IV c 12～g 13グリッドに位置するもの。

検出状況は、①は一部Ⅲ層で検出したものも含まれるが、他は全てⅣ層中で検出した。

＜柱穴番号＞調査区中央部では105個ある。①～⑤のエリア毎に示す。

①137・138号柱穴状土坑で2個である。

②139・223・224・226～229・234～237号柱穴状土坑で11個である。

③175・190・225・254～257・259～263・265号柱穴状土坑で13個である。

④136・142～156・230～233・240～253・258号柱穴状土坑で35個である。

⑤140・141・157～174・176～189・191～199・264号柱穴状土坑で44個である。

＜重複関係＞重複関係にある遺構は、④・⑤のエリアで18号土坑、14号溝跡、2号焼土造構などをそれぞれ切る柱穴状土坑がある。

＜規模＞各柱穴状土坑の規模については、第23・24表を参照戴きたい。

＜埋土＞黒褐色シルトによる単層のものが多い。

＜柱穴配置＞比較的等間隔で並び掘立柱建物跡を構成する可能性があるグループとして、②のエリアにある226・227・236・237号柱穴状土坑、⑤のエリアにある159・179・189・196号柱穴状土坑の2つのグループを挙げておく。他は配置に明確な規則性は看取されない。

＜出土遺物＞（第69図102、写真図版45）出土遺物は17個の柱穴状土坑より、土器類が総量で304.02g出土した。全て小破片なことから不掲載としたが、古代の土器器を中心とする。最も多くの土器類が出土したのが④のエリアに所在する242号柱穴状土坑で88.28g、次いで157号柱穴状土坑の80.73gである。土器類以外では、167号柱穴状土坑より102の近世と推定される鉢の破片1点出土した。

＜時期＞詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

#### 調査区東部柱穴群（第58～60図）

＜位置・検出状況＞調査区中央部で検出した柱穴状土坑を一括する。第58～60図には以下の①～⑥の6つのエリアに分割して示した。

①A IV h 14～l 14グリッドに位置するもの。

②A IV n 14～p 15グリッドに位置するもの。

③A IV w 15～B、a 16グリッドに位置するもの。

④B IV b 16～f 16グリッドに位置するもの。

⑤A V u 19～t 24グリッドに位置するもの。

⑥A V s 3～s 4グリッドに位置するもの。

検出状況は全てⅣ層中で検出した。

＜柱穴番号＞調査区東部では57個ある。①～⑥のエリア毎に示す。

①8～20・238・239号柱穴状土坑で15個である。

②21～24号柱穴状土坑で4個である。

③25～32・38号柱穴状土坑で9個である。

④33～37・39号柱穴状土坑で6個である。

⑤200～218号柱穴状土坑で19個である。

⑥219～222号柱穴状土坑で4個である。

＜重複関係＞重複関係にある遺構は、④のエリアで3号竪穴住居跡を36号柱穴状土坑が、6号土坑を39号柱穴状土坑がそれぞれ切る。

＜規模＞各柱穴状土坑の規模については、第23・24表を参照戴きたい。

<埋土>黒褐色シルトによる単層のものが多い。

<柱穴配置>3個以上の柱穴状土坑が比較的等間隔で並び、掘立柱建物跡を構成する可能性があるものを模索したが、明確な規則性は看取されない。

<出土遺物>出土遺物は5個の柱穴状土坑より、土器類が総量で77.4g出土した。全て小破片なことから、不掲載としたが、古代の土師器を中心とする。最も多くの土器類が出土したのが④のエリアに所在する34号柱穴状土坑で57.35gである。

<時期>詳細な時期は不明であるが、埋土の様相から古代と推定しておきたい。

#### 4 出 土 遺 物

今回の調査では、大コンテナ(40cm×30cm×30cm)で約5箱分の遺物が出土した。土器類は土師器・須恵器合わせて約3.5箱分、土製品1点、焼成粘土塊9サンプル、陶磁器類12点、鉄製品7点、石器35点、チップ・フレークが少量である。

##### (1) 古代の上器

土器類(土師器・須恵器)は、総重量で56,615.02gが出土した。遺構内が52,983.82g、遺構外出土分が3,631.2gである。また、今回の調査で出土した土器類は、全て古代であり、縄文時代や弥生時代などは含まれない。土師器と須恵器に分け、記述することとする。なお、酸化炎焼成で内面無調整の土器は、ここでは土師器の一括して考えている。

<土師器>

壺、高台壺、耳皿、壺、小型壺がある。製作方法は基本的にロクロ成形であるが、土師器の壺においては、ロクロ成形と非ロクロ成形のものがある。

壺：16点掲載した。①底部から内湾気味に立ちあがり体部は外傾してそのまま口縁部にいたるもの、②底部から内湾気味に立ちあがり体部は外傾して口縁部が軽く外反するもの、③底部から外傾して立ち上がりそのまま口縁部にいたるもの、の3種類に分けることができる。また、内面または内外面に黒色処理を施すものと施さないものがある。底部調整は、回転糸切り無調整のものと、回転糸切り後ヘラケズリ再調整をするものがある。

①3・11・18・32・40・47・48・66・80の9点ある。

内外面黒色処理(47・66・80)：47は体部下端と底部の一部に手持ちヘラケズリ調整が施されている。66・80は底部が欠損している。80は口径に対する器高の割合が大きいやや深めの壺である。

内面黒色処理(11・18・32・40・48)：11・40は体部(もしくは体部下端)から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整が施されている。18・32・48には調整はみられない。18は、底部脇がやや屈曲する。48は底部が欠損している。

非黒色処理(3)：3は、体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。やや深めの壺である。

②19・33・34・46の3点ある。内外面ともに黒色処理は施されていない。底部調整は、19は底部が欠損しているため不明である。33・34は、回転糸切りであるが、33は一部ヘラケズリ調整をしていると思われる。46は体部外面から底部の一部にかけて、手持ちヘラケズリ調整をしている。

③1・2・17の3点ある。内外面ともに黒色処理は施されていない。底部調整は、3点すべて回転糸切り無調整である。1・2は底径が推定7cm以上と大きめで、2は底径に対して器高の割合が小さい低めの壺である。

高台壺：1点掲載した。底部から高台部分までの破片である。内面は放射状のヘラミガキが施され、

黒色処理されている。体部外面下端は、手持ちヘラケズリ調整をしている。高台はやや高めでハの字形に聞く（20）。

耳皿：1点出土し掲載した。画面に黒色処理を施している。外面は、体部から底部にかけて手持ちヘラケズリ調整で整えた後ヘラミガキ調整をしており、内面も丁寧に磨かれた後、黒色処理されている（50）。

壺：15点掲載した。完形の個体がほとんどないため、口径が15cm以上のものを壺とした。すべてロクロ成形の長胴壺である。

口縁部が外反するもの（6）、口縁部が外反し端部を上方にひきあげるもので外面に調整のあるもの（5・22・23・24・35・36・63・67）とないもの（10・12・13・68）、口縁部が外反し端部が上下に肥厚するもの（25・65）がある。外面に施される調整は、ほとんどがヘラケズリ調整であるが、5はロクロの下地にタタキ目がみられ、外面に粘土を貼りつけている。

小型壺：5点ある。口径が15cm以下のものを小型壺とした。ロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。

ロクロ成形のものは、79・81の2点である。79は、口縁部が外反し軽く上方にひきあげられ、体部下半に回転ヘラケズリ内調整が施されている。81は、口縁部が外反している。

非ロクロ成形のものは、4・21・49の3点である。4は体部下半から底部までしか残っていないが、底径と器形から小型壺とした。21・49は口縁部が軽く外反し、外面にヘラケズリ調整が施されている。

#### ＜須恵器＞

壺、壺・瓶類、鉢、甕がある。壺以外は破片のものが多く、全容をうかがい知れるものは少ないが、残された器形や調整技法などから器種を特定した。

壺：16点掲載した。底部から内湾気味に立ちあがるもので口縁部が外反するもの（14・43・51）とそのまま口縁部にいたるもの（26・27・42・52・69・70・82）、底部から外傾して立ちあがりそのまま口縁部にいたるもの（41・78・83）、口縁部が残存していない内湾気味のもの（7・44）と外傾しているもの（71）がある。そのなかに、底部下端に手持ちヘラケズリ調整を施すもの（7・44・70・78）、墨書きのあるもの（42）もある。

壺・瓶類：9点掲載した。16・61・75はいずれも体部の破片である。29・31は内外面ともにロクロナデ、76は外面にヘラケズリ調整が施されている。57は小壺の口縁部片と思われる。60・62は壺の破片で、62の外面には黒色付着物がみられる。

鉢：2点ある。8・30とともに、外面にヘラケズリ調整が施されている。8は、底部から内湾して立ち上がり、口縁部が軽く外反する。

甕・大甕：21点掲載した。すべて口縁部片や体部破片で全容が分かるものは皆無である。ここでは便宜的に口径の大きさや調整技法で甕と大甕に分けた。甕としたもののうち、15は外面に平行タタキの木目圧痕が残る薄手のものである。45・59は頸部にタタキ目を残す。内面または内外面にカキメがみられるもの（39・58）、内外面ともにロクロナデのもの（55・77・87）があり、87は頸部に波状文がみられる。大甕の口縁部片は、9・37・38（37・38は同一個体）の2点でいずれも外面に平行のタタキの痕跡がみられる。さらに9は、内面に同心円文当て具痕を残す。大甕の体部破片と思われるものは、11点あり外面に平行タタキ、内面に同心円文当て具痕を残すもの（28・72・84）、内外面平行のタタキのもの（53・64・73）、外面にのみ平行タタキを残すもの（54・56・74・85・86）がある。

## (2) 土 製 品

土鍤 1 点が出土した。また、土器焼成時の失敗品の可能性がある焼成粘土塊 148.9 g が出土したが、これらについても、土製品としてここで扱うこととする。

90 の土鍤は、6 号堅穴住居跡 PP 9 から出土した。長径 4.6 cm、短径 2.1 cm、孔の規模約 0.4 cm である。出土状況としては、土師器片と共に出土したが、特殊性は看取できない。帰属時期は、9 世紀後半～10 世紀前半と考えられる。

焼成粘土塊は、写真と表掲載のみ行った。出土遺構は、何れも平安時代で、1・5・6・7 号堅穴住居跡、1 号掘立柱建物跡付属土坑、2・3・8 号土坑、1 号焼土遺構から出土している。各塊は 1 ~ 4 cm ほどで、出土地点毎に 1 サンプルとし、88・89・91~97 の掲載番号付した。

## (3) 陶磁器類（縁釉、灰釉陶器、中・近世陶磁器）

陶磁器類は 12 点出土した。その中で、近代より古いと捉えられた 98~102 の 5 点を掲載したが、これら掲載した 5 点は全て遺構内出土である。

98 は 5 号堅穴住居跡の埋土中から出土した青磁碗である。外面に蓮弁文がみられる。年代は、中世前半 15 世紀と推定される。従って、5 号堅穴住居跡とは異時期であり、後世における流れ込みと考えられる。

99 と 100 は縁釉陶器である。99 は 5 号土坑の埋土上位から出土した東美濃産の稜楕で、内面の屈曲部に沈線がみられる。10 世紀前半黒窯 90 式と考えられる。100 は 8 号土坑の埋土中から出土した猿投産の稜楕で、内面に陰刻花文がみられる。9 世紀後半と考えられる。101 は 12 号溝跡から出土した瀬戸・美濃産の碗で、中世～近世の時期幅で捉えられる。102 は 167 号柱穴状土坑から出土した产地不明の鉢である。近世と考えられる。

## (4) 鉄 製 品

鉄製品は 7 点出土した。出土地は 2 号堅穴住居跡より 4 点、5 号堅穴住居跡から 1 点、6 号堅穴住居跡から 2 点で、全て平安時代の堅穴住居跡からの出土である。このことから、帰属時期は平安時代 9 世紀後半～10 世紀前半と推定される。器種の内訳は、刀子 2 点、釘？ 2 点、鋤先 1 点、器種不明 2 点である。器種不明 2 点を除く 103~107 の 5 点を掲載した。なお、掲載した 5 点は、整理期間の関係もあり保存処理前の段階で実測・遺物写真撮影を行っていること補足しておく。

## (5) 石 器

石器は 35 点出土した。内訳は、磨石 31 点、砥石 2 点、機種不明 2 点である。

108 は、8 号土坑から出土した磨石で、石材は安山岩である。全面にわたり被熱を受けている。また、胴部の途中から破損している。全面に磨面が形成されているが、表面は緩くマウンド状に盛り上がり、裏面は平坦な状態にあり、また磨面は裏面が明瞭である。この状況からは、作業面が裏面の可能性と、若しくは台石のように設置に関係して平坦な作りに仕上げられている可能性を考えられる。この土坑からは他に磨石 5 点と器種不明の石器 2 点が括出土している。また 75 の土師器甕が共伴出土していることから、帰属時期は平安時代と考えられる。109 は遺構外出土で、平面の形状は斧状を呈し、全面に砥痕がみられる。石材は砂岩である。胴部から先端にかけて、断面形状がやや先細にある。用途は砥石と推定される。所見的であるが、かなり使い込んでいる様子が窺える。

なお、磨石として登録したものは、108 の 1 点を除き不掲載としたが、何れも平安時代若しくは古代と推定される遺構から出土している。ここで不掲載としたものについて補足すると、自然磨耗などの

か人為による磨痕なのか判断できなかったものが大部分を占める。形状や大きさは様々であるが、①扁平な形状を呈し裏面にのみ磨面が形成されているもの、②多面体に平坦面がありその内の3複数面に磨面（自然磨耗？）がみられるもの、③全体が球状を呈するもの、④細長い台状の形状を呈し複数面に磨面があるもの、⑤磨痕は明瞭ではないが板状を呈するもの、などの5種類に入別される。これらは、完形品は少なく、多くは破損している。そして、被熱を受けていると思われるものも幾つか含まれる。

## 5 総 括

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代の陥し穴2基、平安時代の竪穴住居跡8棟・竪穴状遺構1棟・掘立柱建物跡1棟・土坑21基・溝跡19条・焼土遺構2基、古代中心と考えられる柱穴状土坑265基、近世の溝跡1条、近世～現代の溝跡1条、現代の土坑1基である。ここでは、遺構と遺物に分け総括してみる。

### (1) 遺 構

ここでは、古代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝跡・焼土遺構と縄文時代の陥し穴状遺構を取り上げる。

竪穴住居跡は8棟を検出した。出土土器から、平安時代9世紀後半～10世紀前半の時期幅で推定される。また、十和田a火山灰を伴うものが2棟ある。ここでは、調査で判明した内容の中から、規模、カマド、付属土坑についてまとめてみる。規模について、調査区の幅などに起因して竪穴住居跡全体を検出・調査できたものが多く、従って平面形や床面積などの全てを把握できていない。しかしながら、8棟中7棟において一辺の長さを把握できた。それを見ると、3.1～6.3mの範囲にあり、平均的には5m前後を基本とする様相を捉えられる。カマドを検出した竪穴住居跡は4棟である。それらは、煙道天井部が削平されているため、例り貫き式のか掘り込み式なのかはわからない。燃焼部は6号竪穴住居跡以外に明瞭ではなく、また袖部を検出したものはない。4棟何れも東壁際に煙道が構築されている共通点が看取される。本遺跡は南西～北東方向に緩く下る地形にあるが、勾配を感じるほどの傾斜地ではなく、カマド構築に際して地形的な制約を受けないものと捉えられる。風向は西風が多く、煙道とは逆方向となるため、煙を屋外に排出することを鑑みればカマド煙道が東に付くのは有意にあると考えられる。ただし、本遺跡周辺の平安期の竪穴住居跡を検出した小十文字遺跡や牡丹野遺跡（※岩手県教育委員会：2008）を見る限り、該期竪穴住居跡は本遺跡同様に東カマドであることから、地形や気象などの要因ではなく、政治的な制約と考えられよう。付属土坑は6棟で認められた。傾向としては、貼り床を除去した段階で検出されたものが多い。また、埋め戻されているものが多く、非常に硬く整地が施されているものもある。このことから、所見を述べると、付属土坑全てではないにしても、鍛冶など何らかの作業に関連した施設が含まれている可能性がある。

掘立柱建物跡は、平安時代1棟を検出した。6本の柱で構成され、規模は桁行530cm（16尺）、梁間210cm（6.3尺）を測る。柱間寸法は、桁行に多少のバラツキがあるものの、梁間はおおよそ210cm（7尺）を測る。建物の面積は約50m<sup>2</sup>である。ただし、調査区外東側に建物跡が延びる可能性もある。特記事項として、この掘立柱建物跡からは200cm強×140cmの付属土坑を伴う。この土坑は人為堆積されており、土師器や須恵器の破片が多量に出土した。

土坑は22基検出した。時期別の内訳は21基が古代、1基が現代と考えられる。ここでは古代の土坑について取り上げてまとめてみる。古代の土坑は21基検出され、その内19基が9世紀後半～10世紀前

半と推定される。全体的な傾向としては、平面形は椭円形が多い。規模は、最も小さい11号土坑で65cm（※開口部径）、最も大きい15号土坑で280cmである。深さは最も浅いもので10cm、最も深いもので60cmである。埋土は自然堆積と人為堆積がほぼ同じ割合でみられる。規模などの観点から何らかの傾向を導くのは難しいが、7・11・14・21・22号土坑などは、最大長80~90cmで、深さ10cm前後と、浅い共通点がある。

溝跡は21条検出した。時期毎の内訳は、古代18条、中世～近世1条、近代～現代1条、現代1条である。古代と判断した溝跡14条については、出土遺物、十和田a火山灰、遺構同士の重複関係などから9世紀後半～10世紀前半の可能性がある。これらの溝跡は全て自然堆積と推定された。ここでは、溝幅が突出して大きい5・6号溝跡と、平面形が特異な14号溝跡を取り上げる。5・6号溝跡は、長軸方向は南～北で、位置的にも調査区北部で近接した関係にある。規模は、5号溝跡が開口部径990cmで深さ130cm、6号溝跡は開口部径420cmで深さ96cmを測る。埋土には十和田a火山灰が認められるが、5号溝跡は埋土中位に、6号溝跡は埋土上位に堆積する。5号溝跡は埋没途中で、6号溝跡は埋まりきる直前段階で、それぞれ十和田a火山灰が降下した可能性を有する。これら十和田a火山灰は水成作用による二次堆積と考えられるものの、異時期の再堆積ではなく、ある程度降下時期を反映していると推定される。14号溝跡は、全容は明らかではないが平面形が方形基調あるいは馬蹄形を呈する可能性を有する。現道を挟んで東側で検出された4号溝跡に繋がる可能性が考えられるが、何れ直線的な形状の溝ではないことが窺える。

焼土遺構は2基検出した。1号焼土遺構の周りからは、それを取り囲むように3・4号土坑が検出され、また1号焼土遺構と5号土坑は重複関係にある。合わせて、1号焼土遺構と4・5号土坑は同時に埋められていることもわかった。このことから、3号土坑を含め、これらはセットの関係にあると考えられる。この1号焼土遺構と3～5号土坑の配置関係について、類例を模索してみると、前沢区白山の川前遺跡で検出された「鍛冶炉状遺構」と類似性が高い。ただ、1号焼土遺構や3～5号土坑を、鉄に関係する遺構とするには、鉄滓などの出土がなく、推定の域を出ない。ただ、今回の調査で鉄に関係する可能性が窺える遺構として、木炭を焼いた炭窯と考えられる13号土坑が検出されている。この炭窯（13号土坑）は、1号焼土遺構や3～5号土坑から約100m離れた地点にある。この13号土坑からは、多量の炭化材と共に、土師器の破片数点と鉄滓1点が出土している。2号焼土遺構は、焼土層がドーナツ状を呈する壘状で検出され、調査区外東側に続く。調査の結果、いわゆるカマドの煙出部と沿道部と考えられる。ただ、本遺跡にみられる堅穴住居跡のカマドは各所で記述してきたとおり、東向きに作られているのに対して、本遺構は西向きをみる相違点が看取される。従って、本遺構は堅穴住居跡に伴うカマドではなく、屋外に作られた単独のカマド状遺構である可能性も考えられる。

1号陥し穴状遺構は2基検出した。何れも溝状の形態を呈する。1号陥し穴状遺構は規模が270×30cmで深さ85cm、2号陥し穴状遺構は320×75cmで深さ130cmである。この形態を有する陥し穴状遺構は、従来から縄文時代中期や後期と推定されてきている。近年胆沢区では、中位段丘を中心に縄文時代の陥し穴の検出例が急増していることは注目され、大清水遺跡（佐藤：2001）や宮沢原下遺跡（戸根：2007、濱田・吉田・菊池：2008ほか）の報告書中において平面形・断面形の形態や、火山灰混入の有無などから精力的な考察が試みられている。これらの中には、十和田a火山灰や十和田中嶺火山灰などを含むものも見られ、前期前半より古期や、古代に帰属する陥し穴の存在が明らかになりつつあり、本県における陥し穴研究に一石を投じるものと期待される。

## (2) 遺物

土器類は土師器・須恵器合わせて約3.5箱分、土製品1点、焼成粘土塊9サンプル、陶磁器類12点、鉄製品7点、石器35点、チップ・フレークが少量である。

土器は、土師器坏・高台坏・耳皿・壺・小型壺と須恵器坏・壺・瓶類・鉢・壺が出土地で出土している。はじめに、年代を考える上で指標となっている土師器坏を中心に検討し、補足的に須恵器坏についても考えてみたい。

土師器坏の製作技法は、すべてロクロ成形である。内湾嗜好のものが多くみられ、底径が5~6cm前後のものが主体を占める。ロクロ成形の坏の器形は、逆台形から楕円形へと変化し、それが頸部にみられるようになるのは9世紀中葉以降であり、そのころから底形の縮小化もみられるようになる（村田：1995）。また、体部が内湾するもので口縁部が短く外反するものがあるが、このような特徴は9世紀後半にみられるようである（八木：1993）。さらに、楕円形のものから、楕円形で口縁部が外反するものの、底部脇が屈曲するものへと器形が変化すると考えられており（西澤：2005）、今回出土した土器にも、若干ではあるがこのような器形がみられた。底部調整については、回転糸切り無調整のものが多く、再調整が施されている場合は手持ちヘラケズリによるものがほとんどである。内面調整は、放射状のヘラミガキが施されるものが多い。また、9世紀後半からみられるようになる高台坏や耳皿も少量ではあるがみられる。

次に、須恵器坏についてみていくと、土師器坏と同様に内湾する器形のものがほとんどである。底部調整は回転糸切り無調整のものが主体を占め、外面調整もあまりみられない。底径は5~6cm前後のものが多い。須恵器坏も時代が下るにつれ底径の縮小化がみられ、また底部調整に関してはヘラ切りから糸切りへと変化する傾向がある。

これらのことから土器の年代を考えると、非黒色処理の土師器のなかにも黒色処理が施されている土師器や須恵器が一定量あること、土師器・須恵器ともに器形が内湾嗜好で口縁部が外反するもののがみられ、底部調整が回転糸切り無調整のものが多いことなどから、9世紀後半から10世紀前半にみられる特徴であると考えられる。

また、一定量の土器が出土した遺構についてみてみると、1号堅穴住居跡と6号堅穴住居跡は、埋土上に十和田a火山灰が堆積しており、その下層から土器が出土している。さらに1号堅穴住居跡においては、黒色処理の施された土師器を含まない。6号堅穴住居跡では、内面黒色処理の土師器坏と酸化炎焼成で内面無調整の土師器坏が共存する。これらの遺構は、土器の特徴と十和田a火山灰との関係から9世紀後半から10世紀前半の年代幅でとらえることができる。5号堅穴住居跡や1号掘立柱建物跡では、十和田a火山灰は検出されなかったものの、内面黒色処理の土師器高台坏や両面黒色処理が施された耳皿が出土しており、9世紀後半以降の様相をうかがわせる。5号土坑と8号土坑については、年代の指標となる縁輪陶器が出土している。5号土坑からは東濃産の稜輪で大原2窓式（10世紀前半）とされるもの、8号土坑からは猿投産の稜輪で陰刻花文が施された黒笠90号窓式期（9世紀後半）と考えられている縁輪陶器がみつかっている。以上のことから、本遺跡から出土した土器の傾向から、年代は概ね9世紀後半から10世紀前半の範疇でおさまるものとした。しかし、9世紀代の土器はバラエティーに富んでおり、9世紀初頭以外の時期、特に9世紀中頃から後半にかけての土器は細分しがたいという現状ではないかと思われる。今回の調査では、土器の出土点数が決して多くなかったため詳細な検討は行わなかったが、9世紀中頃までのほる土器もあるかもしれない。

土製品は土錐1点が出土した。帰属時期は、6号堅穴住居跡PP9から出土していることから、9世紀後半~10世紀前半の時期幅で推定される。

焼成粘土塊は取り上げ単位で9サンプル、合わせて148.9g出土した。出土遺構は、1・5・6・7号堅穴住居跡、1号掘立柱建物跡付属土坑、2・3・8号土坑、1号焼土遺構である。個々の焼成粘土塊をみると、土器などの失敗品と判断される薄手のものは無く、またロクロ成形の痕跡が認められるものも無い。

陶磁器類は9世紀後半～現代まで12点の陶磁器類が出土した。99・100の平安時代の縁釉陶器が出土しているが、岩手県内における縁釉陶器の搬入拠点として、村田淳は胆沢城跡を挙げているが（村田：2004）、この内容を鑑みれば本遺跡についても胆沢城と何らかの関係が示唆できようか。中世については、98・101の中世陶磁器2点の出土に留まり、また遺構についても12号溝跡以外確定なものはない。ただし、本遺跡においてもなんらかの人的活動があったことは指摘できよう。102などの近世と推定される産地不明の陶器は、牡丹野遺跡などからも多数出土しているが、その供給地（窯元）の解明が課題と考えられる。

鉄製品は7点出土した。刀子2点、釘？2点、鍔先1点、器種不明2点である。全て堅穴住居跡からの出土であることから、帰属時期は9世紀後半～10世紀前半と推定される。

石器は35点出土した。内訳は磨石31点、砥石2点、機種不明2点である。使用痕分析などを実施していないことから、肉眼観察からの所見となるが、これらは鉄製品に関連した研磨具の可能性が窺える。

### （3）縁釉陶器について若干の考察

ここでは、縁釉陶器について取り上げ、若干の考察を試みたい。縁釉陶器は、鉛ガラスを主成分とする釉が施された焼き物で、銅を呈色剤とするため緑色に発色するようである。7世紀後半に朝鮮半島の影響を受けて生産され始めたものの、一般的に生産されるようになるのは8世紀後半からで11世紀代には終焉を迎える。官衙や城柵、寺院、集落跡などで発見されており、岩手県では志波城跡や胆沢城跡、国見山庵寺跡、北上川沿いの集落跡などから出土している。

器種には、椀・皿・耳皿・鉢・水注・瓶・花瓶などがあり、時代あるいは各窯によって多様な器種が作られていたようである。縁釉陶器は、はじめ金属器を模倣して作られていたが、平安時代にはいると、越州窯系青磁を主体とする中国陶磁を志向した椀・皿類を主体とする新たな生産に大きく転換した（齊藤：2000）ようである。

また、縁釉陶器が生産される窯はどこにでもあるわけではなく、現在確認されている場所として、愛知県、岐阜県、滋賀県、京都府、山口県がある。なかでも、9世紀前半から縁釉陶器の生産が開始された愛知県の猿投窯は最大の生産地であったこともあり、縁釉陶器が出土している遺跡では、猿投窯の製品がよくみられる。猿投窯の他に同じ愛知県の美濃（東濃）窯・二川窯・尾北窯、京都府の洛北窯・洛西窯などが生産の拠点であった。

岩手県内の縁釉陶器の出土状況をみてみると、その数は決して多くなく、完形で出土することは稀である。本遺跡から出土した縁釉陶器2点も体部破片と、体部から底部の破片である。先述したように、1点は猿投窯産の稜椀で陰刻花文が施された黒窓90号窯式期（9世紀後半）のもの、もう1点は東濃窯産の稜椀で大原2窯式期（10世紀前半）とされるものである。

個々に特徴をみてみると、猿投窯産と考えられる稜椀は、体部中程の内外面で屈曲して稜を作りだし、外傾して立ち上がるもので、口縁部は斜く外反する。胎土は青灰色で、硬質である。また、猿投窯製品の特徴として、印刻文様が挙げられる。特に、稜椀には陰刻花文が施されるものが比較的多く見受けられるようであり、本遺跡から出土したものこれに相当する。

東濃窯産と考えられる棊碗は、体部下半がやや内湾し、体部中程の内外面で屈曲し、外傾して立ち上がる。口縁部は軽く外反し、屈曲部の内面には沈線がみられる。胎土は灰白色である。

近隣で緑釉陶器が出土した遺跡をみてみると、本遺跡から最も近い出土地は奥州市中半入遺跡である。中半入遺跡からは、托・壺・椀などが出土しており、特に托は全国的にも出土数が少なく、貴重なものである。この托は、猿投窯産で黒瓦90窯式前後と考えられている。そして、県内で最も多く緑釉陶器が出土している胆沢城跡では、楕・皿・蓋・手付瓶・香炉などがあり、猿投窯産（黒瓦14窯式～黒瓦90窯式）の他にも畿内産の製品もみつかっている。

このほかの緑釉陶器出土遺跡の分布傾向をみてみると、出土遺跡は県中・南部の令制六郡内にのみ分布し、いずれも北上川流域あるいは古代東山道付近に位置しており、県北部・沿岸地域には皆無であるという（田村：2004）。城柵や官衙と関連している可能性も考えられるであろうか。

緑釉陶器の用途については、祭祀や儀礼に使用されていた可能性と、日常什器として使用されていた可能性が考えられている。本遺跡で出土した緑釉陶器は、土坑と竪穴住居跡からみつかっているが、用途についての判断材料は少なくどちらともいえない。ただ、当時の人々にとって緑釉陶器が貴重品であったことは確かであろう。そして、緑釉陶器が出土している遺跡は決して多くなく、地域が限られていることも何か意味していると思われる。

以上、緑釉陶器について雑駁ではあるが述べてきた。本遺跡において僅かではあるが緑釉陶器が出土したということは意味のあることだと考える。遺跡の位置からして本遺跡に暮らした人々と胆沢城との関係を考えずにはいられないが、推測の域を出ない。今後の調査と、資料の増加に期待したい。

#### （4）調査区毎の遺構分布

ここでは、調査区毎に遺構分布についてまとめてみる。

① 調査区西部では、竪穴住居跡3棟、土坑9基、溝跡2条、焼土遺構1基、柱穴状土坑12個を検出した。全て古代に帰属する遺構と考えられ、合わせて平安時代と推定される。1号竪穴住居跡より一定量の土器を得られたが、これらは9世紀後半を中心とすることが窺え、合わせて十和田a火山灰との関係から同テフラ降下時期より古い。次に、1号焼土遺構と3・4・5号土坑について、その配置関係からは鍛冶に関連した作業が行われていた可能性が導かれる。

本遺跡における平安時代の集落域について、1号竪穴住居跡は南北方向に走る現道直下に続くことが把握できるが、この内容から拡大解釈するならば、本遺跡の平安時代集落の西端は今回の調査区よりさらに西に広がる可能性も考えられる。

② 調査区北部では、竪穴住居跡1棟、土坑7基、溝跡7条、柱穴状土坑91個を検出した。全て古代の遺構である。特記事項としては、突出して大形の溝跡である5号溝跡と6号溝跡と、炭窯と考えられる13号土坑の検出が挙げられる。5号溝跡と6号溝跡は、長軸方向はほぼ同じ（南一北）で、何れも十和田a火山灰が埋土中に認められる。十和田a火山灰の堆積様相としては両者ともに自然堆積であるが、5号溝跡は崖断の埋土中位に堆積するのに対して、6号溝跡は埋土上位に水平気味に堆積することで相違が看取される。この堆積の違いは、若干の時期差を反映していることも考えられる。これら大形の溝跡の性格については、平面的な連續性を把握できないことから不明と言わざるおえないが、区画などを意図した溝跡ではなく、水路的な用途の可能性が高いと推定しておきたい。炭窯と推定される13号土坑は、埋土中より多量の炭化材と、土器片と鉄滓が出土している。

本遺跡における平安時代の集落域について、5号竪穴住居跡の検出からは、本遺跡の平安時代集落は、今回の調査区よりさらに北に広がる可能性も考えられる。

③ 調査区中央部では、堅穴住居跡3棟、堅穴状遺構1基、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、溝跡7条、焼土遺構1基、陥し穴状遺構1基、柱穴状土坑105個を検出した。古代以外の時期の遺構として、縄文時代の陥し穴状遺構、中世と推定される12号溝跡、近代～現代の16号溝跡、現代と推定される17号溝跡を検出した。特記事項としては、土坑がセット関係にある1号掘立柱建物跡や屋外カマドと考えられる2号焼土遺構の検出が挙げられる。

本遺跡における平安時代の集落域について、6・7・8号堅穴住居跡の検出から、本遺跡における平安時代の集落域の南端付近である可能性も窺える。

④ 調査区東部では、堅穴住居跡1棟、土坑1基、溝跡6条、陥し穴状遺構1基、柱穴状土坑57個を検出した。古代以外の遺構としては、調査区中央部から続く近代～現代の16号溝跡がある。

本遺跡における平安時代の集落域について、3号堅穴住居跡を検出したことから、本遺跡における平安時代の集落域の東端は、本調査区にまで確実に広がることが分かった。しかしながら、本調査区は全体的に遺構密度が低く、特に北東端付近は皆無に近い状況にある。このことから、本遺跡において平安の集落域は、東には大きく広がらないことも推定できようか。また、縄文時代の陥し穴状遺構については、本調査区と調査区中央部から各1基検出している状況からは、この周辺が当時の狩猟場であったと理解できよう。

#### (5) 全体の総括と課題など

今回の調査の結果、本遺跡は縄文時代には狩り場、平安時代には集落として営まれた場であることがわかった。また、断片的な状況ではあるものの、中世～現代の溝跡が検出された。

① 縄文時代の狩り場については、調査区中央部～東部において、溝状の形状を呈する陥し穴状遺構を検出した。胆沢区の過去の調査事例では、このような陥し穴状遺構は中位段丘を中心に発見例が多い現状にあり、低位段丘にある本遺跡にまで縄文時代の狩猟場が広がることがわかったことは評価できよう。

② 平安時代の集落については、出土した土師器・須恵器の年代や十和田a火山灰のあり方から、9世紀後半を中心に10世紀前半までの時間幅で捉えられよう。その集落範囲は、今回の調査成果から300m四方以上に広がる可能性が考えられる。具体的には、今回の調査で用いた大グリッドでA I・A II・B I・B II・B III・B IV区に相当する範囲が集落域と捉えられ、また集落の中心は今回の調査地の内側付近と想定される。

最後に、今回の調査における課題などについて、③～⑥の内容を指摘しておきたい。

③ 陥し穴状遺構の時期について、今回検出された溝状の形態を呈する陥し穴は過去の調査事例から縄文時代と推定されるが、土器などの出土遺物がなく詳細な時期は掴めない。また、調査区範囲にも関連して、分布に関わる内容についても言及が難しい。

④ 堅穴住居跡の床下から土坑が顕著に発見されたが、これらは何のために作られたのか。今回の調査で見つかった炭窯や焼土遺構の存在から仮説を述べるなら、遺跡内で鉄に関する作業が行われていたことが考えられようか。また、床下土坑が見つかる堅穴住居跡についても、居住のためだけの住居ではなく、鉄に関する工房も兼ねていた可能性を視野に入れる必要があると思われる。作屋敷遺跡から南に1kmの距離にある小十文字遺跡では、野鐵治遺構と報告されている鉄の工房跡が見つかっていることから（※この遺構からは十和田a火山灰も確認されている）、本地域には鍛冶の技術を持った工人が存在したことは想像に難くなく、今後の調査事例の増加に期待する。

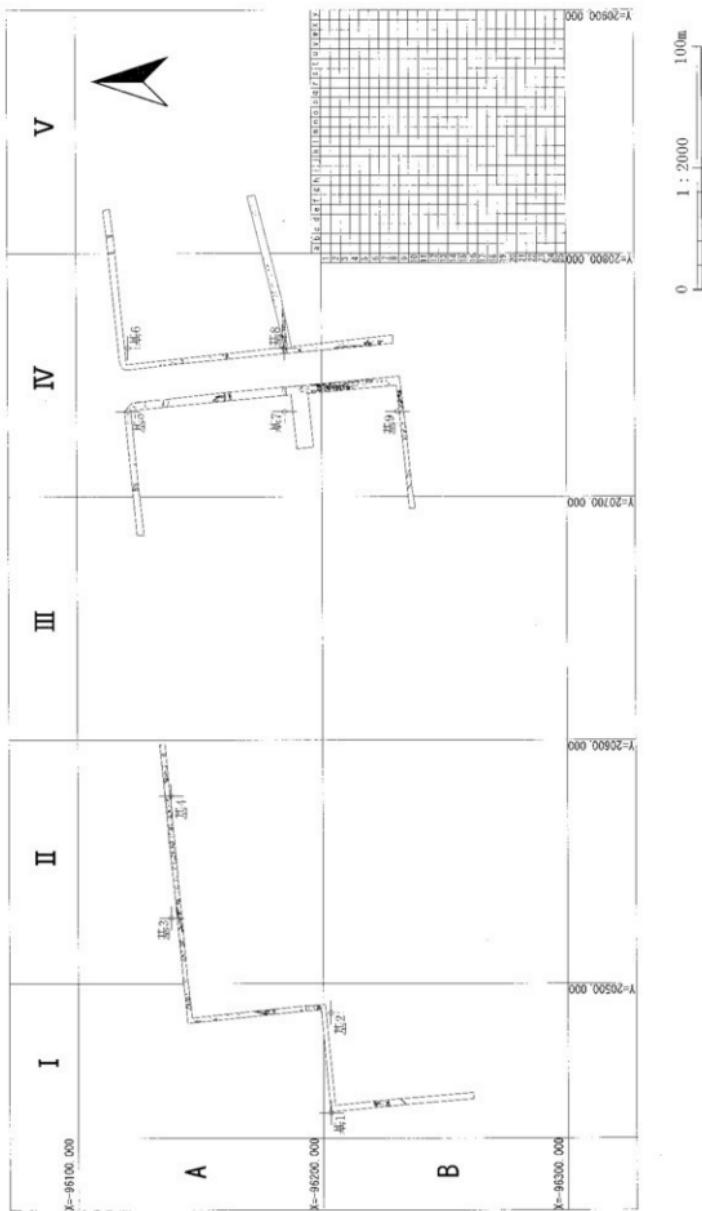
- ⑤ 集落の生産に関わる内容が今回の調査からは不明にある。具体的には、750mにわたり調査したにも関わらず、当時の水田や畠（畝間状造構などを含め）などの生産遺構が未発見にある。水の供給の在り方など、様々な侧面から検討を行う必要があると考えられる。
- ⑥ 5号土坑出土の炭化材について、放射性炭素年代測定を実施したが、14C年代は $1,200 \pm 30$ yrBP、曆年較正年代（ $\pm 1\sigma$ ）は、687~781AD (60.8%)・791~806AD (7.4%)という結果が得られた。この5号土坑は、各所で上述したとおり、鍛冶に関する遺構の可能性が考えられる。年代測定で得られた年代は古墳時代～平安時代前半で、出土土器とは整合しない。

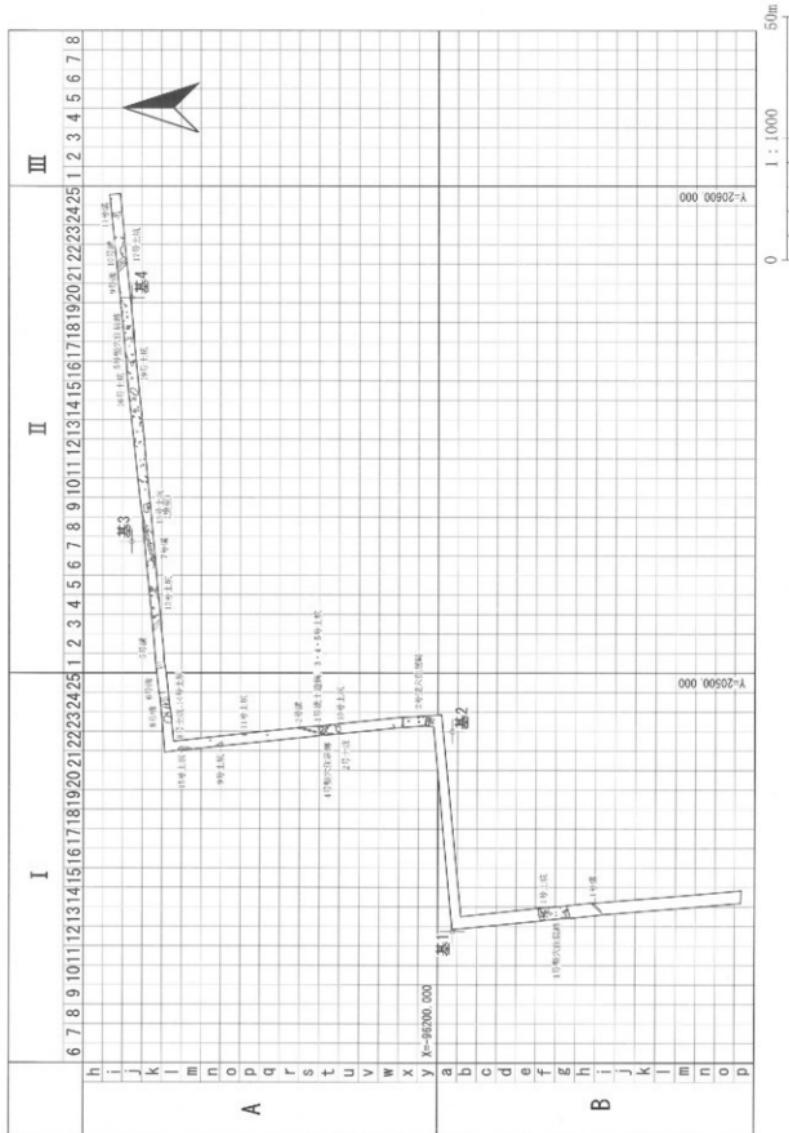
## IV・V・VI参考・引用文献

(※IIと重複するものは割愛した)

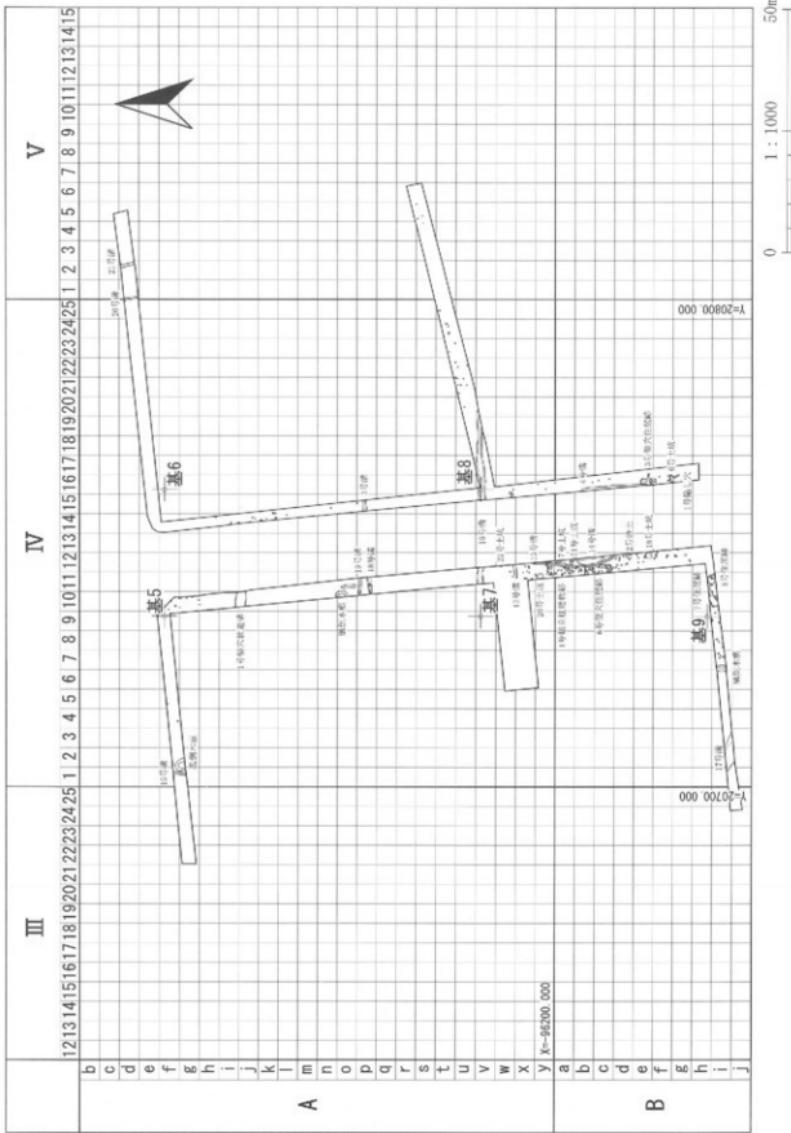
## 【市町村史・論文・報告書・研究会発表資料など】

- 白鳥 良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
- 伊藤 博幸ほか 1981 「内光田遺跡」水沢市文化財報告書第5集水沢市教育委員会
- 伊藤 博幸・佐久間 賢ほか 1981 「伊那城—昭和55年度発掘調査概報」水沢市教育委員会
- 八木 光則 1993 「古代斯波郡と爾童体の土器模相」『第18回古代城壁官衙遺跡検討会 特集シンポジウム 北日本における律令期の上器模相』古代城壁官衙遺跡検討会
- 村田 晃・ 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号
- 高橋 千晶 2004 「胆沢城と蝦夷社会」『古代蝦夷と律令国家』奥羽史研究叢書7 蝦夷研究会
- 村田 淳 2004 「岩手県内出土の縄釉陶器—出土事例の集成と若干の検討」『岩手考古学』第16号 岩手考古学会
- 伊藤 博幸 2006 「陸奥型窯・山形型窯・北夷型窯」『吉岡康輔先生古希記念論集 陶磁器の社会史』同刊行会
- 岩手県教育委員会 2008 『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成18年度）』岩手県文化財調査報告書第126集
- 村田 淳 2009 「近臣」『岩手考古学』第20号岩手考古学会設立20周年記念岩手考古学・回顧と展望 岩手考古学会
- 【(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター報告書など(発刊年順)】(※岩手文第0集と表記する)
- 西澤 正晴ほか 2005 『西川日・津向・道跡発掘調査報告書』岩手文第464集
- 村上 扱・川又 道 2006 『平成16年度発掘調査報告書』『川浦道跡』岩手文第469集
- 佐藤 淳一・中村 純美 2006 『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩手文第475集
- 戸根 貴之ほか 2007 『宮沢原下遺跡発掘調査報告書』岩手文第495集
- 渕田 宏・吉田 泰治・菊池 昌彦 2008 『山の神遺跡・宮沢原下遺跡第2次発掘調査報告書』岩手文第512集



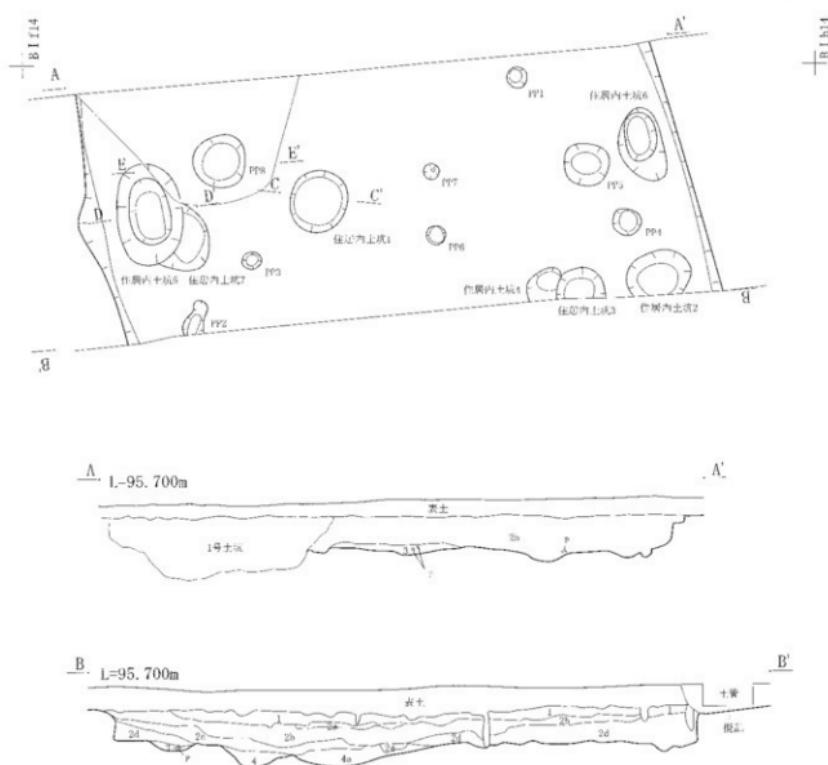


第26図 調査区西部・北部遺構配置図



第27図 調査区中央部・東部遺構配置図

## 1号堅穴住居跡



1号堅穴住居跡A-A'・B-B'

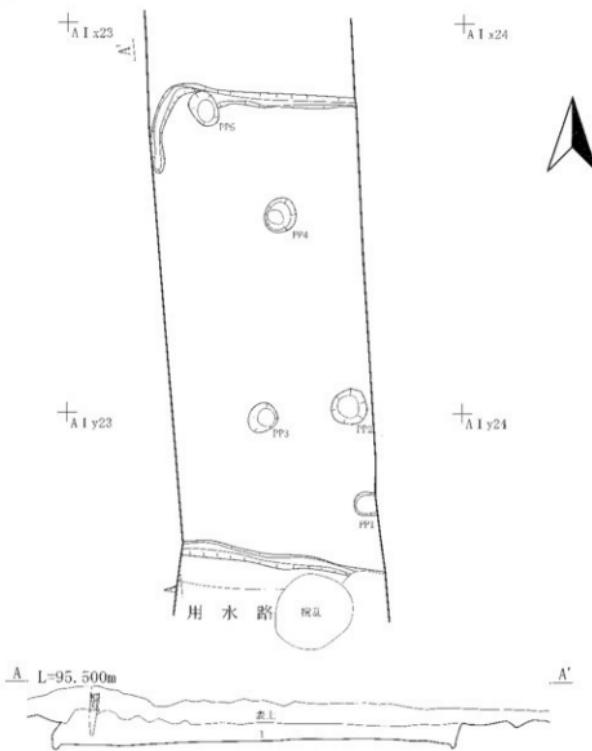
- 1 10H2/2 黄褐色シルト 粘生土 捻まり少 勉化鉄15合む
- 2a 10H3/2 灰黄色砂質土 粘生土 捻まりや少 呈褐色シルトブロック(厚さ10mm)25層入
- 2b 10H3/4 灰褐色シルト 粘生土 粘性やや強 捻まりや少 呈褐色砂質土ブロック(厚さ1~8mm)35層入
- 2c 10H3/3 灰褐色シルト 粘生土 粘性やや強 捻まりや少 呈褐色砂質土ブロック(厚さ1~10mm)55層入
- 2d 10H3/1 灰褐色シルト 粘生土 粘性やや強 捻まりや少 呈褐色砂質土ブロック(厚さ1~10mm)55層入
- 3 10H1/1 黄褐色シルト 粘生土 粘性やや強 捻まり少 勉化鉄25合入
- 4 10H1/2 黄褐色シルト 粘生土 粘性中 捻まりや少 勉化鉄15合入
- 5a 10H4/2 灰褐色砂質土 粘生土 粘性中 捻まりや少 勉化鉄75合む (赤陶器堆積)

0 1 : 50 2m

第28図 1号堅穴住居跡①

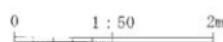


2号豎穴住居跡



2号竖穴住居跡 A-A'

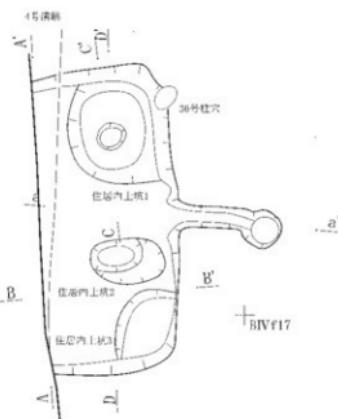
- 1 10TB2/3 黄褐色シルト質粘土 和性中 疊まりやや密  
黄褐色粘土ブロック(1~80mm)洗・炭化物5%・堿土3%混入



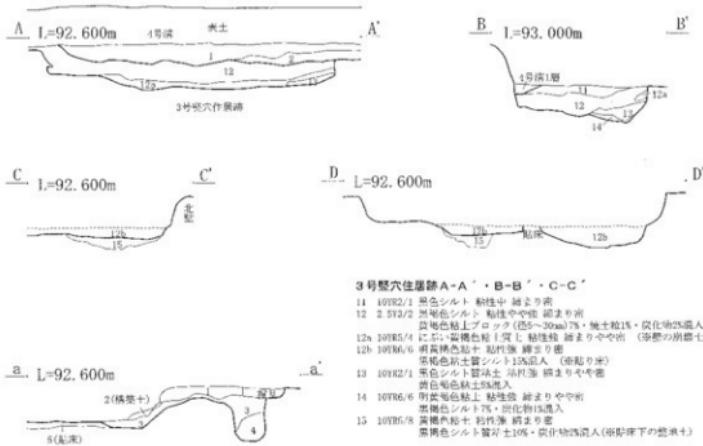
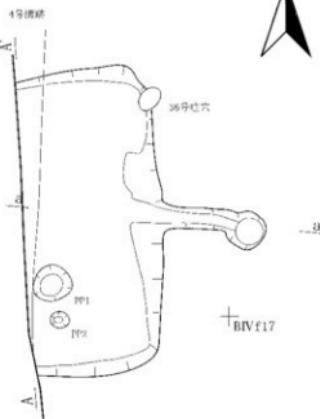
第29図 1号竪穴住居跡②、2号竪穴住居跡

## 3号豎穴住居跡

&lt;古段階&gt;



&lt;新段階&gt;



## 3号豎穴住居跡 A-A'・B-B'・C-C'

- 11 10VR2/1 黄褐色シルト 粘性中・硬より柔
- 12 2.5V12/2 黄褐色シルト 粘性やや硬 硬より柔
- 12a 10VR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック (厚5-30mm) 硬 土粒25%混入
- 12b 10VR6/6 黄褐色粘土 ブロック (厚5-10mm) 硬より柔 硬より柔
- 13 10VR6/1 黄褐色シルト 粘性中・硬より柔
- 14 10VR6/6 黄褐色粘土 粘性強 硬よりやや柔
- 14 10VR6/6 黄褐色粘土 粘性強 硬よりやや柔
- 15 10VR4/6 黄褐色粘土 粘性強 硬より柔
- 15 10VR4/6 黄褐色シルト 粘性強 硬より柔

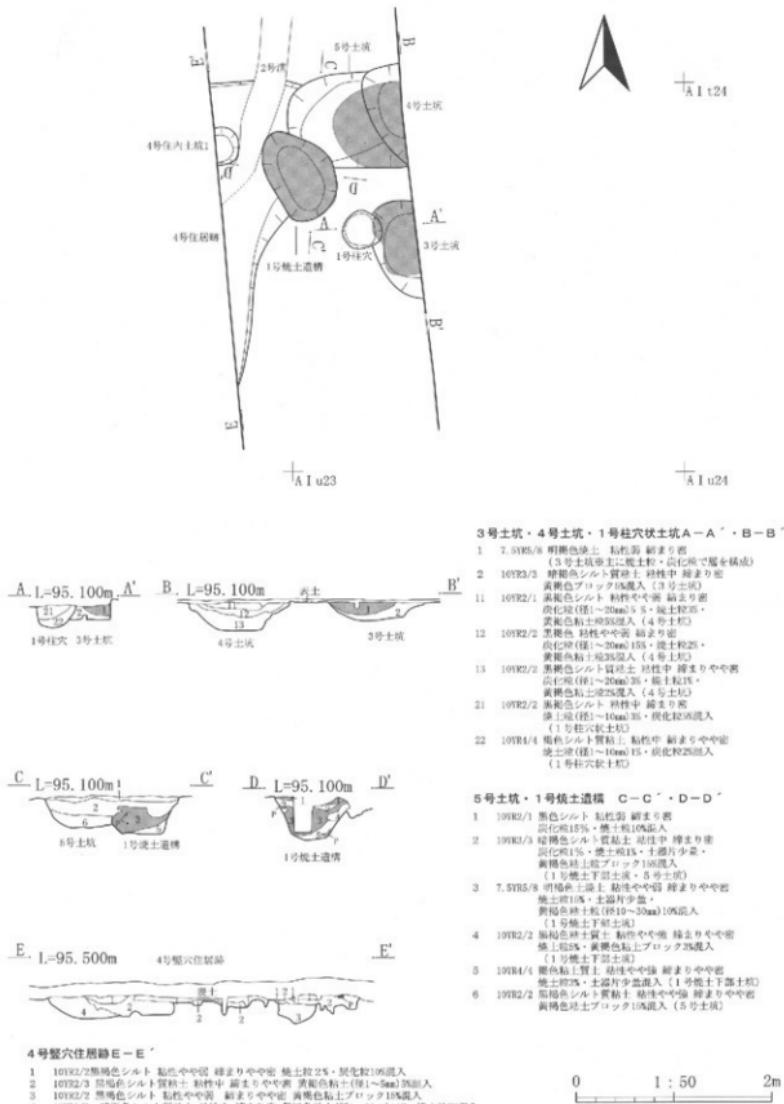
## 3号豎穴住居跡カマド a-a'

- 1 10VR3/3 黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 硬より柔  
にぶい黄褐色粘土20%混入 (赤カマド大井構造上)
- 2 10VR5/4 にぶい黄褐色粘土 粘性強 硬よりやや柔  
黄褐色粘土10%
- 3 10VR2/2 黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 硬より中  
黄褐色粘土10%・炭化物1%・灰土15%混入
- 4 10VR2/3 黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 硬よりやや柔
- 5 10VR4/6 硅化粘土質シルト 粘性強 硬より柔  
黄褐色シルト20%混入 (赤カマド)

0 1:50 2m

第30図 3号豎穴住居跡

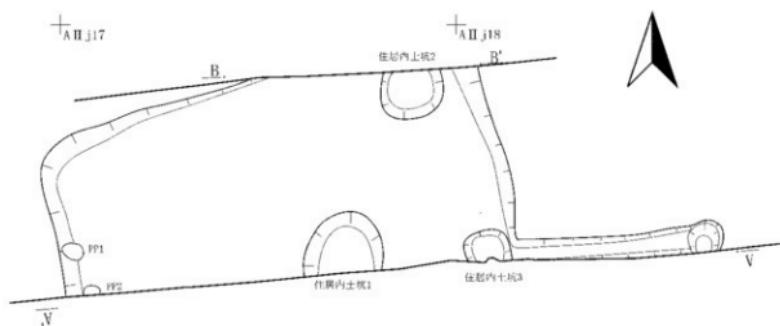
4号竪穴住居跡、3・4・5号土坑、1号焼土遺構



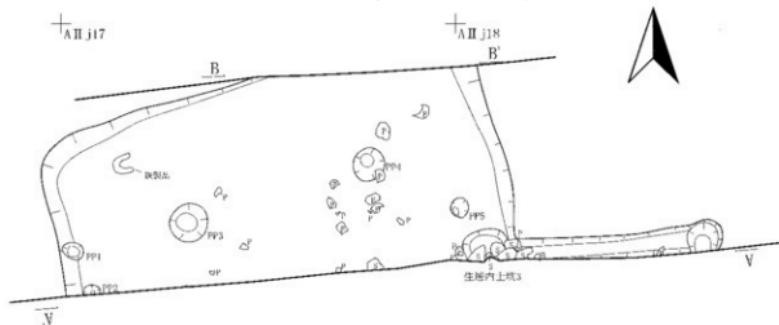
第31図 4号竪穴住居跡、3～5号土坑、1号焼土遺構

## 5号竪穴住居跡

&lt;古段階&gt;

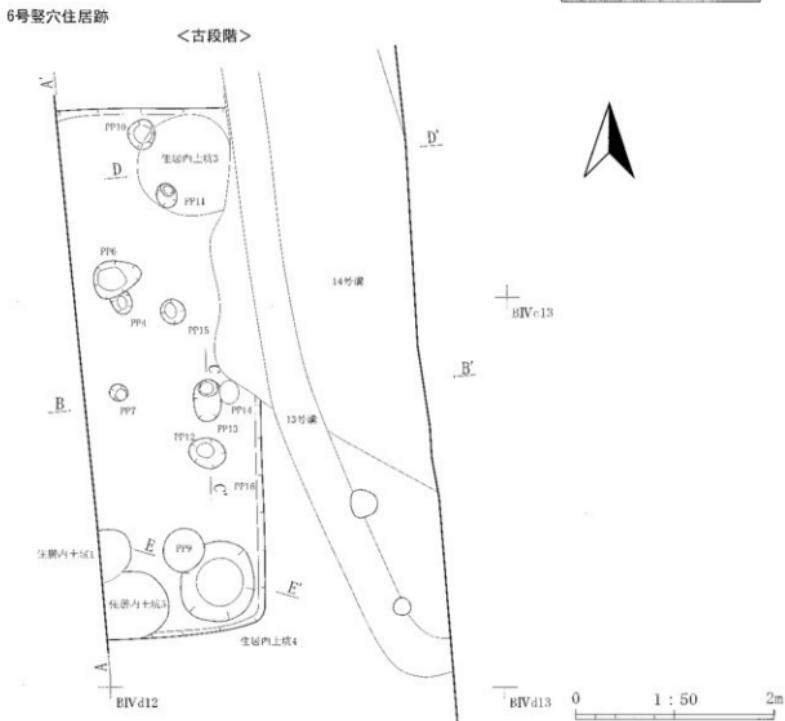
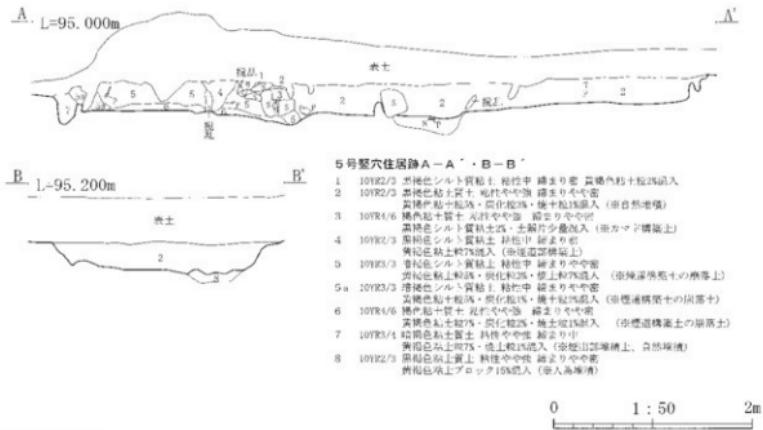
+  
AII k17+  
AII k18

&lt;新段階&gt;

+  
AII k17+  
AII k18

0 1 : 50 2m

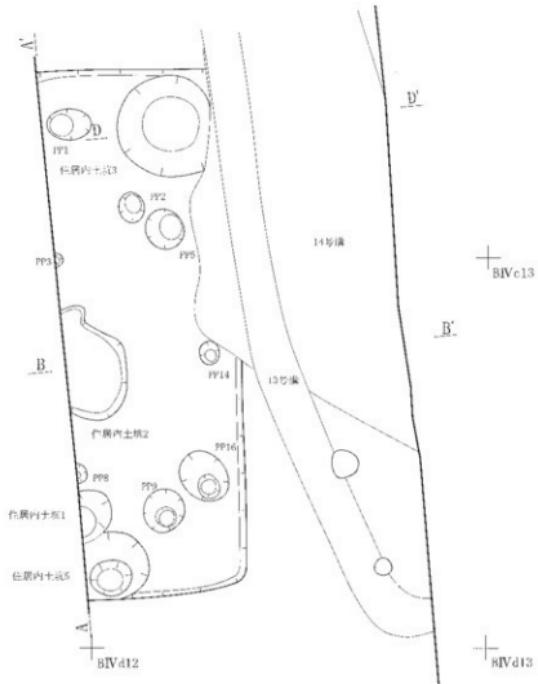
第32図 5号竪穴住居跡①



第33図 5号竪穴住居跡②、6号竪穴住居跡①

## 6号堅穴住居跡

&lt;新段階&gt;



A- L=93.200m

A'



B- L=93.200m

B'



## 6号堅穴住跡 A-A'・B-B'

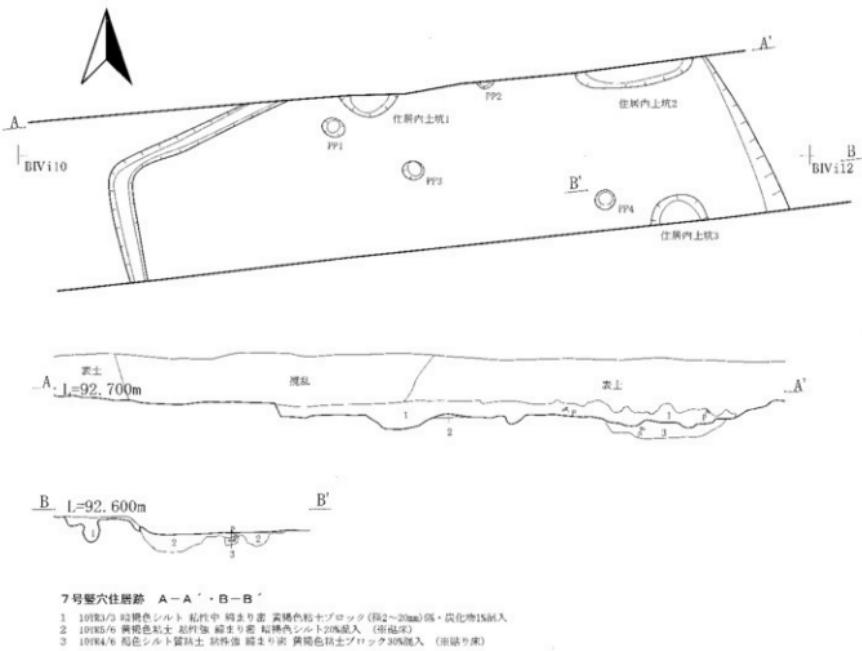
- 1 7.5m2/1 黒褐色シルト 粘性やや強 輪まりなし T=0.15m厚(6号の壁上、自然堆積)
- 1a 10m2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 輪まりやや強 (6号のPP3の壁上)
- 1b 10m2/4 黑褐色土 粘性やや強 輪まりやや強
- 1c 10m2/3 黑褐色シルト 粘性やや強 輪まりやや強 黒褐色粘土ブロック20%混入 (6号の底下)
- 2 10m2/2 黑褐色シルト質粘土 粘性やや強 輪まりやや強 黑褐色ブロック15%混入 (6号の底下)
- 2 a 10m2/3 黑褐色シルト質粘土 粘性やや強 輪まりやや強 黑褐色ブロック15%混入 (6号の底下)
- 3 10m2/3 4 黑褐色シルト質粘土 粘性やや強 輪まりやや強 黑褐色ブロック25%混入 (6号の底下)
- 4 10m2/2 黑褐色シルト質粘土 粘性やや強 輪まりやや強 黑褐色粘土ブロック10%混入 (6号の底下)

0 1 : 50 2m

第34図 6号堅穴住居跡②

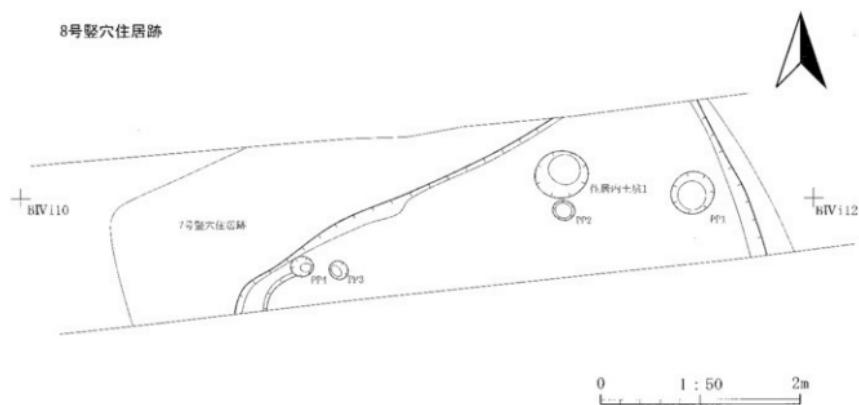


#### 7号竖穴住居跡

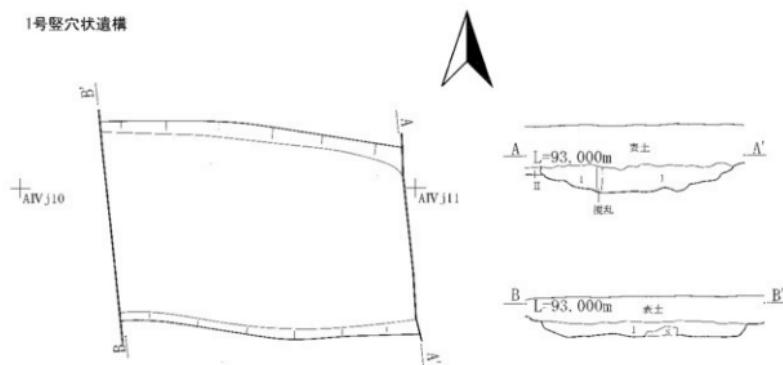


第35図 6号竖穴住居跡③、7号竖穴住居跡

8号竪穴住居跡



1号竪穴状遺構



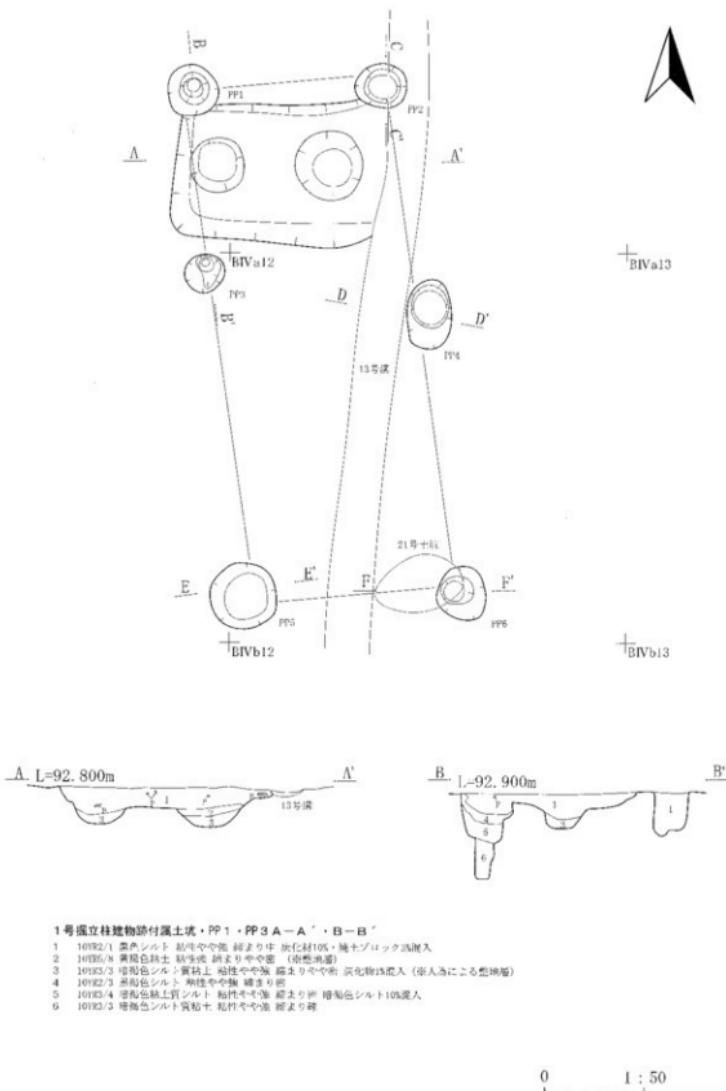
1号竪穴状遺構 A-A'

I 10YR2/2 黑褐色シルト 粘性やや強 硬生りやや密 黄褐色粘土10%混入

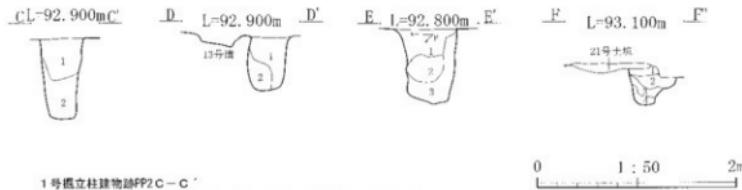
0 1:50 2m

第36図 8号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構

1号掘立柱建物跡



第37図 1号掘立柱建物跡①



## 1号掘立柱建物跡PP2 C-C'

- 1 10Y2/2 黄褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強 腐化物1%混入
- 2 10Y2/3 黄褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強 黄褐色粘土10%混入

## 1号掘立柱建物跡PP4 D-D'

- 1 10Y2/2 黄褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強 腐化物15%混入
- 2 10Y3/3 嫩褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強 黄褐色粘土10%混入

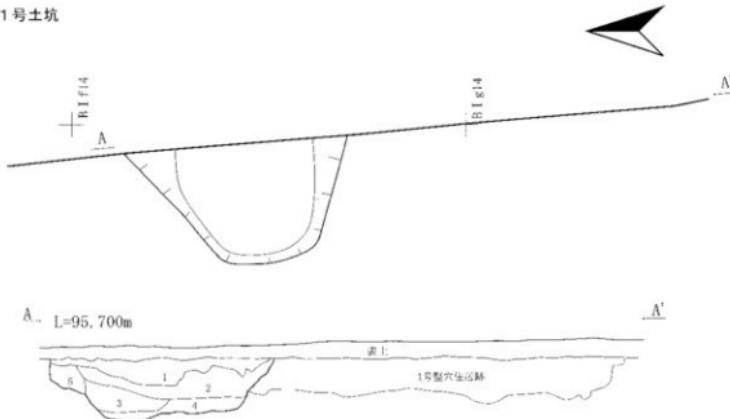
## 1号掘立柱建物跡PP5 E-E'

- 1 10Y2/2 黄褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強 腐化物5%、炭化物1%ブロック(高5cmほど)5%混入
  - 2 10Y1/1 黄褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強
  - 3 10Y3/2 嫩褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強 黄褐色粘土20%混入
- 中段に粘土杭があり、2層がアクリ、3層が撲え方土

## 1号掘立柱建物跡PP6 F-F'

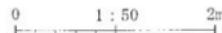
- 1 10Y3/4 嫩褐色シルト 粘性少 硬さりやや強 黄褐色粘土ブロック1%、粘土ブロック25%混入 (中入点埋積)
- 2 10Y3/3 嫩褐色シルト 粘性少 硬さりやや強 黄褐色粘土ブロック5%混入
- 3 10Y5/6 黄褐色粘土 粘性強 硬さりやや強 嫩褐色シルト10%混入
- 4 10Y2/2 黄褐色シルト 粘性やや強 硬さりや

1号土坑



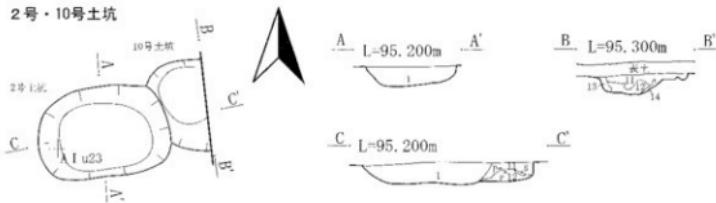
## 1号土坑A-A'

- 1 10Y2/2 黄褐色シルト 粘性やや強 硬さりやや強 黄褐色粘土ブロック(厚2~10cm)25%混入 (中入点埋積)
- 2 10Y2/2 黄褐色シルト 粘性少 硬さりやや強 黄褐色粘土ブロック(厚5~15cm)30%混入 (中入点埋積)
- 3 10Y1/1 黄褐色シルト 粘性少 硬さりやや強 黄褐色粘土ブロック(厚5~20cm)35%混入 (中入点埋積)
- 4 10Y2/1 黄褐色粘土上質土 粘性強 硬さりや 中 黄褐色粘土20%混入
- 5 10Y4/6 黄褐色粘土 粘性強 硬さりや 黄褐色シルト10%混入



第38図 1号掘立柱建物跡②、1号土坑

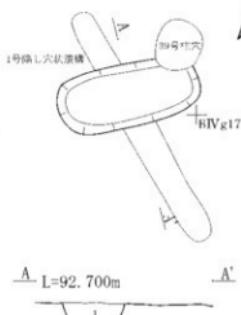
2号・10号土坑



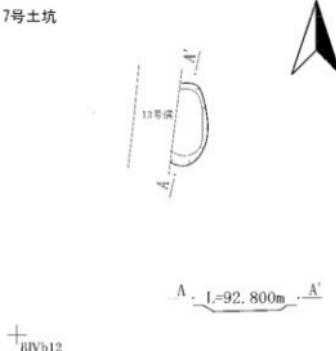
2号土坑・10号土坑 A-A'・B-B'・C-C'

- 1 10V2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 距よりやや深 滅褪色灰土ブロック (径5~10mm) 10%混入
- 11 10V2/1 黑褐色シルト 粘性やや強 距より浅 明黄色粘土上部 (径1~10mm) 35%混入
- 12 10V3/2 黑褐色シルト 粘性やや強 距より浅 明黄色粘土上部下 (径1~10mm) 10%、赤褐色灰土 7%混入 (草摺地層)
- 13 10V3/4 黑褐色シルト質粘土 粘性やや強 距より深 黑褐色シルト 7%混入
- 14 10V2/1 黑褐色シルト 粘性やや強 距より浅 黑褐色粘土粒 (径1~10mm) 35%混入

6号土坑



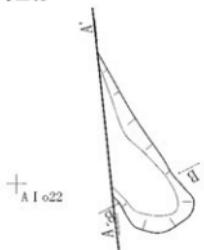
7号土坑



+ BIVb12

- 6号土坑 A-A'
- 1 10V2/2 黑褐色シルト 粘性やや強 距よりやや深 黑褐色粘土ブロック 35%混入

9号土坑



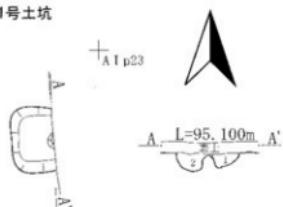
9号土坑 A-A'・B-B'

- 1 10V2/3 黑褐色シルト質粘土 粘性少 距よりやや深 黑褐色粘土粒 (径1~3mm) 35%混入

0 1 : 50 2m

第39図 2・6・7・9・10号土坑

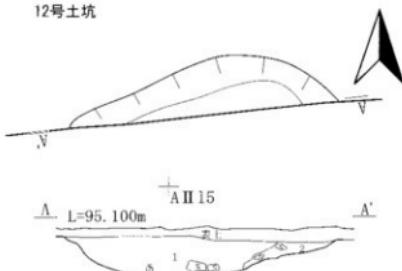
11号土坑



11号土坑 A-A'

- 1 10YR2/3 黒褐色シルト 黏性中 線まり密 露褐色粘土粒3%混入  
2 10YR5/8 黄褐色シルト 黏性やや弱 線まり密 (空堆山か?)

12号土坑



12号土坑 A-A'

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト 黏性やや強 線まり密  
黄褐色粘土10%混入  
2 10YR3/4 黃褐色砂質土 黏性弱 線まりやや強

13号土坑（炭窯）

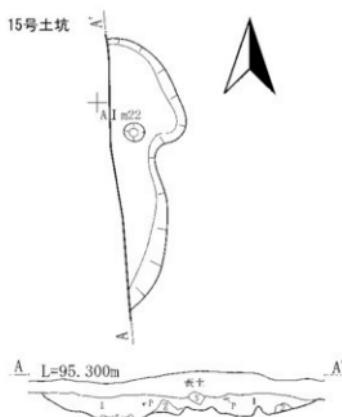


+A II k10

13号土坑（炭窯） A-A'

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト 黏性やや強 線まりやや強  
黄土2%、炭化物5%混入  
2 5YR8/8 明褐色粘土 粘性やや強 線まり中  
炭化物10%混入  
2a 10YR2/3 黑褐色シルト 黏性やや強 線まりやや密  
粘土20%、炭化物18%混入  
3 10YR2/2 黑褐色シルト 黏性やや強 線まりやや強  
粘土25%混入  
4 10YR4/5 黑褐色粘性シルト 黏性やや強 線まり中  
粘土3%、黄褐色粘土ブロック10%、黒褐色シルト10%混入

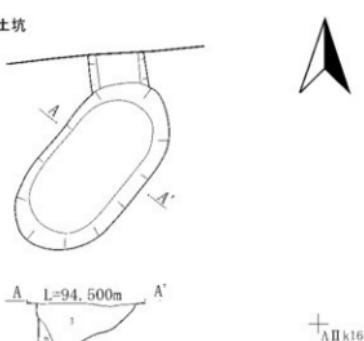
15号土坑



15号土坑 A-A'

- 1 10YR2/3 黑褐色シルト 黏性やや強 線まりやや密  
粘土15%、黄褐色粘土ブロック7%混入  
2 10YR5/8 黄褐色粘土質土 黏性強 線まり密 黑褐色シルト10%混入

16号土坑



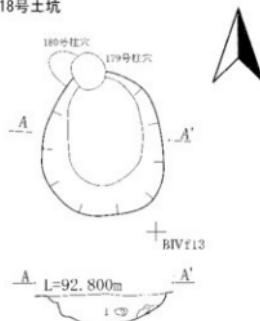
16号土坑 A-A'

- 1 10YR2/1 黑褐色粘土質土 黏性やや強 線まりやや密  
黄褐色粘土15%、酸化鉄2%混入  
2 10YR6/8 黄褐色粘土質土 黏性強 線まりやや密  
黑褐色粘土質土質土ブロック5%、酸化鉄3%混入

0 1 : 50 2m

第40図 11~13・15・16号土坑

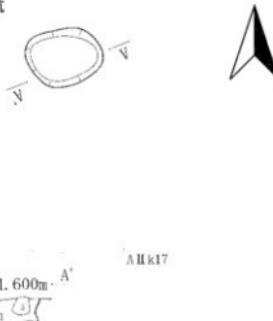
18号土坑



18号土坑A-A'

- 1 10F2/1 黒色シルト 粘性やや強 線まり中 鹿化物15%混入  
2 10F2/6 黄褐色土 粘性強 線まり重 黃褐色シルト10%混入

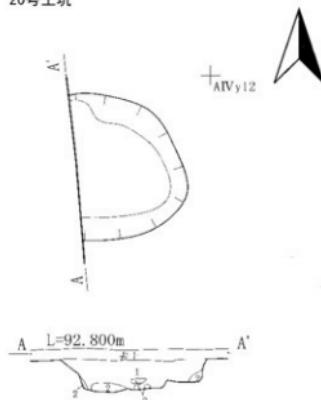
19号土坑



19号土坑A-A'

- 1 10F2/2 黄褐色シルト質粘土 粘性中 線まりやや重  
黄褐色粘土15%・炭化粧15%混入

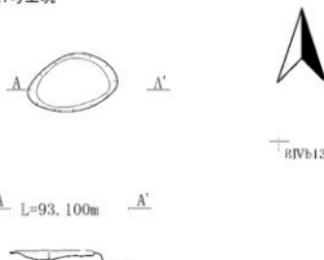
20号土坑



20号土坑A-A'

- 1 10F2/1 黑褐色分土質シルト 粘性やや薄 線まりやや密  
2 10F2/4 黄褐色土 粘性強 線まりやや密  
黄褐色粘土質シルト5%混入

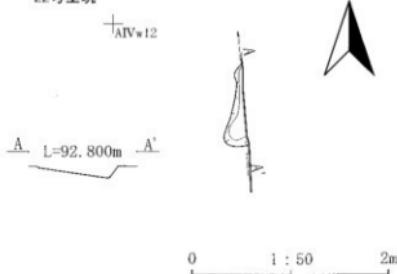
21号土坑



21号土坑A-A'

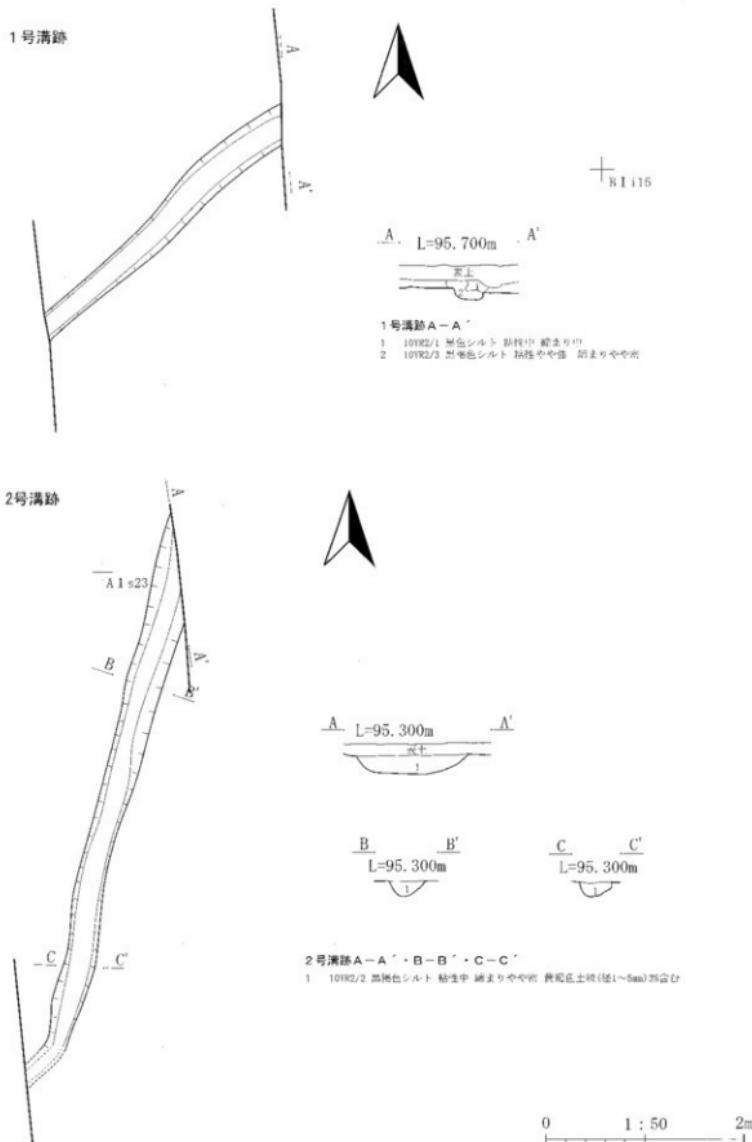
- 1 10F3/1 黄褐色シルト 肥性中 線まり中  
黄褐色粘土ブロック5%・施土5%・鹿化物5%混入(東北系)

22号土坑

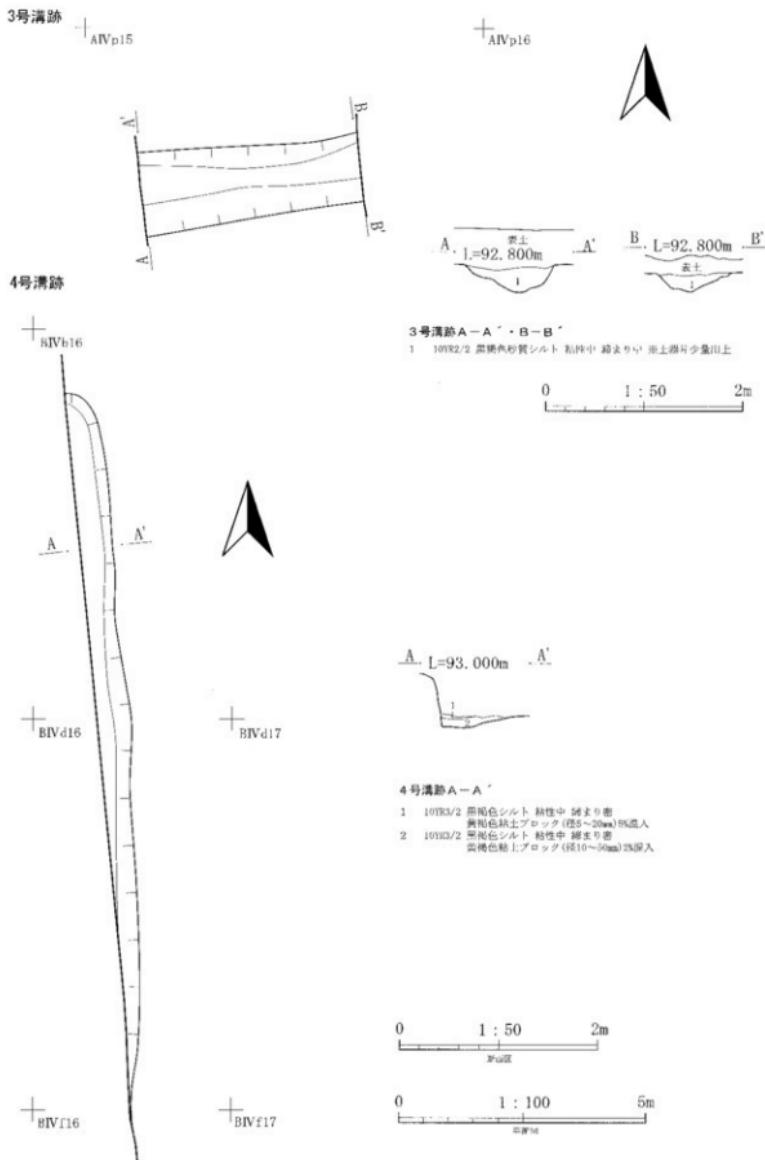


0 1 : 50 2m

第41図 18~22号土坑

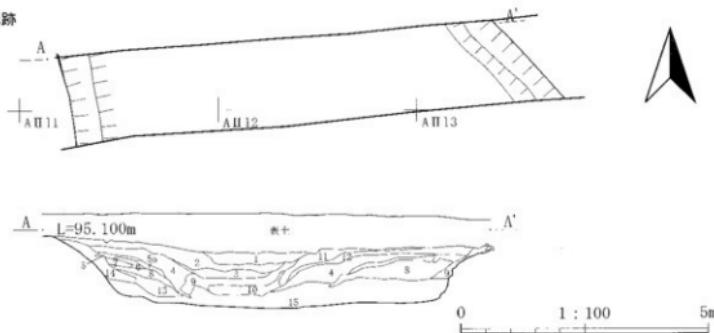


第42図 1・2号溝跡



第43図 3・4号溝跡

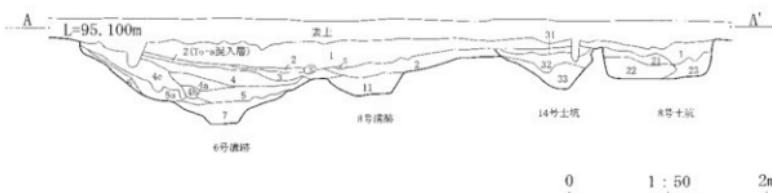
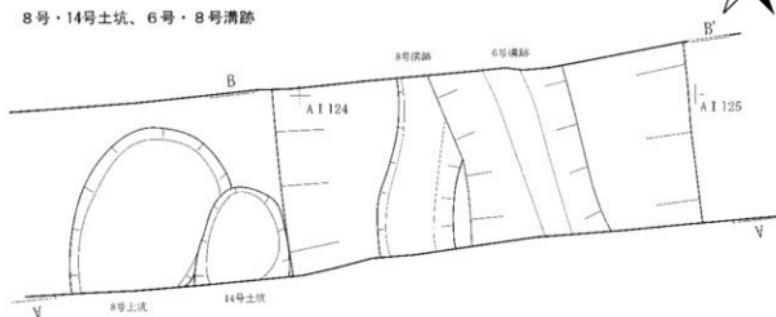
## 5号溝跡



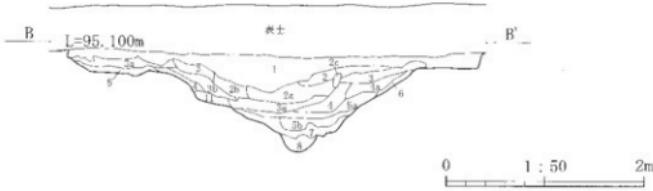
## 5号溝跡 A-A'

- 1 10782/2 黄褐色シルト 粘性やや強 細まり中
- 2 10781/1 黄褐色粘土質質上 粘性やや強 細生中に混入 黄褐色砂質上15% 黄褐色粘土ブロック(径10~50mm) 10% 鉛化鉄の集積15%混入
- 3 10782/3 黄褐色粘土質上シルト 粘性やや強 細まりやや密 黄褐色砂質上10%混入
- 4 10781/2 黄褐色砂質粘土 粘性やや強 細まりやや密
- 5 10785/3 に5-1 黄褐色砂質粘土 粘生やや強 細まりやや密
- 6 10785/3 に5-2 黄褐色砂質粘土 粘性やや強 細まりやや密
- 7 10784/3 に5-3 黄褐色砂質粘土 粘性やや強 細まりやや密
- 8 10787/2-7 に5-4 黄褐色シルト 粘性やや強 細まりやや強 (赤バウダ-状のTo-a)
- 9 10781/1 黃褐色粘土質質上 粘性やや強 細まりやや強 黄褐色土層10%混入
- 10 10784/2 黄褐色砂質粘土 粘性弱 細まりやや強 黄褐色土層状に7%混入
- 11 10785/2 黄褐色砂質粘土 粘性中 細まりやや強
- 12 10784/2 黄褐色砂質粘土 粘性やや強 細まりやや強
- 13 10781/1 黄褐色砂質粘土質質上 粘性やや強 細まりやや強 (赤バウダ-状のTo-a)ブロック2%混入
- 14 10781/7/1 黄褐色粘土質質上 粘性やや強 細まり中 (赤バウダ-状のTo-a) (細部に細裂する)
- 15 10785/2 黄褐色砂質粘土 粘性中 細まり中

## 8号・14号土坑、6号・8号溝跡



第44図 5号溝跡、8・14号土坑①、6・8号溝跡①

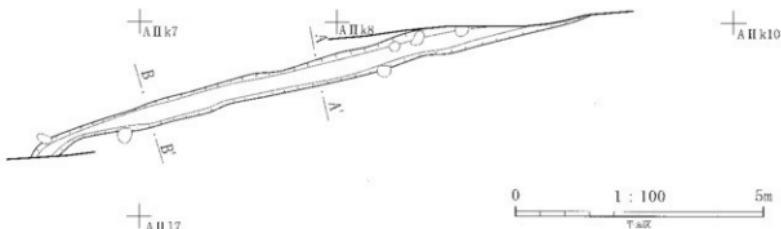


#### 6号土坑・14号土坑・6号溝跡・B号溝跡 A-A'・B-B'

- 1 1012/2 黄褐色シルト・粘性やや強 線生りやや弱
- 2 1014/4 極位粘土シルト・粘性中 線生り中 にぶい黄褐色 To-a10cm深入
- 2a 1018/6/2 反対側地質層 黏性やや強 線生りやや弱 Te-a15cm上 黄褐色シルト粘土0.5m深入
- 2b 1018/6/3 にぶい黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強 To-a15cm深入
- 2c 1018/6/2 反対側地質層 黏性やや強 線生りやや強 Te-a15cm深入
- 3 1017/6/1 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強
- 3a 1017/6/1 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強
- 3b 1017/6/1 にぶい黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強
- 4 1018/4/4 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強 にぶい黄褐色砂質土0.5m深入
- 4a 1018/4/4 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強
- 4b 1018/3/4 黄褐色粘土質土 黏性やや強 線生り中 (波状やや強っぽり)
- 4c 1018/3/4 黄褐色粘土質土 黏性やや強 線生り中
- 5 1018/5/2 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強 (AII溝跡とした8号溝跡堆土上に類似する)
- 5a 1018/5/2 にぶい黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強
- 5b 1018/5/2 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強
- 6 1018/6/2 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生りやや強
- 7 1012/2 黄褐色粘土質土 黏性やや強 線生り中 黄褐色糸上0.5m深入
- 8 1018/5/8 黄褐色粘土 黏性強 線生りやや強 にぶい黄褐色砂質土0.5m深入
- 11 1018/6/2 黄褐色砂質土 黏性強 線生りやや強 (AII溝跡堆土)
- 21 1018/3/1 黄褐色砂質土 黏性やや強 線生り中 (AII溝跡堆土)
- 23 1018/1/1 黄褐色シルト 黏性やや強 線生り中 (AII溝跡堆土)
- 31 1018/3/1 黄褐色シルト 黏性やや強 線生りやや強 (AII溝跡堆土)
- 32 1018/2/1 黄褐色粘土質土 黏性強 線生りやや強 線生り中 (AII溝跡堆土)
- 33 1018/4/6 黄褐色粘土質土 黏性強 線生りやや強 線生りシルト状深入 (AII溝跡堆土)

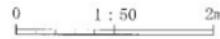


#### 7号溝跡



#### A-L=94, 900m A'-A'

#### B-L=94, 900m B'-B'

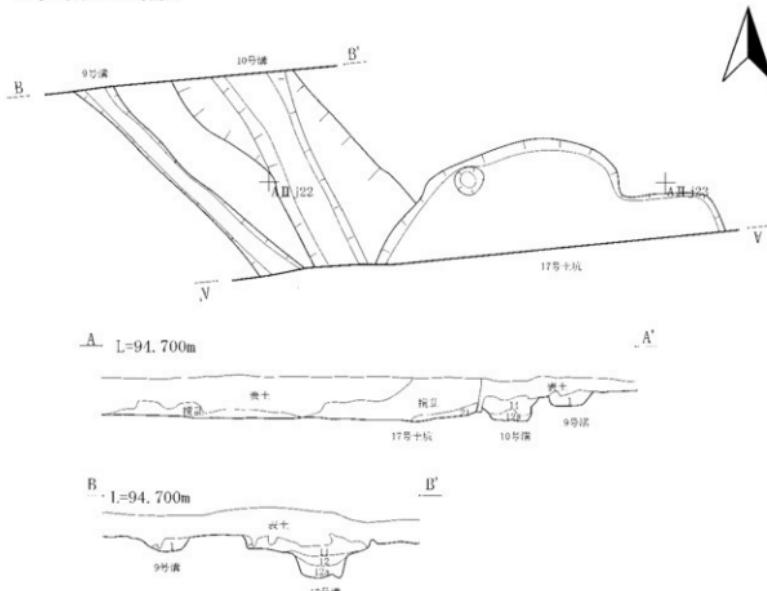


#### 7号溝跡 A-A'・B-B'

- 1 1018/3/2 黄褐色シルト質粘土 黏性やや強 線生りやや弱 黄褐色糸上約25cm深入

第45図 8・14号土坑(②)、6・8号溝跡(②)、7号溝跡

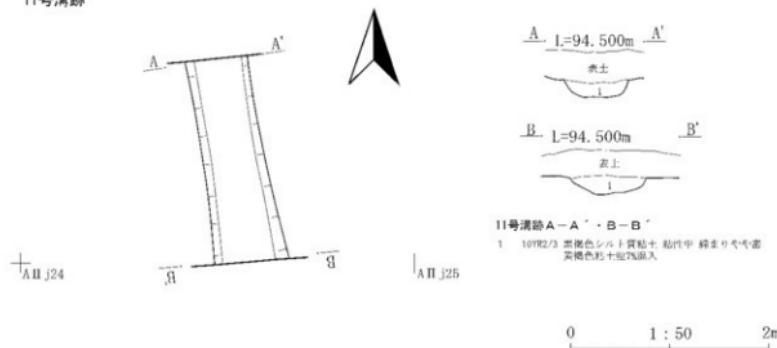
### 17号土坑、9·10号溝跡



- 17号土坑・9号溝跡・10号溝跡A-A'・B-B'

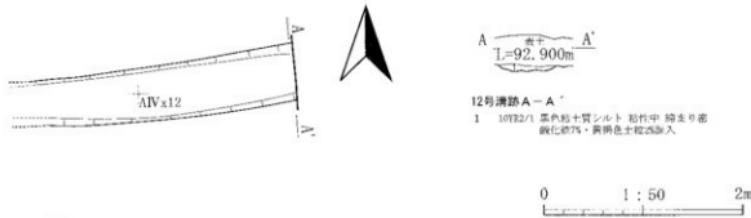
  - 1 10Y38/2 黒褐色シルト質粘土・粘土中 線彫り土器 葉筋陶軸粘土瓶罈(9号房)
  - 2 10Y22/2 黒褐色シルト質粘土・粘土中 線彫りや文様 黃褐色陶軸粘土瓶罈(10号房)
  - 3 10Y22/2 黑褐色土質粘土・粘土中 線彫り土器 黄褐色陶軸粘土瓶罈(10号房)
  - 4 10Y22/3 黑褐色土質粘土・粘土中 線彫り土器 黄褐色陶軸粘土瓶罈(10号房)
  - 5 10Y22/1 黑褐色土質粘土・粘土中 線彫り土器 黄褐色陶軸粘土瓶罈(10号房)

11号溝跡

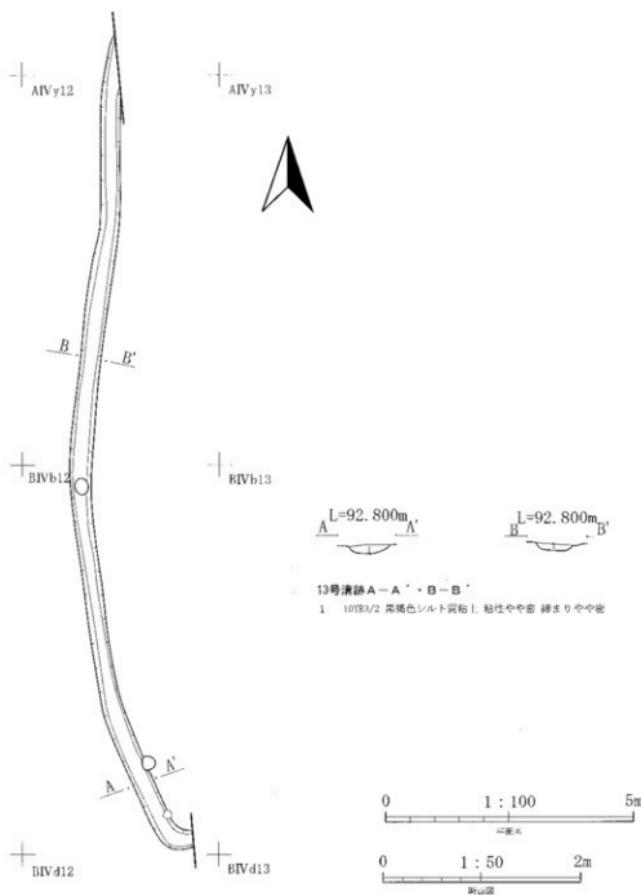


第46図 17号土坑、9~11号溝跡

12号溝跡

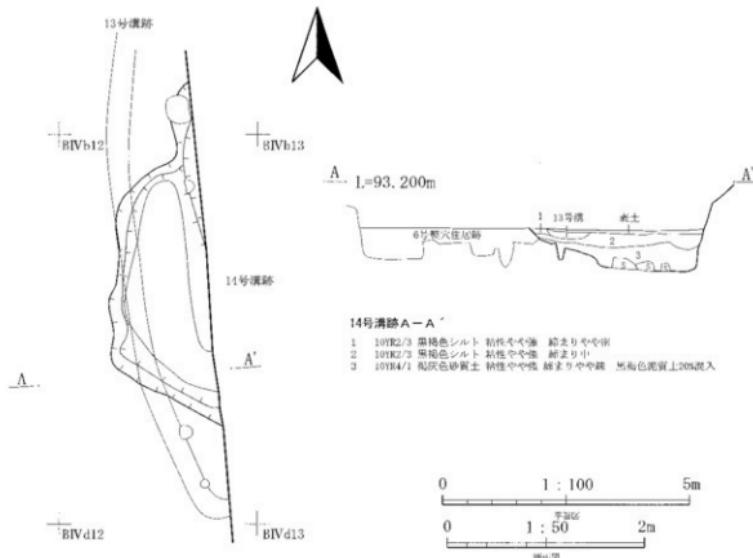


13号溝跡

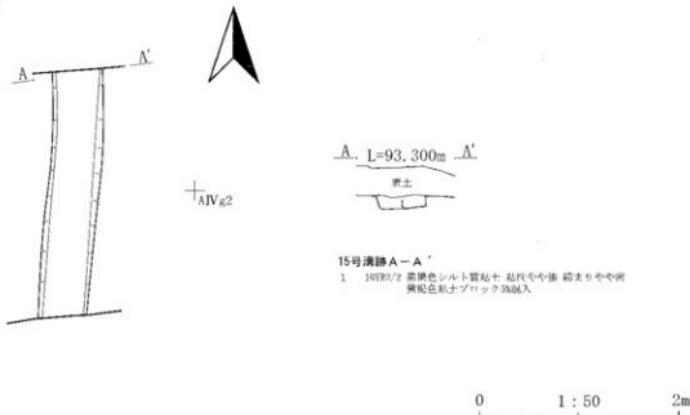


第47図 12・13号溝跡

## 14号溝跡

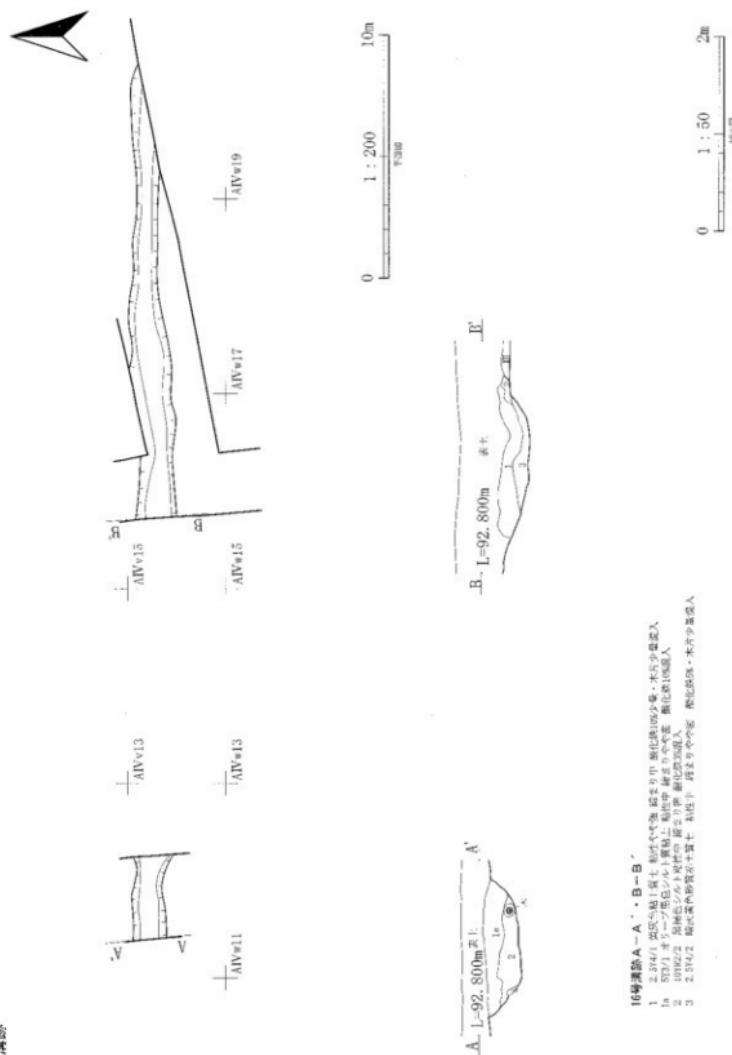


## 15号溝跡



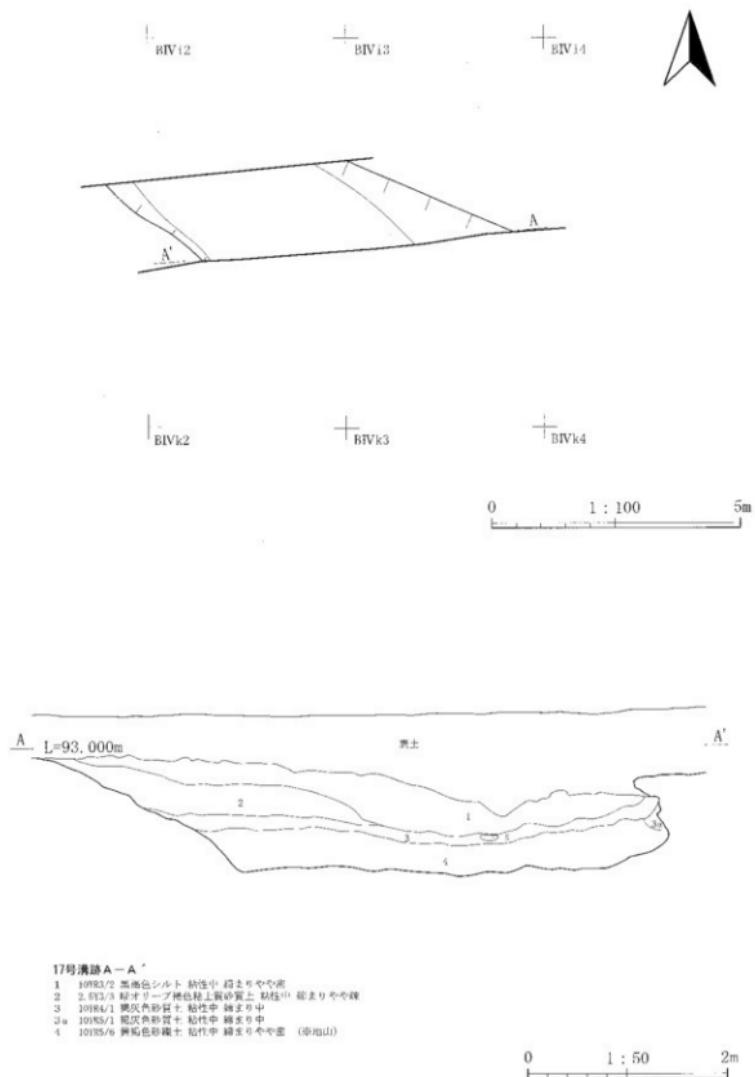
第48図 14・15号溝跡

16号溝跡

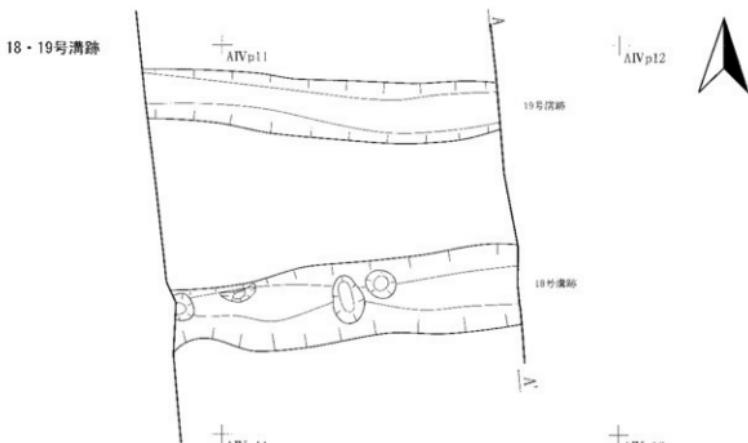


第49図 16号溝跡

## 17号溝跡



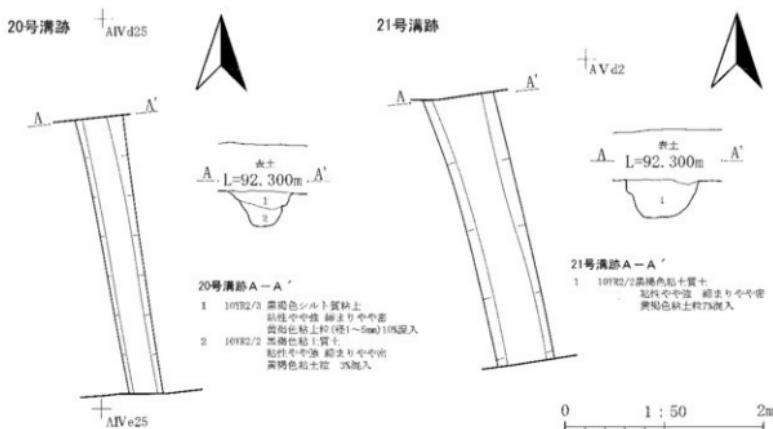
第50図 17号溝跡



18号溝跡・19号溝跡 A-A'

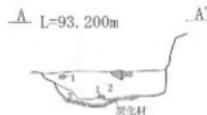
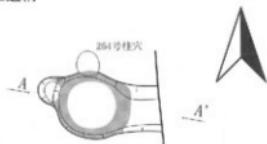
1 10YR2/3 黒褐色砂質粘土質土 粘性中 脳えり少 鹽化物2%混入 (18号溝)

II 10YY2/1 黑褐色粘土質土 粘性やや強 脳まりやや密 黃褐色粘土ブロック5%混入 (19号溝)



第51図 18～21号溝跡

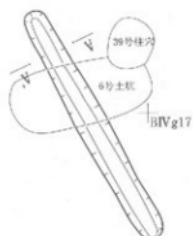
## 2号焼土遺構



## 2号焼土遺構 A-A'

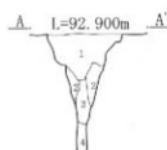
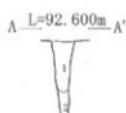
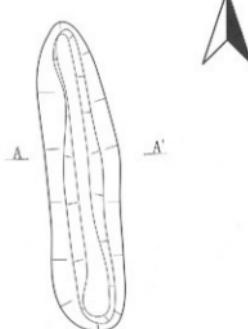
- 1 10786/7 黒褐色地土 粘性やや強 硬まり薄
- 2 10782/3 暗褐色シルト 粘性やや強 硬まり薄  
黄褐色粘土30%混入  
(注入水温で合わせて急激的な塑性変形と思われる)
- 3 BYR6/8 亦褐色地土 粘性やや強 硬まりやや薄

## 1号陥し穴状遺構



## 2号陥し穴状遺構

+ AlVp11



## 1号陥し穴 A-A'

- 1 10782/1 黒色シルト 粘性中 硬まりやや薄
- 2 10782/8 黄褐色粘土 粘性強 硬まりやや薄

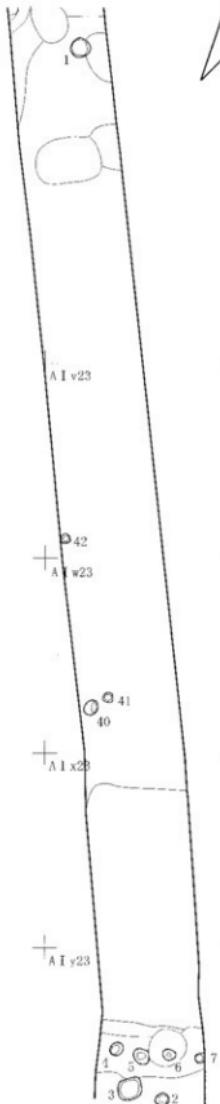
## 2号陥し穴 A-A'

- 1 10782/1 黒色シルト 粘性中 硬まり薄
- 2 10782/6 黄褐色粘土 粘性やや強 硬まり薄 (地山堅度強)
- 3 10782/1 黒色シルト 粘性中 硬まり薄 黄褐色粘土30%混入
- 4 10786/6 黄褐色粘土 粘性やや強 硬まり薄 (地山堅度強)

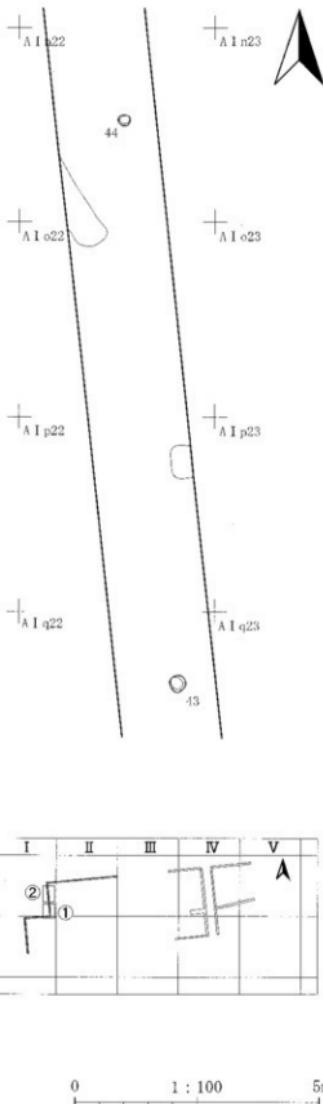
0 1 : 50 2m

第52図 2号焼土遺構、1・2号陥し穴状遺構

西部柱穴群①

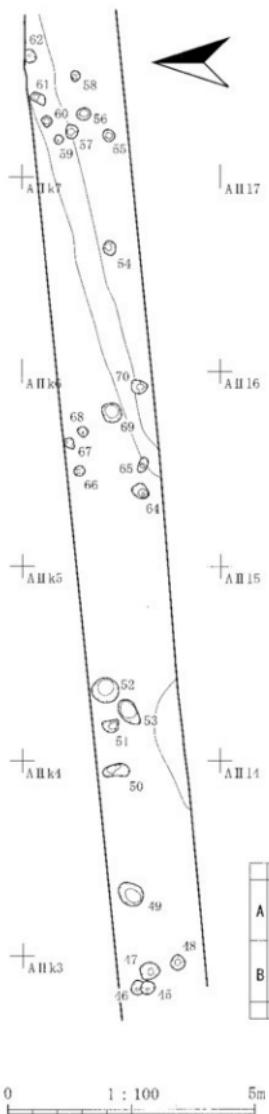


西部柱穴群②

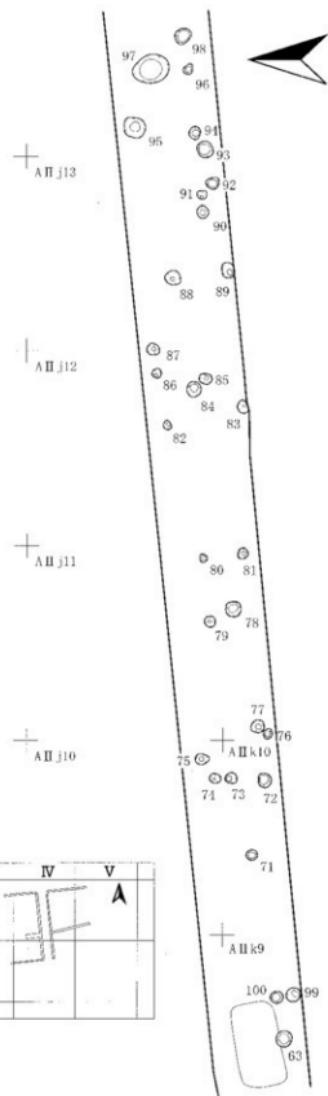


第53図 調査区西部柱穴群①・②

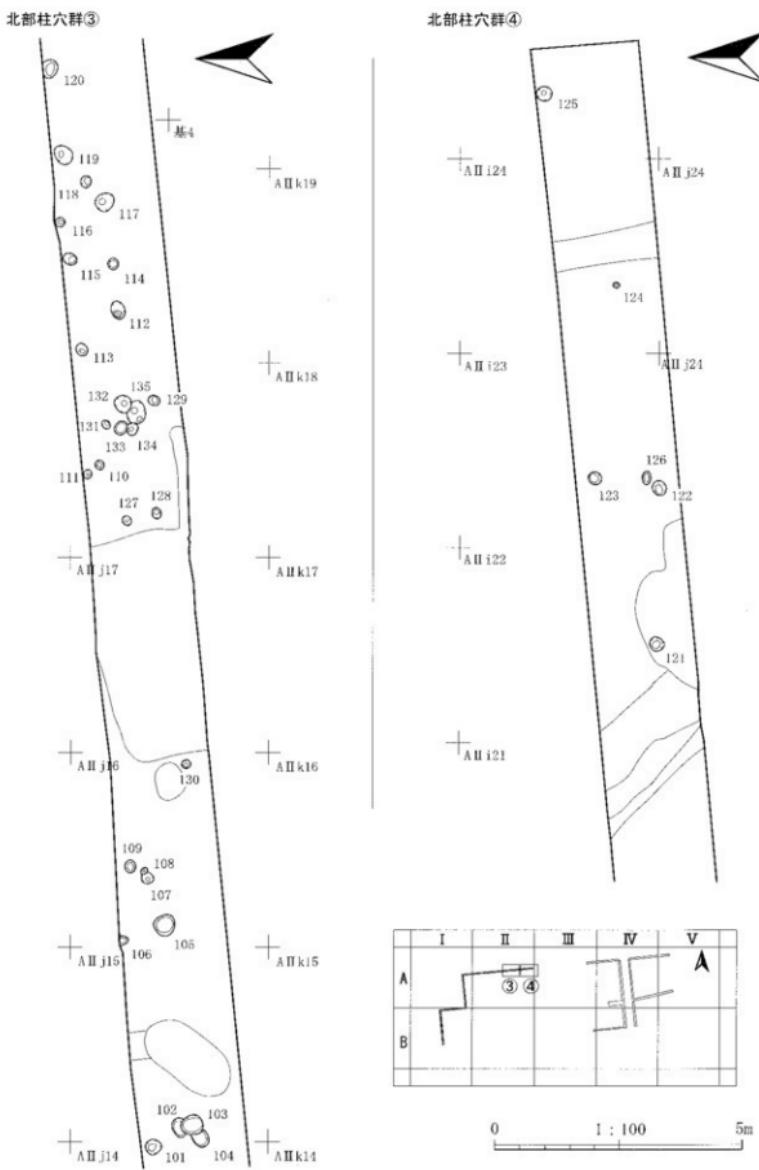
北部柱穴群①



北部柱穴群②



第54図 調査区北部柱穴群①・②

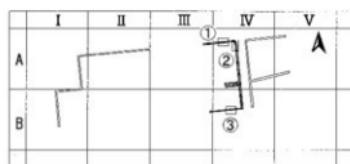
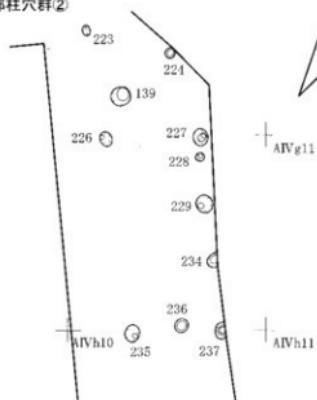


第55図 調査区北部柱穴群③・④

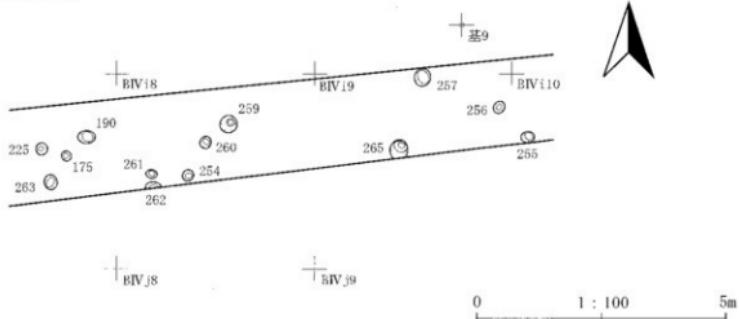
## 中央部柱穴群①



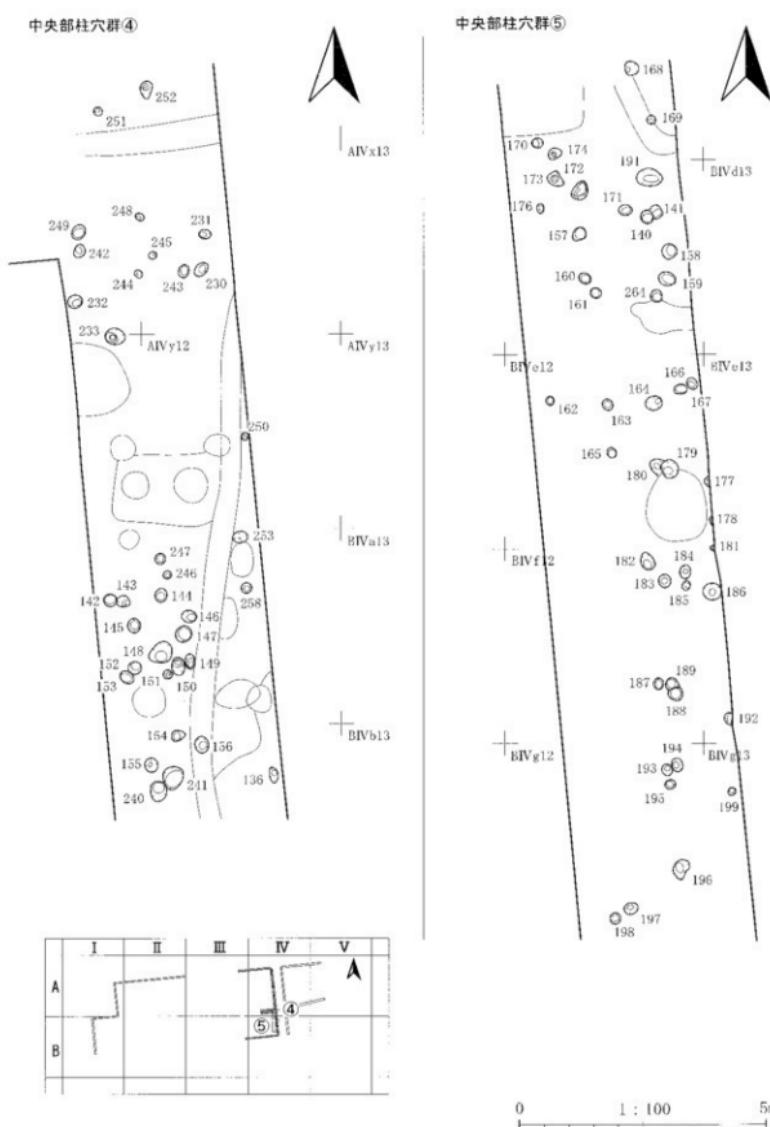
## 中央部柱穴群②



## 中央部柱穴群③

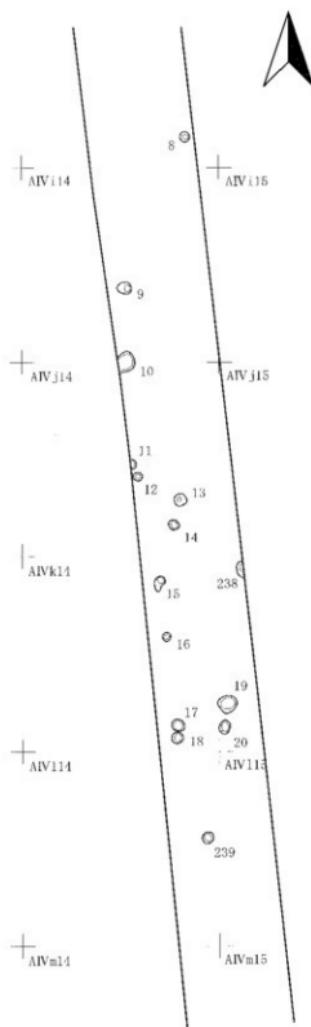


第56図 調査区中央部柱穴群①・②・③

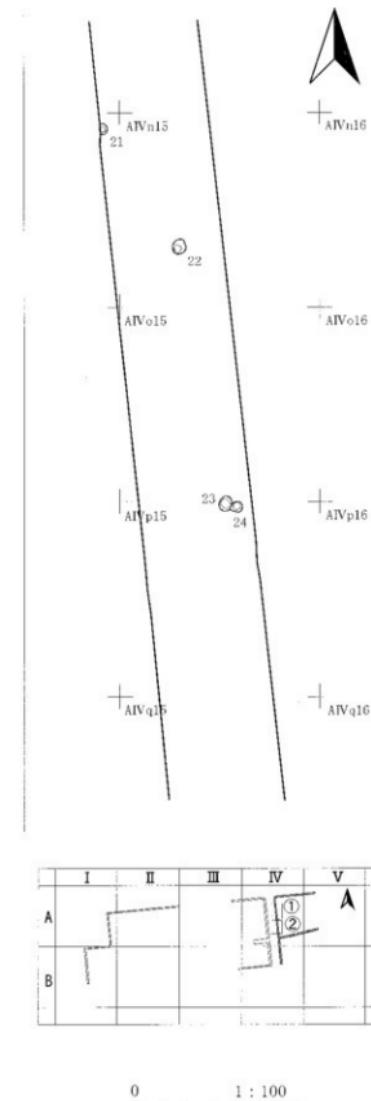


第57図 調査区中央部柱穴群④・⑤

東部柱穴群①

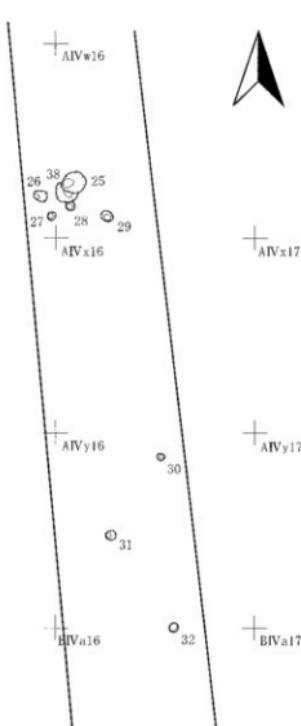


東部柱穴群②

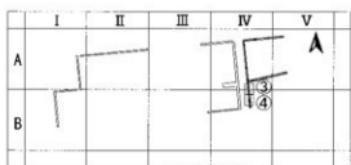
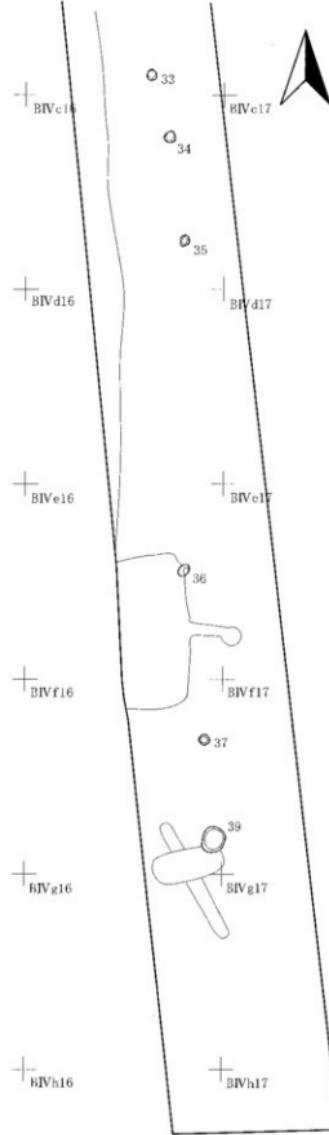


第58図 調査区東部柱穴群①・②

東部柱穴群③

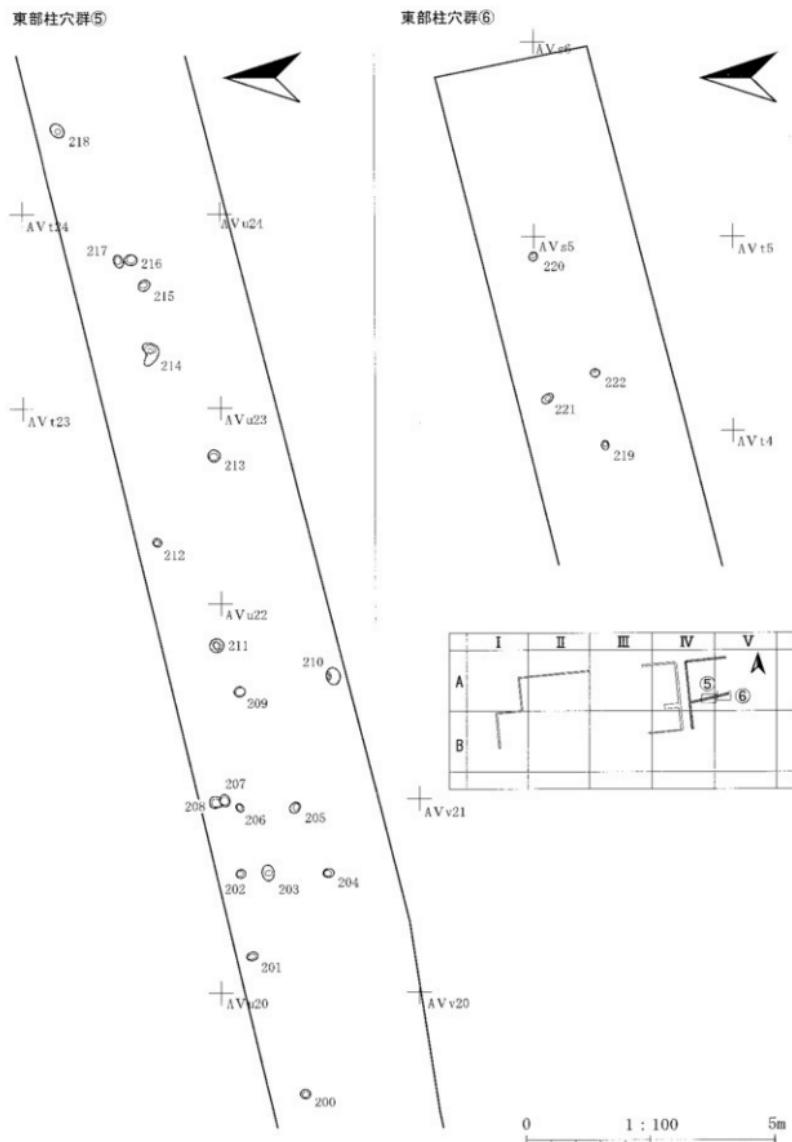


東部柱穴群④



0 1 : 100 5m

第59図 調査区東部柱穴群③・④



第60図 調査区東部柱穴群⑤・⑥

第17表 整穴住跡観察表

回数 番号	場所 番号	遺構名	時 期	位 置	グリッド	規 模 (m)	壁 高 (cm)	埋 土 の 堆積状況	カマド	柱穴数 (個)	付属施設	備 考・その他
29・30	14	1号整穴住跡跡	9~10世紀	西 部	B1v13	6.0	30	自然	一	8	土坑7	1号土坑に切られる、十和田a火山灰
30	15	2号整穴住跡跡	9世紀後半~ 10世紀	西 部	A1x23	4.9	15	自然	5	壁溝1	純住居	
31	16・17	3号整穴住跡跡	9世紀後半~ 10世紀前半	東 部	BIVe16	3.1	35	自然 東壁溝	2	土坑3	1号溝に切られる	
32	17	4号整穴住跡跡	9世紀後半~ 10世紀前半	西 部	A1x22	不 明	15~22	自然?	1	なし		2号溝、1号土坑上溝、 5号土坑に切られる
33・34	18	5号整穴住跡跡	9世紀後半~ 10世紀前半	北 部	A1v17	4.6	22~28	自然 壁溝	5	上坑3		
34・35・36	19・20	6号整穴住跡跡	9世紀後半~ 10世紀前半	中央部	BIVe11	5.4	10~16	自然 東 壁	16	土坑5	13・14号溝に切られる、 十和田a火山灰	
36	21	7号整穴住跡跡	9世紀後半~ 10世紀	中央部	BIVe10	6.3	10~15	人為? 東壁溝	4	上坑3・壁溝1		
37	22	8号整穴住跡跡	9世紀後半~ 10世紀前半	中央部	BIVe10	5.0±	5~10	人為	4	土坑1・壁溝1		

第18表 整穴状造構観察表

回数 番号	場所 番号	遺 構 名	時 期	位 置	グリッド	平面形	規 模 (長辺) m	壁 高 (m) m	埋 土 の 堆積状況	重複・その他
37	22	1号整穴状造跡	古 代	中央部	AIVe10	長方形	3.0±1.	2.2	12~30	自然

第19表 帯立柱建物跡観察表

回数 番号	場所 番号	遺 構 名	時 期	位 置	グリッド	平面形	規 模 (奥行) m	壁 高 (m) m	埋 土 の 堆積状況	重複・その他
38・39	23・24	1号垂立柱建物跡	9世紀後半~ 10世紀前半	中央部	AVy11	5.3	2.1	6	1坑1	13号溝6、21号土坑に切られる

第20表 土坑観察表

回数 番号	町 号	造 構 名	時 期	位 置	グリッド	平面形	開口部高 (cm)	深 度 (cm)	埋 土 の 堆積状況	付属施設	重複・その他
39	24	1号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	西 部	B1v13	不整円形	225×100	60	自然	なし	1号整穴住跡を切る
40	24・25	2号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	西 部	A1x22	楕円形	365×84	35~40	自然?	なし	10号土坑を切る
42	25	3号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	西 部	A1x23	橢円形	100×?	18	人為	なし	1号整穴住跡に切られる
42	25	4号土坑	9世紀後半~ 10世紀	西 部	A1x23	楕円形	100×?	23	自然?	なし	5号土坑を切る
42	25	5号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	西 部	A1x23	橢円形	92×?	32	人為	なし	4号土坑に切られる
49	26	6号土坑	9世紀後半~ 10世紀	東 部	BIVn12	長楕円形	145×65	16	自然?	なし	1号整穴住跡を切る
40		7号土坑	9世紀後半~ 10世紀	中央部	BIVn12	橢円形	82×?	10	自然?	なし	13号溝6に切られる
45・46	26	8号土坑	9世紀後半~ 10世紀	北 部	A1v25	楕円形	365×1× 140	25	自然?	なし	14号土坑に切られる
40	26	9号土坑	9世紀後半~ 10世紀	西 部	A1v22	長楕円形	200×69	26	自然	なし	
40	24・25	10号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	西 部	A1t23	橢円形?	150×?	30~38	上坑自然?下坑人為	なし	2号土坑に切られる
41	26	11号土坑	古 代	西 部	A1p23	方形基調	65×?	13~17	人為?	なし	
41	26	12号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	北 部	A1h4	不整形	270×?	37	人為?	なし	
41	27	13号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	北 部	A1h3	長方形	172×90	50	自然?	なし	叢業
45・46	27	14号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	北 部	A1v23	橢円形	90×100	12	自然	なし	8号土坑を切る
41	27	15号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	西 部	A1v22	不整形	280×1× 75以上	20~25	自然	なし	
41	28	16号土坑	古 代	北 部	A1v15	長楕円形	200×98	48	自然	過去の 盛り出し	
47	28	17号土坑	六代より新しい	北 部	A1v22	小椭円形	78×7×?	40	人為	なし	10号溝跡を見る。現代?
42	28	18号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	中央部	BIVn12	楕円形	148×100	28	自然	なし	17号柱穴式土坑
42	28	19号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	北 部	A1v15	楕円形	70×55	30	自然	なし	
42	29	20号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	中央部	AVy12	楕円形	145×?	32	自然?	なし	
42	28	21号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	中央部	BIVn12	楕円形	88×54	19	人為	なし	
42	—	22号土坑	9世紀後半~ 10世紀前半	中央部	AVw12	不 明	82	13	不 明	なし	

第21表 清跡窓表

回数 番号	写真 番号	道構名	時期	位置	グリッド	方向	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	地上的 堆積状況	その他
43	29	1号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	西 郡	B1h13	北 略	3.15以上	24～36	20	自然?	
43	29	2号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	西 郡	A1r23	東 南	6以上	30～44	12～18	自然	4号窓穴在路を切る
44	29	3号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	東 郡	ANv15	東～西	不明	70～88	16～25	自然?	
44	30	4号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	東 郡	ANv16	北～南	14	不明	12～25	自然?	3号窓穴在路を切る
45	30	5号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	北 郡	AIIk1	北～南	不明	990	130	自然	1号土塁、2号清跡と重複する。1号段A 大量灰
45・46	31	6号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	北 郡	AIIk24	北～南	不明	430	56	自然	1号土塁、2号清跡と重複する。1号段A 大量灰
46	31	7号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	北 郡	AIIk6	西北	11	15～55	4～6	自然?	8・9・10・11・12・13号窓穴在土塁に切られる
45・46	31	8号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	北 郡	AIIk21	北～南	不明	80	20	自然	
47	31	9号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	北 郡	AIIk1	北～南	2.75以上	18～34	8～12	自然?	
47	31	10号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	北 郡	AIIk1	北～南	不明	100	25	自然?	17号土塁に切られる
47	32	11号清跡	古代	北 郡	AIIk24	南南西	不明	61～75	15	自然?	
48	32	12号清跡	中世～近世	中央部	ANv11	西～東	2.5以上	45～60		自然	6号窓穴在路を切る
48	32	13号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	中央部	ANv12	南～北	不明	30～40		自然	13号清跡に切られ、6号窓穴在路を切る
49	32	14号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	中央部	BNv12	北～南	不明	200		自然?	
49	33	15号清跡	古代	中央部	ANv1	南～北	不明	50		自然?	
50	33	16号清跡	近代～現代	中央部、 東部	ANv11	西～東	25以上	90～200		人為?	
51	33	17号清跡	現代	東部	BNv11	西北	不明	370		自然	
52	34	18号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	中央部	ANv10	西～東	不明	60～85		自然	
52	34	19号清跡	9世紀後半～ 10世紀前半	中央部	ANv10	西～東	不明	46～60		自然	
52	34	20号清跡	古代	東 郡	AIVd4	南～北	不明	30～48		自然	
52	34	21号清跡	古代	東 郡	AVd1	南～北	不明	60～70			

第22表 烟土遺構類表

回数 番号	写真 番号	道構名	時期	位置	グリッド	平面形	地上範囲 (cm)	厚さ (cm)	地上的 堆積	備考
32	25・35	1号煙土遺構	9世紀後半～ 10世紀前半	西 郡	A1r23	楕円形	92×54	5	現地性、やや良好	4号窓穴在路を切る
53	35	2号煙土遺構	古代	中央部	BNv112	ドーナツ 状	75×62	10	現地性、非常に良好	364号段A 大量灰に切られる

第23表 跪伏状遺構類表

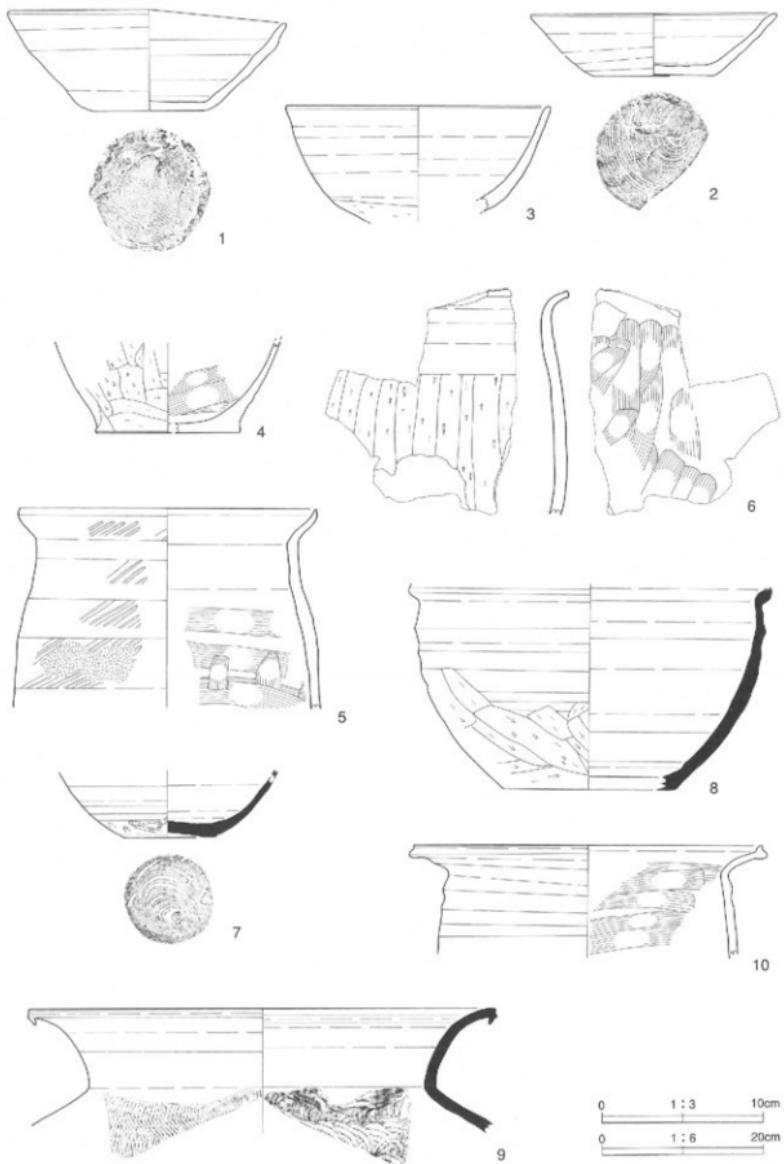
回数 番号	写真 番号	道構名	時期	位置	グリッド	方向	平面性	開口範囲 (cm)	底面積 (cm)	高さ (cm)	煙土の 堆積状況	重複・その他
53	36	1号煙土遺構	9世紀後半～ 10世紀前半	東 郡	BNv117	西北	椭 地	270×30	253×10	85	自然	6号土塁に切られる
53	36	2号煙土遺構	9世紀後半～ 10世紀前半	中央部	ANv111	南～北	椭 地	320×75	200×10～15	130	自然	

第24表 柱穴状土坑觀察表①

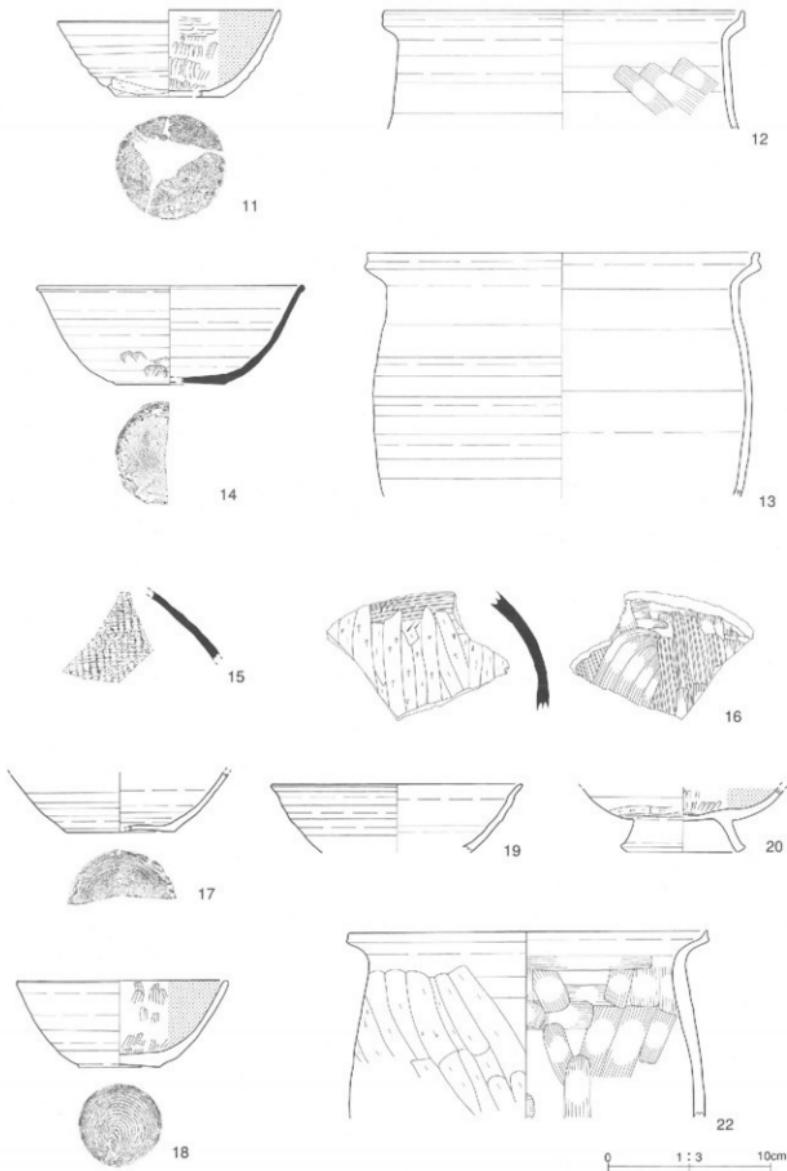
柱穴No.	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No.	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No.	径(cm)	深さ(cm)	調査区
1	41×40	26	西側①	58	23×18	23	北端④	116	30×30	17	北端③
2	29×34	14	西側①	59	19×18	13	北端④	116	21×30	23	北端③
3	56×46	13	西側①	60	23×20	14	北端④	117	40×36	30	北端③
4	27×26	17	西側①	61	34×29	14	北端④	118	25×32	22	北端③
5	36×32	11	西側①	62	(28×21)	29	北端④	119	32×34	31	北端③
6	27×22	22	西側①	63	34×32	31	北端④	120	(39×34)	32	北端③
7	(20×20)	38	西側①	64	36×26	56	北端④	121	39×38	19	北端③
8	21×20	6	東部②	65	32×18	15	北端④	122	32×27	29	北端③
9	29×19	11	東部②	66	32×20	17	北端④	123	28×35	29	北端③
10	(46×38)	18	東部②	67	(35×20)	19	北端④	124	13×13	7	北端③
11	(20×12)	27	東部②	68	22×20	18	北端④	125	31×30	10	北端③
12	20×18	21	東部②	69	42×49	31	北端④	126	28×16	7	北端③
13	26×26	26	東部②	70	32×28	31	北端④	127	20×18	20	北端③
14	24×22	4	東部②	71	24×21	5	北端④	128	23×18	10	北端③
15	33×21	18	東部②	72	30×27	33	北端④	129	23×21	9	北端③
16	19×17	13	東部②	73	24×22	12	北端④	130	18×18	5	北端③
17	28×24	16	東部②	74	24×20	12	北端④	131	20×15	32	北端③
18	24×23	10	東部②	75	29×22	7	北端④	132	36×34	19	北端③
19	39×36	29	東部②	76	22×18	2	北端④	133	30×25	16	北端③
20	29×22	5	東部②	77	28×26	28	北端④	134	(27×20)	26	北端③
21	(20×14)	43	東部②	78	33×33	34	北端④	135	(48×36)	35	北端③
22	33×27	19	東部②	79	24×22	13	北端④	136	32×18	45	中央部④
23	30×26	35	東部②	80	16×15	3	北端④	137	34×28	10	中央部⑤
24	(25×24)	35	東部②	81	23×20	16	北端④	138	24×22	8	中央部④
25	52×40	18	東部②	82	39×16	11	北端④	139	10×10	51	中央部⑥
26	29×24	9	東部②	83	(28×20)	17	北端④	140	29×26	45	中央部⑤
27	18×17	10	東部②	84	32×30	25	北端④	141	(30×28)	22	中央部⑤
28	19×19	10	東部②	85	26×22	23	北端④	142	26×26	20	中央部⑤
29	25×20	9	東部②	86	19×19	9	北端④	143	(26×21)	12	中央部⑤
30	15×15	12	東部②	87	26×26	15	北端④	144	29×24	14	中央部⑤
31	21×21	30	東部②	88	34×29	29	北端④	145	30×25	21	中央部③
32	29×18	19	東部②	89	34×27	58	北端④	146	30×24	52	中央部③
33	22×30	23	東部②	90	38×21	30	北端④	147	31×33	9	中央部③
34	24×23	24	東部②	91	21×18	35	北端④	148	51×42	46	中央部④
35	24×19	28	東部②	92	28×34	23	北端④	149	32×30	64	中央部④
36	28×19	21	東部②	93	34×32	53	北端④	150	37×36	13	中央部④
37	22×22	27	東部②	94	27×22	15	北端④	151	29×19	33	中央部④
38	(46×25)	12	東部②	95	47×43	47	北端④	152	27×26	10	中央部④
39	53×49	11	東部②	96	24×19	23	北端④	153	30×35	44	中央部④
40	33×26	46	西側①	97	75×58	13	北端④	154	29×22	55	中央部④
41	23×21	27	西側①	98	34×30	17	北端④	155	29×27	56	中央部④
42	21×20	8	西側①	99	30×28	39	北端④	156	34×28	59	中央部④
43	36×32	55	西側①	100	26×24	18	北端④	157	32×25	28	中央部④
44	25×22	14	西側①	101	33×30	21	北端④	158	35×32	42	中央部④
45	28×26	18	北端④	102	(40×18)	6	北端④	159	36×28	55	中央部④
46	(29×20)	15	北端④	103	44×30	20	北端④	160	36×22	35	中央部④
47	40×35	40	北端④	104	(44×33)	4	北端④	161	24×22	15	中央部④
48	32×30	41	北端④	105	45×42	23	北端④	162	20×16	12	中央部④
49	54×44	38	北端④	106	(22×16)	10	北端④	163	24×21	29	中央部④
50	54×24	45	北端④	107	(26×24)	15	北端④	164	35×29	46	中央部④
51	33×24	8	北端④	108	15×12	36	北端④	165	21×19	30	中央部④
52	54×50	19	北端④	109	26×35	11	北端④	166	29×31	33	中央部④
53	60×34	16	北端④	110	20×18	13	北端④	167	25×30	33	中央部④
54	30×26	23	北端④	111	19×18	18	北端④	168	30×29	43	中央部④
55	25×24	39	北端④	112	27×24	32	北端④	169	18×18	21	中央部④
56	25×25	19	北端④	113	38×28	33	北端④	170	25×21	49	中央部④
57	25×25	18	北端④	114	24×22	21	北端④	171	28×22	14	中央部④

第25表 柱穴状土坑觀察表②

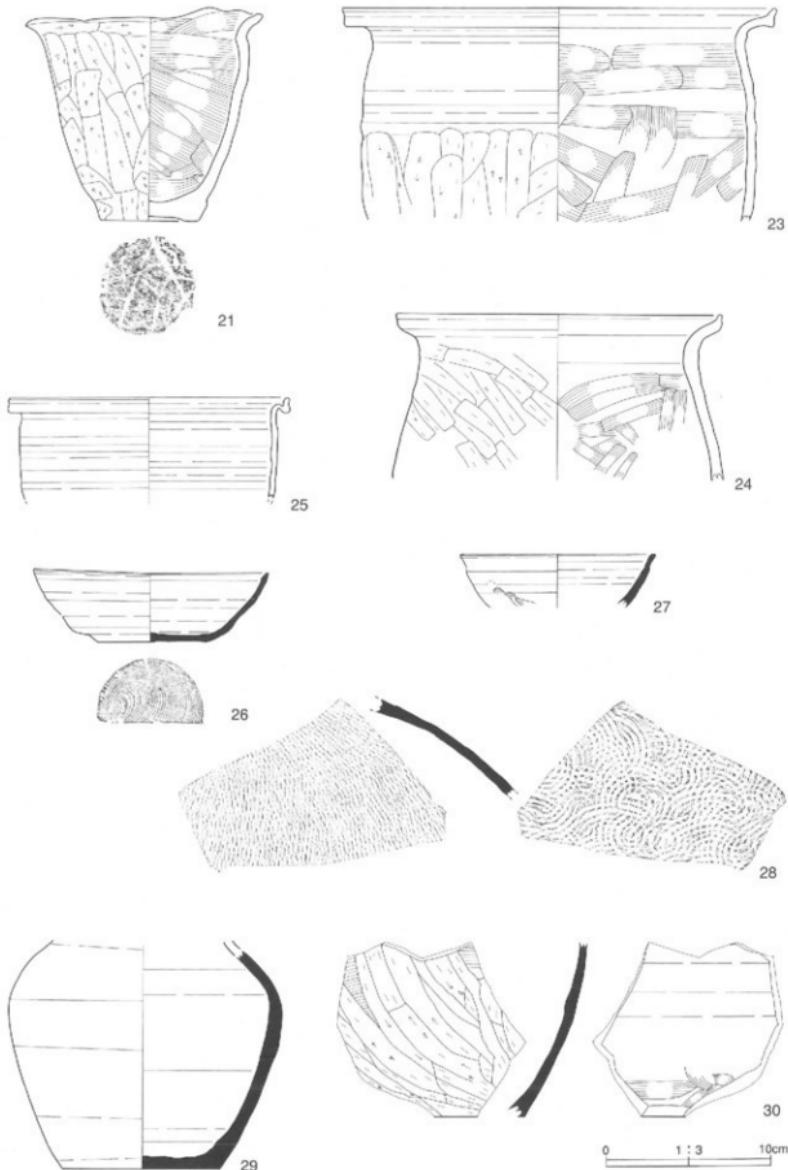
柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区	柱穴No	径(cm)	深さ(cm)	調査区				
172	49×32	29	中央部⑤	204	22×18	10	東部③	236	28×27	9	中央部②
173	37×29	10	中央部⑤	205	24×29	20	東部③	237	(34×21)	33	中央部②
174	29×25	14	中央部⑤	206	19×15	12	東部③	238	(34×13)	30	東部②
175	22×20	17	中央部⑤	207	24×21	49	東部③	239	24×23	14	東部①
176	20×14	9	中央部⑤	208	(30×30)	6	東部③	240	36×32	51	中央部④
177	(35×11)	26	中央部⑤	209	22×21	10	東部③	241	46×40	30	中央部④
178	(22×7)	35	中央部⑤	210	36×28	75	東部③	242	28×22	22	中央部④
179	36×34	21	中央部⑤	211	29×28	76	東部③	243	28×22	22	中央部④
180	(33×32)	36	中央部⑤	212	19×17	10	東部③	244	18×14	24	中央部④
181	(13×11)	25	中央部⑤	213	35×24	42	東部③	245	17×15	29	中央部④
182	38×26	13	中央部⑤	214	14×26	12	東部③	246	17×16	10	中央部④
183	27×25	44	中央部⑤	215	25×21	35	東部③	247	23×22	8	中央部④
184	28×22	31	中央部⑤	216	26×22	18	東部③	248	18×15	24	中央部④
185	20×16	53	中央部⑤	217	27×19	39	東部③	249	32×36	24	中央部④
186	38×35	27	中央部⑤	218	32×24	34	東部③	250	18×14	14	中央部④
187	24×20	15	中央部⑤	219	19×15	5	東部③	251	19×17	32	中央部④
188	30×27	48	中央部⑤	220	18×18	10	東部③	252	36×34	18	中央部④
189	(26×22)	35	中央部⑤	221	25×18	14	東部③	253	30×24	36	中央部④
190	36×27	17	中央部⑤	222	18×16	35	東部③	254	24×22	8	中央部④
191	52×36	35	中央部⑤	223	22×16	16	中央部②	255	28×23	27	中央部③
192	(36×17)	19	中央部⑤	224	21×20	9	中央部②	256	26×22	20	中央部③
193	24×21	30	中央部⑤	225	25×25	25	中央部②	257	36×34	16	中央部③
194	29×23	24	中央部⑤	226	31×34	78	中央部②	258	22×21	30	中央部③
195	22×20	44	中央部⑤	227	36×30	66	中央部②	259	38×35	18	中央部③
196	40×33	26	中央部⑤	228	18×17	36	中央部②	260	24×24	13	中央部③
197	38×21	41	中央部⑤	229	37×33	64	中央部②	261	23×18	6	中央部③
198	25×22	12	中央部⑤	230	33×28	14	中央部②	262	(34×13)	20	中央部③
199	15×16	9	中央部⑤	231	24×19	11	中央部②	263	31×26	27	中央部③
200	26×19	11	東部③	232	29×27	20	中央部②	264	27×24	30	中央部③
201	21×17	10	東部③	233	41×34	63	中央部②	265	40×38	60	中央部③
202	30×18	11	東部③	234	(31×21)	43	中央部②	266			
203	32×24	67	東部③	235	36×33	56	中央部②	267			



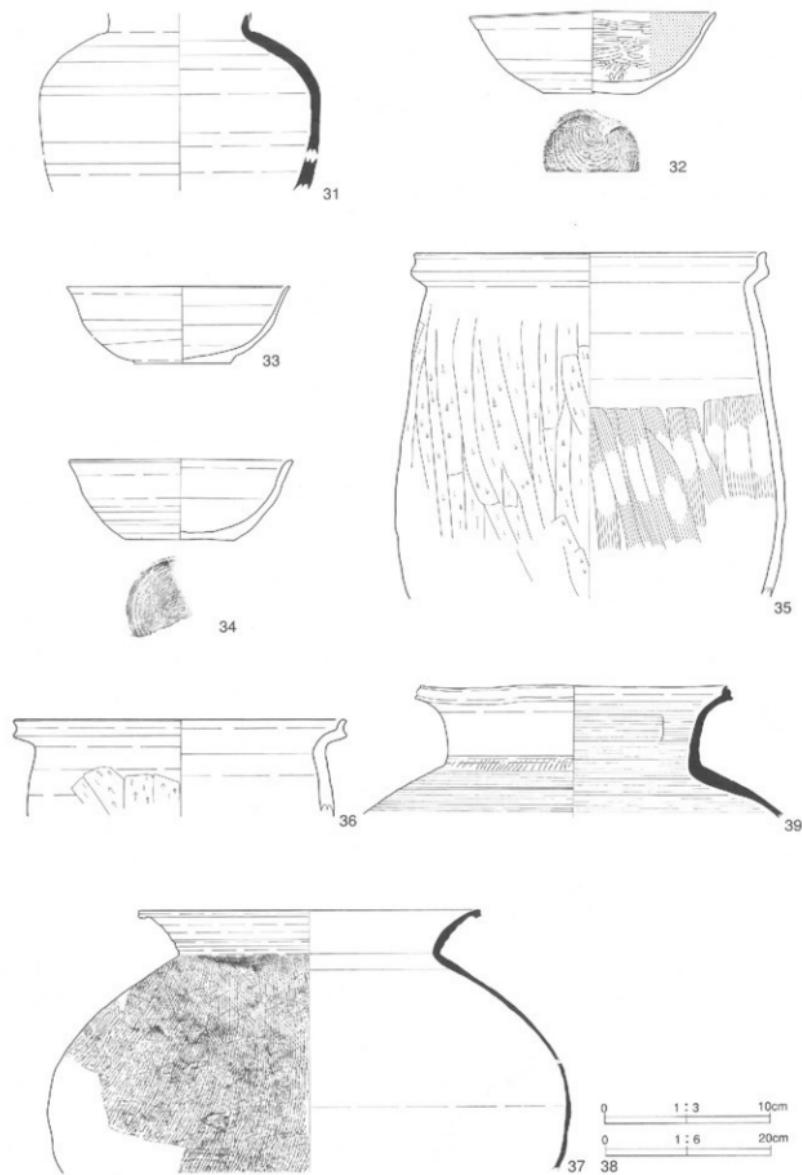
第61図 古代の土器（1）



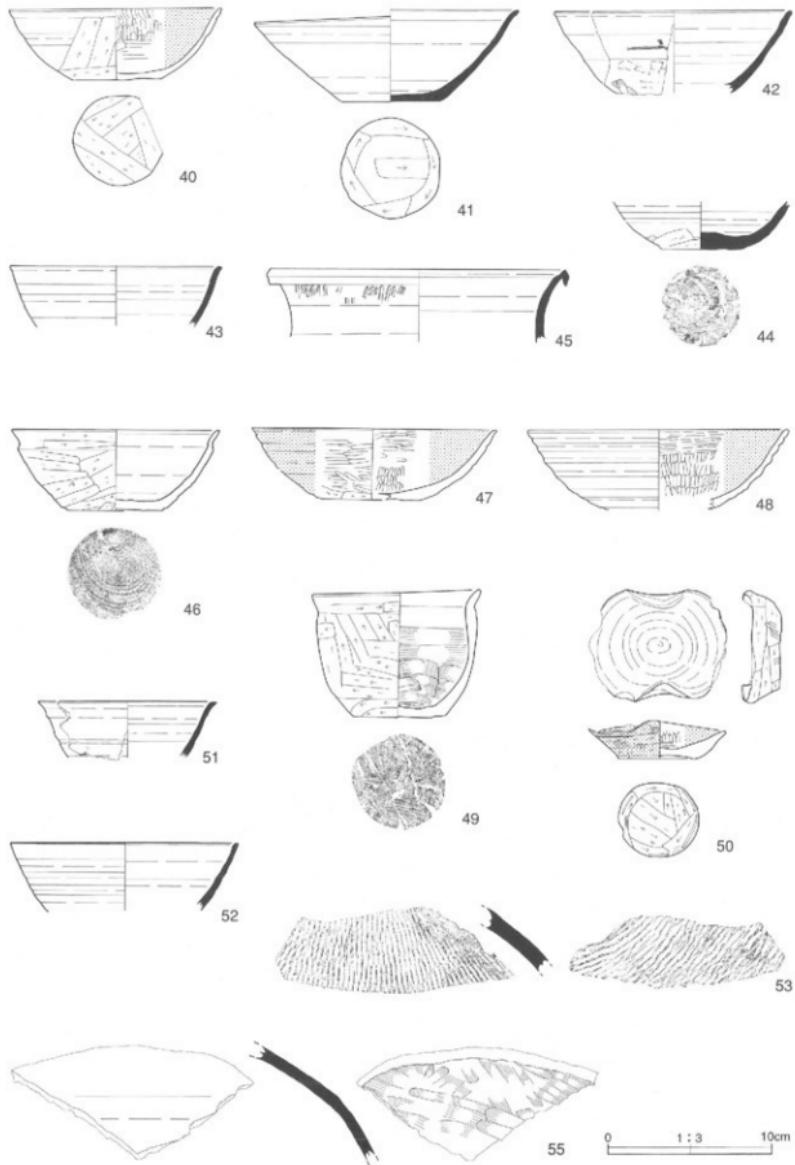
第62図 古代の土器（2）



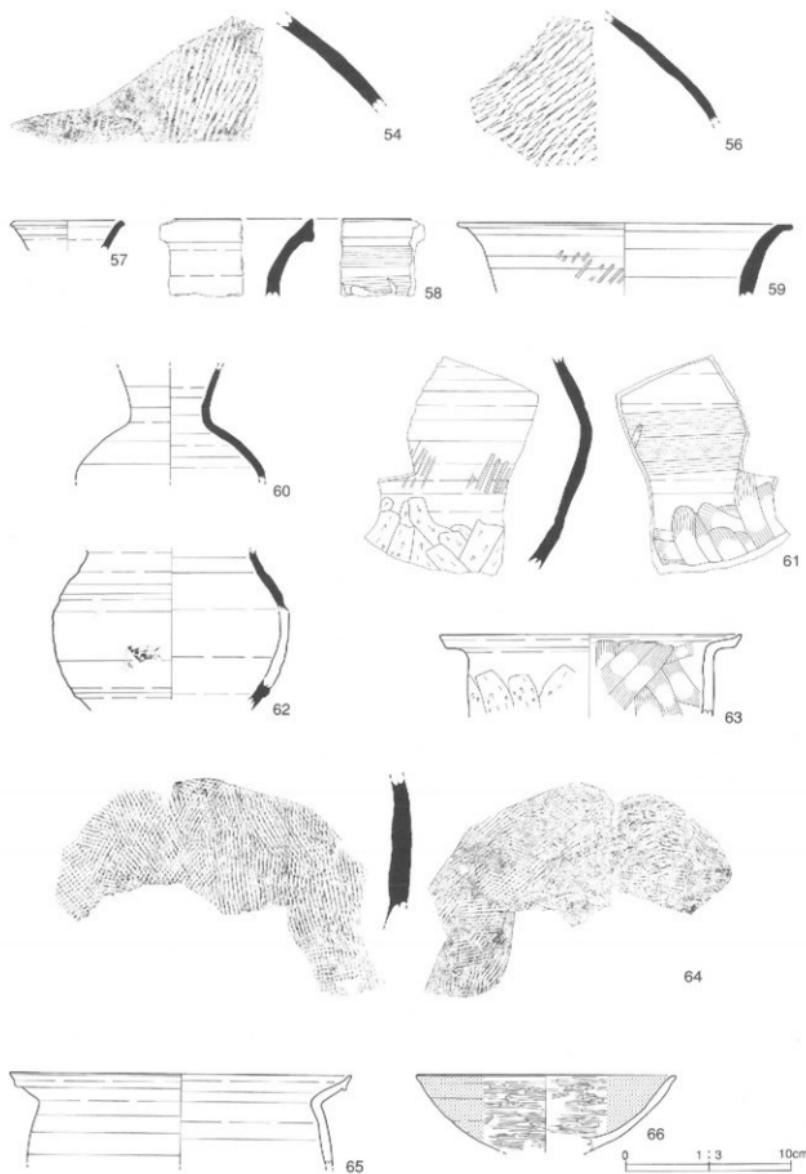
第63図 古代の土器（3）



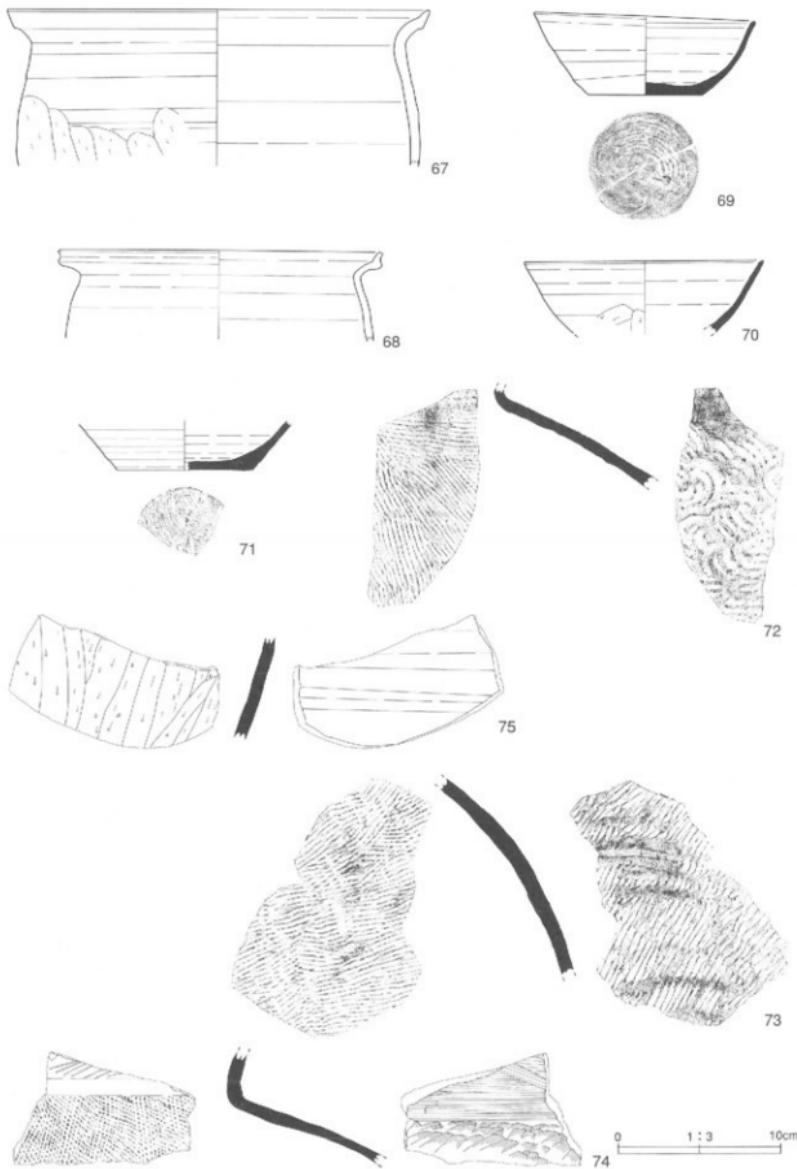
第64図 古代の土器（4）



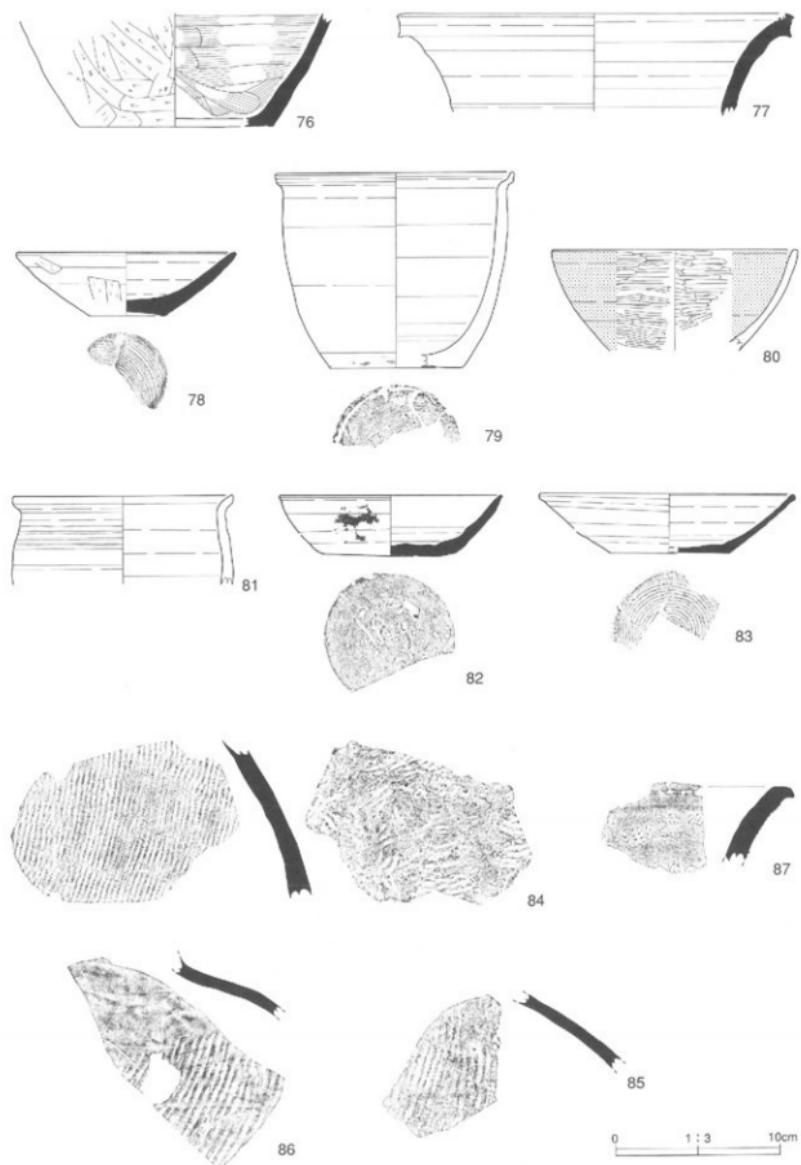
第65図 古代の土器（5）



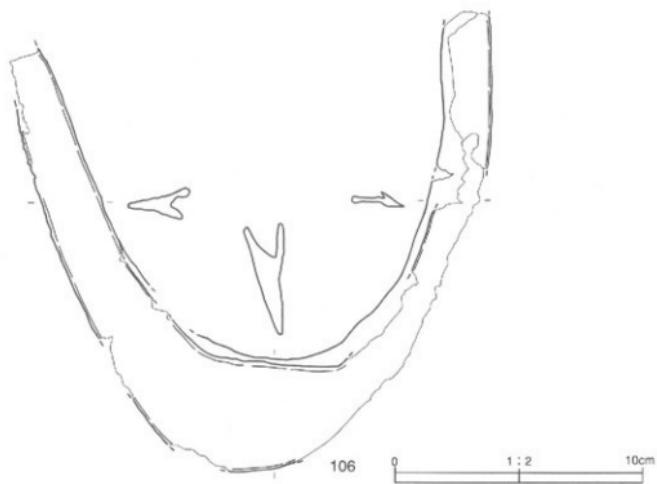
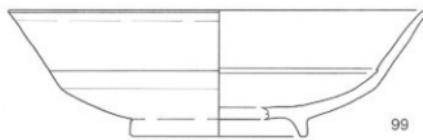
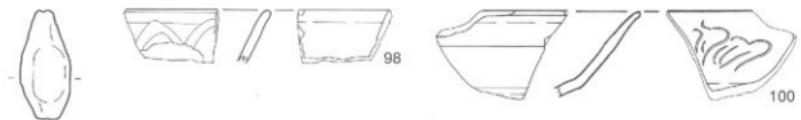
第66図 古代の土器（6）



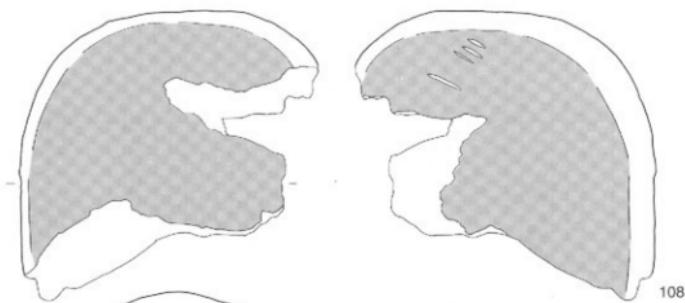
第67図 古代の土器（7）



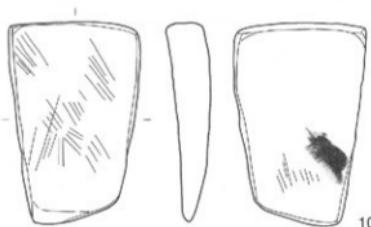
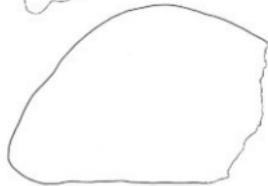
第68図 古代の土器（8）



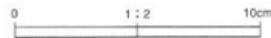
第69図 土製品、陶磁器、鉄製品



108



109



第70図 石器

第26表 古代の土器類繫表(1)

No.	出土点	層位(小字～下位～より)	種別	断面	口径	底面	保存状況	外見概要	小括記述	備考
1	17号	壁上(小字～下位～より)	土器	直筒	17.5	6.3	1/2	□クロナメ	□クロナメ	
2	1号	壁上	土器	直筒	17.5	6.3	1/2	□クロナメ	□クロナメ	
3	1号中段	直筒	二輪轍	直	16.4	7.2	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
4	2号中段	直筒	二輪轍	直	16.4	7.2	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
5	1号下部	直筒	二輪轍	直	16.5	7.0	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
6	1号下部	直筒	二輪轍	直	16.5	7.0	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
7	1号下	直筒	二輪轍	直	16.5	7.0	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
8	1号中段	直筒	二輪轍	直	16.5	7.0	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
9	1号中段	直筒	二輪轍	直	16.5	7.0	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
10	2号中段	直筒	二輪轍	直	16.5	7.0	1/2	□クロナメ	ヘタケナメ	
11	3号北切	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
12	3号北切	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
13	3号北切	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
14	3号北切	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
15	3号北切	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
16	3号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
17	4号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
18	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
19	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
20	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
21	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
22	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
23	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
24	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
25	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
26	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
27	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
28	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
29	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
30	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
31	5号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
32	6号北内土器	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
33	6号北内土器	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
34	6号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
35	6号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
36	6号北内土器	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
37	6号北内土器	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
38	6号北内土器	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
39	6号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし
40	7号北	直筒上(小字～下位)	土器	直筒	15.7	6.5	2/3	□クロナメ	□クロナメ	内丸あり、手持なし

27表 古代の土器觀察表(2)

第28表 土製品觀察表

No.	出土地点	層 位	器 物	重 量 (g)
88	1号住南壁際	2 層	燒成粘土塊	24.0
89	5号住	埋土中	燒成粘土塊	7.1
90	6号住内壁	埋土中	土 瓶	15.2
91	6号住内土坑	埋土中	燒成粘土塊	18.8
92	7号住カタドリ前	貼 壁	燒成粘土塊	22.0
93	1号住内壁際	埋土中	燒成粘土塊	7.5
94	2号土坑	埋土中	燒成粘土塊	9.6
95	3号土坑	埋土中	燒成粘土塊	36.5
96	8号土坑	埋土中	燒成粘土塊	13.9
97	1号地上遺物	3層 (燒 土)	燒成粘土塊	9.8

第29表 南磁器觀察表

No.	出土地点	層 位	器 物	器 形	代	文 標	備 考
98	5号住	2 層	碗	青 瓷	中世前半 (15世紀?)	外側に蓮瓣文	
99	3号土坑	2 层	碗 框	青美濃	10世紀前半	碗内部に沈線	抹熱窯器、模押模式
100	8号土坑	埋土中	碗 框	盤	9世紀後半	内部に印刷草文	母熱窯以 (田子格)
101	12号窯	埋土中	瓶	漸少・美濃	中世～近世		母熱窯以 (田子格)
102	16号柱穴	埋土中	瓶	東北地方?	近 世		

第30表 鉄製品觀察表

No.	出土地点	層 位	器 物	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)
103	2号住	埋土中	刀 子	4.00	1.00	0.50	3.2
104	2号住	埋土中	刀 ?	4.60	1.50	0.60	4.6
105	2号住	床 面	刀 ?	3.60	1.00	0.70	2.3
106	5号住	床 面	鍔 先	19.00	15.00	1.40	203.0
107	6号住	床 面	刀 子	5.70	1.20	1.00	10.9

第31表 碳石器觀察表

No.	出土地点	層 位	器 物	石 質	產 地	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
108	8号土坑	埋土中	磨 石	安山岩	房主山脈	11.5	12.0	7.2	1047.5	鴨丹球狀
109	1号住内壁際	埋土中	磨 石	砂 岩	奥羽山脈	14.2	5.3	1.4	104.1	

## VII 自然科学分析

### 1 作屋敷遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

作屋敷遺跡は、岩手県奥州市胆沢区南都田字作屋敷487ほか（北緯39° 07' 57"、東経141° 04' 17"）に所在する。測定対象試料は、平安時代と考えられる5号土坑の埋土中位から出土した炭化材（炭化材サンプル1：IAAA-82549）である。

#### 2 測定の意義

土坑の時期を推定する手掛かりとする。

#### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA : Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く  
最初の酸処理では1Nの塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80°C) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素 (CO<sub>2</sub>) を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

#### 4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polash 1977)。
- (2) <sup>14</sup>C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として通る年代である。この値は、δ<sup>13</sup>Cによって補正された値で

ある。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (%) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度の割合である。
- (5) 历年較正年代とは、年代が概知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下…桁を四捨五入しない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.0較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## 6 測 定 結 果

5号土坑の埋土中位から出土した炭化材の $^{14}\text{C}$ 年代は、 $1250 \pm 40$ yrBPである。历年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、687~781AD (60.8%)・791~806AD (7.4%)である。試料の炭素含有率は62.47%であり、化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理 方法 (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					$\delta^{13}\text{C}$ (%)	Libby Age (yrBP), pMC (%)
IAAA-82549	炭化材サンプル1	5号土坑 埋土中位	炭化材	AaA	-22.28 ± 0.94	1,250 ± 40   85.61 ± 0.38

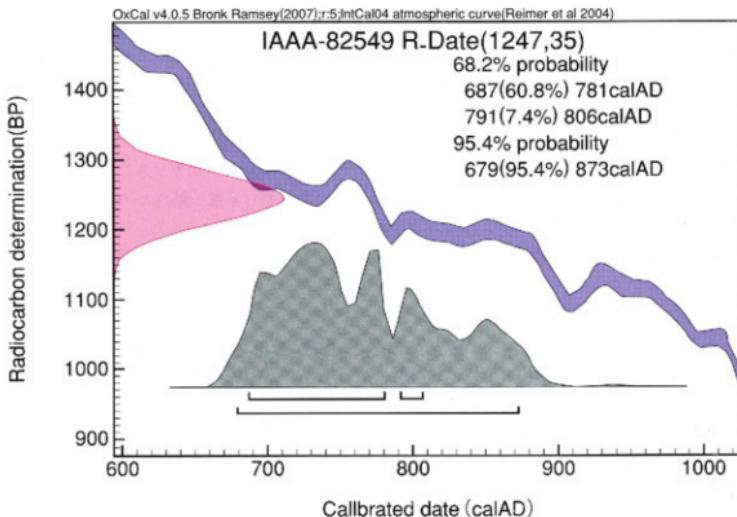
[#2685]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 历年年代範囲	2 $\sigma$ 历年年代範囲
	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	Age (yrBP)			
IAAA-82549	86.09 ± 0.34	1,247 ± 35	687AD - 781AD (60.8%) 791AD - 806AD (7.4%)	679AD - 873AD (95.4%)	

[参考値]

## 参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19, 355-363  
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2), 425-430  
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43 (2A), 355-363  
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A), 381-389  
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



[参考] 年代校正グラフ

## 2 岩手県奥州市胆沢区作屋敷遺跡より採集されたテフラについて

弘前大学大学院・理工学研究科

柴 正 敏

岩手県奥州市胆沢区作屋敷遺跡より採集された、火山ガラスを含むテフラサンプル2試料について、以下の観察・分析を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、偏光顯微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003；青木・町田、2006）。火山ガラスの化学組成を決定する方法として、近年、電子プローブマイクロアナライザ（以下EPMA）が用いられるようになってきた。本報告では、2試料の火山ガラスについてEPMA分析を行った。使用したEPMAは弘前大学・機器分析センター所属の日本電子製JXA-8800RL、使用条件は加速電圧15 kV、試料電流 $8 \times 10^{-9}$ アンペアである。補正計算はZAFに従った。

本遺跡より採集されたテフラより見出された火山ガラス及びその形態、構成鉱物は以下の通りである：

- (1) テフラ1（5号溝）：火山ガラス（軽石型、バブルウォール型）、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、单斜輝石、鉄鉱。火山ガラスは主に軽石型となる。
  - (2) テフラ2（6号溝）：火山ガラス（軽石型、バブルウォール型）、褐色ガラス、斜長石、石英、斜方輝石、单斜輝石、鉄鉱。火山ガラスは主に軽石型となる。
- プラントオパール、両錐石英、ホルンブレンド、OSTを含む。

ガラスのEPMA分析値（表）から明らかのように、9成分の含有量について、既存の十和田aテフラ起源のガラス組成（青木・町田、2006）と良く一致する。

これらを総合すると、両テフラともに、十和田aテフラに帰属されると考えられる。テフラ2については、両錐石英、ホルンブレンド及びOSTを含むことから、他の堆積物の混入が考えられる。

### （引用文献）

- 青木かおり・町田 洋 (2006) 日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成 —K2O-TiO2図によるテフラの識別、地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258.
- 町田 洋・新井 房夫 (2003) 新編火山灰アトラス -日本列島とその周辺-、東京大学出版会、pp.336.

表 奥州市胆沢区作屋敷遺跡、テフラガラスのEPMA分析値

テフラ1 (5号窓)	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	Total	N	EPMA
最小	76.35	0.24	12.28	1.75	0.03	0.36	1.92	3.59	1.31			
最大	77.86	0.52	12.90	2.12	0.18	0.51	2.20	4.48	1.55			
平均	77.06	0.36	12.48	1.94	0.08	0.43	2.05	4.18	1.43	99.92	21	WDS
標準偏差	0.342	0.065	0.144	0.090	0.033	0.038	0.065	0.220	0.061			

テフラ2 (6号窓)

テフラ2 (6号窓)	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	Total	N	EPMA
最小	76.77	0.31	12.19	1.82	0.08	0.42	1.96	3.71	1.27			
最大	77.80	0.44	12.80	2.08	0.14	0.50	2.17	4.46	1.45			
平均	77.27	0.36	12.51	1.95	0.11	0.44	2.05	3.95	1.34	101.57	8	WDS
標準偏差	0.330	0.040	0.180	0.079	0.022	0.027	0.074	0.275	0.062			

青木・町田 (2006)

To-a	Sample ID	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	Total	N	EPMA
Sample ID	77.75	0.36	12.73	1.62	0.09	0.38	1.81	3.90	1.37	98.41	19	WDS	
Sample ID	77.69	0.36	12.74	1.68	0.09	0.35	1.80	3.99	1.31	98.53	8	WDS	
Sample ID	76.17	0.42	13.41	1.89	0.09	0.38	1.99	4.08	1.56	92.89	18	WDS	

FeO%はすべてFeOとした、WDS：波長分散型EPMA、To-a：十和田aテフラ、N：分析ポイント数を表す。



# 写 真 図 版



遺跡全景（上が北）



調査区全景（上が南）

写真図版1 調査区全景航空写真



南側調査区全景①（西から）



南側調査区全景②（西から）

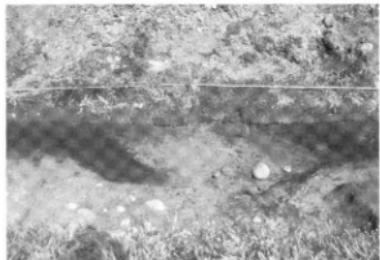


西側調査区全景①（南から）



西側調査区全景②（南から）

写真図版2 南側・西側調査区全景



調査区西部基本土層①(東から)



調査区西部基本土層②(西から)



調査風景①



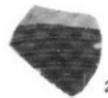
調査風景②



調査風景③



調査風景④



写真図版3 調査風景、陶磁器 (S=1:2)



遺跡全景（上が北）

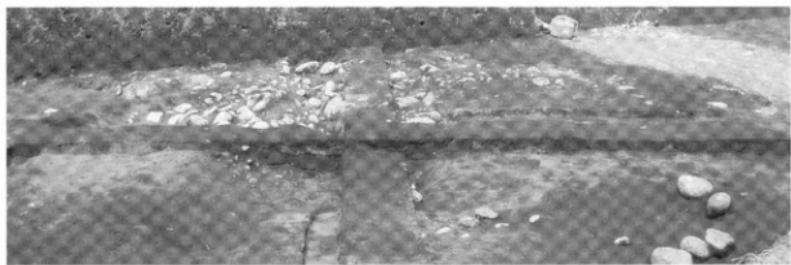


調査区全景（上が西）

写真図版4　遺跡全景



1号竪穴住居跡平面（南から）

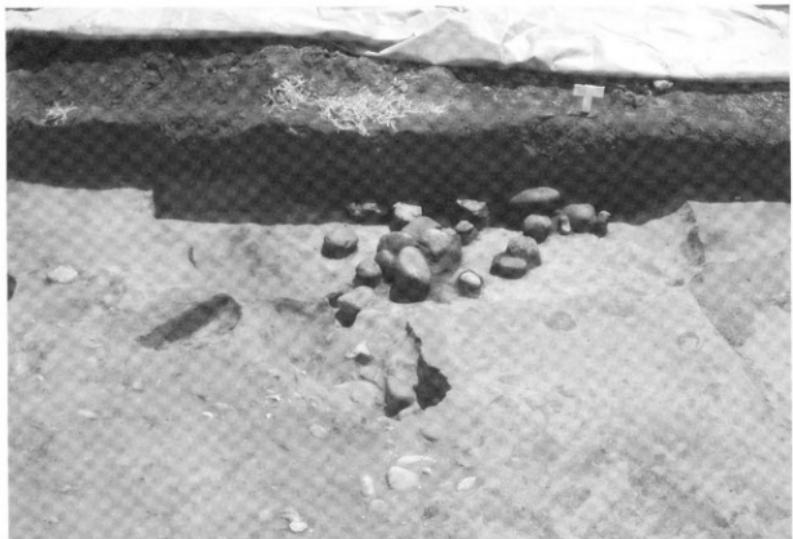


1号竪穴住居跡断面（南から）

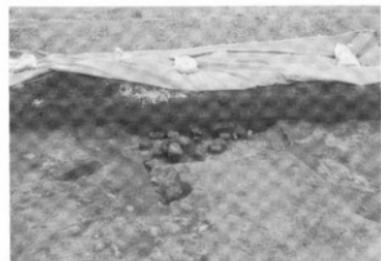


1号竪穴住居跡断面（西から）

写真図版 5 1号竪穴住居跡



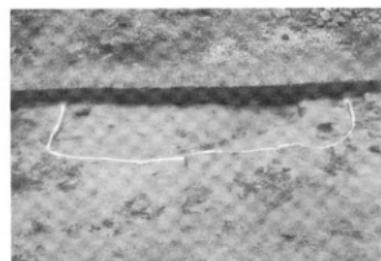
2号竪穴住居跡平面（北から）



2号竪穴住居跡断面（北から）



2号竪穴住居跡縦溝部断面（西から）

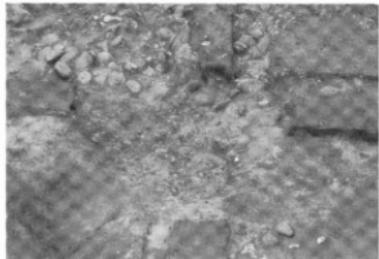


1号竪穴状遺構平面（北から）

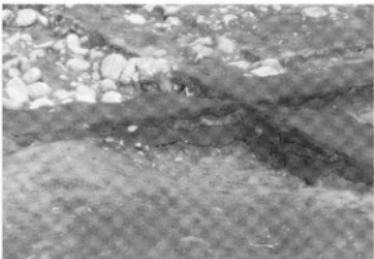


1号竪穴状遺構断面（北から）

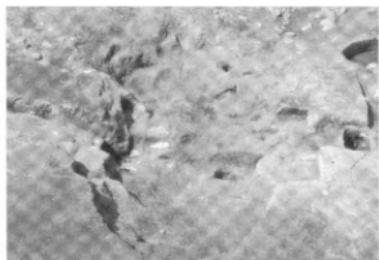
写真図版 6 2号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構



1号土坑平面（南から）



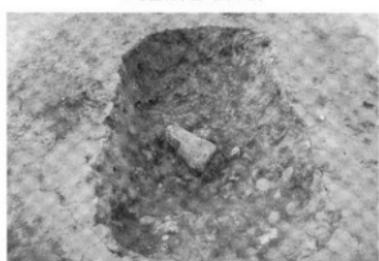
1号土坑断面（南から）



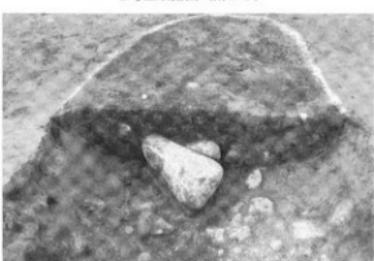
2号土坑平面（南から）



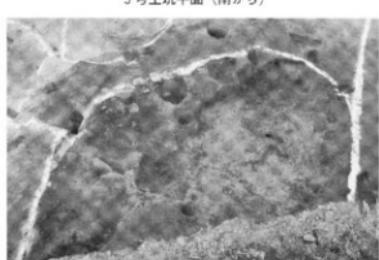
2号土坑断面（南から）



3号土坑平面（南から）



3号土坑断面（南から）



4号土坑平面（南から）

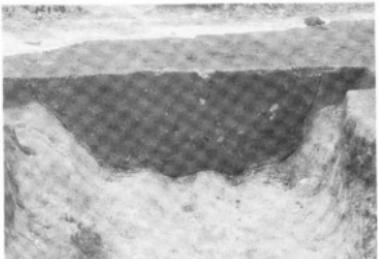


4号土坑断面（西から）

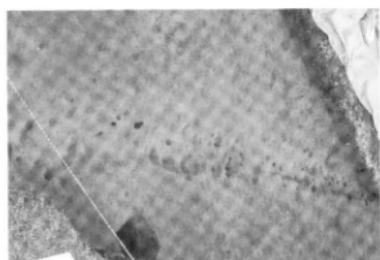
写真図版7 1～4号土坑



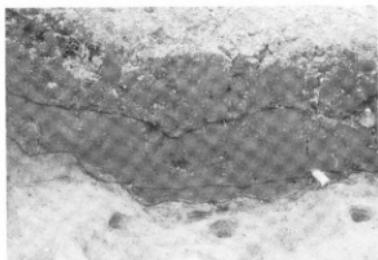
1号溝跡平面（東から）



1号溝跡断面（東から）



2号溝跡平面（西から）



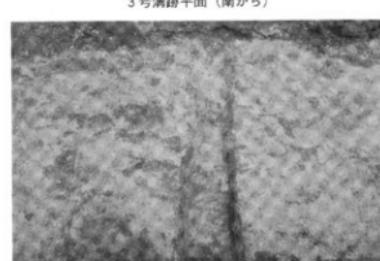
2号溝跡断面（南から）



3号溝跡平面（南から）



3号溝跡断面（北から）



4号溝跡平面（南から）



1号溝跡調査状況

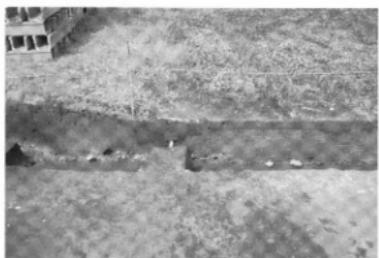
写真図版8 1～4号溝跡



1号旧河道断面（西から）



2号旧河道平面（西から）



3号旧河道断面（東から）



4号旧河道断面（南から）



作業風景①



作業風景②

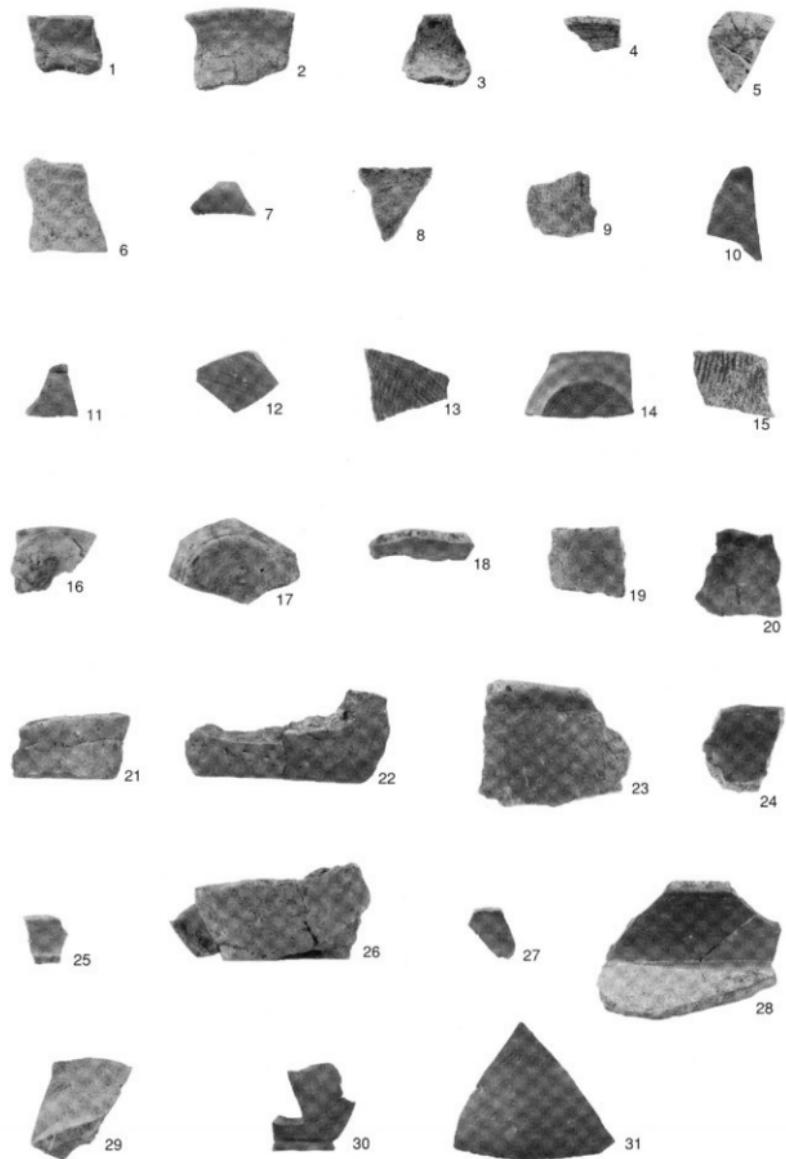


作業風景③

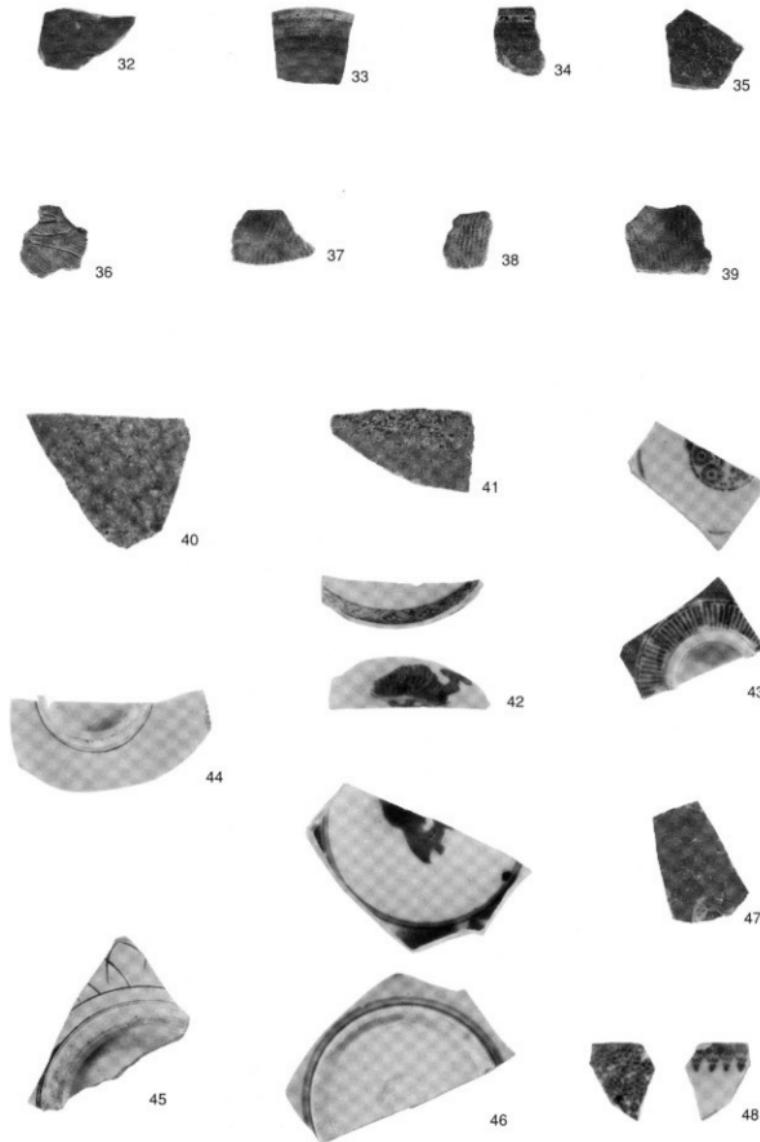


作業風景④

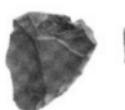
写真図版9 1～4号旧河道、作業風景



写真図版10 古代の土器（1）（S=1:3）



写真図版11 古代の土器(2)、弥生土器、陶磁器 ( $S=1:3$ 、※40~48は $S=1:2$ )



49



50



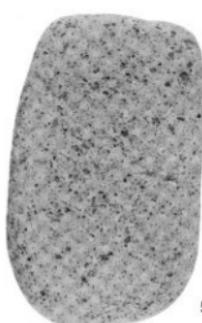
51



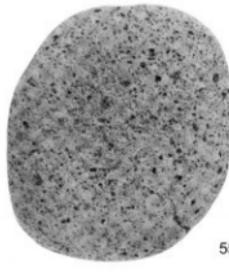
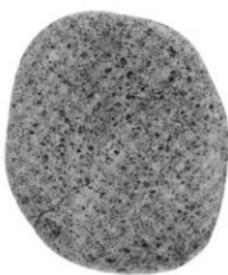
52



53



54



55

写真図版12 石器 ( $S = 1 : 3$ )



遺跡遠景（南から）

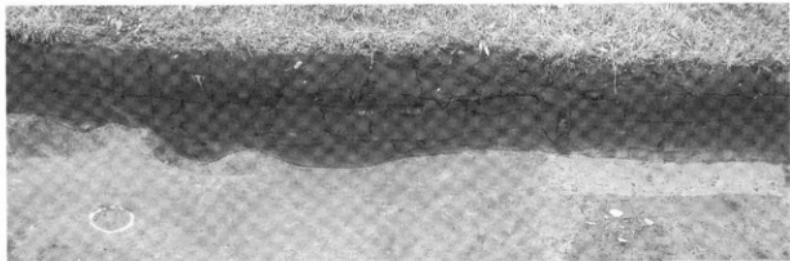


遺跡全景（直上※上が北）

写真図版13 遺跡全景



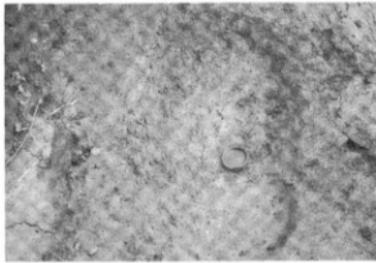
1号竪穴住居跡平面（北から）



1号竪穴住居跡断面（西から）



1号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

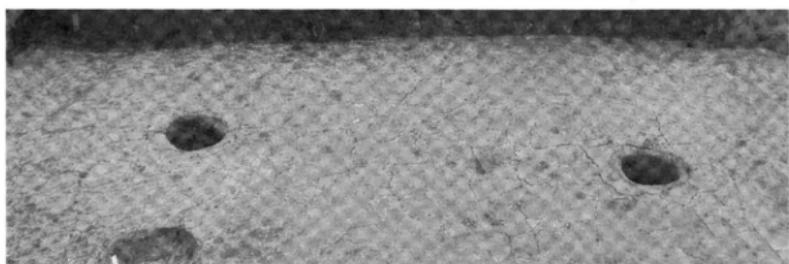


1号竪穴住居跡内土坑5（西から）

写真図版14 1号竪穴住居跡



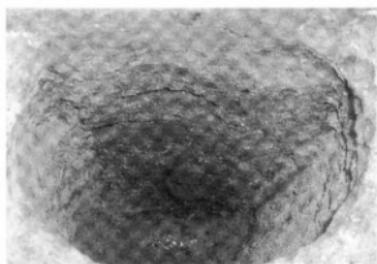
2号竖穴住居跡平面（北から）



2号竖穴住居跡断面（東から）



2号竖穴住居跡炭化材・焼土出土状況（北東から）



2号竖穴住居跡PP 4 断面（南から）

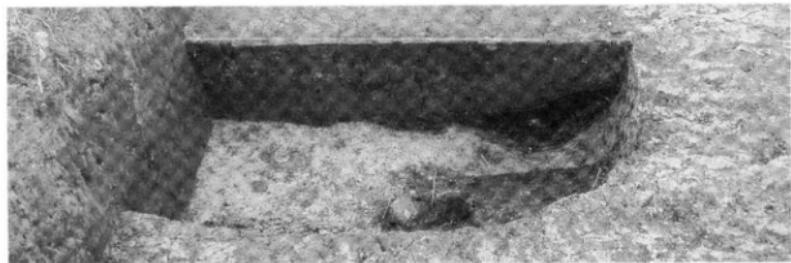
写真図版15 2号竖穴住居跡



3号竖穴住居跡平面（南から）

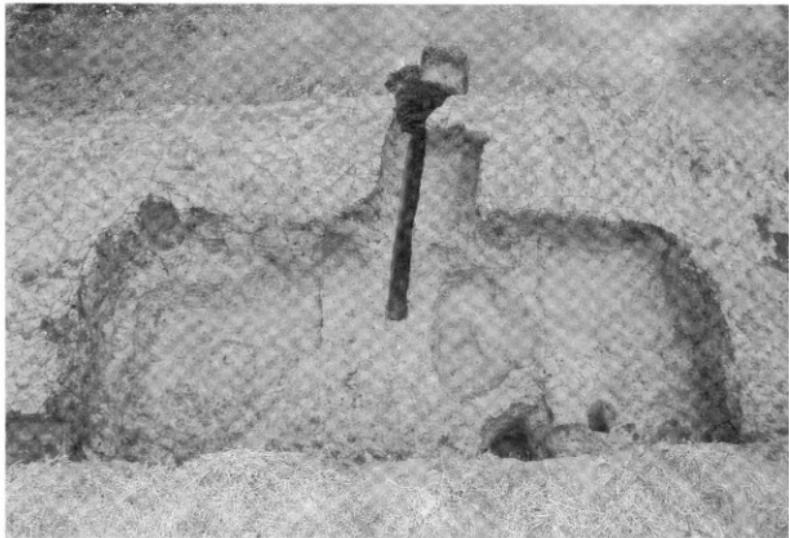


3号竖穴住居跡断面（東から）



3号竖穴住居跡断面（南から）

写真図版16 3号竖穴住居跡（1）



3号竪穴住居跡平面（西から※貼床除去後）



3号竪穴住居跡カマド断面（南から）



3号竪穴住居跡貼床下PP（東から）

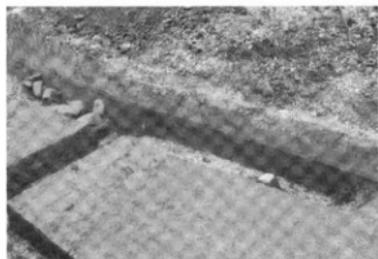


4号竪穴住居跡平面（東から）

写真図版17 3号竪穴住居跡（2）、4号竪穴住居跡



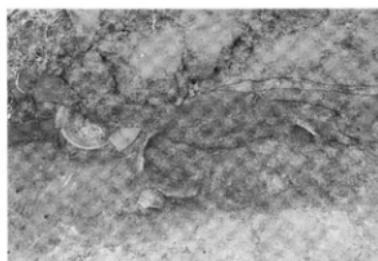
5号竖穴住居跡平面（西から）



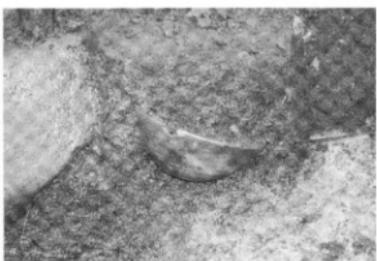
5号竖穴住居跡断面（北から）



5号竖穴住居跡カマド断面（北から）



5号竖穴住居跡カマド煙道部土器出土状況（北から）



5号竖穴住居跡土器出土状況（北から）

写真図版18 5号竖穴住居跡



6号竖穴住居跡平面（東から）

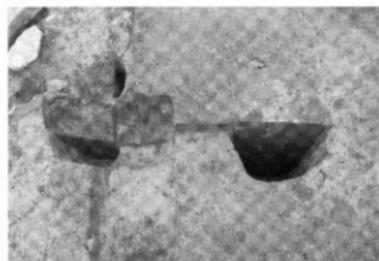


6号竖穴住居跡断面（東から）

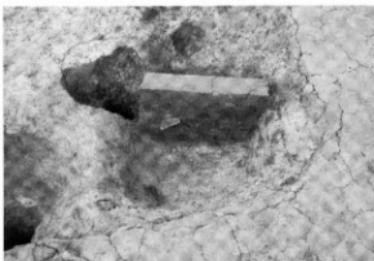
写真図版19 6号竖穴住居跡（1）



6号竪穴住居跡平面（東から※貼床除去後）



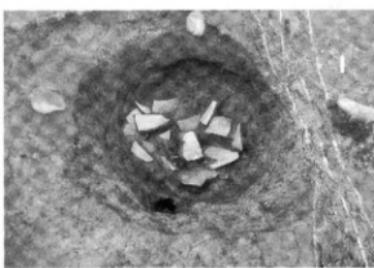
6号竪穴住居跡カマド燃焼部とPP12断面（西から）



6号竪穴住居跡内土坑4断面（南から）

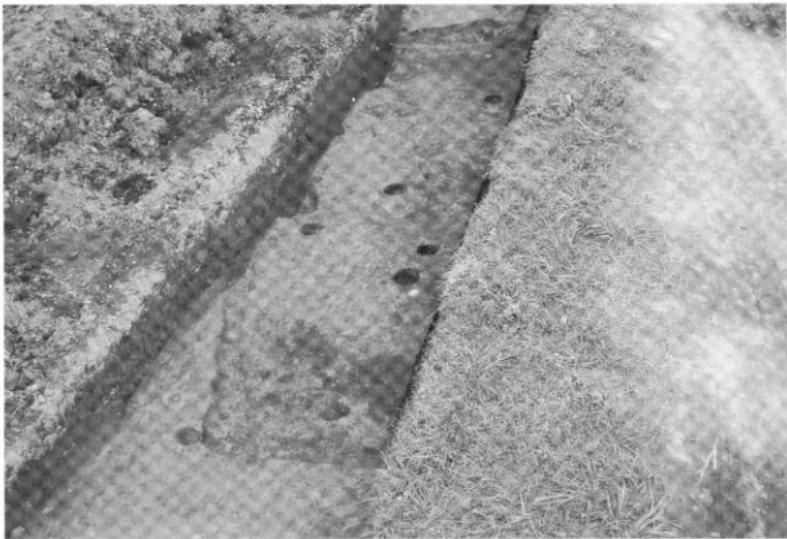


6号竪穴住居跡内土坑3断面（南から）

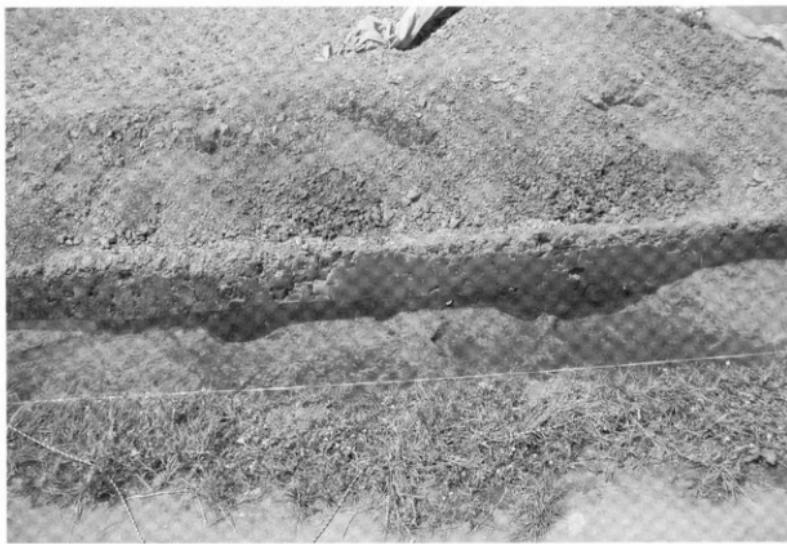


6号竪穴住居跡内土坑3土器出土状況（南から）

写真図版20 6号竪穴住居跡（2）



7号竪穴住居跡平面（西から）

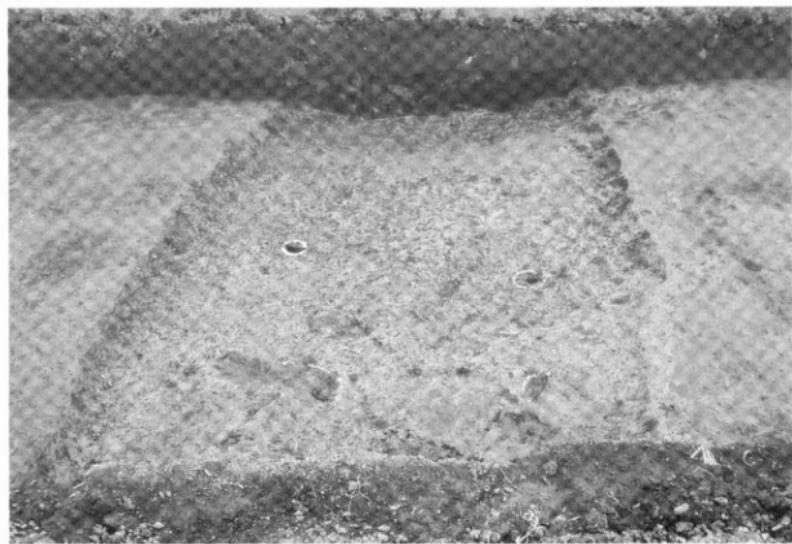


7号竪穴住居跡断面（南から）

写真図版21 7号竪穴住居跡



8号竪穴住居跡平面（西から）



1号竪穴状遺構平面（西から）

写真図版22 8号竪穴住居跡、1号竪穴状遺構

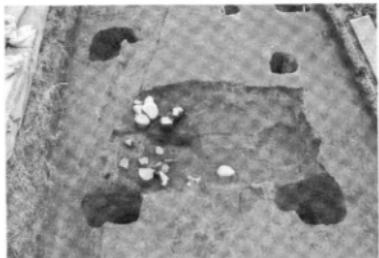


1号掘立柱建物跡平面（南から）

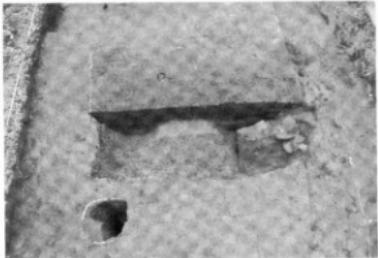


1号掘立柱建物跡平面（南から）

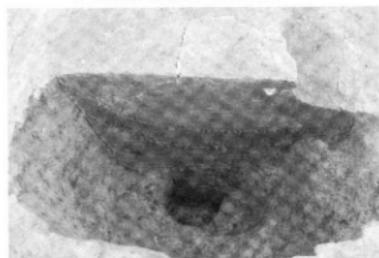
写真図版23 1号掘立柱建物跡（1）



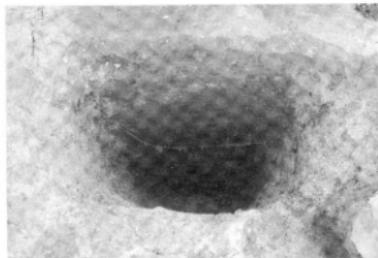
1号掘立柱建物跡内土坑平面（南から）



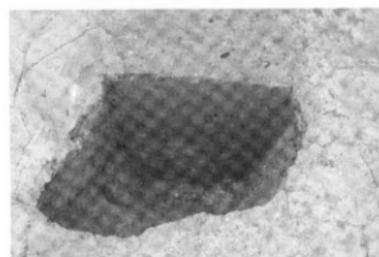
1号掘立柱建物跡内土坑断面（南から）



1号掘立柱建物跡PP 1断面（西から）



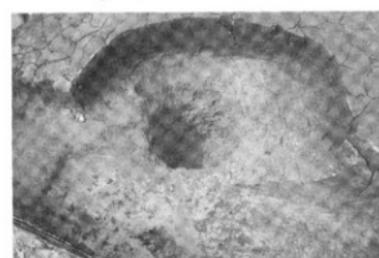
1号掘立柱建物跡PP 2断面（西から）



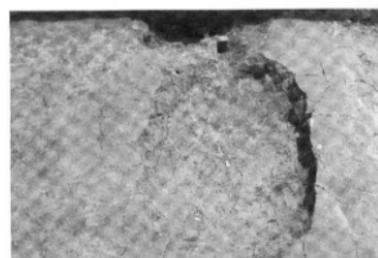
1号掘立柱建物跡PP 4断面（西から）



1号掘立柱建物跡PP 5断面（南から）

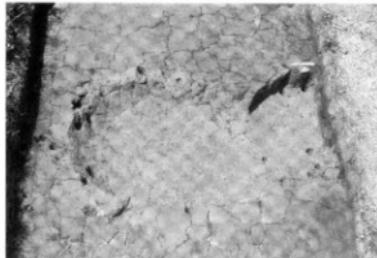


1号土坑平面（東から）

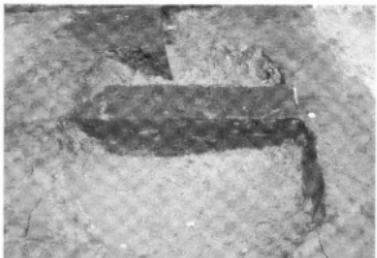


2・10号土坑平面（南から）

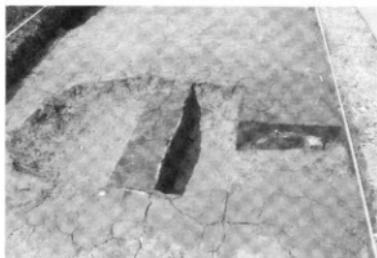
写真図版24 1号掘立柱建物跡（2）、1・2・10号土坑



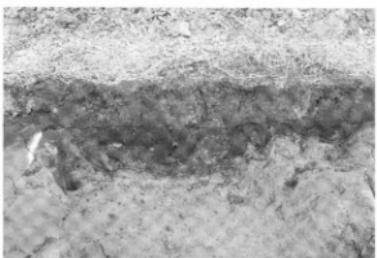
2・10号土坑平面（南から）



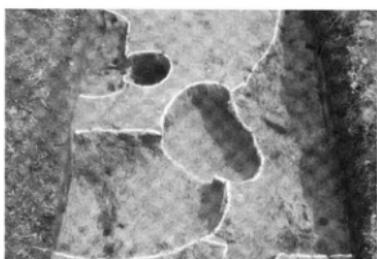
2号土坑断面（西から）



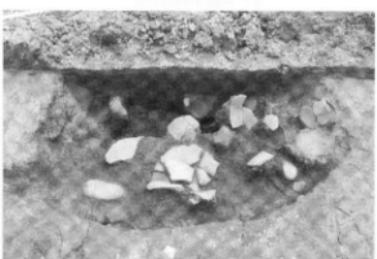
2・10号土坑断面（南から）



10号土坑断面（西から）



3・4・5号土坑、1号焼土遺構平面（北から）



5号土坑遺物出土状況（西から）



3号土坑断面（西から）



5号土坑、1号焼土遺構断面（西から）

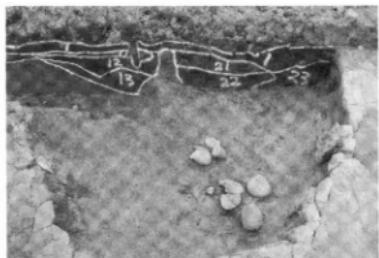
写真図版25 2～5・10号土坑、1号焼土遺構



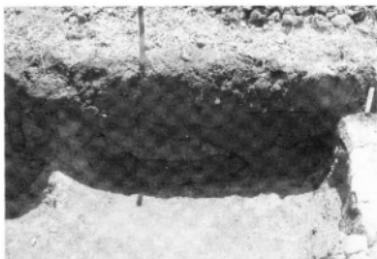
6号土坑平面（西から）



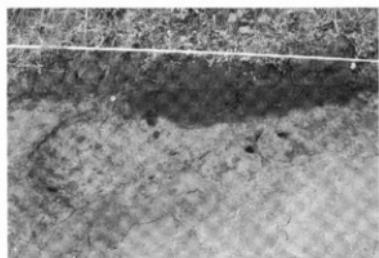
6号土坑断面（西から）



8号土坑平面（北から）



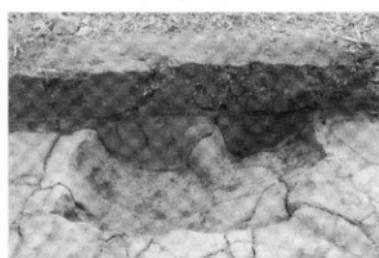
8号土坑断面（北から）



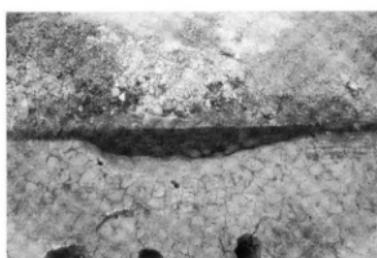
9号土坑平面（東から）



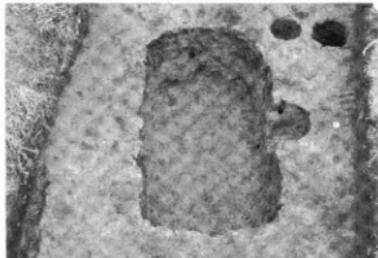
9号土坑断面（北から）



11号土坑平面・断面（西から）



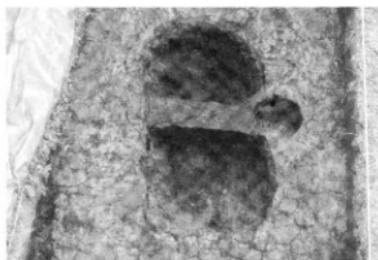
12号土坑平面（北から）



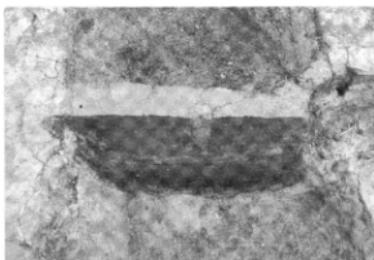
13号土坑平面 (西から)



13号土坑炭化材出土状況 (西から)



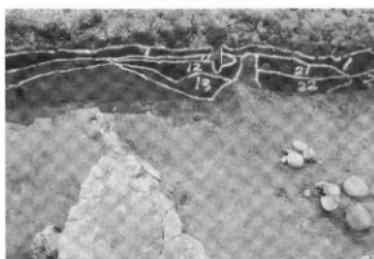
13号土坑炭化材出土状況 (西から)



13号土坑断面 (西から)



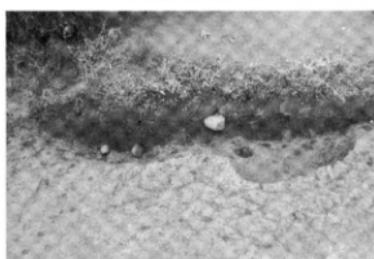
14号土坑平面 (南から)



14号土坑断面 (北から)

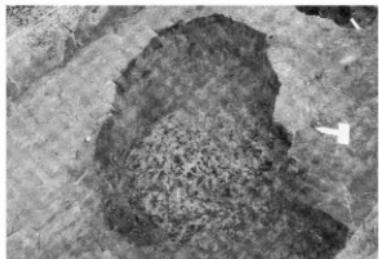


15号土坑平面 (東から)

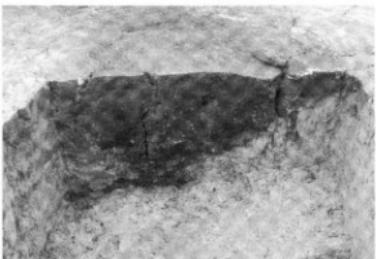


15号土坑断面 (東から)

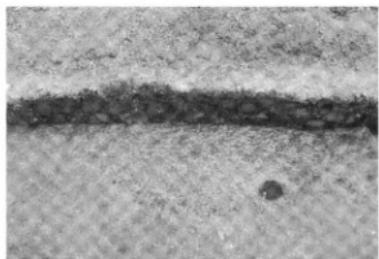
写真図版27 13~15号土坑



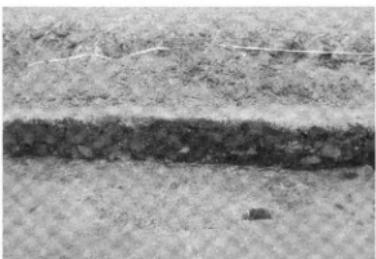
16号土坑平面（北から）



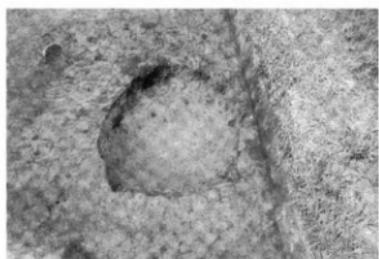
16号土坑断面（南から）



17号土坑平面（北から）



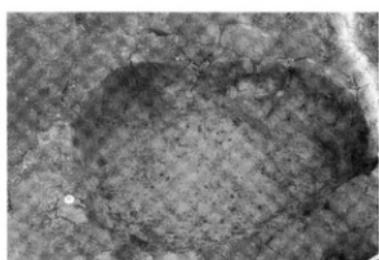
17号土坑断面（北から）



18号土坑平面（南から）



18号土坑断面（南から）

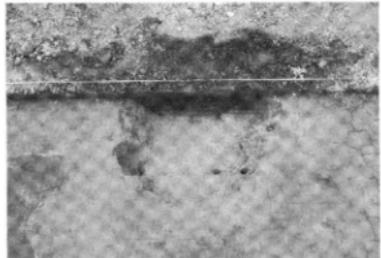


19号土坑平面（南から）

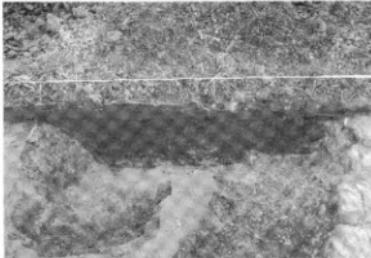


21号土坑断面（南から）

写真図版28 16~19・21号土坑



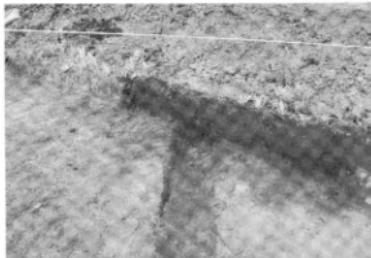
20号土坑平面（東から）



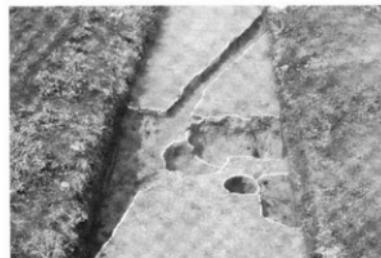
20号土坑断面（東から）



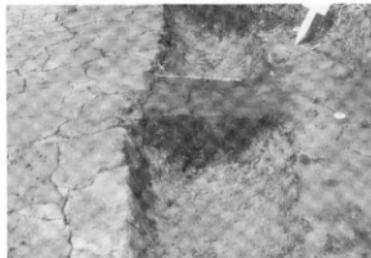
1号溝跡平面（西から）



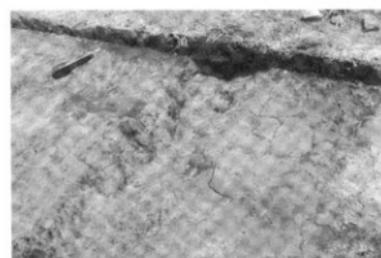
1号溝跡断面（西から）



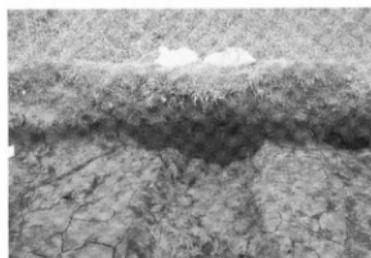
2号溝跡平面（南から）



2号溝跡断面（南西から）



3号溝跡平面（西から）

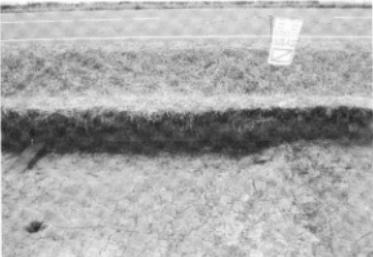


3号溝跡断面（東から）

写真図版29 20号土坑、1～3号溝跡



4号溝跡平面（南から）



4号溝跡断面（東から）



5号溝跡側断面（南から）



5号溝跡側断面（南から）

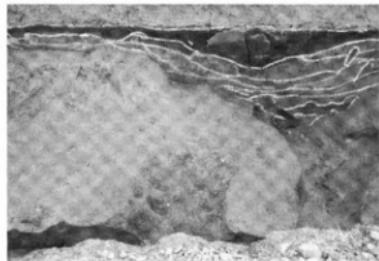


5号溝跡平面（南から）

写真図版30 4・5号溝跡



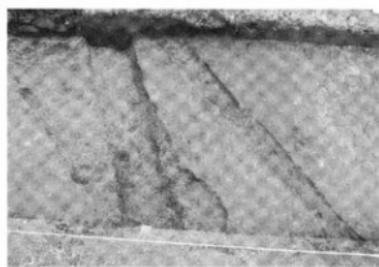
6・8号溝跡断面（南から）



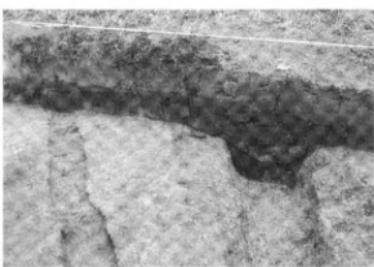
8号溝跡平面（南から）



7号溝跡平面（西から）

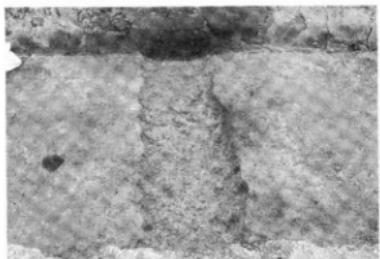


9・10号溝跡平面（北から）



9・10号溝跡断面（北から）

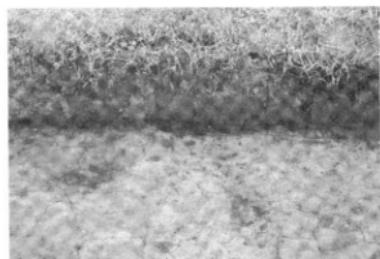
写真図版31 6～10号溝跡



11号溝跡平面（南から）



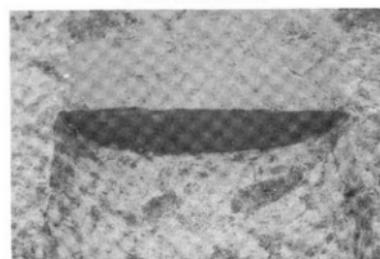
11号溝跡断面（北から）



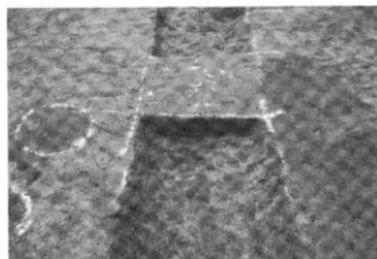
12号溝跡平面（西から）



13号溝跡平面（南から）



13号溝跡断面 1（南から）



13号溝跡断面 2（南から）

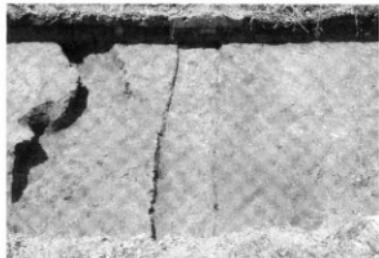


14号溝跡平面（南から）

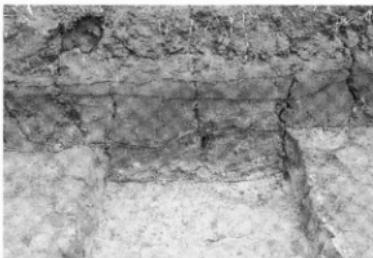


14号溝跡断面（南から）

写真図版32 11～14号溝跡



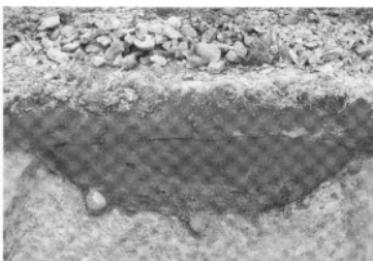
15号溝跡平面（北から）



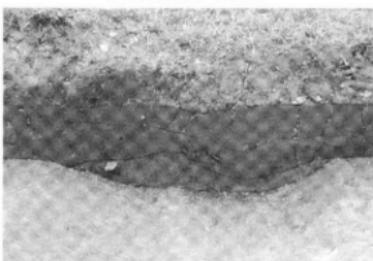
15号溝跡断面（南から）



16号溝跡平面（西から）



16号溝跡断面1（東から）



16号溝跡断面2（東から）

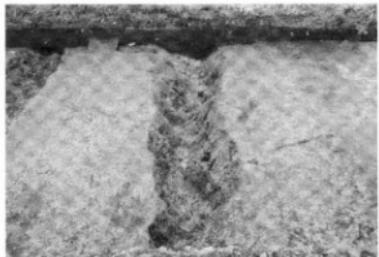


17号溝跡平面（北から）

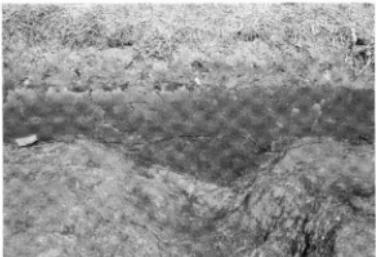


17号溝跡断面（北から）

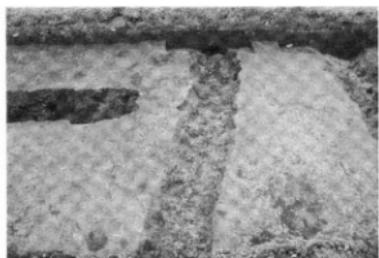
写真図版33 15～17号溝跡



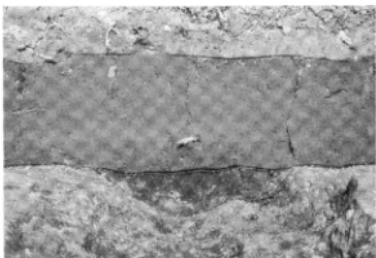
18号溝跡平面（西から）



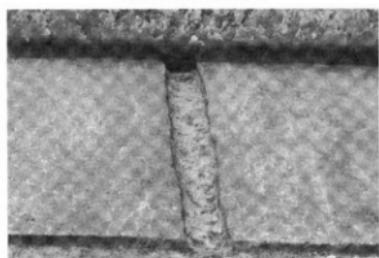
18号溝跡断面（西から）



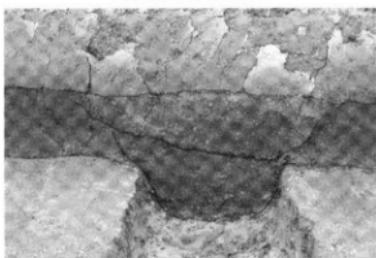
19号溝跡平面（西から）



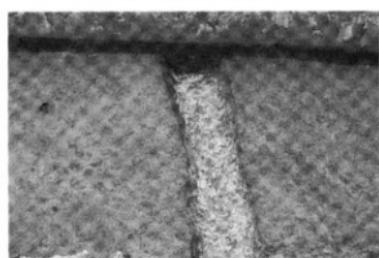
19号溝跡断面（西から）



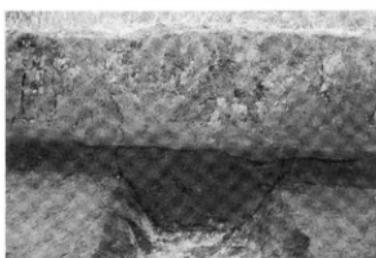
20号溝跡平面（南から）



20号溝跡断面（南から）

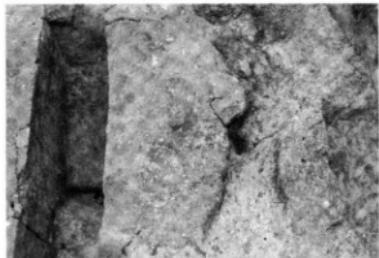


21号溝跡平面（南から）



21号溝跡断面（南から）

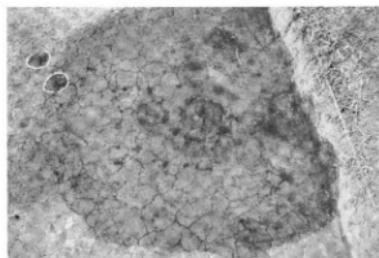
写真図版34 18~21号溝跡



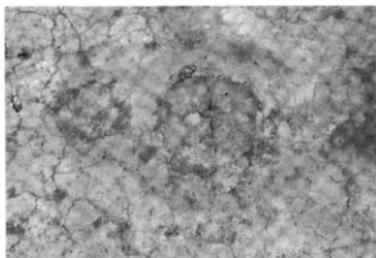
1号焼土遺構検出状況（北から）



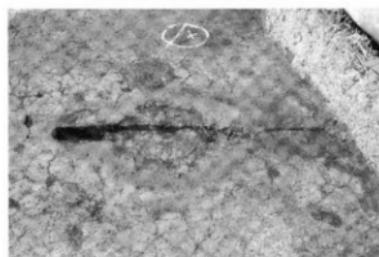
1号焼土遺構断面（北から）



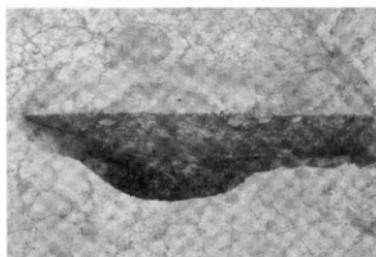
2号焼土遺構検出状況（南から）



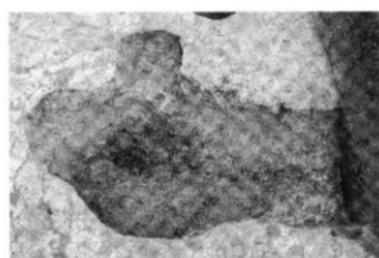
2号焼土遺構検出状況アップ（南から）



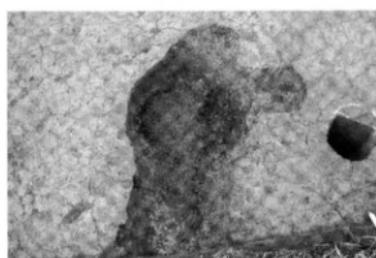
2号焼土遺構サブトレ断面（南から）



2号焼土遺構断面（南から）

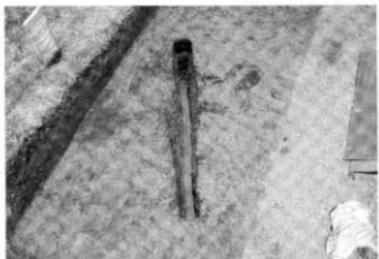


2号焼土遺構平面（南から）

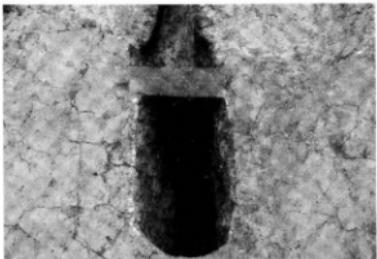


2号焼土遺構平面（東から）

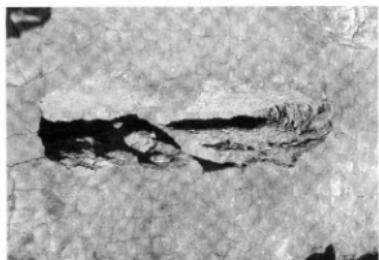
写真図版35 1・2号焼土遺構



1号陷し穴平面（南から）



1号陷し穴断面（北から）



2号陷し穴平面（南から）



2号陷し穴断面（南から）



作業風景1（北西から）



作業風景2（東から）



調査前風景（西から）



調査区中央部神社前（東から）

写真図版36 1・2号陷し穴、作業風景



表土除去作業（西から）



調査区西部（南から）



調査区北部調査中（西から）



調査区北部調査中（北西から）



調査区中央部（北から）



調査区中央部調査中（南から）



調査区南部（東から）



調査区中央部調査中（南から）

写真図版37 作業風景



実測作業中（北から）



実測作業中（西から）



調査中（南から）



調査中（南西から）



現地公開1



現地公開2

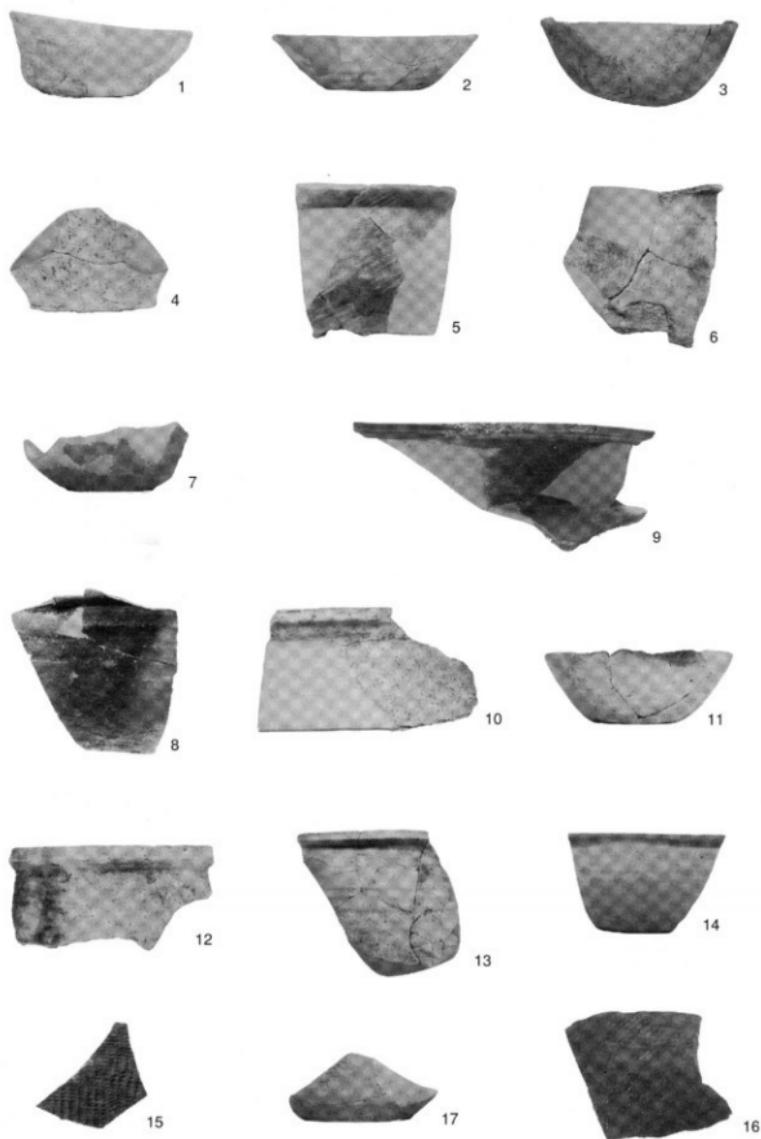


現地公開3

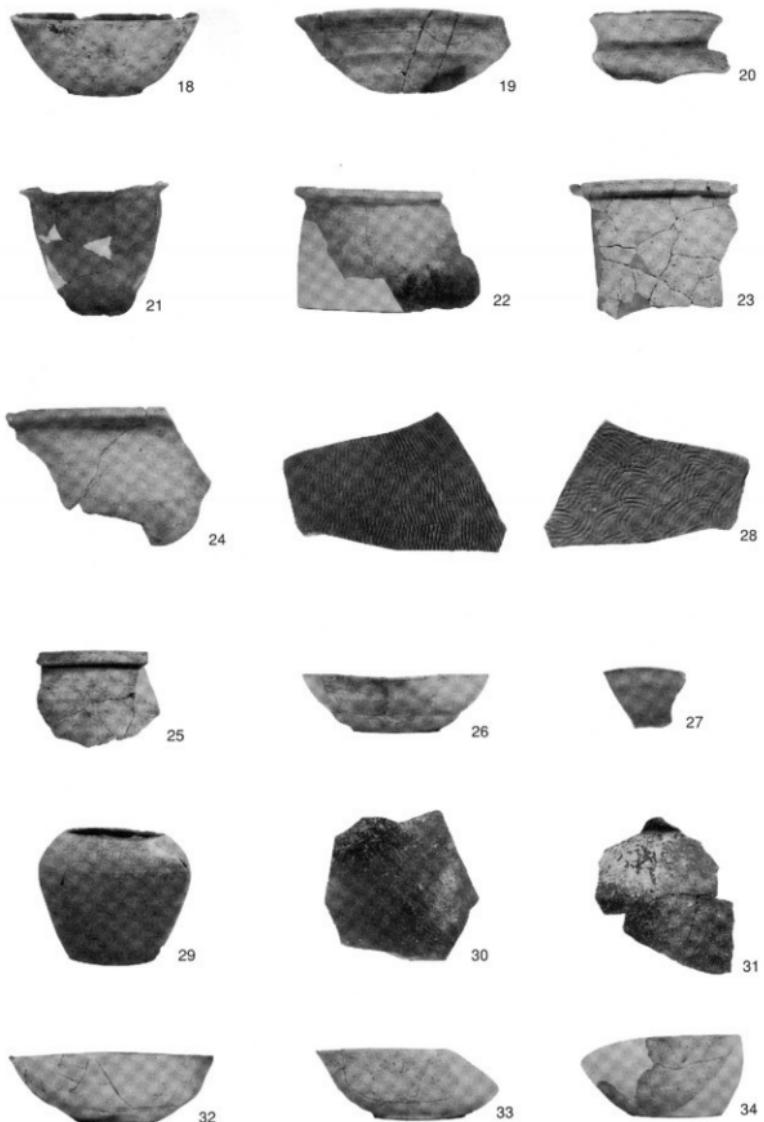


現地公開4

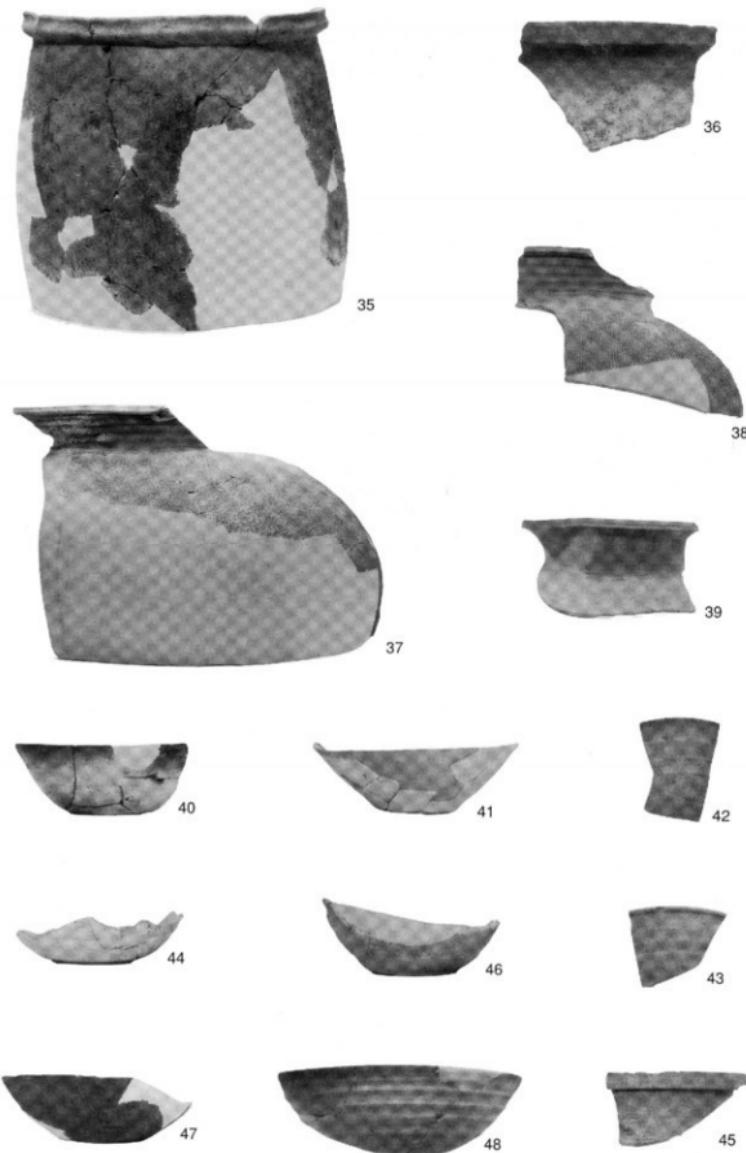
写真図版38 作業風景、現地公開



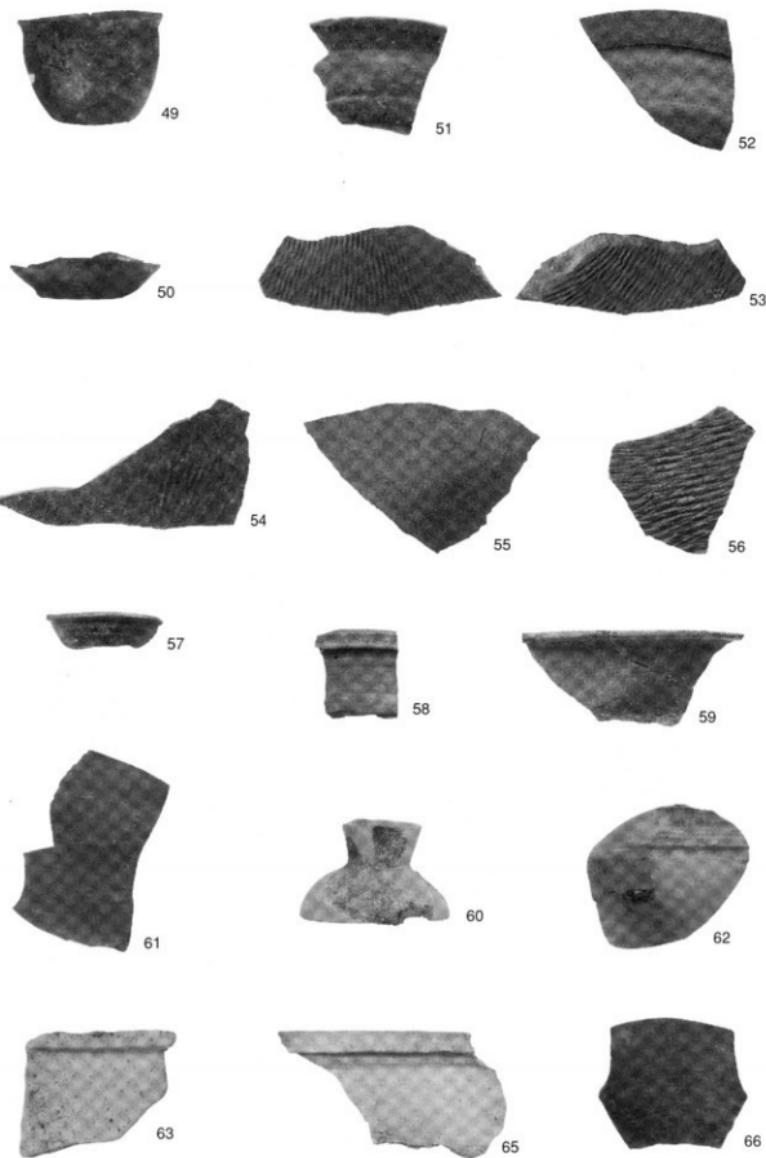
写真図版39 古代の土器 (1) (S=1:3、9は1:6)



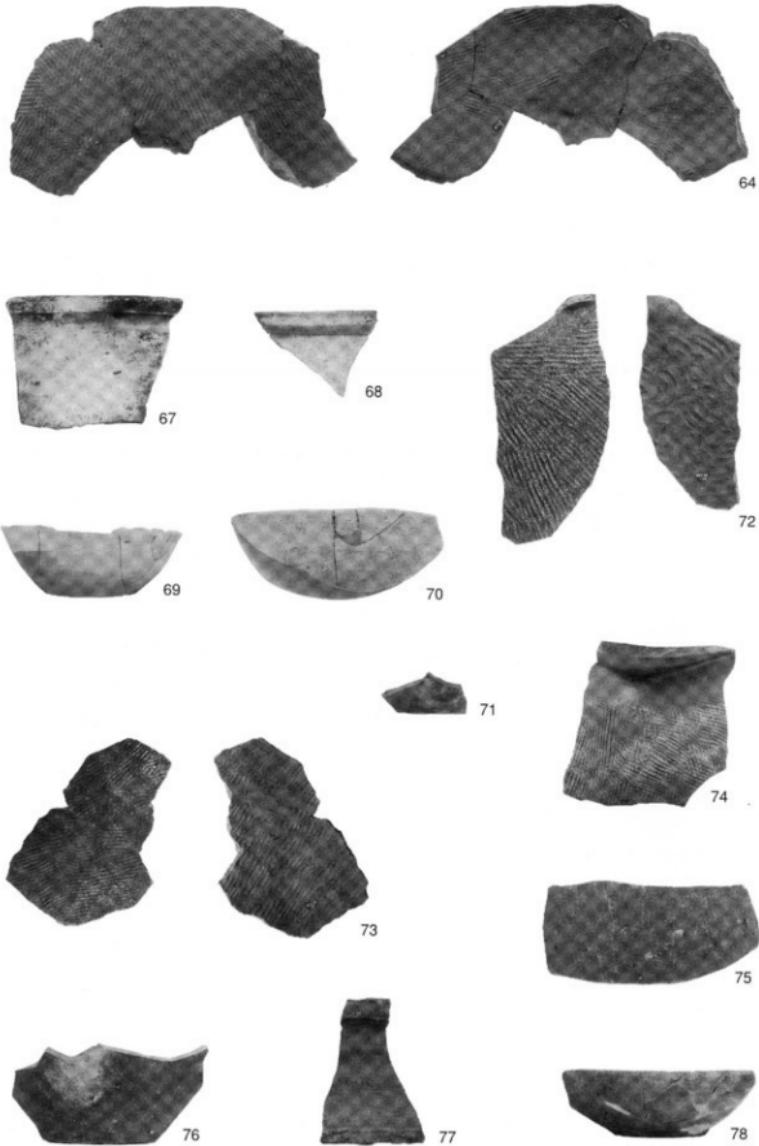
写真図版40 古代の土器（2）（S=1:3）



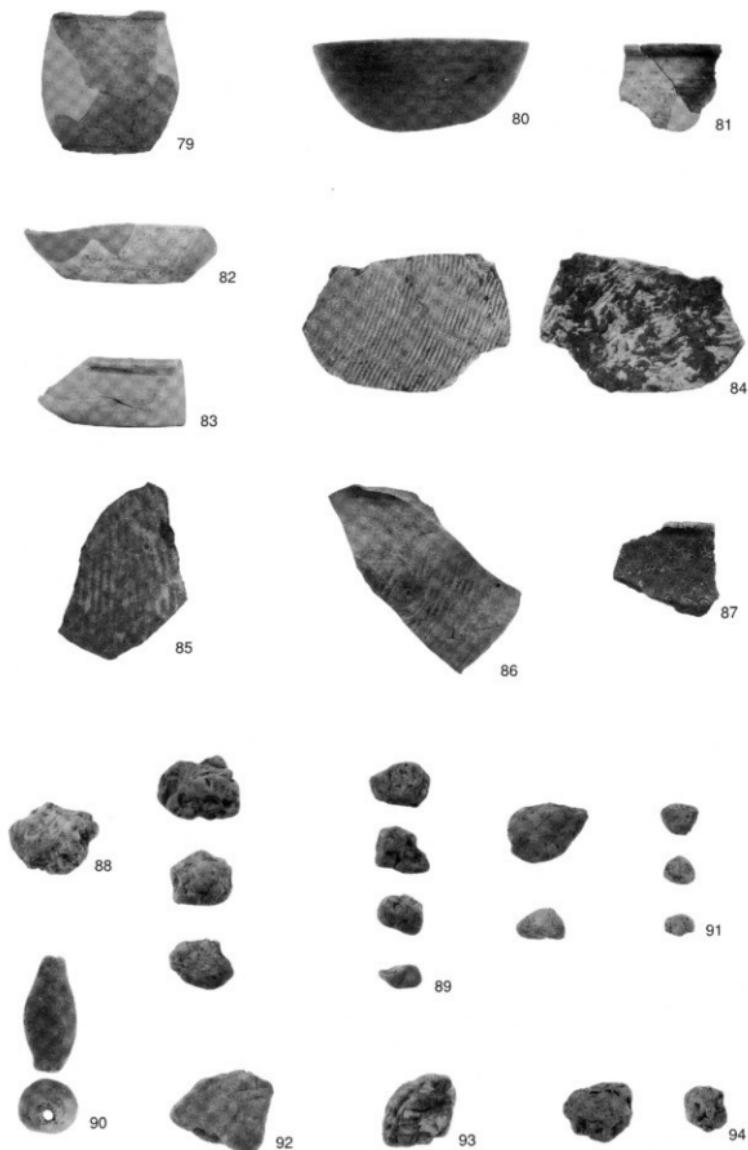
写真図版41 古代の土器（3）（S=1:3、37は1:6）



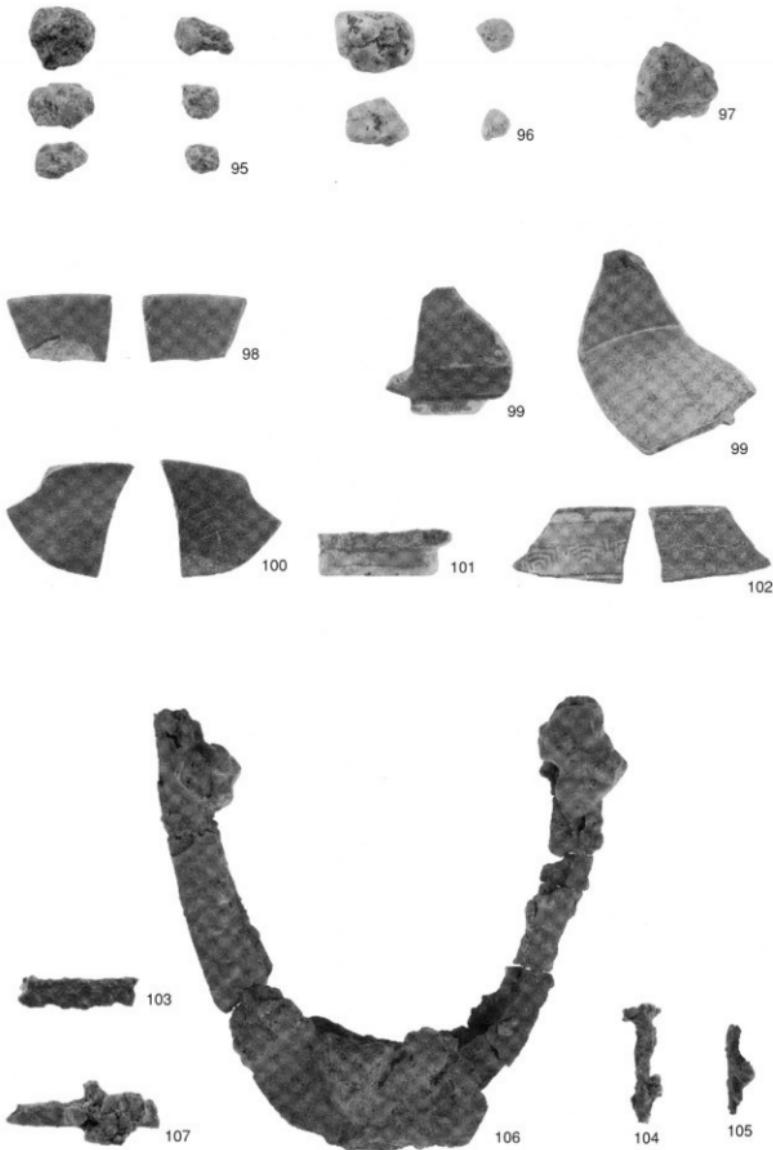
写真図版42 古代の土器（4）（S = 1 : 3）



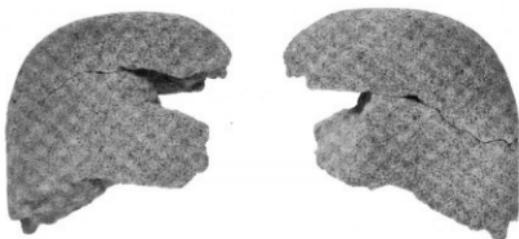
写真図版43 古代の土器（5）（S = 1 : 3）



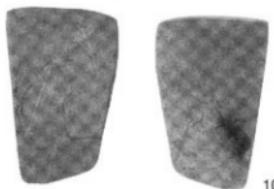
写真図版44 古代の土器（6）、土製品（1）（S = 1 : 3、※88~94はS = 1 : 2）



写真図版45 土製品（2）、陶磁器、鉄製品（S = 1 : 2）



108



109

写真図版46 石器 ( $S = 1 : 3$ )

## 報告書抄録

ふりがな	あまさかいせき・ほたんのいせき・さくやしきいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書							
副書名	経営体育成基盤整備事業都島地区関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第569集							
編著者名	星雅之・田中美穂							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 田 (019) 638-9001							
発行年月日	2010年2月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
尼坂遺跡	岩手県奥州市 胆沢区南部田字 国分370-1	03215	NE25-1123	39度 07分 34秒	141度 04分 38秒	2008.05.01 ~ 2008.05.15	322m <sup>2</sup>	経営体育成基 盤整備事業都 島地区
牡丹野遺跡	岩手県奥州市 胆沢区南部田字 国分371ほか		NE25-0185	39度 07分 45秒	141度 04分 47秒	2008.04.10 ~ 2008.06.12	2,698m <sup>2</sup>	
作屋敷遺跡	岩手県奥州市 胆沢区南部田字 作屋敷487ほか		NE25-0144	39度 07分 53秒	141度 04分 24秒	2008.06.09 ~ 2008.08.12	2,044m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
尼坂遺跡	散布地	近世	なし	陶磁器				
牡丹野遺跡	集落跡	古代	堅穴住居2棟	土師器				
			堅穴状造構1基	弥生土器				
			土坑4基	陶磁器				
溝跡3条	石器							
柱穴状土坑32個								
旧河道2条								
	時期不明	溝跡1条						
	現代?	溝跡1条 旧河道2条						

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
作屋敷遺跡	集落跡	縄文時代	陥し穴2基	土師器・須恵器	
		古代	竪穴住居跡8棟 掘立柱建物跡1棟 竪穴状遺構1基 土坑21基 溝跡18条 焼土遺構2基 柱穴状土坑265個	陶磁器	
		中世～近世	溝跡1条		
		近世～現代	土坑1基 溝跡2条		
要 約		<p>尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡は、奥州市胆沢区南都出に所在する、縄文時代・平安時代・中世・近世までの多段にわたる複合遺跡である。</p> <p>尼坂遺跡は、過去の調査において縄文時代早期～前期の遺構・遺物が見つかることで知られていた。また、平安時代の須恵器壺などの優品も出土している。今回の調査では近世～現代の陶磁器類が出土したが、遺構は未検出であった。過去の調査地点が福原段丘及びその縁辺であるのに対して、今回の調査地点は一段低い水沢段丘高位面であることも遺構・遺物が皆無に近い状況であった要因として考えられる。</p> <p>牡丹野遺跡は、平安時代の遺構・遺物を中心に、弥生時代及び中世～近代の遺物が出土した。今回の調査では遺構・遺物とともに希薄の状況であったが、旧河道などの検出があり当時の旧地形を復元する手掛かりとなる。また、平安時代の集落については調査地外に所在すると考えられる。</p> <p>作屋敷遺跡は、縄文時代の陥し穴状遺構、平安時代や中世の遺構・遺物、近世～現代までの陶磁器が出土した。調査成果からは、十和田a火山灰降下より古い時期を主体とする集落跡と考えられる。</p>			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第569集

## 尼坂遺跡・牡丹野遺跡・作屋敷遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業都島地区関連遺跡発掘調査

印 刷 平成22年2月16日

発 行 平成22年2月19日

編 集 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電 話 (019) 638-9001

発 行 岩手県県南広域振興局農林部農村整備室

〒023-1111 岩手県奥州市江刺区大通り7-13

電 話 (0197) 35-8443

(財) 岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号

電 話 (019) 654-2235

印 刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電 話 (019) 641-0671

